Fate/EXTRA NEET

あけろん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちゃり～っす！　ジナコさんっス。

この小説は「もしジナコが用務員室に引き篭もることができなかったら」というｉｆ設定の下に書かれたお話しっス。

他にも色々なｉｆ設定が盛り込まれているみたいっスけどね。

本当余計なことしてくれるっスよ。

おかげでジナコさんの聖杯戦争でのニート生活はメチャクチャっス。

まぁ、膨大な可能性が記録されている《ムーンセル》の中には「こんな聖杯戦争もあったかもしれない」くらいの気持ちで読んでほしいッス。

では、『Ｆａｔｅ／ｅｘｔｒａ　ＮＥＥＴ』はじまりはじまり～。

目次

何が始まるんです？ ―― 1
そうだアリーナに行こう ―― 6
お前のような坊主がいるか ―― 12
焼豚をプロデュース ―― 17
夢の中で逢ったような ―― 23
ジナコ＝カリギリは静かに暮らしたい ―― 29
戦うことを強いられているんだッ！ ―― 34
『きょげんへき』 ―― 40
おっさん、明日って今さ！ ―― 46
真の英雄 ―― 52
君を忘れず ―― 58
そんなマスターで大丈夫か？ ―― 64
いつから治療すると錯覚していた？ ―― 70
１００万の女 ―― 76
赤いツンデレと黒いマーボー ―― 81
昨日か今日かそれが問題だ ―― 87
欠けた星の行方 ―― 93
ロストデイズ ―― 99
保健室の主 ―― 104
その罰の名は ―― 109
長い夜のはじまり ―― 115
シークレットライブ ―― 123
解き放たれた『怪物』 ―― 130
黄金色の楽園 ―― 136

変貌の道化師 144
意志の炎 151
bite_gluttony 157
失われし黄金郷① 163
失われし黄金郷② 170
彼女との再会 181
幻想が砕け散る時 187
カーマインブレイジ 194
首輪と宝石 201
マッチ売りのジナコ 210
例のポーズと新たな物語 219
ジナコの願い 226
幸せの対価 236
記憶喰い（メモリーイーター） 247
無銘の英霊 255
炎と鉄の輪舞 263
無限の剣製 272
降伏勧告 280

何が始まるんです？

〝こうなる〟　前のアタシはそれなりに幸せだったと思う。
ドイツ人のパパと日本人のママの間にアタシは生まれた。
そこそこ裕福な家庭と仲のいい両親。
平凡すぎるパパにイラっとくることはあったけど、アタシはパパとママが大好きだった。
でもアタシが１４歳の時パパとママは突然死んだ。
交通事故だった。
アイスバーンで滑ったトラックに撥ねられて２人とも即死だった。
アタシの手には２人が残してくれた一生食べていけるだけの遺産が残った。
そしてアタシの人生はイージーモードに。
どうせ終わりが来るのなら現実世界に意味なんてない。
高校になんて行かなくていい。
外に出る必要すらない。
一生布団の中で過ごせるのならそれが一番幸せでしょう？
それでも、もし。
アタシにも別の人生があったのなら。
進学して、結婚して、子供ができて、そんな普通の人生があったのなら。
そんな〝幻想〟　を見てみたいと思うじゃない？
それがアタシがここに来た理由。
月の霊子虚構世界「Ｓ（セ）Ｅ・Ｒ（ラ）Ａ・Ｐ（フ）Ｈ」で行われる『聖杯戦争』に参加した理由だ。

「――――だったんだけど、もう正直ジナコさんは帰りたいッス」
アタシはたどり着いた校舎の片隅で頭を抱えていた。
だってここって参加してるのは天才ばっかじゃん！
アタシみたいな凡人が勝ちあがれるわけないよ！
むりむりむりむぅーりぃー！

１５年間引き篭もってたニートなめんな。
どう考えても絶望です。本当にありがとうございました。
「どうしたジナコ。１回戦はもう始まっている。頭の中で一人祭りをやっている暇はないぞ」
「カーニバルでもファンタズムでもねぇー！　絶望に打ちひしがれるマスターを労わろうって気持ちがカルナさんにはないんスか!?　ないんスね！　やだ、私のサーヴァント冷たすぎ!?」
そう言いながらアタシは傍に立つ白髪の青年を睨む。
一見その姿は人間のようだが、そこからはアタシでも分かる強烈な神気が放たれている。
彼はこのＳＥ（セ）・ＲＡ（ラ）・ＰＨ（フ）を管理する《ムーンセル》がマスターに用意した過去の英霊《サーヴァント》なのだ。
彼らは人間には到底扱えない神秘の技と無類の武勇を持っている。
聖杯戦争とは参加者である《マスター》が《サーヴァント》を用いて他の《マスター》と殺し合うことなのだ。
「『願いが叶う』なんて言葉にホイホイされてこんなとこに来るんじゃなかったっスよ！　殺すのも殺されるのもジナコさんはゴメンっス！」
「そうだな。今のお前を勝たせることは俺の力では難しい」
「じゃあ、もう死ぬしかないじゃない!?　ああ……せめてゲットしたのがショタサーヴァントだったら成仏できたのに……」
泣き崩れるアタシとため息をつくカルナ。
サーヴァントにも見放された以上アタシに選択肢は一つしかない。
引き篭もるのだ。
全部投げ出して布団の中に逃げ込めば、ホラそこは安住の地。
すでにいい感じのアタシだけのマイルームはチェック済みっス！
アタシは行き交うマスター達の間を縫って目的地にたどりつく。
そこはちょうど用務員室の裏口に当たる場所だった。
どうやら奥まったところにあったため誰にも気づかれなかったようだ。
「マスターの為のマイルームが用意されているのだ。わざわざこんな

ところに来なくてもそっちに引き篭もればいいのではないか？」
アタシはカルナの言葉を鼻で笑いとばした。
「ワロス、あんなリア充共の巣窟で心健やかにニートができるわけないじゃないっスか。カルナさんは蝶を見る芋虫の気持ちが分かるんスか？」
自分もああなれるはずだと見せ付けられながら、なれない我が身を呪う気持ちはこの英霊には分からないだろう。
周囲が就職、結婚と楽しそうにイベントをクリアしていくのを見せ付けられる気持ちは。
「とにかく！　ジナコさんはこの用務員室に篭ってもう絶対に外にでないことを誓うっス！　異議があるなら最高裁まで戦う覚悟っスよ！」
「異議はないがいいのかジナコ。戦いを放棄するのなら7日後にお前は死ぬことになるのだぞ」
カルナの言葉にアタシの動きは凍りついた。
聖杯戦争のマスターには相手と戦うために6日間の準備期間が設けられている。
そして7日目のマスターとの戦いに向かわなければ《ムーンセル》はアタシを不戦敗とし、SE（セ）・RA（ラ）・PH（フ）から排除するだろう。
それはアタシが死ぬことに他ならない。
でも、もういいんだよカルナ。
アタシの願いは叶わない。
この願いに殉じて他のマスターと殺し合いをするなんてアタシにはできないよ。
「いいんだよカルナ。アタシの聖杯戦争は終わったんだ」
そう言いながらアタシは用務員室のドアに手をかける。
そこで違和感に気がついた。
「あ、開かない!?」
用務員室のドアは押しても引いてもビクともしなかった。
なんで!?
どうして!?

さっき来た時はすんなり開いたのに！
「カルナ！」
「俺にも無理だ。かなり強固に施錠、いや『封印』されている」
アタシはその場にへたりこんだ。
今この時決定的な〝何か〟がずれ始めている気がしたのだ。
理由のない悪寒がアタシの体を走り抜ける。
「ふふ……残念でしたね。そこは閉めさせて頂きました」
その時突然響いた声と共に虚空から一人の少女が姿を現した。
黒い修道服に身を包んだその少女はスカートの裾をつまむと銀色の髪を揺らしながら優雅に一礼する。
「今回の聖杯戦争で皆様の健康管理ＡＩを務めさせて頂きますカレン・オルテンシアと申します。以後お見知りおきを」
「あんたっスか。ここを封印したのは！　ジナコさんの理想郷（アヴァロン）を返すっス！　この場所があればジナコさんの心は不死身っス！　何度でも蘇るっス！」
「だまりなさい。このメス豚が」
優雅な態度としかしその口から出た暴言とのギャップにアタシの頭がフリーズする。
え？　今なんて言ったのあの子？
メス豚？　メス豚って言ったよね？
えっとこっちにいるのはボクとカルナさんでー。
カルナさんは男だからー。
メス豚ってアタシのことかゴラァァァァァァァァァァ！
「戦いもせずに安全な場所で怠惰に死を待つ。そんな生き物は人ではなく豚でしょう。ブヒーって鳴いてもいいんですよ？」
「ジナコさんをブヒらせたいならショタなサーヴァントでも連れてくるっス！　小娘がぁ、年上に対する口の利き方を教えてあげないといけないようっスね！　カルナ先生やっちゃってください！」
「落ち着けジナコ。その女は聖杯戦争を司る上級ＡＩだ。俺でも手出しはできん」
動かないカルナを見てカレンは微笑む。

「その通りです。豚にしてはいい犬を連れていますね。豚に真珠とはこのことかしら」
また豚って言ったよこの小娘。
ジナコさんはむっちりボディなだけなんスよ！
しかもまだピチピチの２０代っス！
「ギリギリだがな」
シャラップ！　ジナコさんは永遠の２３歳っス！
「私に健康管理ＡＩの役目が回ってきた以上怠惰に死を待つなど許しません。あなたにはきちんと〝戦って〟　死んでもらいます」
「健康管理ＡＩの言うことじゃないっスね。バグってるんスか？」
「あら、別におかしなことではないでしょう？　生かすも殺すも『管理』するという点では同じこと。あなたは特に念入りに管理して差し上げますわ。主に殺す方向で」
そう言ってカレンは嬉しそうに笑う。
こいつは絶対にサディストだ。
それも飛びっきりの。
呆然と地面にへたりこんでいるアタシの様に満足したのかカレンはこちらに背を向けた。
「では、ごきげんようジナ豚さん。くれぐれも戦いから逃げようなどと思わないことです。あなたは必ず戦いの中で〝殺して〟　差し上げますから」
そう言うとカレンの姿は掻き消えた。
逃げられない。
漠然とだがそう確信できる。
戦う？　アタシが？　この聖杯戦争で？
「あのようなＡＩがいたとはな。戦いは避けられそうにないぞジナコ」
カルナの声が遠くに聞こえる。
アタシの聖杯戦争が今、始まったのだ。

そうだアリーナに行こう

「始まりましたね。私を楽しませてくれるのはどんなマスターかしら。勝利を約束された天才か、取るに足らない路傍の石か、はたまた惰眠をむさぼるメス豚か。うふふ……楽しみですね」

「　　」

「悪趣味ですって？　あなたには言われたくないですね。私は《ムーンセル》に与えられた健康管理ＡＩの役目はきちんとこなしています。自分の欲望を満たすことしか考えていないあなたと一緒にしないでください」

「　　」

「ええ、あの場所は封印済みです。一人入口に気がついたマスターがいたようですが問題ないでしょう。あの程度の実力なら１回戦で消えるでしょうし」

「　　」

「分かっています。〝彼女〟を排除できたのはあなたのおかげでもありますから。今のところは見逃して差し上げますよ。でもやりすぎればどうなるか、分かっていますよね？」

「　　」

「いいでしょう。その醜悪な願いを叶える為にせいぜいがんばってください。では、よき戦いを」

◆　◆　◆

『アリーナ？　なんスかそれ。辛いんスか？』

『あのＮＰＣの話を聞いていなかったのかジナコ。マスターが７日後の戦いに備えて己を鍛える場所がアリーナだ』

『ああ、あの陰気な神父さんがそんなこと言ってたっスね』

『あのカレンというＮＰＣの言葉から戦いが避けられないことは分かっただろう。ならばアリーナで鍛錬を……』

『だが断る』

『なんだと？』
『この程度のことでジナコさんのニート魂がくじけると思ったら大間違いっス！　考えてみたらあの用務員室に入れなくなっただけじゃないッスか。まだメインカメラをやられただけ。ジナコさんは絶対に自分を曲げないっスよ！』
『眠れる蝸牛にも一分の矜持があるというわけか。だが忘れるなジナコ。７日後にお前を待つのはシステムによる緩やかな死ではない。敵マスターとの殺し合いの果てに訪れる無残な敗死だ』
『……ッ！　アタシもう寝る！　絶対起こさないでよカルナ！』
そう言ってたどり着いたマスター用のマイルームで眠りについたのが昨日のこと。
「ん、んん……」
アタシの意識が眠りの中から目覚める。
今何時だろうか。
なんだか布団の外の空気が妙に冷たい気がする。
アタシは布団から身を起こし――――。
「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
身を起こしたアタシの目に飛び込んできたのは眠りについたマイルームの室内ではなかった。
辺りは先の見えない深い闇。
そこに浮かぶ立体的な通路が入り組みながら奥へと続いている。
「ようやく起きたかジナコ。先ほどの叫び声の勢いから察するによく眠れたようだな」
「か、カルナさん！　何がどうなってるんスか！　ここはどこっスか!?」
「ふむ、どうやらアリーナのようだな」
「マイルームで寝てたアタシがどうしてアリーナにいるんスか！　しかも布団ごと！」
「どうやら朝になると同時にここに転移させられたようだな。布団ごと」
朝になると同時に転移？

布団を引っぺがすどころかまるごと外に放り出すこの所業。
こんな外道なことを一体誰がするというのか……。
『おはようございますブタコさん。アリーナの寝心地はいかがですか？』
聞き覚えのある声がアリーナに響く。
うん、なんとなくそんな気はしてたっス。
「ボクをここに放り出したのはあんたっスか？　カレン」
『ええ、その通りです。本当は顔を合わせてご挨拶したいところなんですが、私も忙しい身ですから声だけで失礼しますね。ああ……紅茶がおいしい』
絶対忙しくないよこの女。
人を部屋から拉致っといて自分は優雅にティータイムだよ。
そしてジナコさんの怒りは有頂天だよ！
「このドS銀髪鬼！　あんたは1度ならず2度までもアタシから安息の地を奪うんスか！」
「マイルームは不可侵領域のはずだ。上級ＡＩであっても手はだせないはずだが？」
アタシとカルナの言葉に声だけのカレンが答える。
『未だに戦う覚悟もない豚さんにマスターとしての権利が与えられるとでも？　プライベートルームが欲しいのならせめて人に進化してきてください。入り口は封鎖しましたし、リターンクリスタルは使用不能に設定させて頂きました。ここから出たいのならアリーナの奥にある出口までたどり着くことですね。ではごきげんよう。そうだわ、棚においしいクッキーがあったわね……』
言いたいことを言ってカレンの声は途切れる。
「さて引き篭もる場所すらなくなってしまったわけだが、それでも曲がらないニート魂とやらをお前は持ち合わせているかジナコ」
「曲がるどころかへし折れたっスよカルナさん……」
こうなった以上出口にたどりつくしか道はない。
アタシは闇の中に浮かぶ通路へと足を踏み出した。
しばらく歩いたところで正面に丸い物体が浮かんでいるのを見つ

ける。
「な、何かいるよ。カルナ」
「アリーナに放たれている攻性プログラムだな。近づけば攻撃してくるぞ」
「うええ!?　それじゃ通れないじゃない！」
「心配するな。何のために俺がいると思っている」
そうだった。アタシにはサーヴァントがいる。
人ならざる神秘の体現者にして無類の武勇の使い手。
サーヴァントはマスターにとって最強の盾にして矛。
彼にとってあのような攻性プログラムなど敵ではないのだ。
「じゃあやっちゃおう。カルナ先生お願いします！」
「よかろう。我が槍の神技その目に焼き付けるがいい」
力強い言葉を残して敵へと駆けるカルナ。
彼の槍によるすさまじい一撃で攻性プログラムは粉砕――――されなかった。
「ぐはぁ！」
逆に敵の体当たりを食らいカルナがよろめく。
え？　え？
えええええええええええええええ!?
「ちょ、何やってるっスかカルナさん！　遊んでないで早く片付けるっス！」
「予想以上に魔力が足りない。槍の具現化もできないとはお前の魔力量はどうなっている」
え、魔力？
ちょ、ちょっと待つっス。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！　燃え上がれアタシの魔力！　セブンセンシズに目覚める勢いで！　どうっすかカルナさん！　槍でもミサイルでも具現化できそうっスか!?」
「……もういい。素手で戦うしかないようだ」
そう言ってペチペチと拳で敵を殴り始めるカルナさん。
その背中には男の悲哀が漂っていた。

◆　◆　◆

その後カルナは一匹にかなりの時間をかけながらも全ての敵を撃破し、

アタシ達はアリーナの出口にたどりつくことができた。

「よくもまぁそんな体たらくで『我が槍の神技その目に焼き付けるがいい（笑）』なんて言えたもんスね。かわりにカルナさんのペチペチ拳法だけはしっかりこの目に焼きついたっスよ。動画サイトに上げて一人弾幕したいぐらい見事だったっス」

「自分の未熟さを棚に上げてサーヴァントを笑いものにしようとはたいした厚顔ぶりだ。俺もサーヴァントとして恥が高い」

「そこは鼻！　鼻って言うのよ絶対！」

あーつかれたー。

とっととマイルーム（仮）に帰って寝たい。

ていうかアリーナに布団置きっぱなしにしちゃったけど代わりの布団ってあったっけ。

「待てジナコ。マイルームに帰る前に向かうべき場所があるだろう」

「え、どこっスか？　ジナコさんがこれから向かうべき場所はマイルームの布団の中だけっス」

「掲示板に1回戦の対戦者が貼りだされているはずだ。相手の名前くらいは知っておいたほうがいいのではないか？」

「あー……」

正直気が進まない。

でも、知りたいと思う自分もいる。

自分を殺すのは一体どういう人間なのか。

アタシが重い足取りで掲示板の前にたどりつくと見慣れない一枚の紙が張り出されていた。

真っ白な紙には2人の名前が書き込まれている。

一人はアタシそしてもう一人は――――。

マスター：臥籐門司

決戦場：一の月想海

それが５日後にアタシを殺すマスターの名前だった。

お前のような坊主がいるか

「貴様が小生の相手か。……ぬるい面持ちをしておる。後生戦いどころか労働とも無縁な、カピバラを思わせる面構えだな。さしたる覚悟も高尚な目的もついでに定職すら持たずに欲界から逃げてきた無業者。そんなところかな？」

野太い声に振り向くと一人の大男がアタシを見ていた。

首からいくつもの数珠と手には十字架を下げ背には三度傘。

修行僧のような佇まいだが、なんの宗派なのか統一感がないことこの上ない。

このおっさんが臥籐門司っスか。

なんか暑苦しそうで苦手なタイプっスね。

ていうかブタとかカピバラとか月にはジナコさんを人間扱いしてくれるヤツはいないんスか。

「初対面の相手に随分な言いようっスね。そう言うおっさんもまともな職業についてる人間には見えないっスよ」

「何を言うか小娘。小生は我が神に仕え、その威光をあまねく知らしめるために日々邁進しておる。これ以上に神聖な職務がこの世にあろうか！　あぁ、ハレルヤ！　我が神こそ究極にして至高！　美食家もびっくりな唯一神である！　うおおおおおおお！　神さいこおおおおおおおおう!!」

うわぁ……コレに殺されるのかアタシ。

殺られるならカワイイ弟キャラマスターに『ごめんね。おねぇちゃん♡』て言われながらピチュりたかったっス。

どうして対極なのが出てきちゃうかなー。

「というわけだ小娘。この臥籐門司が相手とあってはヴァルハラも黄泉平坂も待ったなし。諦めて我が神の軍門に下るがよい！」

「好きにすればいいっス。ジナコさんに戦う気はないっスから」

「ぬぅ？　それは不戦敗を選ぶということか？」

「そんなのはカレンが許さないだろうから決戦場には行くっスよ。あとはなるべく痛くないように殺してくれればいいっス。楽に勝ちを

拾えてラッキーだったっスね。おっさん」
　どうせアタシが戦ったって勝てるわけがない。
　死ぬのは怖いけど仕方ないよね。
「ふむ、確かにカレンちゃんなら無理やりにでも決戦場に放り込むであろうな。あの足に踏まれようものなら小生は即解脱できる自信があるぞ」
「おまわりさんこいつです。じゃあそういうわけっスからもう話しかけないで。ジナコさんは部屋に戻るっス」
　これ以上の会話は無意味。
　アタシは臥籐門司の脇をすり抜けてマイルームへと歩き出す。
「待てぃ、ジナコよ」
「話しかけないでって言ったっスよね？　まだ何かあるんスか」
「お主、小生の弟子になれ」
「ファッ!?」
　いきなり何言ってんスかこのマジキチ坊主。
　意味不明にもほどがあるっス。
「全く嘆かわしい！　確かに貴様の敗北及び死は確定しておる。しかし生への執着を捨てることはまかり通らぬ！　カピバラのまま死しては輪廻転生の輪からも外れよう。この臥籐門司、神に仕える者としてそのような救われぬ魂を見過ごすわけにはいかぬわ。ならば我が神の教えをもって貴様の魂をカピバラからヴァルキリーへとプロデュースすることこそ小生の使命である！　さぁ、ジナコよ！　小生と共にガンダーラへと旅立とうではないか！」
「助けてカルナぁ！　暑苦しいおっさんが鼻息荒くしながら迫ってくるよぉ！　これ薄い本できちゃうぅ！」
「少なくとも悪意は感じられない。相手の情報を引き出す為にしばらく付き合ってやったらどうだジナコ」
　アタシは迫ってくる臥籐門司の顔を必死に押し返す。
「善哉善哉（ぜんざいぜんざい）！　サーヴァントの同意が得られたのであれば何も問題はないな。明日から修行を始める故、今日はゆっくりと休むがよい！」
「一番肝心なアタシの同意は!?　こんなの絶対おかしいよ！」

笑いながら去っていく臥籐門司とその場に崩れ落ちるアタシ。
「殺される相手に弟子入りとはたいしたものだ。俺もサーヴァントとして鼻が高い」
「こういう時は間違えないんスねカルナさん。はぁ……もういい。寝て全部忘れるっス」
そうしてアタシはマイルームで眠りにつくのだった。

◆　◆　◆

眠りから覚めたアタシの目に飛び込んできたのはまたもや深い闇と入り組んだ通路だった。
なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁとでも言うと思ったっスか。
はいはいアリーナアリーナ。
驚きの展開も２度目になればもうテンプレなんスよ。
それじゃあとっとと出口まで行きますかね……っと？
そう思い起きようとしたアタシは体が動かないことに気がついた。
よく見ると布団ごと縄で縛り上げられているではないか。
「起きたか我が弟子よ。しかし少々遅いぞ。神に仕える者ならば朝の４時には起きるようにせよ」
そしてなぜか縛り上げられたアタシはおっさんの小脇に抱えられていた。
「な……な……な……」
「我が神が今日はアリーナを修行の場と定められたのでな。迎えにいったら寝ておったので起こすのも忍びないと思い、布団ごと運んだというわけだ」
「なななななななな」
「ちなみに部屋のカギはカレンちゃんに言ったら開けてもらえたぞ。しかしジナコよ。お主はもう少し体の肉を落としたほうがよいな。小生の腕力でもここまで運ぶのは一苦労であったぞ」
「な　　　ん　　　　　　　　　じゃっ　　　　　　こ
りゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「この早朝からテンションＭＡＸとはさすが我が弟子。その調子で随神の道を踏破するがよい」
どいつもこいつも人のマイルーム（仮）をなんだと思ってるんスか！
ていうかカルナは!?
自分のマスターが敵マスターに拉致られたのにサーヴァントは何をやってたんスか!?
「話しているうちに意気投合してしまってな。すまなかったなガトー。本来ならばサーヴァントである俺が運ぶのが道理だったのだが」
「なんのなんの、察するにかなりの神格を持つ英霊とお見受けする。神の子に弟子（だにく）を担がせたとあっては、この臥籐門司明日から僧を名乗れぬ」
「おい、おっさん。今自分の弟子を駄肉って言わなかったっスか？」
カルナさんまで懐柔するとは恐るべし臥籐門司。
アレ一歩手前は伊達じゃないっスね。
『ぷっくく……おはようございますジナ休さん。今日は絶好の修行日和ですね』
「人の名前を無理やり小坊主っぽく呼んでるんじゃねーっス」
狙い済ましたようなタイミングでカレンの声がアリーナに響く。
あの女絶対今すげーいい笑顔してるよ。
笑いをこらえてるのがここまで伝わってくるもん。
「おお、カレンちゃん！　先ほどは世話になった。今度小生の五穀粥を馳走するゆえ楽しみにされよ！」
『それは楽しみです。いいお茶の葉を出しておきますね。でもカレンちゃんとは呼ぶな』
「うほっ！　その冷たい言葉を聞くと小生なにやら胸の動悸が……。ワンモアプリーズカレンチャン！」
『……後はお任せします。カルナさん』
さすがのドＳ魔人もウルトラ求道僧相手には分が悪かったらしい。
カレンの声が途切れるとこの場を任された（？）カルナが臥籐にた

ずねた。
「しかし本当にこんなことをしていてよいのかガトー。職業柄とはいえここは聖杯を奪い合う戦場。自分以外の全てが敵のはずだ。お前にとってジナコのプロデュースとやらは聖杯に託す願いよりも重いものなのか？」
「簡単な話だ神の子よ。お主のマスターは小生の敵ではないということよ」
　それはつまり……。
「……アタシ程度の実力じゃおっさんの敵にはならないってことっスか？」
「まぁその辺は自分で考えよ。とにかく小生はお主を敵だとは思っておらん。ならばこの臥籐P、見事お主の魂をヘーゲモネーのごとく磨き上げてやろうではないか。ゆくぞ、ジナコよ！　黄金劇場（ドムス・アウレア）が我らを待っている！」
「その劇場を目指すのはやめておけガトー」
　こうしてアタシと臥籐門司の奇妙な関係は始まったのだった。

焼豚をプロデュース

「ジナコよ。お主は此度めでたく我が神の信徒となった訳だが」
「なってねーっスよ。ていうかアタシいつまで簀巻きで抱えられてるんスか」
「まずは我らが神を紹介せねばならぬな。神々しすぎて直視できんとは思うが、両のまなこを見開きその御姿をしかと目に焼き付けるがよい！」
「このおっさん聞いてねぇー！　いいから早く降ろすっスよ！」
　暴れるアタシの前に臥篠門司のサーヴァントが具現化する。
　金色に輝く髪と赤い瞳。
　姿は人間の女性のようだが、カルナと同様纏っている空気が人間離れしている。
「美しすぎるうぅぅぅぅぅぅ！　この御方こそ我らが神！　真祖にして魔眼の持ち手！『アルクェイド・ブリュンスタッド』様である！」
「ねぇ、カルナ。サーバントの真名って隠しておくものじゃなかったっスか？　ついでにマトリックスぽいものまで駄々漏れてるんスけど」
「お前も俺の名前を隠していないぞ。しかし真祖とはな。とんでもないのが出てきたものだ」
　え、真祖ってすごいんスか？
　見た目は綺麗でちょっとアーパーそうなお姉さんにしか見えないっス。
「吸血鬼の王にして星の触覚であり、神というよりは自然現象そのものといったところか」
　何そのチートサーヴァント。
「さぁ、我が神よ！　新たに信徒の末席に加わったジナコ・カリギリに祝福の御言葉をお与えくだされ！」
「……」
　あのー……何もしゃべってくれないんスけど……。

ハッ!?　もしかして初見で嫌われたっスか!?
　いやぁぁ！　十七分割されちゃうぅぅぅ！
「どうやら狂化されてまともに言葉を話せないようだな。クラスはバーサーカーというわけか」
「我が神はちょっとシャイなのでな。しかし小生が聖杯を手に入れた暁には、微笑みと共に天上の調べにも似たお声を聞かせてくださるであろう！　お主も楽しみにしておれ」
　うん、アタシその時もう死んでるよね。
「では神への拝謁もすんだところで至福の修行タイムといこうぞジナコ！　ぬおおおおおおお！」
　雄叫びと共にアリーナに突入していくガトー。
　いいなぁ。
　悩みなんてないんだろうなぁ。
　それはともかくとして。
「簀巻きにしたまま置いていくな。クソ坊主ぅぅぅぅぅぅぅ！」
　アタシの声はむなしくアリーナに吸い込まれた。

◆　◆　◆

　そして『修行』という名のエネミー狩りが始まったのだが。
「シャオラァァァァァァァァァァァァァァァァア！」
「カルナさん。君に決めたっ！」
　ズガァン！　ドガァ！
　ペチペチペチ……
「だぁぁぁぁぁぁぁぁいさっかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！」
「もっと足を使うっス！　小さく！　細かく！　速く！」
　ズドォ！　メキャア！　ズバァ！
　ペチペチペチペチペチペチ……
「頼もしすぎるぅぅぅぅぅぅぅ！　小生の嫁ってば強ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」

「立てぇ！　立つっス！　カルナさぁん！」
ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！
ぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺぺ……
……なんだか決戦を待たずに死にたくなってきたっス。
「どうしたジナコ。目が濁っているぞ」
「復活の呪文みたいな攻撃しかできない自分のサーヴァントに絶望しているとこっスよ。同じ素手なのにこの差はなんなんスか？　カルナさんもサーヴァントならエネミーを指先一つでダウンさせて『今ので１０％の力だ』くらい言えないスか？」
「ガソリンの入っていない車で走れと言われているようなものだ。そちらこそ得物が具現化できるくらいの魔力はまわしてほしいところなのだが」
サーヴァント　魔力なければ　ただの人。
川柳作って現実逃避してる場合じゃないっスね。
なんとか自分の魔力量を上げていかないと……。
って何考えてるんだアタシは。
どうせ４日後には死ぬんだからそんなことしたって無意味だよね。
「はっはっは！　気にすることはないぞジナコよ。我が神と比べられてはどのようなサーヴァントも霞むというもの。その戦う御姿はまさにマーブルファンタズム！　我が神の威光は大きいお友達にもあまねく降り注ぐであろう！」
「まさか変身してステッキを振り回したりしないっスよね？」
「ふはははは！　我が神は後２回の変身を残しておる。これがどういうことか分かるな？」
「何それ怖い」
「ガトオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
なぜかいきなり叫ぶアルク様。
「ハッ!?　いかん！　虚言を吐いたことで神の怒りに触れてしまったか!?　おお、我が神よ！　これなる供物で怒りをお静めくだされ！」
「ちょ、おま……！　なんでそこでアタシを盾にするっスか！　アタシの血はおいしくないっスよ！　それよりアルク様、新鮮な坊主の肉

はどうっスか？　でも頭は食べちゃダメっス。馬鹿が移るっスからね！」
　互いを盾にしようと取っ組みあうアタシとガトー。
「マスター同士が楽しそうで何よりだ。短い間だがよろしく頼む」
「アアア……アア……（コクリ）」
　何か向こうはサーヴァント同士で通じ合ってるし。
　それから誰が楽しそうなんスか！
　こんなおっさんウザいだけなんスからね！

◆　◆　◆

　エネミー狩りは夕方まで続き、アタシ達は校舎へと戻ってきた。
「あー……もうダメっス……。天国のパパとママが見えるっス……。ただいまー……ジナコさん今帰ったっスよー……」
「どうやら魔力を使いすぎたようだな。朝から夕方まではやりすぎだったのではないかガトー」
「なんのまだまだ。小生の弟子ならば阿修羅すらも凌駕する存在でなければならん。明日も朝から修行を始めるゆえ精進するがよい！　では小生はマイルームに戻るのでチャオ！」
　そう言って歩くのもやっとなアタシを置いて帰っていくガトー。
　明日もマイルームに迎えにくるのだろう……朝４時に。
「あ、あの電波坊主……。いつか脳天にジナコスペシャルを食らわせてやるっス……」
　体を引きずりながらマイルームへの道を歩くアタシ。
　と、アタシの行く手をふさぐ形で２人の少年が何やら話しているのが見えた。
「フン、これで分かっただろう岸波？　お前じゃ僕には勝てないってね。ああ、お前が弱いんじゃない僕が強すぎるのさ。今からでも遅くない。このアジア圏屈指のゲームチャンプ『間桐慎二』の子分になりたいというのなら考えてやらなくもないぜ？」
　なんか聞いたことのある名前っスね。

しかもアジア圏屈指のゲームチャンプとな？
……ああ、もしかして。
「そうやって人を見下すクセ、やめたほうがいいっスよ～シンジさんクン？」
アタシの声に少年の一人が振り向く。
「うおっ、何だよいきなり後ろから！　っていうかオタク誰？　どこの三流マスター？」
「本当にＰ（ピースジャーナル）Ｊで言われてる通りの性格っすね。『スーパーチャンプ（笑）』に『かまってチャン（笑）』ついでに『ワカメ（笑）』だったっスか？　海藻扱いとか今のジナコさんよりヒドイっスよ？」
「なっ!?　ジナコってお前あの『じな子』か!?　ＦＡプレイ時間６０００越えのトータルチャンプ!?」
まぁ今は４日後の死を待つヘッポコマスターっスけどね。
自分のことを「エリートニート」とか言ってた時期が懐かしいっスよ。
「ここではトータルチャンプの称号なんて何の役にも立たないっス。ましてや『アジア圏屈指のゲームチャンプ』なんてなおさらっスよ。人に嫌がらせをしてる暇があったらサーヴァントのレベル上げでもしてきたらどうっスか？」
「ふ、ふん！　僕のエル……サーヴァントは最強なんだ。凡人共のようにあくせく努力する必要なんてないのさ。じゃあな岸波、子分の件は考えておけよ」
そう言って慎二は立ち去った。
自分より上の称号を持つ人間と一緒にいるのは我慢できないんスよね。
気持ちは分かるっス。
でもゲームと違ってここではアタシはシンジさんクンには勝てないっスねきっと。
「あの……何かありがとう」
その時アタシにもう一人の少年が声をかけてきた。
「ああ、別にいいんスよ。ああ見えて悪い人間じゃ……」

答えようとしたアタシの言葉は少年の顔を見て途切れてしまう。
ＮＰＣと言っても信じてしまいそうな特徴のない顔つき。
服装もカスタマイズされたものではなくデフォルトである月海原学園の学生服だ。
「俺は白野。岸波白野だ」
そう言った少年の顔をアタシは凝視してしまう。
初めて出会ったはずのこの少年にアタシは妙な懐かしさを感じたのだった。

夢の中で逢ったような

アタシは岸波白野と名乗った少年の顔を凝視していた。
一度見たら忘れないほどのイケメンてわけでもないっスよね。
声も……声フェチのアタシからして６０点てところだし。
どこからどう見てもアタシと同じノーマル人なんだけど……。
でもアタシは間違いなくこの少年を知っている。
この顔と『岸波白野』という名前は確かにアタシの記憶にあるのだ。
それが『いつ』『どこで』のものなのかは分からないが。
「アタシはジナコ・カリギリっス。もしかしてどこかで会ったことないっスか？」
たずねたアタシに岸波少年も考えるそぶりをする。
「ジナコ……カリギリ……うん、俺もどこかで会ったことがあるような……」
アタシと岸波少年は顔を見合わせる。
その瞳の奥に互いの記憶を見つけようと顔が近づきかけたその時。
『ストォーップ！　ストップです！　それ以上はお天道様が許してもこの私（わたくし）が許しません！』
響く声と共に少年の傍らに人影が現れる。
現れ方から察するに岸波白野のサーヴァントなのだろう。
まず目を引くのは頭に生えた三角のケモ耳と背中越しに見える尻尾。
背は低いがスタイルの良い体。
身につけている大胆にアレンジされた着物がそれをさらに際立たせている。
「やっべぇ～。さすがにコイツはないだろうと思ってたらそんなことはなかったゼ。ご主人様のフラグ建築技術はすでに女を捨てた生物まで引き寄せるレベルにあるというのか。しかぁ～し！　この私の目の黒い内はご主人様に立つ恋愛フラグは即・撲・滅☆　というわけでそこの肉布団はご主人様からただちに離れなさい。燃やしますよ？」

「はい、肉布団頂きました～。ってどいつもこいつもいい加減にするっス！　誰が女を捨てて肉布団っスか！　こうなったらもう屋上！　屋上しかないっスね！　久々にキレちまったよ！」
「落ち着けジナコ。疲れきった今のお前に屋上までの階段が登れるとは思えん」
　ネタにマジレスカコワルイよカルナさん。
「失礼なことを言うなよキャスター。ジナコさんは慎二に絡まれてるところを助けてくれたんだから」
　白野クンはいい子っスね～。
　もっと言ってやれ！　このケモ耳娘を教育してやるっス！
「いいえ！　それがこの女の策略かもしれません！　見てくれは女を捨てていますが、心には狼を飼っているとみました。『どこかで会ったか？』なんて捻りのないテンプレでだまくらかしてご主人様を食う気なのです！　私がまだ味見もしていないというのに！」
　白野クン、サーヴァントは選んだほうがいいっスよ。
　そのケモ耳言ってることが限りなくアウトに近いアウトだよ。
「あのワカメとのことにしたって助けなど必要なかったのです！　次に会った時には細切れにして味噌汁の具にした上で食べずに月の海にまいてやる予定だったのですから。まぁそうでなくても４日後にはご主人様に成敗されているんですけどね」
　どうやらこの少年の１回戦の相手はあの間桐慎二らしい。
「ああ見えてシンジさんクン腕は確かっスからね。厳しい戦いになるんじゃないっスか？」
「そう思うよ。今もアリーナで戦いを仕掛けられて歯が立たなかったところさ」
　そう言った白野クンを見てアタシは驚いていた。
　その言葉とは裏腹に彼の目には諦めの色がなかったからだ。
　立ち振る舞いを見ても魔術師（ウィザード）として秀でているようには見えない。
　実力だけならアタシとどっこいではないだろうか。
　もしもアタシならアリーナでフルボッコにされた時点でもう布団から出ない自信がある。

「なんの、魂のイケメン度ではご主人様の圧勝です。最後に勝つのはご主人様と決まっているのです！」
なぜかサーヴァントまで自信たっぷりに胸を張っている。
なんだか不思議なコンビっスね。
「おっと、こんなところで無駄に時間を食っている場合ではないのです。ご主人様は予定外の戦闘でお疲れのはず。早く２人の愛の巣に帰ってお休みするべきです。あのワカメにやられたところが痛むなら一晩中さすって差し上げますよご主人様♪」
キャスターがポンと手を打ちながら白野クンの背を押した。
「お、押さないでくれキャスター。じゃあジナコさんまた……」
「ジナコでいいっスよ。なんだか君に『さん』付けされると変な違和感があるっス」
「俺もそう思ってた。俺のことも『白野』でいいよ。じゃあジナコ、お互い勝てるといいな」
「むぅ～……。あの赤いのだけでも頭が痛いのに思わぬ伏兵が……」
白野クンはアタシを睨むキャスターに押されながら遠ざかっていく。
雰囲気はアタシと同じノーマル人なのに戦いにのぞむ姿勢は天と地の差だ。
彼が特別じゃないというのなら、あの心をアタシも手に入れることができるのだろうか。
「ねぇカルナ。アタシがもし『勝ちたい』って言ったら笑う？」
「ジナコ俺は……」
「あはは、冗談っスよ。ちょっと言ってみただけっス」
アタシは何かを言いかけるカルナをさえぎった。
彼とアタシは違う。
１５年もどこにも行けなかった心と体で『勝利』を掴もうなんておこがましいにも程がある。
危ない危ない白野クンにあてられて変な希望を持っちゃうとこだったっスよ。
今度白野クンを見かけたら後ろから膝カックンでもしてやるっス

かね。
「帰ろうカルナ。マイルームの布団がアタシを待ってるっス」
まだ何かを言いたそうにしているカルナを無視しながらアタシはマイルームへと歩き出した。

◆　◆　◆

気が付くとアタシは夕暮れの校舎に立っていた。
アタシはあの後マイルームの布団で眠りについたはずだ。
ならばこれは夢？
月の電脳空間にいるアタシが夢を見ることなどあるのだろうか。
「まさかまたカレンに転移させられたなんてオチじゃないっスよね」
場所は月海原学園で間違いないようだ。
下校する生徒達が昇降口に向かって歩いている。
その中の一人がアタシにぶつかりそうになり、
そのままアタシの体をすり抜けた。
「うん、こりゃ夢だわ。しかしなんで夢の中までここなんスか。どうせならかわいい男の子のハーレムの夢でも見たかったっスよ」
とりあえず歩いてみることにしたアタシは人の流れに沿って昇降口にたどりつく。
そこに立っている人物を見てアタシは思わず足を止めた。
「あれってアタシじゃないっスか？」
周囲の生徒が制服を着ている中一人だけ私服な為その姿は嫌でも目立っている。
ワイルドに伸びた髪（ボサボサとは言わないっス）
全体的に少し太めのフォルム（デブじゃないっス。ぽっちゃりっス！）
カーディガンにジーンズという唯我独尊のファッション（流行？何それおいしいの？）
それは間違いなくアタシ、ジナコ・カリギリだった。
自分の姿を傍から見せられるとかどんなバツゲームっスか。

やっぱりカレンの仕業のような気がしてきたっス。
どこかに頭でもぶつけてこの夢を強制終了させられないものかとアタシが考え始めたその時。
『そこで何してるっスか。そんなとこにしゃがんでると邪魔っスよ』
しゃべっているのはアタシではない。
向こうに立っている「ジナコ」だった。
校舎の出口にいる〝誰か〟に向かって「ジナコ」は話しかけているようだ。
『女の子が倒れてる？　貧血でも起こしたんスかね。保健室に運んであげればいいっスよ』
話し相手は下駄箱に隠れていてよく見えない上に何を言っているかよく聞こえない。
聞こえるのはもう一人の「ジナコ」の声だけだ。
『うええ!?　嫌っスよ。どうしてボクも付き添わないといけないんスか。面倒事はゴメンっス』
まぁ、アタシならこう言うよね。
さすがジナコさん夢の中まで歪みねぇっス。
『……分かったっスよ！　分かったからそんな目で見ないでほしいっス。君には鍵をもらった恩があるっスからね。でも運ぶのは君っスよ。ボクは付いていくだけっスからね』
驚いたことに話し相手はあの「ジナコ」に面倒事を頼むことに成功したらしい。
一体どんなヤツなのかとアタシが下駄箱に近づこうとすると視界がぐにゃりと歪んだ。
辺りの風景がだんだん曖昧になっていく。
ああ、夢から醒めるんスね。
なんのオチもない変な夢だったっス。
歪む視界の向こうで「ジナコ」と並んで歩く人影が見える。
しかし、目を凝らしてもそれが誰なのかは分からなかった。
『思い出す必要はありませんよメス豚さん。あなたはずっと忘れていればいいんです。そう、ずっとね……』

聞いたことのある声が頭の中に響いたのを最後にアタシの意識は再び眠りに落ちていった。

ジナコ＝カリギリは静かに暮らしたい

「んぅ……う～ん……」
　眠りから覚めたアタシは目を開く。
　外は薄っすらと明るくなってきているが、まだ朝とよべる時間ではない。
　なんだか変な夢を見たせいで早く目が覚めてしまったようだ。
　あれは聖杯戦争の予選だった気がするんスけど。
　あの時アタシは昇降口であの２人に出会って、そして……。
　ん？　あの２人って誰だ？
　アタシは首をかしげる。
　聖杯戦争の予選での記憶がどうも曖昧になっている気がする。
　そもそもアタシは予選ではずっと用具倉庫に引き篭もっていたはずだ。
　ならばなぜ本選でアタシは〝外に出ていた〟のだろう。
　予選と本選の間に何かがあったような気はするんスけど……。
　自分の中の記憶をたぐりよせようと考え込もうとしたその時。
『ジナコォォォォォォォォォ！　お主の心の師匠、臥籐門司が参ったぞ！　今日もお主の人生の海原をモーゼのごとく導いてやる所存なり。我が神もお待ちかねである！』
『ジィイイイナァァァァァァコォォォォォァァァァァァ!!』
　……なんだかいろんな事が頭からふっとんだっス。
　なんかアルク様までアタシの名前絶叫してるし。
　ご近所のマスターから苦情が来たらどうしてくれるっスか。
　マイルームの扉の向こうから聞こえてきた大声に、アタシは仕方なく布団から身を起こす。
　同時にカルナが姿を現した。
「珍しく早起きだなジナコ。それでどうする。寝た振りをしてもまた布団ごと連れ出されるだけだと思うが」
「本当に連れ出されるのを止める気はないんスね。それでもアタシのサーヴァントなんスか？」

「言っただろう。あの男にお前を傷つける意志はない。なんの酔狂なのかは分からないが本当にお前を鍛えたいだけのようだ。それならば俺はそれを邪魔する気はない」
「全くおっさんといいカルナさんといい何を考えてるんだか……」
仕方なくアタシは布団から這い出す。
本当にアタシは何をやっているのだろう。
今更自分を鍛えた所で3日後には全てが無になるというのに。
「まぁ、所詮は死ぬまでの暇つぶしっス。おっさんの気が済むまで付き合ってやるっスよ」
そう言いながらアタシは激しくノックされているドアへと向かう。
それは『修行』という名のモラトリアムの始まりだった。

◆　◆　◆

今日も朝の4時からアリーナに篭りながら交互にエネミーを狩り続けるアタシとガトー。
といってもガトーがエネミーを狩るのは5回に1回、あとの4回はアタシが狩っている。
ガトー曰く「我が神をつまらぬものと戦わせるのは忍びない」だそうだが。
結果アタシは4回に1回の休憩を挟みながら延々とエネミーを狩り続けることになるわけだ。
そう、夕方まで……。
「ああ……今日も夕日の赤が目に染みるっス……。大体ジナコさんは争いは嫌いなんス。植物の心のような生活がしたいんスよ。なのにどうしてこうなった……」
校舎に戻ってきたアタシは盛大にため息をつく。
「はっはっは！　ジナコよ！　植物のように全てを受け入れ強く生きることを目指すとは我が弟子ながら見事な志（こころざし）である！　明日からの修行はさらに厳しくいくので楽しみにせよ！」
「うわーたのしみー（棒）。なんだかこの意思疎通がまったくできない

会話にも慣れてきた自分が怖いっス」
このおっさんをを爆破するコードキャストが作れないもんスかね。
触ったものを爆弾にしたり、遠隔自動操縦で爆破したり、時間ごと吹き飛ばしたりとか。
アタシがブツブツ言っているとガトーが急に立ち止まる。
やばっ！　口に出てたっスか!?
「いや、別におっさんの手を集める嗜好に目覚めたとかじゃないっスよ！　でも『爪』が伸びるのを止められる人間はいないわけで……」
「何を言っておるのか分からんが、着いたぞジナコ」
へ……？
着いたってどこに？
アタシは辺りを見回す。
いつのまに外に出ていたのかそこは噴水のある広場だった。
そしてアタシたちの正面には教会が建っている。
電脳空間で教会っていうのもおかしなもんスね。
セーブしてコンテニューできる場所なら大歓迎なんスけど。
ガトーは教会の扉を開けて中に入っていく。
アタシも慌てて後を追いかけた。
「こんなところでお祈りでもするっスか、おっさん」
そう言いながらアタシも教会の中に入る。
入ると同時に目につくのは奥に設置してある不思議な光を放つ装置。
そしてその装置を挟んで座っている2人の女性がアタシ達を見た。
「あら、ガトーさんじゃない。この前来たばかりだと思ったけどまた来たの？　もしかして例の『サーヴァントに猫耳を付けて欲しい』っていう改造かしら？　こっちは準備できてるわよ」
装置の右に座る赤い髪の女性が陽気な声でガトーに話しかける。
自分の神様に何しようとしてるんだこのおっさん。
ていうかこの女の人も『準備できてる』とか大概なんですけど。
「ミスターガトー。あなたの嗜好や性癖は否定しないが、そこの女に頼むのだけはやめておけ。頭に猫耳をつけるついでに体を三頭身に

されて、どこかの喫茶店に売られることになるぞ」
今度は装置の左側に座る青い髪の女性の静かな声が響く。
なんかそれはそれで強そうっスね。
ビーム出したり、ジェットで飛んだり、無限に増えたりできそうっス。
「い、いや……あれは言った後で我が神に引っ掻かれたので断腸の思いで諦めたのだ。今日は青子殿と橙子殿に弟子の『魂の改竄』をお願いしたい」
そう言ってアタシを指差すガトー。
魂の改竄？
なんか危ない臭いがするんスけど。
「簡単に言うとサーヴァントを強化する儀式のことね。まぁ、マスターの霊格に左右されるからあなたのレベルが上がってないと意味がないものなんだけどね。」
青子と呼ばれた赤い髪の女性が説明してくれる。
じゃあ、アタシがやっても意味がないんじゃないだろうか。
何日かアリーナで戦ってるけど全然強くなってる気がしないし。
「まぁ、やってみて損はない。君は自分の実力を客観的に見た方がいいと思うがね？」
橙子と呼ばれた青い髪の女性が辛辣な言葉を放つ。
普通なら反感の一つも覚える所だが、全身から放たれる彼女の説得力にアタシは何も言い返せなかった。
「……じゃあ、とりあえずお願いするっスよ」
拗ねたような声を出すアタシに送り出される形でカルナが中央の装置に入る。
青子が装置の端末を操作すると、カルナの体が光に包まれた。
「うん、マスターの霊格が規定値に達しているわ。これならサーヴァントの階梯を上げることができるわね。何よ、ちゃんとがんばってるんじゃない」
「ほ、本当っスか？」
青子の言葉にアタシは目を見開く。

どうやら知らないうちにアタシの魔力はアップしていたらしい。
しかしそうなると納得できないことがあるのだが……。
「でも未だにカルナさんはランサーなのに槍の一つも出せないんスよ。もしかしてボクのサーヴァントはどっかに欠陥があるんじゃないっスか？」
「欠陥？　とんでもない。あなたのサーヴァントはかなり上級、いや超級と言ってもいいサーヴァントよ。でも、槍が出せないなんておかしいわね。この内臓魔力なら……」
青子が言葉を続けようとしたところで、カルナがそれを目で制した。
「ジナコ、少しだが力が戻ったのを感じる。よくがんばったな」
「な、なんスかカルナさん。褒めても何もでないっスよ」
憎まれ口を叩いたアタシだが顔がニヤけるのを止めることはできなかった。
自分の努力を他人に認められるのは随分と久しぶりだったからだ。
無理やりにやらされていた修行だったが一応成果はあったらしい。
まぁ、悪くない気分っスよね。
引き篭もってた15年間では味わえなかった気持ちっス。
謎の感動に浸るアタシには青子の言いかけたことはもうどうでもよくなっていた。
「さて……そろそろかのぅ……」
そしてそんなアタシの顔を見ながら真剣な面持ちでつぶやくガトーにも、この時のアタシは気がついていなかったのだった。

戦うことを強いられているんだッ！

聖杯戦争５日目の朝。
今日もアタシはガトーに叩き起こされアリーナに連行されている。
そこまではまぁいつもの事だったのだが、
今日に限ってこの神様フェチがとんでもないことを言い出した。
「というわけで今日の修業はサーヴァント同士の模擬戦である！」
「唐突に何言い出すんだこのおっさんは。絶対いやっス！」
「はっはっは！　１５年越しの反抗期かジナコよ！　だがそれを受け止めるのも師の務め。神の愛は父の愛なり！　さぁ、この『臥父さん』の胸に飛び込んでくるがよい！　ほれハリーハリー！」
「このおっさんウザすぎィ！『臥父さん』ってなんなの？　馬鹿なの？　死ぬの？　そしてジナコさんは今日も朝４時起きなの!?」
攻性プログラム相手の戦闘だってやっと慣れてきたところなのだ。
それなのにあのアルク様相手に模擬戦をしろと？
そう思ったアタシはガトーの傍らに立つアルク様をチラリ。
最近ちょっと仲良くなれた気がするし手加減してくれたりとか……。
「フゥウゥウゥウゥウゥウゥッ！」
うん、無理。
やばいよ、やばすぎるよ。
アルク様ったら牙剥きだして完全に殺る気１０００％じゃないですかーやだー。
「相手の手の内を知るいい機会だ。俺はかまわんぞジナコ」
ってなんでカルナさんもやる気になってるっスか!?
あれ？　もしかして嫌なのアタシだけ？
誰かー!?　ムーンセルにジナコさんの味方はいらっしゃいませんかー!?
『勝手なことをされては困りますねガトーさん。こんなところで模擬戦などこの私が許しません』
アリーナに響く声と共に黒い修道服姿の少女が姿を現す。

ドS紫陽花キター！　もうこの際コイツでも構わないっス！
この模擬戦への流れを変えて完全勝利したジナコさんＵＣっスよ！
「決戦場以外でのマスター同士の私闘は禁じられています。あなたも知っているはずですが？」
「いくら我が天使カレンたんの言葉でも聞けぬ相談よ。小生と我が弟子ジナコは今こそ拳で語り合い、師弟愛を深めねばならぬのだ！　今この場でハルマゲドンが起ころうとも我らは模擬戦をやめることはない！」
なんでアタシとおっさんの模擬戦が世界崩壊より優先されてんの？
「そこまでの覚悟とは……。私、ガトーさんの決意に心打たれました。という訳でジナコさんはさくっと模擬戦して死んでください。あとカレンたんて呼ぶな」
「うぉぉい！　今の感動する流れじゃなかったでしょうが！　さては最初から止める気なんてなかったんスねコンチクショオオオオオ！」
『模擬戦なんて許さないと言ったな。あれは嘘だ』って言うオチっすか！
「あら、嘘なんてついていませんよ。私は私が見ていない〝こんなところ〟で模擬戦をするのは許さないと言ったんです。私は試練によってヒトを見極める者。あなたがこの模擬戦（しれん）をどう乗り越えるのかを見届ける義務があるのです」
「……で本音は？」
「ブタコさんが無様に叩きのめされるのを近くで見たかっただけです♪」
よし、地獄に落ちろ。
「とは言えムーンセルがマスター同士の私闘を禁じているのは事実です。ですからあなた達が戦える時間はムーンセルが介入するまでのせいぜい1分間といったところでしょう。校舎での私闘は即ペナルティですがアリーナならばそれもありませんしね」
「いいんスか？　ムーンセルが禁止してることをアンタが見逃し

ちゃっても」
「お2人の模擬戦への決意は固いと見ました。止めるには実力行使しかないでしょう。でも私は健康管理ＡＩですからマスターに手を出すわけにはいきません。ああ、困りました。せめて私にできることは大事が起こらぬように見守ることだけ……。ということで心置きなく散ってきてくださいできるだけ派手に」
ムーンセルさんいいんですかこんなＡＩ野放しにして。
とはいえカレンまでかかわってきたのなら模擬戦をしなければこの場は収まりそうにない。
カレンは模擬戦の制限時間は1分間だと言った。
1分間なんとか逃げ回ればこの場をやり過ごすことができるだろう。
「分かったっスよ。そうと決まればとっとと始めて1分で終わらせるっスよカルナさん」
「セリフだけなら強そうなところが逆に悲しいなジナコ」
「言わなければ決まってたのにィ！」
アタシとカルナはガトーを正面に見据えながら戦闘体勢をとる。

「ようやくその気になったようだなジナコよ。ならばこの拳を以ってお主に神を教えを叩き込んでやろう。我が神よ！　準備はよろしいか!?」
「ハァァァァァァァァァァァァァ！」
ガトーの合図でアルクェイドが吼える。
連日のアリーナ通いと魂の改竄で少しはアタシも強くなっているはずだ。
1分間逃げ切るだけならできるはず。
アルク様の攻撃も当たらなければどうということはないんスよ！
「ガァッ！」
叫ぶアルクェイドが地を蹴りカルナとの間合いを詰める。
繰り出される爪の攻撃を回避しながらカルナは離れようとするが。
「グッ!?」

すぐさま追いつかれたカルナをアルクの爪がかすめる。
アルクェイドの動きが速すぎる。
スピードが違いすぎて逃げようにもすぐに追いつかれてしまう。
「カルナさん！　回避は諦めてガードするっス！」
アタシの声にカルナは足を止め、攻撃を防御する戦法に切り替える。
しかしガードの上からでもカルナの体力が削られていく。
アルクの攻撃力を受け止めるだけの防御力が今のカルナにはないのだ。
「1分持ちそうにありませんね。超級サーヴァントもマスターがあなたではこんなものですか」
「そ、そんな……」
カレンの言葉にアタシは立ち尽くす。
カルナはすでにアルクェイドのサンドバックと化していた。
攻撃を回避することも防御することもできないのだ。
あとはただ相手の攻撃を受け続けるしかない。
少しは成長したと思っていた。
だが甘かったのだ。
アタシのような人間がちょっと努力しただけで他のマスターと戦えるはずなんてなかった。
「おっさんストップ！　降参っス！」
たまらずアタシは叫んだ。
しかしアルクェイドの攻撃は止まらない。
ガトーは黙ったままこちらを静かに見つめているだけだ。
「おっさん。もしかして本気で……」
アタシは悟る。
これは模擬戦なんかじゃなかったんだ。
ガトーは最初からアタシをここで……。
「逃げてカルナ！」
だがカルナのスピードではそれも叶わない。
アタシのサーヴァントは目の前で打ちのめされていくだけだ。

ごめんねカルナ。
あなたがそんな風になってるのはアタシのせいだよね。
アタシがあなたの力を引き出せないから。
「もういいよカルナ！　もう戦わなくていいから！」
もう倒れていいよ。
休んでいいよ。
こんなアタシのために戦わなくてもいいんだよ。
だがカルナは倒れない。
無数の攻撃をその身に受けながらも彼はそれに耐えている。
アタシは歯を食いしばる。
心の奥から湧き上がってくるのは悔しさだった。
悔しい悔しい悔しい。
あんなにがんばっているカルナにアタシは何もできない。
「どうやら最後まで『敵』にはなれなんだか……。ならば愚僧(おれ)も覚悟を決めようか」
ガトーの言葉にアルクェイドが駆ける。
さらに力のこもった一撃がカルナを打ち倒そうと迫る。
「カルナァ！」
本当にごめん。
こんなアタシでごめん。
あなたをこんな目にあわせてごめんなさい。
でも……でもアタシここで死にたくない。
負けたくないよカルナ！
「そう、その一言が聞きたかったのだジナコ」
アルクェイドの一撃をカルナの左腕がからめとる。
「ガッ!?」
攻撃の方向をずらされたアルクェイドの体勢が崩れた。
「だいぶやられたが一刺し返させてもらうぞ」
そしてカルナの右手が動く。
槍のように鋭い貫手がアルクェイドの心臓に突き刺さったその時。
《マスター同士の私闘は禁じられています。ただちに戦闘を中止して

ください》
ムーンセルの介入により両者のサーヴァントが強制的に引き離される。
「最後の一撃は見事だったぞジナコ」
「お、おっさん……」
しかし傍らに立つアルクェイドはピンピンしている。
今のカルナの攻撃力ではあの一撃もたいしたダメージにはならなかったようだ。
「今日をもってお主を破門とする。これから貴様は俺の『敵』だ」
「え……」
ガトーはアタシに背を向ける。
「2日後、俺は聖杯に託す願いの為にお主を殺す。強くなるがいいジナコ。強い敵を倒してこそ我が神の威光は一層輝く。そのために小生はここまでお主を鍛えてきたのだからな」
ガトーの姿がアリーナから消える。
リターンクリスタルを使ったのだろう。
『なるほど、ブタも追い詰められると何をするか分かりませんね。最後の一刺し、あれが彼の〝本来の得物〟で放たれていたのなら……。ふふ、断然面白くなってきました』
いつの間にか消えていたカレンのつぶやきがアリーナに響く。
しかし、アタシの耳には入っていなかった。
決戦まであと2日。
アタシに命をかけた決断が迫られていた。

『きょげんへき』

アタシは本当の気持ちを言うのが苦手だ。
騙すつもりがあるわけじゃない。
自分というモノがあやふやなアタシにとって、
本当の気持ちを他人に言うなんてとても恥ずかしいことだったから。
アタシの心は誰にも見えない。
誰にも分からない。
アタシの言葉はいつも嘘という殻で包まれていた。
アタシがそんなふうになって１５年。
積み上げ続けた嘘はいつのまにかアタシ自身になっていて、
外の世界からアタシを守る『大切な自分』になっていた。
でも本当は誰かに知ってほしかったんだ。
嘘をつくのはさみしいから。
本当がないのは悲しいから。
でも分厚くなってしまった『大切な自分』は、
逆にアタシを外に出してくれなくなった。
そしていつもアタシの『ホント』は闇の中。
大抵はいつも期待はずれ。
でもここに来てからのアタシはどうだっただろう。
ガトーと一緒にアリーナで戦って。
妙に懐かしい感じのする少年に出会って。
教会でカルナに少し褒められて。
命がけの聖杯戦争という舞台は、
アタシの心の壁を少しづつ壊していく。
本当は見ない振りをしていたんだ。
だって諦めたほうが楽だもの。
そうやって今まで生きてきたんだもの。
今更、友情とか、努力とか、勝利とか、
そんなのもう忘れちゃったもの。

でもガトーがアタシを殺そうとしたあの時。
必死に立っているカルナを見てアタシは思ったんだ。
負けたくないって。
それはきっとアタシの『ホント』の気持ち。
死を目の前にして『大切な自分』を突き破って出てきたアタシの真実。
15年前になくしたと思っていた心の熱はまだここにあったんだ。
今までのように見ない振りをすることもできる。
このまま決戦場で何もせずに殺されればいい。
それはきっととても楽なこと。
そして猶予期間（モラトリアム）最後の1日がやってくる。
アタシは――――。

◆　◆　◆

「こんなところにいたんスか。探したっスよ」
校舎の屋上でその姿を見つけたアタシは声をかけた。
時間はもう夕方に差し掛かっている。
「あんたが迎えにこないから今日はゆっくり寝てられると思ったんスけどね。そしたら今日はカレンがアリーナにぶちこんでくれたっスよ。おかげでこんな時間になっちゃったっス」
相手は背を向けたまま何も言わない。
フェンス際で下の景色を見下ろしているだけだ。
「聞いてるんスか？　ガトーのおっさん」
「何をしにきたのだジナコ。お主と小生はもう敵同士だと言ったはずだが？」
ようやく口を開いたと思ったらそれっスか。
「敵同士でも話くらいはするっス。おっさんもモブじゃないなら決戦前に敵と酒を酌み交わすくらいの心の余裕を持ったらどうっスか？」
「ふん、言いよるわ。ヒヨっこ以前のくせに」
場の雰囲気が和らぎ、ようやくガトーがこちらを振り向く。

「酒までは出せんが話くらいは聞いてやろう。なんだ？」
「単刀直入に聞くっス。おっさんはどうしてこんなことをしたんスか？」
こんなこととはこれまでのガトーの行動のことだ。
アタシを鍛えるようなマネをし、
昨日はアタシをアリーナで殺そうとした。
「それは昨日言ったであろう。強い敵と戦い、我が神の威光を一層輝かせる為だとな」
「それは嘘っスね」
アタシはバッサリと切り捨てる。
「強い敵と戦いたいならアタシを殺した後の2回戦や3回戦でいくらでも戦えるっス。ああ、最初に言ってたアタシの魂をプロデュースするとかもナシね。それなら昨日アリーナでアタシを殺そうとする理由がない」
ガトーはアタシを見つめながら黙り込む。
やれやれ普段あんだけ言いたいこと言ってるくせに、
こんな時はだんまりっスか。
「じゃあ、アタシが当ててあげるっス」
ガトーが初めて会った時に言っていた『魂をプロデュース』も
『強い敵と戦いたかった』と言うのもおそらく方便だ。
だがガトーが言っていたことの中で一つだけ本当のことがあった。
『簡単な話だ神の子よ。お主のマスターが小生の敵ではないからだ』
あの言葉だけがおそらく真実。
そしてガトーは昨日アタシに言ったはずだ。
アタシがガトーの『敵』になったのだと。
「おっさんはアタシに『敵』になってほしかったんスよね？」
そう考えれば昨日の模擬戦も、
アタシに「負けたくない」という気持ちを喚起させるものだったと分かる。
だがなぜそんなことをしたのか。
そんなことをしてもガトーに得なことなど一つもない。

でもアタシには一つ思いあたることがあった。
馬鹿馬鹿しい考えだと思うが、
他には思い浮かばなかったのだ。
「もしかしておっさんは『敵』じゃない人間を殺したくなかったんじゃないっスか？」
もしガトーに初めて会った時のアタシが戦う意志を持っていたのなら、
彼はアタシを『敵』と見なし、なんのためらいなく殺しただろう。
だがあの時のアタシは戦うことなど考えていなかった。
誰もが死に物狂いで相手を殺そうとしている戦場で、
一回戦がアタシみたいな人間だと知ってガトーは驚いたに違いない。
そこで自分の信念に絶対的な自信を持っているはずのこの男は、
初めて迷ったのではないだろうか。
戦う意志のない人間を殺すことはできない。
『臥籐門司』とはそういう人間だったのだ。
『願い』の為に『自分』を殺すか。
『自分』に殉じて『願い』を殺すか。
そしてどちらも選ぶことができなかったガトーは第３の選択をする。
アタシに戦う力を与え、戦う心を呼び戻す。
アタシを『敵』に育て上げることで『自分』と『願い』の両方を守ろうとしたのだ。
ガトーは何も答えない。
だがこの男は違うなら違うと声を大にして言うだろう。
その沈黙はアタシの考えが正しいことを物語っている。
「でも安心するっスよ。今のアタシは正真正銘おっさんの『敵』っス」
胸を張ってそう答えるアタシにガトーが目を見開く。
「アタシの願いは人生をやり直してカワイイ男の子一杯のハーレムを作ることっス！　そのためにおっさんの電波ユンユンな願いは却下させてもらうっスよ！　プギャーおっさんザマァ！」

アタシの精一杯の強がりにガトーが始めてニヤリと笑う。
「はっはっは！　言うではないかジナコよ！　そうであればもう容赦はせん。明日は我が神と小生がお主をヘルヘイムの底に突き落としてくれよう！　せいぜいがんばって成仏するがいい！」
「上等っス！　明日は倒れたおっさんの上でコサックダンスを踊ってやるっスよ！」
そしてアタシは屋上をあとにする。
アタシとおっさんはこれでいい。
いや、これ以外に向き合う方法などなかったのだ。
後は明日の決戦でアタシの『本当の気持ち』をおっさんにぶつけるだけだ。
例えその結果がどうなろうとも。
「それじゃあ、とりあえずピコがんばってみるっスかね」
アタシは振り返ることなくマイルームへの道を歩き出した。

◆　◆　◆

夜もふけたマイルームの片隅でカルナは目を開いた。
ベッドには自分のマスターが寝息を立てている。
先ほどまで端末に向かって何やら作業をしていたようだが、
終わると電源が落ちるように眠ってしまった。
（とうとう明日か）
相手は強敵だ。
加えて自分はマスターが未熟なおかげで満足に力が出せないでいる。
ジナコが戦うことを諦めていた時ならそれでもよかった。
この身はマスターに寄り添うもの。
潔く敗れて消えればそれでいい。
（だが風向きが変わったようだ）
どうやらジナコは戦う覚悟を決めたらしい。
ならば自分もその意思に寄り添わなければならないだろう。

（いくつかの布石は打ってあるが、さて……）
それらもジナコに戦う気がないのなら使う必要がなかったものだ。
だがあの時。
『負けたくない』
ジナコは俺にそう言った。
ならば俺はその心に全力で応えるまで。
カルナはジナコがマスターであることを一度も嘆いたことはない。
全ての物事を『それも有り』と受け入れることがこの英霊の本質なのだから。
明日は自分のマスターの意思に殉じてその力を振るうのみだ。
そして勝つか負けるかは……。
（それはお前次第だジナコ）
そしてカルナは目を閉じる。
その瞼の裏に映るのは勝利した主の姿かそれとも……。

おっさん、明日って今さ！

そして6日間の《猶予期間（モラトリアム）》は終わりを告げ決戦の朝が来た。
アタシは肩にかけたポシェットの中身を確かめるとマイルームをあとにする。
この決戦が終わった後、はたしてアタシはここに帰ってこられるのかな。
「昨夜は遅くまで何かやっていたようだが、体調の方は大丈夫なのかジナコ」
「問題ないっス。アタシＦＡやってた頃は寝ながらレベルを上げてたんだから。いざとなったら寝ながらでもきっちり指示は出すっスよ」
「……頼もしいのかそうでないのか判断に困るセリフだな」
カルナを言葉を交わしながら１Ｆに降りると、
決戦場への入り口になっている用務員室の扉の前に１人のＮＰＣが立っていた。
「ようこそ決戦の地へ。身支度は全て整えてきたかね？」
確か言峰とかいう神父のＮＰＣっスね。
一日目に会って以来見なかったから忘れかけてたけど。
「扉はひとつ、再びこの校舎に戻るのも一組。覚悟を決めたのなら、闘技場への扉を開こう」
覚悟というほど立派なもんじゃないんだけどね。
でも戦う意志がなきゃこのジナコさんがわざわざ布団から出てここまで来るわけないっス。
アタシは昨日慌てて用意した２つの暗号鍵（トリガー）を提示する。
扉を封鎖していた鎖がトリガーによって砕け、闘技場への扉が開いた。
実はこれがないと闘技場に入れないこと昨日まで忘れてたんスよね。
まぁ、なくてもカレンに強制連行されそうなんだけど。
でもそうなったらあの女いい笑顔ですごいペナルティ課してきそうだし。

「これでいいっスか？　お勤めご苦労様っス」
「いいだろう、もう若くはない闘士よ。決戦の扉は今、開かれた。もし生き延びられたのなら2日後の筋肉痛に気をつけ給え」
「余計なお世話っス！　まだ次の日にくるもん！　多分！」
さらっと刺してくるっスねこの神父は！
なんかカレンに似たものを感じるのは気のせいっスかね。
叫ぶアタシに全く動じることなく神父は静かに言葉を続ける。
「ささやかながら幸運を祈ろう。再びこの校舎に戻れることを」
幸運……ね。
このアタシがここに戻ってくるにはどれだけの運が必要なんだか。
「そして――――存分に、殺し合い給え」
物騒なセリフに見送られながらアタシ達は開いた扉へと足を踏み出した。

◆　◆　◆

扉の先はもちろん用務員室ではなく闘技場へと降りるエレベーターだ。
これから戦う2組のマスターとサーヴァントはこのエレベーターで闘技場へと降りていく。
1組はアタシとカルナ。
そしてもう一組は……。
「今日はさすがに寝坊はなかったと見える。だが身支度をする時間はなかったようだな。今日もいつも通りのボサボサ頭よ。小生の神プロデュースもそこまでは行き届かなかったというわけか？」
「ちゃんちゃらおかしいっスよ。イケメン力たったの5のおっさんに会うならこれで十分っス。おしゃれしたハイパージナコさんが見たいなら、イケメン力を53万まで上げて出直すことっスね」
透き通ったシステムの壁の向こうに立っているのはガトーとアルクェイドだ。
「小生からほとばしる御力を感じ取れぬとは未熟にもほどがある。万

能にして優美なる我が神から賜った大天使の羽にも劣らぬこの圧倒的感無量寿経の前にはイケメン力などゴミクズに等しい！　そして小生は決して5という数字にショックを受けてはいない！　決してだ！」
「ゴミクズとか言っといて。めちゃショック受けてるじゃないっスか！」
　でもどうやら昨日と違って完全に本調子みたいっスね。
　まぁ、昨日の雰囲気で来られてもこっちが調子狂っちゃうんだけど。
「どうやらお主は完全に敵となったようだなジナコ！　その心意気に免じてお主との戦いは我が聖典の新たなる一節に加えてやろう！　モンジ奮闘記第五章第三節。かくして小娘めはめでたく小生のイケメンぶりを思い知りました、とな！」
「なんスかその後で読み返したら悶絶確定の黒歴史的聖典は！　そんなのに記録されるなんて耐えられないっス！　こうなったらソレおっさんごと燃やすしかなさそうっスね！」
　アタシ達がギャアギャアといい合いを続ける間にもエレベーターは降り続ける。
　そろそろネタも尽きてきたか思った頃、
　ようやくエレベーターは最下層の闘技場へとたどり着いた。
　やっと着いたっスか……。
　戦う前にかなり疲れた気がするっスよ。
　停止したエレベーターの扉が開く。
　その先の闘技場に入る前ににちょっとしたイタズラを思いつき、
　アタシはガトーを呼び止めた。
「あ、おっさん」
「ぬ？　まだ何かあるのかジナコ」
　律儀にこちらを振り返るガトーにアタシはニヤリと笑ってやる。
　これは『あの時』の意趣返しだ。
「アタシはおっさんの『敵』って言ったっスけど。おっさんはアタシの『敵』じゃないっスよ」

「……どういうことだ？」
「さぁ？　それは自分で考えるっス」
不思議そうな顔をするガトーをおきざりにしてアタシは歩き出す。
あとはお互い戦うのみ。
そしてこの闘技場でアタシの運命が決まるのだ。

◆　◆　◆

そこは海の底を思わせる一面の蒼。
周囲には珊瑚や魚の群れが見えるが本物ではないだろう。
そんな観客もいない闘技場でアタシとガトーは向かい合う。
「よくぞ逃げずにここまで来た。その成長ぶりに我が神もご満悦よ。だが『敵』として小生の前に立ちはだかるのなら容赦はせぬ！　ジナコよ我が神の雷に撃たれて塵と化せい！」
「ガアアアアアアアアアアア！」
ガトーの口上を受けてアルクェイドが吼える。
「そうは問屋が卸さないっスよ。明日ってのは今のことッス！　本気出したジナコさんの力を見せてやるっスよ！　主にカルナさんが！」
「ジナコ。最後の一言はなくてもよかったぞ」
アタシの口上受けてカルナが冷ややかなツッコミを返す。
２組のマスターとそのサーヴァントは互いに構えをとり。
――――激突する。
「シッ！」
先手はカルナ。
アルクェイドへの間合いを詰めると貫手による突きを繰り出す。
しかしそれはあの模擬戦の再現だ。
カルナの素手での攻撃はアルクェイドには通用しない。
「ガァッ！」
力任せにその突きを払いのけ、こんどはアルクェイドの爪がカルナに迫る。
模擬戦ではここでカルナはサンドバッグになるのだ。

しかし――――。
「ハァッ！」
カルナがアルクェイドの爪を鮮やかにいなす。
受け止めるのでもなく回避するのでもなく最小限の動きで攻撃の方向のみを操作する。
これならば相手よりパワーやスピードが劣っていてもダメージを食らわないですむだろう。
「ぬぅ……。そうか全てはこの時のためだったというわけか神の子よ」
「そういうことだガトー。連日のアリーナとそして先日の模擬戦。アルクェイドの動きは存分に見せてもらった。その上でならこういう戦いもできるというわけだ」
アタシが『修行』と称したアリーナでのデスマーチの最中で、カルナは敵となるであろうアルクェイドの動きを見ていたのだ。
そしてあの模擬戦の間も相手の動きを見ることに徹したことで攻撃を受け続けるハメになった。
思えばあの最後の一撃は、カルナがアルクェイドの動きを見切って放たれたものだったのだ。
「ていうかわざとやられてたんスか?!　あの時アタシがどれだけ……」
「かなり本気でやられていたのだがな。それでもお前が戦わないというのならあのまま倒れるつもりだった。それを変えたのはお前の意思だジナコ」
アタシというハンデを背負いながら。
劣るパワーとスピードを己の見切りと武の技で補いながら。
その身の上を一切嘆くことなく。
このサーヴァントはアタシの『戦う』という意志に全力で応えようとしているのだ。
「そしてお前の成長の証を今俺が見せてやろう」
何度目かの攻撃をいなされたアルクェイドが大きく体勢を崩した。
その隙に攻撃を加えようとカルナの右手が貫手の形に構えられる。

しかし素手での攻撃はアルクェイドには通らないことはもう自明の理だ。
「カルナ！　それじゃ……」
ダメだと言おうとしたアタシはその動きに目を奪われた。
貫手と思われたカルナの手のひらが『何か』を掴む形に握り締められていく。
その動作と共に膨大な魔力がその右手に集まり、炎を纏った槍を形作る。
そしてそれは即座にアルクェイドへと放たれていた。
「ガァァァッ!?」
槍を受けた部分を焦がしながらアルクェイドが下がる。
今の一撃は完全に『通った』
初めてアタシはアルクェイドにまともなダメージを与えたのだ。
しかしカルナの槍は今の一撃で力を失ったように消失してしまう。
「まだ安定はしないか……。だが最初に比べれば随分マシだ。お前の成長が形をとって敵を貫いた。誇るがいい我が主人よ。そして我が槍の神技しかとその目に焼き付けるがいい」
これはカルナの意趣返しか。
アタシはアリーナに初めて入った時を思い出す。
でもあの時とはアタシもカルナも違う。
それをカルナは証明してくれたのだ。
月の姫と太陽の御子が再びにらみ合う。
さて、カルナさんの次はアタシの番っスね。
アタシは『とっておき』の準備をするべく、肩にかけたポシェットに手を伸ばした。

真の英雄

アタシはポシェットを開くとごそごそと中を探る。
中に一緒に入れていたキャンディがこぼれるのも構わず『とっておき』を引っ張り出した。
圧縮したデータの塊であるそれはアタシが作ったコードキャストだ。
一晩で作ったヤツだから効果はお察しっスけどね。
でも戦うと決めたなら何もしないわけにはいかないじゃない。
ノーマル人でニートなアタシがアルクェイド相手にできることなんて、
これくらいしかないんスよ。
「ささやかな嫌がらせっス！」
引っぱりだしたコードキャスト《ｃｈｅａｔ＿ａｔｋ（）；》をアルクェイドに向かって放つ。
このコードキャストは相手に微量のショックを与え、魔力を削り取る効果を持っている。
カルナとの戦闘に注意を割かれているアルクェイドにコードキャストが命中し、
その動きをわずかに鈍らせた。
「シッ！」
それだけの隙があればカルナには十分だ。
再び右手に具現化した炎の槍が突きこまれ、身を焦がしたアルクェイドが押し返される。
「コードキャストまで用意していたとは、あのカピバラがよくぞここまでに至ったものよ。小生の指導がよほど良かったと見える。来世ではプロデューサーになるのも悪くないかもしれんな」
「おっさんのプロデュースじゃアイドルがランクＦで終わっちゃうっスよ。でもまぁここで負けるおっさんが来世の心配をするのは当然か。なれるといいっスね、プロデューサー（笑）」
「言いおったな小娘。我が神の御力でエデンの彼方までその汚れた身

体を葬り去ってくれるわ！」
「昨日はちゃんとお風呂に入ったもん！　ジナコさん汚れてないもん！」
アタシは続けざまに《ｃｈｅａｔ＿ａｔｋ（）；》を放つ。
効果はわずかだが速射できるのがこのコードキャストのいいところだ。
アタシのコードキャストが作り出すわずかな隙をカルナは的確に捉え、
炎の槍でダメージを与えていく。
「ガアァ！」
アルクェイドがその身体のあちこちに火傷を伴なった傷を負いながら苦しげにあえぐ。
槍のダメージに加えて魔力も削り取られているのだ。
２重の痛手にさすがのアルクェイドも平気ではいられない。
「どうっスか！　このジナコさんが布団を出たからには手ぶらでは帰らないっス。ここでおっさん相手に大金星をゲットさせてもらうっスよ！」
「威勢がいいことだなジナコ。だが小生は負けるわけにはいかんのだ！」
「ガアァァァァァァァァ!!」
咆哮と共にアルクェイドの身体にさらなる魔力がみなぎる。
「小生は現世を神の教えにて救うべく、あらゆる宗教を学び全ての教えを体現してきた。だが小生は気づいてしまったのだ。神とは人間が望んで作り出した己への究極の罰なのだと！　人間を救う神などいないのだとな！」
ガトーの叫びと共により苛烈さを増したアルクェイドの攻撃がカルナを襲う。
動きを読みながら懸命に攻撃をそらすカルナだが、
予測を上回るアルクェイドのパワーとスピードを殺しきることが出来ず
その爪が身体をかすめ始める。

「だが絶望していた小生の前に真の神が現れたのだ！　それこそ我が神アルクェイド・ブリュンスタッド様である！　小生はこの聖杯戦争を勝ち抜き、神の威光で必ずや世の人々を救ってみせる！　我が神！
　我が祈りよ！　準備はよろしいか!?」
「ハァァァァァァァァァッ！」
　アルクェイドから膨大な魔力が立ち昇る。
　血のように赤い魔力が地面に波紋のように落ちた。
　その中心で赤い月の化身が獲物を引き裂こうと両手を広げる。
　あれはなんかやばそうっス！
　敗北イベントで食らう敵必殺技みたいな雰囲気ビンビンっスよ！
「カルナ！」
「ああ、わかっている。『宝具』というよりはそういう『権能』のようだがどちらにしろやっかいな一撃がくるぞ。今の俺でしのげるかどうか」
「そ、それならこっちも宝具を出すっスよ！　カルナも何かすごい宝具持ってるんスよね!?」
「あるにはあるが今の俺では扱うことは難しいな。お前の魂が燃え尽きるまで魔力を回せば1回くらいは使えるかもしれないが、どうする？」
「そんなの聞くまでもないでしょーが！　ああ、もうダメだぁ！　おしまいだぁ！」
　頭を抱えるアタシとカルナに狙いを定め、
　アルクェイドの体が沈みこみ――――。
「我が神！　麗しの月よ！　ここに黄金の地獄を解き放ち給え!!」
　――――放たれた。
　極限まで高められたスピードで瞬間移動のように間合いを詰めたアルクェイドが、
　鋭い爪による無数の斬撃を繰り出す。
　もはやそれはカルナを捕らえる斬撃の檻だった。
　攻撃をいなすことはもちろん回避さえも不可能。
　カルナは両腕を交差させ、懸命に防御する。

「ガアアアアアアアアア！」
「ぐうううううううう！」
全身を斬り刻まれながらもかろうじてカルナはアルクェイドの攻撃を耐え切る。
己がサーヴァントの最大の一撃を受けてなお立っているカルナを見て
ガトーが苛立たしげに口を開く。
「神の一撃で往生せぬとは、この不心得者どもが。だがどうやら勝負あったな。その様子ではもう戦うことなどできまい」
アタシはカルナの姿を見て言葉が出なかった。
身体のあちこちに決して浅くはない無数の傷を負い、
攻撃を防御した両腕にいたってはついているのが不思議なくらいにボロボロだ。
両手をダラリと垂らしながらたたずむ様は、倒れないことが不思議な有様だった。
「これでも小生は感謝しておるのだジナコ。お主が敵となってくれたおかげで、小生は無抵抗の者を殺す外道に堕ちずにすんだ。せめて最期は苦しまぬようとどめを刺してくれよう」
アタシは膝から崩れ落ちそうだった。
いや、崩れ落ちてもいいのかもしれない。
戦いとは無縁でニートのアタシが、敵マスターに宝具を使わせるまでに追い詰めたのだ。
それだけで大金星ではないか。
「ジナコ、お主はよくやった。この臥籐門司が『敵』であったことが不運だっただけだ」
ちがう。
アタシの敵は臥籐門司ではない。
模擬戦の時の気持ちを思い出せ。
アタシはあの時『負けたくない』と思ったはずだ。
本当の気持ちを見つけたはずだ。
ならば、アタシの敵は――――。

「諦めようとするアタシ自身っスよ」
崩れ落ちそうになる足に力を込めて前を見る。
そう、まだ負けたわけじゃない。
アタシもカルナもまだ立っているんだから。
「カルナ、まだ戦える？」
「マスターが戦うと言っているのだ。俺はその意思にどこまでも寄り添おう」
満身創痍ながら頼もしい言葉を返すカルナにアタシはうなづく。
「だが状況が厳しいのは事実だ。俺達に許された攻撃はあと一撃といったところだろう」
「一撃って言ったって……」
アタシはカルナの両腕を見る。
アルクェイドの宝具により切り刻まれた両腕はもう動かすことすらできないようだ。
これでは槍での攻撃はおろか素手での攻撃さえも不可能だろう。
「心配するな。お前はありったけの魔力を俺に回せばいい。真の英雄が何を以って敵を殺すのか。それを奴らに教えてやろう」
どうやらカルナには考えがあるようだ。
ならばアタシはカルナの言うとおり〝ありったけの魔力〟を用意する。
「アタシにはおっさんみたいな大層な願いはないっス。でもアタシはもう自分の気持ちを偽るのはやめたんスよ。アタシは負けたくない。嘘つきなアタシには負けたくないんだ！」
マスターたるジナコ＝カリギリが令呪を以って命ずる。
「カルナ、次の一撃に全ての力を!!」
令呪とは聖杯戦争のマスターがサーヴァントに対して持つ３つの絶対命令権だ。
それ自体が膨大な魔力を秘めており、サーヴァントの性能を跳ね上げる効果もある。
アタシはその魔力を全て最期の一撃に使うように命じたのだ。
令呪の莫大な魔力がカルナへと注ぎ込まれる。

その魔力で両腕を治すのかと思ったのだが、その様子はない。
相変わらず両腕を下げたままカルナは視線だけを敵に向けている。
「最期まであがくかジナコ。それもよかろう。ならば我が神の慈悲により浄土へ行けい！」
カルナの様子に気づいたガトーがサーヴァントを動かす。
瀕死のカルナにとどめを刺すべくアルクェイドが疾駆する。
その爪をいなす左腕も炎の槍を持つ右腕も封じられた。
膨大な魔力をその身に宿そうとも敵を殺す手段がカルナにはない。
だが彼は言っていた。
真の英雄が何を以って敵を殺すのかを教えてやると。
カルナをとりまく魔力が収束する。
それはただ一点、彼の右目へ。
すなわち――――。
「真の英雄は眼で殺す!!」
カルナの右目から放たれた強烈な閃光は、
爪を振り下ろそうとしていたアルクェイドに直撃しその身体を貫いた。

君を忘れず

カルナの右目から放たれた光は決戦場全体を白く染め上げていた。
近くにいるアタシも眩しくて目を開けていられないほどだ。
これ熱視線てレベルじゃねーっスよ！
カルナさん『眼で殺す』ってそういう意味じゃないから！
まぁ、アルクェイドがカルナの視線でメロメロになっても困るんスけどね。
どっかの死神に分割されそうな気がするし。
アタシの右手の甲に刻まれた令呪の一画が消失する。
決戦場を染め上げる光が徐々に消失していく。
そしてようやく見えるようになったカルナの背中が大きくよろめいた。
「カルナ！」
「大丈夫だ。まだ倒れるわけにはいかないからな」
令呪の、いやアタシの意志に応えてあの技に全ての力を使ったのだろう。
かくいうアタシの魔力も底をついている。
令呪の魔力も乗せた閃光は確かにアルクェイドを貫いた。
あれを食らって無事でいられるはずがない。
とか考えてる時点でフラグっスかね。
ここで「やったか!?」なんて死んでも言わないっスよ。
光が消失した決戦場でアタシはガトーを探す。
「ふん、『アタシの敵はおっさんじゃない』か。なるほどな」
声が聞こえた方向に目を向けるとガトーは神妙な面持ちでこちらを見ていた。
傍らにアルクェイドも立っている。
やっぱ嫌なフラグ建っちゃってたスね。
でも諦めてなんてやるもんか。
もう一つ令呪を使ってでも最後まであがいてやる。
もう一度カルナにあの技を使ってもらうか。

それとも両腕を治して正攻法で戦うか。
それとも……。
立っているのもやっとなアタシが思案をめぐらせたその時。
ガトーがこちらを見てふっと笑った気がした。
その顔に先ほどまでの敵意は微塵もなくて――――。
「間が悪かった……か」
短くそう言ったガトーの横でアルクェイドがどさりと音を立てて倒れる。
「あ……え……？」
頭が真っ白になっているアタシの前に、
勝者と敗者を隔てる赤いシステム壁が現れる。
臥籐門司のサーヴァントは倒れたまま動かない。
そしてアタシのサーヴァントはかろうじてだがまだ立っている。
勝った……の？
もしかして負けたのは自分なのではと身体を見るが
何も起こる気配はない。
ということは。
「お主の『敵』は自分自身だったというわけか。見事にしてやられたわい」
「おっさん、それ……」
赤いシステム壁の向こう。
臥籐門司のアバターは足元から黒く変色し崩壊しようとしていた。
このＳＥ（セ）・ＲＡ（ラ）・ＰＨ（フ）でアバターを失うということは
すなわち『死ぬ』ということに他ならない。
「なんて顔をしておる。勝者のする顔ではないぞジナコ」
「だって……だって……」
考えなかったわけではない。
アタシが勝つということはガトーが負けるということ。
アタシが生き残るということはガトーが死ぬということなのだ。
決して考えなかったわけではない。
しかし死にゆくガトーを前にして初めてアタシは現実を突きつけ

られる。
自分の意思を貫いた結果ガトーを殺してしまったという現実を。
「アタシが……アタシが負ければよかったんだ……」
小さなつぶやきが漏れる。
アタシは自分の為に『負けたくない』と願い、
ガトーは人々の為に『救いたい』と願った。
どちらが生き残るべき人間なのかは明白だ。
ガトーの迷いのない信念はいつか人々を救うかもしれない。
だがアタシのようなニートが生き残ったところで何の役にも立ちはしないのだから。
「それは違う。それは違うのだジナコ」
身体の半分を黒く染めながらガトーが首を振る。
「お主と小生の願いに優劣などありはしなかった。あったのは強弱だけよ。お主の願いが愚僧(おれ)の願いよりも強かった。それならばお主こそが生き残るべき者なのだ。お主はよく自分をニートだと蔑むが、人間とはそもそも奪い、殺し、貪り、そして忘れるスーパーニートなのだ！　何も悪いことではない！」
そう言うガトーは敗北を経てもその言動に少しの迷いも感じられない。
対するアタシは下を向いて泣くのをこらえるのに必死だった。
これではどちらが勝者なのかわからない。
「ほれ、このハイパーイケメン求道僧に勝利したのだ。胸を張るがいい。なんならそこでコサックダンスを踊ってもかまわんぞ？」
「グスッ……まだイケメン力のこと気にしてたんスか？　それにあの時は勢いで言ったけど正直ジナコさんの体型でコサックダンスは無理があるんスよ……」
アタシ目をこすりながらは丸まりかけた背を正す。
ガトーの最期をその目に焼き付ける為に。
その身体は大部分が崩壊しておりもう顔の一部しか残っていなかった。
「しかしあらゆる教えを体得しながらもついに人間を救うことはでき

なんだか……」
「そんなことはないっスよ」
もう時間がないガトーの言葉をアタシははっきりと否定する。
「少なくともおっさんに救われた人間が一人はいるっス。それはアタシが保証するっスよ」
「そう……か……」
もうガトーの表情は分からない。
だがアタシは確かにその顔が笑ったように見えた。
「ならば……良しとするかのぅ……」
そしてついにその巨躯が完全に崩壊し消滅する。
それが『敵』ではないアタシを殺すことを良しとせず己の在り方を貫き通した求道僧。
臥籐門司の最期だった。
「――――はぁ、ようやく解放されたかー」
その時決戦場に聞き覚えのない声が響く。
驚いてそちらを見るとなんとアルクェイドが立ち上がっていた。
え、えええええええええ!?
マスターがいないのにどうして消えないんスか!?
それどころか普通に立ち上がってるんですけど!?
「ないわコレ！　と思っていたんだけど最期はちょっとかっこよかったわよガトー。さよなら純真なマスターさん？　アナタの教義に輪廻転生があるのなら、次の命で会いましょう」
軽い調子ながらもその言葉にはガトーの死を悼む心が感じられる。
「さすがに真祖を殺しきることはできなかったか。マスターがいなくなり、サーヴァントの枠から解放されたのだろう」
「そーゆーこと。あのビームすごかったわね～。アナタの視線でお姉さんの心臓は見事に撃ち抜かれちゃったゾ☆」
カルナの言葉にアルクェイドは頬に手を当てながらクネクネしている。
……なんかサーヴァントだった時とのギャップがひどいっス。
ハッ!?　まさかこの真アルクェイドとまだ戦わないといけないと

か!?
もうやめて！　ジナコさんの魔力はゼロよ！
「これ以上戦う気なんてないから安心しなさい。そもそも此処どこなの？　なんだか体がピリピリするんだけど。場違いな気もするしアタシは帰るわね」
「帰るって……」
あっけに取られるアタシを置き去りに
アルクェイドは決戦場の壁面に歩み寄るとその爪を一閃する。
すると瞬く間に彼女が通れるほどの穴が空いた。
デタラメすぎっス。
帰るなら早く帰ってプリーズ。
「――――あ、そうそう。そこのアナタ？」
穴へと向かう足を止めるとアルクェイドはこちらを振り返った。
帰ると思ったんだがそんなことはなかったぜ。
なななんでしょうかアルク様。
このジナコさんに落ち度でも!?
「意識がなかったとはいえやってくれたみたいね。殺されかけるなんて2回目よ。懐かしい気持ちにしてもらったお礼にいいこと教えてあげる」
しかしアルクェイドの表情は屈託のない笑顔だった。
彼女は赤い瞳でアタシを見ながら続ける。
「今ちょっと見えたんだけど校舎になんか甘ったるくてピンクの色魔がいるみたい。あなたは女だから大丈夫かもだけど一応気をつけなさい。なんだかアレ、かなり性質（たち）が悪そうだから」
そう言うとアルクェイドは踵を返す。
「じゃあ、縁があったらまた会いましょう。その時は――――私を倒した責任ちゃんととってもらうんだから」
今度こそ彼女は壁に空いた穴に飛び込んでいく。
その姿が消えるのと同時に壁の穴も消失した。
後に残るのは静寂。
決戦場に残るのは勝者であるアタシとカルナだけだ。

「終わったんだね」
「ああ、終わったな」
「アタシ勝ったんだよね」
「ああ、勝ったのはお前だジナコ」
カルナに言われてもアタシの心には
勝利に対する喜びも達成感も沸いてはこなかった。
アタシは聖杯戦争の1回戦を生き残った。
ただそれだけ。
だが何も得られなかったわけではない。
アタシが初めて本気で向かい合い、ぶつかり合った男。
その結果、アタシの替わりに死んでしまった男。
例え人間が奪い、殺し、貪り、そして忘れる存在だったとしても、
その男のことだけは絶対に忘れないとアタシは心に誓ったのだった。

そんなマスターで大丈夫か？

初戦にしてはなかなか面白い見世物でした。
最強のサーヴァントをもって敵を蹴散らす生まれながらの王。
それを打倒せんと勝ち進む中東のレジスタンス。
自らの性能を証明するべく参加したアトラスの人造人間。
エリートを破り大番狂わせを演じてみせたイレギュラー。
そしてようやく歩き出した怠け者のメス豚。
今回の聖杯戦争はいい役者がそろっていて嬉しい限りです。
私は試練にてヒトを見極める者。
彼らの苦痛こそが私にとっての至上の愉悦。
敗れた者には安息の死を。
勝利した者にはさらなる試練（しゅくふく）を。
さぁ、聖杯戦争の第二幕を始めましょう。

◆　◆　◆

聖杯戦争の1回戦が終わり、2回戦の猶予期間（モラトリアム）が始まった。
アタシは最低限の身支度をすませるとマイルームの外に出る。
「ふぁ～あ、朝日が目にしみるっス。おっさんのおかげで早い時間に目が覚めるようになっちゃったっスよ。エリートニートのジナコさんが健康的になったもんっスね」
「マスターが健康的になるのは俺にとっても喜ばしい。次は夜のお菓子を控えてその皮下脂肪を減らすというのはどうだろうか」
「夜のお菓子だけはやめられないっス！」
カルナの提案を一蹴してアタシは歩き出す。
「ところで1回戦でやられた傷の具合はどうっスか？」
「問題ないと言いたいところだが難しいな。他の傷はともかく両腕は完全に破壊されている。猶予期間の7日で回復させるのは絶望的だろう」
やっぱりか。

これはまいったっスね。
アルクェイドの宝具に破壊されたカルナの両腕は
1回戦から一夜明けても治ることはなかった。
このままでは決戦に臨むどころかアリーナで戦うことすらできない。
これどう考えてもアタシのせいっスよね。
アタシにもっと魔術師としての力があれば傷を治せたかもしれないし
そもそもこんな傷をサーヴァントに負わせることもなかったっス。
まぁ、カルナは絶対そうは言わないだろうけど。
まず考えたのは右手に残った令呪を使うことだ。
令呪の魔力をもって『両腕を治せ』と命じればおそらくカルナの両腕は治るだろう。
しかし全ての令呪を失えばマスターとしての資格は剥奪されることを考えると
マスターが自由に使える令呪は2つ。
その内の一つをアタシは1回戦で使ってしまっている。
ここでもう一つ使うとなると令呪という切り札を使い切ってしまうことになるのだ。
さすがにそれはまずいっスよね。
そうなるともう一つの方法しかなくなるんだけど……。
これははっきり言ってやりたくない。
これをやるくらいなら2回戦を諦めて死んだほうがマシかもしれない。
ゲームなら選んだ瞬間Ｂａｄｅｎｄまっしぐら。
どうやっても絶望である。
しかし、しかしだ。
アタシの未熟さのツケはアタシが払わなければならない。
覚悟を決めたアタシは一気にその部屋の前にたどりつくと
迷いを振り切るように扉を開け放った。
「たのもー、カレンいるっスか？　ぽんぽん痛いので診てほしいっ

スー（嘘）」
「あら、1回戦で自分を鍛えてくれたガトーさんをぶっ殺して生き残った恩知らずさんじゃありませんか。お腹が痛いのなら死ねば楽になりますよ？」
アタシが訪れたのは保健室。
目の前にいるのは紅茶を飲みながら息をするように毒舌を吐くカレンの姿。
・・・
・・やばい、早くも帰りたい。
・・だから来たくなかったんだよコンチクショー！
誰だよ保健室にいるカレンにサーヴァント治してもらおうとか考えたヤツは、馬鹿なの!?
……アタシだよすみませんでした。・・
「アタシのサーヴァントの傷を治してほ・しいっス。あんたも健康管理ＡＩならサーヴァントの傷くらい治せるっスよね？」
「もちろんできますが、なるほどあなたは浅ましくも自分ができないことを私に押し付けようというわけですか。さすがの私もドン引きです。生きていて恥ずかしくないんですかこのポルカ・ミゼーリア」
ポルカ・ミゼーリアってどういう意味っスかね・・
意味はわからないけどなんか滅茶苦茶ひどいこ・と言われた気がするっス。
「それに何か勘違いをしていませんか？　私は確かに健康管理ＡＩですがその対象はあくまでマスターです。サーヴァントの傷を治すのはマスターの役割でしょう。あなたは自分のペットの世話もできないのですか？」
相変わらず殺意が湧いてくる物言いだが言ってることは正論だ。
どう考えても虫のいいことを言っているのはアタシの方である。
はぁ……ダメ元だったんだけどやっぱりダメか。
こうなったらもう令呪で治すしかないっスかね。
「……と言いたいところですが、いいでしょう」
「……は？」

「治してさしあげると言っているんです」
なん……だと……。
これはどういうことっスか？
1回戦のアタシの戦いぶりを見て感動した？（ないない）
2回戦にして早くもデレ期に入った？（もっとない）
うまいこと言ってアタシをはめようとしている？（これだ！）
「何をたくらんでるんスか。正直に言うっス」
「失礼な。あなた私をなんだと思っているんですか？」
「鬼畜外道ドS銀髪鬼」
「気が変わりました。そこの死にぞこないサーヴァントにとどめをくれてやるとしましょう」
やめてぇ！　カルナちゃんを死なせないで！
「ともかくこれから治療に入りますので役立たずのマスターは外に出ていてください。昼ごろには終わりますから」
そう言われてアタシは保健室を追い出される。
なんだかうまくいきすぎているような気がしたが今はカレンに任せるしかない。
「そうだ対戦相手……」
カルナの傷のことで頭が一杯で忘れていたがまだ2回戦の対戦相手を確認していなかった。
この時間ならもう掲示板に張り出されているはずだ。
できれば弱くて……そして嫌なヤツでありますように。
そう願いながらアタシは掲示板の前にたどりつく。
そこには1回戦と同様に1枚の白い紙が張り出されていた。
アタシはその紙を覗き込む。
マスター：ランルーくん
決戦場：二の月想海
ランルーくんってあのランルーくんっスかね。
ハンバーガーチェーン店『レンレンバーガー』のマスコットキャラの？
え、アタシ一体何と戦うの？

「何よアレが次の対戦相手？　どんな子リスかと思ったらトドじゃないの。ホント興ざめだわ。サーヴァントもいないみたいだしここで殺っちゃわないマスター？」
背後から聞こえた声にアタシは振り向いた。
そこにはアタシを見つめる1組のマスターとサーヴァント。
片方は硬質の角と鱗のついた尻尾を持つ少女。
こちらがおそらくサーヴァントだろう。
そしてもう片方は。
「ダメダヨ……ココジャオイシクタベラレナイカラ……」
甘く透き通ったサーヴァントの声とは対照的な低くかすれた声が響く。
ピエロを模したような服装に、顔には白と赤のコミカルな化粧が施されている。
まさにレンレンバーガーのマスコット
『ランルーくん』のコスプレをしたマスターがそこにいた。
格好だけを見れば愉快なコスプレイヤーなのだが、
感情が抜け落ちたかのような無表情と血走った両目が怖すぎる。
というかコレが店にいたら子供は絶対に泣くだろう。
「本当に1回戦に続いてジナコさんの対戦相手はどうしてこう、キワモノ揃いなんスかね」
「オーディエンスにもなれないトドがアイドルにダメ出しとか１００万年早いわね。血もなんだかドロドロでのりが悪そうだし、やっぱりここで殺しましょうよマスター」
「……カエルヨ、ランサー。コノコ、アマリオイシソウジャナイ……」
サーヴァントの言葉を無視し、ランルーくんがふらふらと歩き出す。
「あ～あ、ストレスが溜まるったらないわね。お肌が荒れたらどうしてくれるのかしら」
残されたサーヴァントの少女も苛立たしげにつぶやくと姿を消す。
そして掲示板の前にはアタシだけが残された。
今度の対戦相手はまた別の意味でやばそうっスね。

あのマスター、アタシを見て『おいしそうじゃない』とか『たべる』とか言ってなかった？
一体何を食べる気なんですかねぇ……。
嫌な予感しかしないっス。
だがこの時のアタシはまだ知らなかった。
アタシの苦難はまだ始まってもいなかったことを。
それをもたらすのは対戦相手ではなく保健室のあの女だということを。
その結果アタシが致命的な〝敗北〟を味わうのだということを。
『うふふふ……』
掲示版の前から立ち去るその刹那。
あの女の笑い声が聞こえた気がしてアタシはぶるりと身を震わせた。

いつから治療すると錯覚していた？

掲示板を離れたアタシは保健室の前に戻ってきていた。
よく考えたらさっきのアタシかなり危なかったっスよね？
あのコスプレマスターが止めなかったら殺されてたかもしれないし。
これは早く傷を治したカルナと合流しないと。
次に鉢合わせても見逃してくれる保証はないっスからね。
これ以上サーヴァントなしでそこらを歩き回るのは危険だ。
昼前というには少し早いが保健室の中にいる方が安全だろう。
邪魔だと言って追い出されたがかまうものか。
そもそもアタシはカルナのマスター、その治療を見届ける義務がある！
「ちわーっス。少し早いけど中で待たせてもらうっスよー」
そう言いながら保健室の扉を開けたアタシの目に飛び込んできたものは。
「うふふ……どんな気持ちですかカルナさん？　最高クラスの神格を持つあなたが、一介のＡＩ風情である私にこのような仕打ちをされるのはさぞかし屈辱でしょうね？」
「屈辱などは特にないのだが、これは治療に必要な行為なのか？」
赤い布のようなものでぐるぐる巻きにされたカルナが、
カレンの白く細い足で踏みつけられていた。
ピシャリとアタシは扉を閉める。
あるぇ？　部屋を間違えたっスかね？
ある日サーヴァントの治療をしているはずの保健室をのぞいたら
黒い修道服を来た少女が男を踏みつけていたんだ、どう思う？
アタシ疲れてるのかな。
そうっスね、1回戦大変だったし疲れて変なものが見えただけっスよね。
それともアレか。
背中を踏んでサーヴァントのこりをほぐしてあげてたとか？

アタシも小さい頃はパパによくやってあげたもんっス。
なぁんだカレンも実はお父さんっ子……ってそんなわけあるかーい！
バァン！　とアタシは再び勢いよく扉を開く。
「何やってんスかあんたはぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「見て分かりませんか？　あなたのサーヴァントを足蹴にして楽しんでいるのです」
「もはや取り繕う気もないよこの女！　どうしてカルナさんを縛り上げて足蹴にしているのかと聞いているンスよ！」
「こうした方が私の調子が上がり、治療効率がよくなるのです。あなたも早くサーヴァントを治して決戦に備えたいのでしょう？」
「それはそうっスけど余計な性癖まで追加してくれとは言ってないっス！　カルナさんは元から全てを受け入れるM体質なのに、これ以上やって『ドM体質』にスキルがパワーアップしたらどうしてくれるんスか!?」
「ジナコ……お前は俺をそんなふうに見ていたのか……」
アタシの言葉にうなだれるカルナさんを足蹴にしたまま
カレンはすがすがしい笑顔を浮かべている。
「あなたもご一緒にいかがですか？　太陽の御子を足蹴にできる機会などもうありませんよ？」
「あんたと一緒にするな。カルナは1回戦を共に乗り越えた戦友っス。それを足蹴にするなんてありえないっスよ常識的に考えて」
「賢明な判断だジナコ。お前の体重で踏まれては治療前以上のダメージを負いかねないからな」
一度は断ったアタシだったがカルナの言葉にこめかみがピクリと引きつる。
どうやら言ってはならないこと言ってしまったようっスね。
前言撤回、覚悟しろ戦友。
アタシはカレンに目で合図を送る。
『オーケー？』
『いつでも♪』

この時だけアタシとカレンの心は一つになった。
「待て、なぜジナコは跳躍体勢に入っている？　よ、よせ。考え直せマスター！」
「デリカシーという言葉の意味を思い知れカルナァァァァァァ!!」
「サーヴァントの不幸で今日も紅茶がおいしいです♪」
助走からの跳躍でアタシの身体は宙へと舞い上がる。
カレンの布がより一層カルナを締め上げ、完全にその身体を固定した。
「お前たちどうしてこんな時だけ息がぴったｒ……ぐはぁぁっ!!」
こうしてアタシの全体重に跳躍からの落下速度もプラスされたストンピングは
見事カルナの背中に炸裂したのだった。

「不幸な事故はありましたが、これで治療はおわりです」
「ホント嫌な事件だったっスネ」
「そのおかげで俺の背骨は折れかけたわけだが」
ほどなくカレンの治療はおわり、アタシは腰かけていた椅子から立ち上がる。
「かなりひどい状態でした。両腕はもちろん階梯に見合わないスキルを使ったおかげで魔術回路もかなり傷んでいましたよ。こんなになるまでサーヴァントをコキ使えるなんてある意味尊敬します」
「ぐっ……これからは気をつけるっスよ」
カレンの嫌味にも返す言葉がない。
今まで散々な目にあわされてきたが、
今回ばかりは彼女に感謝しなければならないだろう。
「あーその一今回は助かったっスよカレン」
「当然のことをしたまでです。私はＡＩである前に神に仕える修道女なのですから」
そう言って十字を切るその姿はひたすらに神々しい。
どうやらただのドＳ女じゃなかったみたいっスね。

厳しさは優しさの裏返しって言葉もあるっス。
この女のおかげで鍛えられた部分もあるし（主に精神力）
これからはもう少し仲良くしてもいいっスかね。
「じゃあ、アタシはこれからアリーナにでも行くッス。カルナさんを連れていくっスから『それ』はもう解いてもいいっスよ」
『それ』というのは今もカルナを縛っている赤い布のことだ。
治療が終わった今も相変わらずカルナはこの布にぐるぐる巻きにされ、
保健室の天井からぶら下げられているのだ。
アタシの言葉にカレンはにっこりと微笑んだ。
「ええ、頂くものを頂いたらすぐにでも解いて差し上げます」
「……頂くもの？」
脳裏に嫌な予感が走る。
「とぼけるのがうまいですね。『治療費』に決まっているじゃないですか」
え、治療費!?
「タダじゃないんスか!?」
「ご冗談を。カルナさんほどの英霊を治療するのにどれだけのリソースを使ったと思っているんですか？　そもそもサーヴァントの治療は健康管理ＡＩの仕事ではありません。対価が発生するのは当然でしょう」
「確かにそうかもしれないっスけど……」
治療費がかかるならかかると先に言っておいてほしいものである。
話が違うと突っぱねて強引に踏み倒してしまおうか。
「ちなみにカルナさんを縛っているのは男性を拘束することに特化した聖骸布です。本来の彼ならいざしらず、今の彼の力では自力で抜け出すことはできませんのであしからず」
……チッ！　考えを読まれたか。
「私は悲しいです。健康管理ＡＩは本来特定のマスターへの肩入れを禁止されているのですよ？　ですが足りない力をその意志で補い勝利したあなたに私は心打たれたのです。だからこそ困っているあな

たを禁忌を犯してまで助けたというのに。ええ、そうですね。善行に見返りを求めてはいけませんでした。所詮私はじめじめと日陰に咲く紫陽花のような女。感謝の心を目に見える形で受取りたいなどすぎた願いだったのです。私はカーテンの向こうで泣いてきますので、その間にここから立ち去ってください」

そう言ってカレンはとぼとぼとカーテンの方へと歩き出す。

その姿はまるで打ちひしがれた聖者のようだった。

「わ、わかったっス。払うっスよ……」

アタシではどうしようもなかったカルナの傷をカレンが治してくれたのは紛れもない事実だ。

一応アタシも聖杯戦争に参加する魔術師（ウィザード）の端くれ。

等価交換の原則を無視するわけにもいかないだろう。

仕方ないっスね。

手持ちのＰＰＴいくらあったかな。

「……グスッ……本当ですか？」

「ジナコさんに二言はないっス。これでもちゃんと感謝はしてるんスから」

「そうですか……」

カレンの足がピタリと止まる。

その瞬間。

「うふ、最初からそう言えばいいんですよ。ブタコさん」

「へ……？」

聖者が悪魔へと変貌した。

「ではまず超級サーヴァントの両腕及び魔術回路を修復する際に消費したリソース、使われた術式の使用料、私に発生する管轄範囲外の仕事に対する人件費、邪魔されたティータイムの賠償費、そうそうカルナさんを拘束する際に抵抗されて聖骸布の一部が燃やされてしまったんでした。その弁償費も合わせまして――――」

悪魔が楽しそうにそろばんを弾く。

「１００万ＰＰＴになります。耳をそろえて払っていただきましょうか？」

そう言って今日一番笑顔を見せるカレンにアタシはくらりと眩暈を覚えたのだった。

１００万の女

「ひゃく……まん……？」
「ええ、１００万ＰＰＴです。ビタ一文まかりませんのでそのおつもりで」
「そんなの払えるわけないじゃないっスか！」
あまりにも法外な治療費にアタシは叫ぶ。
無免許の闇医者かあんたは！
「払えないというのでしたら、あなたのサーヴァントはずっとこのままです。もちろん決戦にもサーヴァントなしで臨んでもらいますよ。人の身で英霊に勝利できるのか試してみるのも一興かもしれませんね」
冗談じゃない。
人がサーヴァントに挑んで勝てるわけがない。
しかも掲示板の前で会ったあのサーヴァントはどう見てもまっとうな英霊じゃなかった。
アレに挑めばあっさり殺されるのはまだいい方だろう。
おそらくじわじわとロクでもない殺され方をするのは目に見えている。
最後に死なせてくれるのかどうかも怪しいところだ。
「そんなことできるわけないでしょーが！　カルナも黙ってないで何か言ってやるっス！」
アタシの言葉に天井から吊り下げられたカルナが口を開く。
「カレン、その治療費というのはＰＰＴで支払わなければならないのか？」
「他のものでも構いませんよ。その場合私が１００万ＰＰＴの価値があると認めたものに限りますが」
「では俺の『槍』を差し出そう。それでどうだ」
ちょ!?　何言ってるんスかカルナさん！
「伝承に謳われる『雷神の槍』ですか。価値で言えば１００万どころではすまない代物ですが、本当にいいのですか？」

「ダメっスよ！　あれはカルナの大切な武器でしょう!?　明日からビームを撃つしか能がない『ランチャー』になっちゃってもいいんスか!?」
「かまわん。お前を一人で戦わせるくらいなら槍の一つや二つ喜んで差し出そう」
　カルナはなんの迷いもなくそう言い切った。
　サーヴァントの傷を満足に治すこともできないマスターを一言も責めることなく、
　この英霊はアタシの為に自分の分身である槍を手放そうとしているのだ。
「いいでしょう交渉成立です。では槍をこちらに――――」
「ちょっと待ったぁ！」
　1回戦でもそうだった。
　いつもカルナは未熟なアタシのツケを全て引き受けてくれる。
　でもいつまでもそれじゃダメなんだ。
　こんなことになったのは元はと言えばアタシのせい。
　だからこの１００万ＰＰＴはアタシが払わなければいけないんだ。
「カルナの槍は渡せないっス。治療費はアタシがなんとかするっスよ」
「あなたが１００万ＰＰＴを支払うと？　それとも何かそれ相応の品を持っているのですか？」
「いや、アタシはあんたに支払えるものは何も持ってないっス」
「お話になりませんね。それでどうするおつもりですか？」
「だから買ってほしいんスよ」
「……どういうことですか？」
　アタシは眉をひそめるカレンを正面から見つめた。
「2回戦のアタシに与えられた猶予期間を１００万ＰＰＴで買わないっスか？」
　一瞬部屋に沈黙が落ちる。
「買ってくれるのならこれから6日間アタシの時間はあんたのものっス。言うことはなんでも聞くし、やってやるっスよ。奴隷にするなり

ペットにするなり好きにすればいいっス」
「ジナコ、それは無謀だ。やはり俺が……」
「カルナは黙ってて」
何かを言おうとするカルナを一言で黙らせるとアタシはカレンの返事を待つ。
彼女は一瞬驚いたように目を見開いたがそれはすぐに呆れたような表情に変わった。
「何を言い出すかと思えば……。私があなたの6日間に100万PPTの価値を見出すと思っているのですか？　15年という月日を無為に過ごしてきたあなたのたった6日間に？」
「確かにあの頃のアタシの6日間なら二束三文でも売れないかもしれないっスね。でもこれからの6日間はアタシにとって生きるか死ぬが決まる時間になるんスよ。それにもし次の決戦でアタシが負けたならこの6日間がそのままアタシの余命になるわけっス」
次の対戦相手にガトーのような手心は期待できないだろう。
客観的に見て2回戦でアタシが勝てる見込みは現時点では低い。
「アタシの人生最後の時間になるかもしれない6日間っス。正直100万PPTでも安いと思っているんスけど、そこのところどうスかねカレン？」
アタシの言葉にカレンは少し考え込んだが、やがて口元をニヤリと歪めると言った。
「……いいでしょう。『雷神の槍』より余程おもしろそうです。あなたの猶予期間、私が100万PPTで買いました」
その言葉と同時にカレンの手に何かが具現化する。
それはロックミュージシャンが付けるような革製の黒い『首輪』だった。
「こんなこともあろうかと作っておいた奴隷用拘束具『赤いワンちゃん』です。これからの6日間を私に売り払う証としてこれを身に着けて頂きましょう。それで交渉成立です」
どんなことを想定していたんスかねこの女は、怖すぎっス。
しかも黒い首輪で『赤いワンちゃん』とか意味不明っスよ。

まぁ、付けるしかないんだけど。
「本当にいいのだなジナコ」
「大丈夫だって。少しはマスターに恰好つけさせるっスよ」
念押ししてくるカルナを振り切ってアタシは首輪をつける。
「結構です。では約束通りサーヴァントは解放しましょう」
カレンが手をかざすとカルナを拘束していた聖骸布が解かれた。
「さぁ、今度はこっちが約束を果たす番っスね。何をすればいいんスか？　鎖を付けて校内を散歩？　それともひざまづいて足でも舐めればいいっスか？」
この提案をした時から覚悟はできている。
どんな無茶な要求だろうと耐え切ってみせよう。
「あなたを連れて散歩したところで恥ずかしいだけですし、足を舐められたところで汚いだけです。そんなことよりももっと楽しいことを思いつきました。あなたという人間の大部分を〝壊す〟。そんな素敵な命令をね。うふふふふ……」
カレンの顔が邪悪に歪む。
なんだこの女何を思いついた。
アタシという人間の大部分を壊す？
もしかして洗脳!?　まさかの人体改造!?
ジナコさん英霊じゃないライダーになっちゃうの!?
「ジナコ逃げるぞ。さすがの俺もマスターが変身ヒーローになる状況は受け入れ難い」
「おおお落ち着くっス、カルナさん。まままだ慌てる時間じゃないっスよ！」
だが次にカレンの口から飛び出した言葉は
アタシにとっての最悪のさらにナナメ上をいくものだった。
「あなたには6日間この月海原学園に就職し、用務員として働いて頂きます」
「な……」
一瞬何を言われたのか分からなくなる。
1秒後に全身を突き刺すような拒否反応、

２秒後にこみあげる吐き気をどうにか抑え、
３秒後にようやく脳がその言葉を理解した。
なんだとおおおおおおおおおおおおおお!?
それだけは絶対に嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!
働きたくないでゴザル！
働きたくないでゴザル!!
働きたくないでゴザル!!!
「それだけは勘弁してほしいっス！　他の命令ならなんでも聞くからどうかそれだけは！　こ、このジナコさんが就職して働くだと!?
ぎゃあああああああ！　口に出しただけで逝っちゃいそうっス!!」
「その苦痛にゆがんだ顔ゾクゾクしちゃいます。今更条件の変更は効きませんよ。６日間たっぷりとこき使ってあげますので楽しみにしていてくださいね♪」
「殺せぇ！　いっそひと思いに殺せぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」
「……槍を差し出さなくて本当に良かった」
床でじたばたと暴れるアタシと心から安堵するカルナ。
そしてそれを見ながら愉悦の笑みを浮かべるカレン。
こうしてアタシという人間の大部分であった『ニート』という属性は、
保健室の悪魔の手によって粉々に破壊されたのだった。
それはニートなアタシが味わった完全敗北。
それは世にも恐ろしい労働(じごく)の始まり。
それはこの歳で初めて登る社会人への階段。
「就職おめでとうジナコ。おまえの両親も天国でさぞかし喜んでいるだろう」
「がんばって家畜から立派な社畜になって下さいね♪」
「お前らちょっと黙るっスよ！」
ジナコ＝カリギリ２９歳。
今日から社会人１年生です。
どうしてこうなったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!

赤いツンデレと黒いマーボー

「ここが今日からあなたの職場になります」
　保健室での虚しい抵抗の甲斐なく引きずられるように連れてこられたのは、
　校舎の地下１Ｆにある学生食堂だった。
「あなたの仕事はここで食事にくるマスターの接客をすることです」
「てっきり花壇の手入れとかゴミの処理とかだと思ったんスけどね」
「コミュ障のブタコさんには花やゴミより人相手の方が苦痛かと思いまして」
「こ、この女……」
　当たっているだけに腹が立つっス。
「責任者が厨房にいますので後のことはそちらに聞いてください。では私はこれで」
「ちょっ!?　せめてそこまでついてきてくれても……」
　アタシの抗議を無視してカレンは行ってしまう。
　あの女の性格なら初めての職場にテンパるアタシを笑う為に付いてきそうなものなのだが、
　厨房に会いたくない奴でもいるのだろうか。
　一人残されたアタシは厨房に向かって声をかける。
「ちわーっス。今日からここで働くことになったジナコ＝カリギリっスけどー」
「話は聞いている。ようこそ私の店へ、ここを取り仕切る料理長として歓迎しよう」
「……何やってるんスか神父さん？」
　厨房の奥から出てきたのは監督役のＮＰＣ言峰綺礼だった。
　清潔感のある白いコック衣装に頭にはご丁寧にコック帽まで乗せている。
　壊滅的に似合ってないっスね。
　そもそも料理できるんスかこの人。
「保健室のアレに監督役としての仕事はほとんど取られてしまってい

てね。『あなた決戦日以外は暇でしょう』と言われてここにまわされたというわけだ。ああ、いつかアレの鳩尾に崩拳を叩き込みたい」
「それは……ご愁傷様っス……」
あの女同じＮＰＣにも容赦ないな。
「とはいえ任された以上手を抜くつもりはない。私は潔癖症かつ凝り性でね。こうなった以上最強の料理人を目指すつもりだ。君もそのつもりで励みたまえ」
『『最高』じゃなくて『最強』なところが激しくズレてる気がするんスけど……」
元神父と元ニートの組み合わせとかどう考えてもうまくいく気がしないっス。
これどう考えても人選間違ってるよね？
「君の仕事着も用意してある。手早く着替えて仕事を始めてもらおう」
「研修もなしにいきなりっスか。しかも仕事着ってエプロン付けるだけかい！」
「急なことで服が間に合わなくてね。今日のところはそれで我慢しもらいたい」
「まぁ、いいっスけど」
アタシは渡された黄色のエプロンを服の上からかけた。
急いで用意した割には左胸に『カリギリ』という名札がちゃんと付いている。
『ちょっと～。誰かいないの～？』
その時カウンターの向こうから声が聞こえた。
「早速お客様がお呼びだ。くれぐれも失礼のないように対応したまえ。お客様は神様、お客様の幸せが私達の幸せなのだからな。はっはっは……全く反吐が出る」
「オイオイ最後に本音が駄々漏れてるっスよ……」
暗黒微笑を浮かべている神父（今は料理人）から離れ、アタシは声の主の元へ。
そこには券売機の前に立っている一人の少女がいた。

意志が強そうな瞳が印象的なかなりの美少女だが、その顔は不機嫌そのもの。
かなりイライラしているようで腕を組んだまましきりにつま先で床を叩いている。
身体中からリア充オーラが出まくってる娘っスね。
ジナコさんこういう娘苦手っス。
「遅いじゃない。この券売機さっきから何度やっても食券が買えないのよ。絶対に壊れてるわ」
そう言って少女は券売機をびしりと指差した。
少し長めの黒髪がふわりと揺れ、少女が着ていた赤い服にかかる。
うわー初めての接客がクレーム対応とか勘弁してほしいっス。
接客Ｌｖ１のジナコさんには荷が重すぎるモンスターっスよ。
「えーと、とりあえずもう１回やってみてもらえないっスかねオキャクサン」
若干キョドりながら言うアタシを不機嫌そうに見つめると少女は携帯端末を取り出す。
それを券売機にかざすことでＰＰＴが引き落とされ食券が買える仕組みになっているのだ。
少女は券売機に向かって端末をかざしたが、券売機は無反応のままだった。
「ね？　壊れてるでしょう」
「うーん……」
見た目はレトロな券売機だがこれも一応ムーンセルが管理しているのだ。
だとすればそうそう壊れる代物ではないし、壊れたとしても即座に修理がされるはずである。
聖杯戦争に参加している以上そんなことはこの少女も分かっているはずなのだが……。
「壊れてるのよ壊れてるに決まっているわ。そうじゃなければこの私が券売機もロクに使えない機械オンチみたいじゃないの。そんなことはありえないわそうよね？」

「……ちょっとアタシがやってみてもいいっスかね？」
少女の携帯端末を受け取ると券売機にかざす。
「ご注文は？」
「……エビチリ定食」
ピーッというこれまたレトロな音を立てながら券売機から食券が吐き出された。
食券には間違いなく『エビチリ定食』の文字。
「……」
「まぁなんというか……ドンマイ？」
「キィィィィィ！　ＮＰＣのくせに的確に心をえぐる一言を吐いてくれるじゃないの！　あんたも後ろで笑うんじゃない！」
どうやら霊体化したサーヴァントも後ろで笑い転げているらしい。
完璧そうなリア充に見えるけど実はドジっ子なのかもしれない。
アタシをＮＰＣだと思ってるみたいだし。
というかアタシもう行っていいっスか？
「あれ、ジナコと……遠坂？」
この場を離れる機会をうかがうアタシに後ろから声がかけられる。
振り返ると１回戦で出会った妙な懐かしさを覚える少年、岸波白野が立っていた。
相変わらず癒されるレベルの普通っぷりっス。
遠坂っていうのはこのリア充ドジっ子さんの名前っスかね。
「白野クンじゃないっスか。君も食事に来たんスか？」
「ああ、正直あまり食欲はないんだけどね……」
なんだか元気がないっスね。
当たり前か、ここにいるってことは１回戦でシンジさんクンを倒したってことなんだし。
アタシもその辺まだ完全に吹っ切れてないっスからね。
「明確な願いがない俺みたいなのがこの先勝ち残っていいのかなとか考えちゃってさ。さっきもその迷いを対戦相手に見破られちゃったし、ちょっと落ち込んでるんだ」
「気持ちがフラフラしてるのはアタシも同じっスよ。まぁこっちの対

戦相手はアタシの気持ちなんか察する間もなく殺しにかかってくる感じっスけどね」
「あはは……お互い次も苦労しそうだね」
アタシと白野クンは顔を合わせてため息をつく。
なんだかアタシまで落ち込んできたっス。
「コホン！　なんだか存在を忘れられてるようだから、岸波君の頭にガンドでも撃って自己主張しようと思うんだけどいいかしら？」
「待つんだ遠坂。忘れてないから人差し指をこちらに向けるのを今すぐにやめてほしい」
遠坂と呼ばれた少女は青い顔をしてぶるぶると首を振る白野から指を外すとこちらを見た。
「遠坂凛よ。あなたマスターだったのね。ＮＰＣにしては体型がだらしなかったからおかしいとは思ってたんだけど」
「……遠坂また間違えたの？」
「こ、今度はしょうがないじゃない！　食堂で働いてたら普通ＮＰＣだと思うでしょ!?」
白野の突っ込みに凛の顔が赤くなる。
どうやら彼女は前にも同じことをしたらしい。
これはもうドジっ子であることは確定的に明らかっスね。
「ジナコ＝カリギリっス。色々あって2回戦の猶予期間の間だけここで働くことになったっスよ」
「記憶がないマスターにも驚いたけど、学食で働くマスターまで出てくるとは思わなかったわ。あなたにも言っておくけどこの先そんな半端な覚悟で生き残れると……」
「あ、そういえば食券渡してなかったっス。はい『エビチリ定食』毎度あり」
「聞きなさいよ！」
「そうだぞジナコ。遠坂は親切で言ってくれてるんだからちゃんと聞かないと」
「べべべ別に親切とかじゃないわよ！　私は誰とでもフェアに戦いたいだけなんだから！　あなた達の為に言ってるわけじゃないんだか

らね！」
そう言って凛さんはアタシの手から食券をひったくるとカウンターの方へ行ってしまった。
いいモン見せてもらったぜ凛さんよ。
今日びあそこまでの様式美には滅多にお目にかかれねぇ。
ありがたやありがたや。
「何を拝んでるのか知らないけどいいのかジナコ？」
「え、何がっスか？」
「厨房の方からなんかすごい視線を感じるんだけど」
「あ……」
白野クンの言葉で我に返ったアタシが厨房を見ると暗黒微笑を浮かべた言峰シェフがいた。
彼は右手にリンゴを取り出すとその握力でグシャリと握りつぶす。
「勤務初日からお客と長話とはいい気なものだ。このリンゴのように頭蓋を砕かれたくなければさっさと溜まった注文をさばきたまえ」
「ひっひぃぃぃぃぃぃぃ！　ただいま参りますぅぅぅぅぅぅぅ!!」
第２回戦１日目。
アタシの労働（じごく）はまだ始まったばかりだ。

昨日か今日かそれが問題だ

第２回戦のモラトリアムの２日目。
アタシとカルナは朝早くからアリーナを訪れていた。
一日の大部分を学食での労働時間に取られているアタシは、
勤務時間前に少しでもＬｖＵＰを図ろうと涙ぐましい努力をしている……わけではない。
「ジナコあったぞ」
カルナの声にアタシは通路の先に目を向ける。
そこにあるのはアリーナに設置されているアイテムフォルダだ。
中には役に立つアイテムやＰＰＴが入っているマスターにとっては嬉しいオブジェクトである。
だが見つけて嬉しいはずのアイテムフォルダを前にしてもアタシの心に喜びはない。
なぜならそこに入っているのは役に立つアイテムでもＰＰＴでもないからだ。
アタシは無言でフォルダを開き中から出てきたブツを手にする。
ちなみにアタシが手に入れたアイテムの名前は。
『大根』
「うだぁぁぁぁぁぁぁぁ！　どうしてアリーナまで来てお野菜ゲットしなくちゃいけないんスか！　しかもここ海だから！　大根が取れるとかおかしいから！　この大根ちゃんと食べられるんスよねカルナさん!?」
「疑問はもっともだがこれも仕事だジナコ」
そうこれも仕事の一環なのである。
昨日仕事を終えヘトヘトなったアタシに言峰はこんなことを言ったのだ。
『明日ここに来る前にアリーナで材料の仕入れをしてくるように。ふむ、言っている意味が分からないかね？　凝り性の私は当然素材にもこだわりたいと思っていてね。料理にはアリーナ農法で育てた新鮮な食材を使いたいのだよ。アリーナのアイテムフォルダでリソース

を吸わせた食材は普通のそれとは一線を画した旨味を有する。最強の料理人を目指す私にとってアリーナで取れる食材は必要不可欠なのだ。何？　まだ意味が分からないと？　はっはっは……いいから行ってこい』

そう言ってリンゴを握りつぶす言峰シェフに逆らえるはずもなく。

こうしてアタシは早朝から食材の仕入れに励んでいるというわけである。

「なんスかアリーナ農法って！　アタシのアリーナでお野菜育てるとか上司の横暴ここに極まれりっス！　しかもフォルダの中全部食材だし！　これ本来入ってるはずのＰＰＴやアイテムのリソースが食材の養分になってるってことっスよね!?　そりゃ旨くなるに決まってるよ！　ついでにジナコさんの涙でちょっとしょっぱいんじゃないかな!?」

「メモによると次の食材は肉のようだな」

「最早突っ込む気もおきねぇ！」

そう叫んで次のアイテムフォルダへと足を進めようとするアタシをカルナが制した。

見ると前方の少し開けた場所に２つの箱を紐で繋ぎ合わせたような形のエネミーがいる。

「ご褒美はないのにエネミーはしっかりいるんスね。ダルいわ～」

「学食の仕事が始まるまであまり時間がない。手早く仕留めるぞ」

そう言うとカルナはダッシュをかけエネミーとの距離を詰める。

こちらに気が付いたエネミーが攻撃体勢に入るが、

アタシの行動の方が早かった。

「先手必勝っス！」

放たれたコードキャスト《ｃｈｅａｔ｜ａｔｋ（）；》が相手の出鼻をくじく。

動きが止まったところにカルナの攻撃が連続で入り、

最後に炎の槍が突きこまれたところでエネミーは消滅した。

「全く邪魔するんじゃないっス。ここで時間食うとジナコさんの休憩時間が減るんスからね」

戦闘後に軽口が叩けるくらいにはアリーナにも慣れてきたっスね。
1回戦のサーヴァントがかなりの迫力だったからなぁ。
金色で赤目のアルク様のプレッシャーに比べたら
その辺のエネミーなんて新兵が乗った旧ザクみたいなモンっスよ。
学食の仕事に入る前の休憩を確保するべく先を急ごうとするが、
カルナは再びアタシを引きとめた。
「油断するなジナコ。俺が感じた気配の本命はエネミーではない」
「私のアイドルオーラをいち早く察知するなんて。そっちのトドと違ってサーヴァントの方はファンとしての礼儀を心得ているようね？」
澄んだ声と共に通路の影から異形の少女が現れる。
一見かわいらしい少女だが頭に生えた硬質の角と鱗の付いたシッポ。
1日目に掲示板の前で会ったランサーのサーヴァントだ。
その後ろにはそのランルーくんが相変わらずの無表情で立っている。
「勝手にファン扱いされては困るな。全身から血の臭いを漂わせている女の追っかけをする趣味は、あいにくと持ち合わせていない」
「いいわねその反抗的な態度。首だけになっても同じことが言えるかしら？」
凶悪な笑みと共にランサーの手に身の丈以上の長大な槍があらわれた。
相手が放つ刺すような殺気にカルナも戦闘態勢をとる。
どうやら相手は私闘を禁ずるという聖杯戦争の規則を守る気はないらしい。
「さぁ、オープニングライブよ！　派手にぶちまけてもらおうかしら！」
ランサーがカルナとの間合いを一気に詰める。
その可憐な見た目とはかけ離れた強烈な横薙ぎがカルナに向かって放たれた。
その一撃をカルナは具現化させた槍でなんとか弾いたが、

衝撃を殺しきることができずによろめく。
「なぁに？　まだ1曲目なのにもうシビれちゃったの？　もっともっと盛り上げて頂戴よ！」
ランサーはその細腕からは想像もできない怪力で次々と槍を繰り出す。
まだ槍を完全に具現化できないカルナは防戦一方に追い込まれた。
やはりサーヴァントの基本性能は向こうが上をいっているようだ。
1回戦のガトーとの模擬戦が思い出される。
あの時のアタシはカルナがやられるのをただ見ていることしかできなかった。
でも残念だったっスね。
ここにいるのは社会人デビューしたスーパージナコさんなんスよ。
アタシはカルナを攻めたてているランサーに向かってコードキャストを放つ。
一瞬ランサーの動きが止まった隙にカルナは体勢を立て直していた。
「うっとおしいブーイングね。シラけるったらないわ」
「やだなぁエールっスよ。こっからはオタ芸並に激しいのいくから覚悟するッス！」
速射性を生かしたアタシのコードキャストがランサーの攻撃のリズムを狂わせる。
逆にカルナはこちらのタイミングを完全に掴んでいるようで、
アタシのコードキャストのリズムに乗ってランサーを押し返す。
再び具現化したカルナの槍がランサーをかすめたその時。
ムーンセルによる戦闘の強制終了が告げられた。
「チッ！　やっぱり日課のブラッドバスに入れないと調子がでないわね。あの女ってば壊れてるくせに妙なところで頑なだし、イラつくったらありゃしない」
「アレハダメ。ミンナオイシクナクナッチャウ」
「そんなの知ったことじゃないわよ。私は私が美しくあれば後はどうでもいいの。男(ブタ)も女(リス)も私の美しさを保つ為だけに存在しているんだ

から」
ランサーはそう言うと憎らしげにランルーくんの方を見る。
にらまれたマスターの方はと言えばランサーの言葉を無視して、
フラフラとアリーナの奥へと歩き出していた。
やがてその姿はアリーナの奥へと消える。
「……私がいつまでも言うとおりにしているとは思わないことね」
そうつぶやきを残してランサーも霊体化して姿を消す。
「どうやら向こうのマスターとサーヴァントはうまくいっていないようだな」
「みたいっスね。今回はそれで助かったっスけど」
戦いの最中ランルーくんは一度も自分のサーヴァントを援護しなかった。
アタシ達のつけいる隙があるとしたらそのあたりだろうか。
「カルナさんはアタシがマスターでよかったっスねぇ。その辺の感謝を込めて部屋に帰ったらマッサージとかしてくれてもいいんスよ？」
「お前が部屋をかたずけるのならば考えよう。しかしマッサージとは、まさか決戦から2日後の今日になって筋肉痛がきたのかジナコ？」
「待て、ジナコさんの筋肉痛は昨日からだ。決して今日きたわけじゃない、わかるね？」
「わかっている。マスターとサーヴァントの関係が重要なのは先程の戦いで思い知ったからな。マスターとの関係を良好に保つ為にも主人のささやかな見栄と年齢からの逃避を温かく見守れと、そういうことだな？」
「全然わかってなかった!!」
関係が良好に保たれるどころか殺意がわいてきたよ！
おのれカルナ、アタシを年寄り扱いしおって。
次にあのランサーと戦いになったら後ろからコードキャストで撃ってやろうか。
「そんなことより急いだほうがいいのではないか？　学食の開店時間までもうほとんど時間がないような気がするんだが」

「またまた御冗談を……」
そう言ってアタシは携帯端末に表示されている時刻を確認する。
……なんと学食の開店時間まで5分を切っていた。
「うそぉ！　なんでこんなに時間になってるっスか!?　まだ食材全部集まってないのに！」
「筋肉痛になったばかりでつらいだろうが走れるかジナコ」
「走るしかないじゃないっスか！　あとなったばかりじゃないから！　昨日からだから！」
この後追いかけてくるエネミーから必死に逃げながら食材を集めたアタシは、
その勢いで学食に滑り込み……見事に遅刻したのだった。

欠けた星の行方

「唐揚げ定食あがったっスよー！」
アタシは厨房から出てきた料理をカウンターへと運ぶ。
この食堂ではカウンターに置かれた料理をお客が取りにくることになっているのだ。
聖杯戦争３日目。
昼下がりの学食はそこそこのにぎわいを見せていた。
１回戦が終わって残るマスターは６４人。
普通の高校に比べたら格段に少ない人数だが、
それでもその大半が昼時に集まるとなれば忙しくもなる。
それにアタシがここで働くようになってから妙にお客が増えてる気がするんスよね。
これってジナコさん目当てのお客さんが増えてるってことっスか!?
脱ニートしたらモテ期まで来ちゃったとか!?
ええい、かわいいショタっ子との出会いイベントはまだっスか！
「最近マスターの間で評判なんだよ。ここのメニューが急においしくなったってさ」
そう言うのはカウンターに唐揚げ定食を取りに来た白野クンである。
そりゃ今日も早朝からアリーナで取ってきた新鮮な食材が使われてるっスからね。
あの元神父の料理の腕がどれほどかは知らないけど食材の質だけは保証するっス。
ジナコさんの汗と涙とＰＰＴとアイテムの結晶、残したら許さんぞお前ら。
「まぁ、料理はどうでもいいんスよ。どこかのショタっ子マスターが『食堂のおねぇちゃんにいい子いい子されたい』とか言ってなかったっスか!?　ほい、カツカレーあがりっスー！」
「い、いやそんな話は聞かないけど。けど今日のジナコの恰好ならそ

んな人も出てくるかもね」
「そうっスか？　はっきり言ってこの恰好ってば苦痛でしかないんスけど。次、ラーメンセットお待ちどー！」
白野クンと話してる間にも次々に出てくる料理をカウンターに並べていく。
話すことばかりにかまけていると、アタシが苦労して取ってきたかわいい食材達があのシェフに握りつぶされちゃうっス。
そんなアタシが今日身に着けているのは全身をゆったりと覆う白いエプロン。
頭には同じく白い三角巾。
いわゆる『割烹着』というやつである。
昨日見事に遅刻したアタシは罰としてこの格好で仕事をさせられているのだが、これを着た自分の姿を鏡で見たアタシの感想は一言。
完全に給食のおばちゃんじゃねーか!!
おのれ外道シェフめ。
ＮＰＣはマスターを傷つけられないだろうと甘く見ていたっス。
まさかこんな手でジナコさんに精神的苦痛を味あわせるとは。
ええ、効果はバツグンっスよ！
「さっき食堂の入口ですれ違ったマスターが『田舎のおふくろを思い出した』とか『かあちゃん元気かなぁ』とか話してたけどそういうことだったんだね」
「おばちゃんじゃなくてお母さん……だと……。タケシ、レバニラ定食できたわよ！」
「どこかのショタっ子マスターが『食堂のお母さんにいい子いい子されたい』って言ってたらすぐに報せるよ、うん」
「余計なお世話っス！　えっと、なんだかわからない魚のチリソースかけあがったっスよ！」
「それは私が注文したゴスバレイヤです。ちなみにかかっているのはチリソースではなくトマトソースですよミス・カリギリ」
カウンターに置かれたよく分からない魚料理を取りに来たのは、褐色の肌が目を引くエキゾチックな眼鏡美少女だった。

「ラニさんじゃないっスか。今日もご来店ありがとうございますっス」
「ごきげんようミス・カリギリ。そのコスチュームには人の郷愁を呼び起こす効果があるようですね。しかし精神攻撃としては少々回りくどいような気がするのですが」
眼鏡を押し上げながら見当違いの評価を下す彼女の名前はラニⅧ。エジプトにあるアトラス院というところで造られたホムンクルスである。
占星術を得意としていて、人の星を詠むということができるというのは昨日一緒に学食に来ていた白野クンから聞いた話だ。
なんでも白野クンの対戦サーヴァントの正体を突き止める手伝いをしてくれているらしい。
凛さんといいラニさんといい白野クンにはジゴロの才能でもあるんスかね。
アタシも初めて会った時から妙になじんでるところあるし。
「白野クンだけずるいっスよ。ラニさん、アタシの相手サーヴァントの真名も星占いでちょちょいと見破って教えてくれないっスか？」
「却下しますミス・カリギリ。あなたの〝おかしな〟星にも興味はありますが、これ以上のタスクを負うと私自身の２回戦に影響が出てしまいますので」
感情の読めない声できっぱりと断られる。
アタシは厨房から出てきたゴーヤチャンプルーの皿をカウンターに滑らせながら眉をひそめた。
それは断られたことに対してではなく、その後の言葉が引っ掛かったからだ。
「アタシの星って何かおかしいんスか？」
「ええ。『星』とはその人間を形作る『経験』と言い換えることもできるのですが、あなたはそれが大きく〝欠落〟しているのです。単刀直入に聞きますが、あなたには記憶があいまいな時期がありませんか？」
記憶があいまいな時期といえば予選から本戦にかけての間のこと

だ。
アタシは確かに用務員室に篭って悠々自適なニートライフを送っていたはずなのに、
気が付いたら本戦の校舎に立っていた。
何を言っているのかわからねーと思うが状態である。
「おそらくその時あなたにはとても重大なことが起こったはずなのです。しかし今のあなたはそれを忘れてしまっている。そうでなければこの大きな欠落は説明がつきません。私は白野さんに『あなたは何なのですか？』とたずねましたが、ミス・カリギリにはこうたずねたい。『あなたに何があったのですか？』と」
無機質な瞳が眼鏡の奥からアタシを射抜く。
しかし何が起こったのかと聞かれても答えようがない。
あの時アタシがまだ用務員室に篭っていたのなら、カレンに会うこともなく、ガトーと戦うこともなく、そしてアタシが今こうして生きていることもなかったはずだ。
だがあの時どうしてアタシが用務員室の外に出ていたのか。
それがどうしても思い出せない。
「何をしている。料理がたまってきているぞカリギリ」
後ろから聞こえた声に振り向くと、奥の厨房から言峰シェフが出てくるところだった。
丸三日顔をあわせているというのに未だそのコック服姿には違和感を感じる。
「あ、ちょうどよかったッスよ言峰シェフ。ちょっと聞きたいんスけど、アタシ予選から本戦にかけての間のことが思い出せないんスよ。こんなことってよくあることなんスか？」
その右手に食材が握られていないことに胸をなでおろしながら、アタシは先ほどの疑問を目の前のＮＰＣに投げかけてみる。
今は料理人とはいえ元は聖杯戦争の仕組みを管理する監督役のはず。
アタシの今の状況に心当たりがあるかもしれない。
「今のところそういうマスターの報告は受けていないな。だがお前ほ

ど未熟なマスターならば、令呪の獲得時やサーヴァントとの契約による仮想体への負荷で一時的に記憶が飛ぶこともあるかもしれないが」
なるほど、魔術師（ウィザード）としての経験が全くないアタシは、仮想体への負荷になれていない。
そこに膨大な魔力が宿った令呪を刻まれたり、高密度の霊体であるサーヴァントと契約したりすればアタシの体に何らかのフィードバックがあってもおかしくないわけか。
なんとなく釈然としないものがあるけど。
「失われた記憶に思いを馳せるのも結構だが、今は目の前の現実（りょうり）と向き合ってほしいものだ。アリーナ農法で作られた貴重な食材をこれ以上握りつぶすのは忍びないのでね。ちなみに次に何か粗相をした場合私の自作マスコット『るなっしー』の着ぐるみを着て働いてもらうのでそのつもりでいたまえ」
「いや、その間に何かアタシにとって重大なことがあったらしいんスよ。だから……」
「これ以上手を止めているつもりならば粗相と見なすがいいかね？ちなみに着ぐるみの総重量は２０ｋｇだ。さぞかし楽しく仕事ができることだろう。それが嫌ならば社会の歯車らしくきりきり働くのだな」
「アッハイ」
言峰シェフの言葉にアタシはしぶしぶ疑問を引っ込める。
これ以上聞くのは無理そうっスね。
ていうか２０ｋｇって何で出来てるんスかその着ぐるみ。
ネーミングといい色々とヤバイだろうそのマスコット。
でも口に出したらその場で着装されかねないのでツッコミは心の中だけにしておくっス。
「これ以上いると邪魔になりそうだから俺はもう行くよ。がんばってねジナコ」
「『るなっしー』の精神攻撃も是非分析したいものです。期待していますよミス・カリギリ」
「いや、着ないっスからね」

カウンターを離れていく2人を見送りながらアタシは仕事に戻る。
「激辛麻婆豆腐あがったっスよー！」
しかし出来上がった料理をカウンターに並べながらアタシは違うことを考えていた。
『おそらくその時あなたにはとても重大なことが起こったはずなのです。しかし今のあなたはそれを忘れてしまっている』
ラニさんの言葉がアタシの心によみがえる。
言峰シェフはああ言ったが、なぜかその説明に納得することはできなかった。
アタシに何が起こったというのだろう。
そしてどうしてそれを忘れてしまっているのだろうか。
次々に厨房から出てくる料理に思考の大半を奪われながらも、その疑問はアタシの心の隅にいつまでも居座り続けたのだった。

ロストデイズ

月の霊子虚構世界「SE（セ）・RA（ラ）・PH（フ）」では眠っても夢を見ることはない。

なぜなら聖杯戦争に参加しているアタシ達の身体は自身の精神や魂といったものをデータの入れ物に押し込んだ仮想体であるからだ。

眠っている間に見る夢は脳が作り出す情報であり、そしてその脳が仮想体には存在しない。

足のない者が歩けないように、口のない者が話せないように、脳のない者が夢を見ることはできないのである。

神代の英雄が聖杯をめぐって戦ってるもろファンタジーな空間の割には夢のない話っスよね。

いっそのことアタシが聖杯戦争に参加してるところから夢だったらよかったんだけど。

さて、ではアタシが見ているコレはなんなのだろう。

そう思いながら肩をすくめつつ周囲を見回わした。

清潔感の漂う白い床を蛍光灯が照らしている。

壁際にはなにやら薬の入った棚や、身体測定用の器具などが並んでいた。

部屋の一部を仕切るカーテンには染みひとつなく綺麗で、その向こうにはこれまた丁寧に整えられた真っ白なベットが見える。

アタシが月に来てから何度も目にしている光景なので間違いない。

どうやらここは月海原学園の保健室のようだ。

第二回戦の猶予期間3日目の夜。

今日も今日とて食堂でコキ使われたアタシは、マイルームに帰るなり日課のスレ監視と夜のお菓子もキャンセルして眠りについたはずだった。

そして気が付いたらここにいたというわけである。

そういえば前もこんなことがあったっスね。

以前眠っている間に見た夕暮れの校舎での出来事を思い出す。

そこにはアタシの姿をした「ジナコ」が現れ、倒れていた〃誰か

〝　とそれを介抱しようとしていた〝誰か〟　に巻き込まれ、保健室に連れ添っていったところで終わったはずだ。
　そしておそらく今回もあの時と同じことが起こっているのだと確信する。
　なぜなら
『あ～も～どうしてこんなことになったんスか～』
　アタシの目の前に椅子に座りながら盛大にテーブルに突っ伏している「ジナコ」がいるからだ。
『そりゃジナコさんは一応ここの臨時教員っスけど、保健室の先生をやらされるなんて聞いてないっス。おのれ藤村め。確かに職員会議を全部ブッチしてたアタシもちょっとは悪いかもっスけど、いない人間をめんどい役職に推薦するとか教師のやることじゃないっスよ……』
　アタシの目の前で「ジナコ」は気だるげにぼやくとテーブルに置いてあった湯呑に入ったお茶をすする。
　向こうからアタシは見えていないようだ。
　ためしに近くの花瓶に腕を伸ばしたが手は花瓶に触れることなくすり抜けた。
　どうやらここではアタシはただの『観客』らしい。
『男の君なら藤村先生のようなセクシーダイナマイツな先生が保健室にいた方がいいっスよね？　尼さんみたいな恰好してるから怪我がひどくて死んじゃってもバッチリ念仏唱えてくれそうだし。肉食っぽいから2人きりの保健室でイケナイ個人授業なこともあるかもしれないっスよ？』
　よく見ると「ジナコ」とテーブルを挟んだ向かいにも湯呑が2つ置いてあった。
　しかし並んだ2つの椅子には誰も座っていないように見える。
　「ジナコ」は正面の誰も座っていない椅子に向かってからかうように言った後、今度はその隣の椅子に目を移すとおびえたように体をのけぞらせた。
『じょ、冗談っスよ。冗談だからその「殺っちゃいますよ」的な黒い笑

みを今すぐひっこめてほしいッス。それは女の子がしていい顔じゃないっスよ。大体どうしてアンタの方が怒るんスか全くもう……』

そう言って誰も座っていない椅子を前に「ジナコ」はガクブルしている。

なんか一人芝居してるみたいっスね。

誰もいない保健室でエア友達に話しかけるアタシ。

どこぞのラノベヒロインかと。

やばい、死にたくなってきたっス。

アタシは目の前で展開される黒歴史に頭を抱えたが、「ジナコ」の表情や仕草は実に自然で一人芝居をしているようにはとても見えない。

もしもアタシにあそこまでの演技力があれば、15年間ニートなんかやってないっス。

女優か声優にでもなって某お笑い芸人のバラエティーに出演したり、魔法少女の声でもあててるところっスよ。

となぜか頭に浮かんだ妄想を頭の隅に追いやりながらテーブルに視線を戻す。

どうやらアタシに見えないだけで「ジナコ」にはそこにいる〝誰か〟が見えているらしい。

話の内容からして正面にいるのが男でその隣に女が座っているようだ。

今のは正面に座っている〝彼〟をからかったところをその隣に座っている〝彼女〟に怒られたのだろう。

しかし分かるのはそこまでで座っているのが誰なのかは当然分からない。

『まぁ誰か怪我人が来たらそっちに任せるっスよ。今度からはノートPCでも持ってくるっス。あ、ここちゃんとネット繋がるっスよね？』

そう言って右手で頬杖をつく「ジナコ」を見ていたアタシはその姿に違和感を覚えた。

目の前の「ジナコ」には何かが足りないような気がしたのだ。

そして違和感の正体に気が付いたアタシの目は、頬杖をついたその

右手に吸い寄せられる。
そこには令呪がなかった。
アタシは自分の右手を確認する。
そこには一つ使用して2画になっているが、聖杯戦争に参加するマスターの証である令呪が確かに刻まれている。
ならば目の前にいる「ジナコ」にはなぜ令呪がないのか。
やっぱりこれはそういうことっスかね。
アタシは前回から感じていたことが正しかったことを確信する。
もしこれが夢なのだとしたら少々の現実との食い違いは納得できる。
月海原学園にいる「ジナコ」の右手に令呪がなかったとしても「まぁアタシの頭が書き忘れたんだろう」で終わる話だ。
だがこれが夢という空想の産物ではなく事象を記録した映像だと考えるのなら話は変わってくる。
月海原学園にいる「ジナコ」にどうして令呪がないのか。
それはこの「ジナコ」がまだ予選を通過していないからだ。
つまり今見ているのは聖杯戦争予選の映像であり、そこにいる「ジナコ」は予選の時のアタシというわけである。
1度目の時は確信が持てなかったが、今見ているのはアタシが思い出せない予選の時の記憶で間違いないというわけだ。
となると次に気になるのは……。
『でも保健委員が君達で本当によかったっスよ。昇降口でのことといいなんか縁でもあるんスかね。これが顔も知らない人間だったら一緒の部屋に放り込まれた時点でジナコさん窒息してたところっス』
アタシは「ジナコ」が話しかけている2つの椅子に目を向ける。
気になるのはこの椅子に座っている2人が誰なのかということだ。
昇降口でアタシと出会った2人。
1人が男で1人は女。
保健室の女というと一番最初に思い浮かぶのはカレンだ。
ということは女のほうはカレンなのだろうか。
いや、なんかそれは違う気がするっス。

アタシはもう一度周囲を見回しながらその考えを否定した。
確かにここは月海原学園の保健室だ。
しかし、カレンがいた保健室とは全く雰囲気が違う。
テーブルにかけられた可愛らしいクロス。
先程アタシが触れなかった花瓶には清楚な花がいけられている。
奥の棚の上ではお茶を出す時に使われたであろうポットがコポコポと優しい音をたてていた。
部屋の雰囲気はその主に似るものだ。
アタシの部屋が布団敷きっぱなしの汚部屋なのは置いておくとして、この部屋の主は可愛らしく清楚で優しい性格にちがいない。
この部屋の主とカレンの人物像は月とすっぽん、聖女と魔王、某ハーレム吸血鬼とワカメくらいかけ離れている。
『お茶とお菓子は用務員室よりこっちの方がおいしいし、しばらくはこっちで過ごすのも悪くないかもしれないっスね。というわけでこれからよろしくっス――――と――――』
そう言った「ジナコ」の言葉は最後まで聞き取ることができなかった。
急速に周囲の景色が歪み、それと共にアタシの意識が遠のいていく。
ぼやけていく視界の中で「ジナコ」はなおも話し続けている。
向かいの2つの椅子には確かに〝誰か〟が座っているのだ。
「君達は一体誰なんスか……」
意識が闇に沈んでいく。
アタシの発したつぶやきもまた意識の闇に溶けていく。
『やはり完全に封じるのは無理ですか。ならば全てを思い出す前に……』
聞き覚えのある声が頭に響いたのを最後にアタシの意識は完全に途切れた。

保健室の主

月海原学園の保健室で2つの人影が無言で向かい合っていた。
清潔感の漂う白い床を蛍光灯が照らしている。
壁際にはなにやら薬の入った棚や、身体測定用の器具などが並んでいた。
部屋の一部を仕切るカーテンには染みひとつなく綺麗で、その向こうにはこれまた丁寧に整えられた真っ白なベットが見える。
しかしここは〝彼女〟を主として聖杯戦争のマスター達を陰ながら支えてきた空間ではない。
中央のテーブルにかけられているのは血を思わせる真っ赤なクロス。その上には飲みかけのティーカップが置かれている。
室内に花などの生気を感じさせるものは一切なく、ところどころに置かれた銀製の燭台が放つ鈍い光は部屋の冷たい雰囲気に拍車をかけていた。
〝彼女〟が去り新しい主を迎えた保健室はまるで凍り付いたように静まり返っている。
「さて、どうしてここに呼び出されたのか分かっていますよね？」
先に沈黙を破ったのは人影の片方である漆黒の修道服を纏った銀髪の少女。
現在この保健室の主であるカレン＝オルテンシアだった。
「2回戦の猶予期間も今日で4日目だというのにその間全く例の件の報告がないというのはどういうことなのかしら。あなたは言われたことすらできない無能だということですか？」
明らかに不機嫌な声が少女の口放たれる。
その原因は彼女の正面に立つ一人の男だった。
「少しは大目に見てもらいたいものだな。なにしろ初めての仕事に慣れるので精一杯でね。おまけに手のかかる従業員まで押し付けられたとあっては業務に支障がでるのはやむを得ないことだとは思わないかね？」
壊滅的に似合っていないコック服に身を包んだその男、言峰綺礼は

カレンの刺々しい言葉にも全く動じることなく皮肉まで混ぜて返答する。
全く悪びれないその態度にカレンの頬がピクリと引きつった。
「自分の立場が分かっていないようですね。料理人の仕事に不満があるのなら明日からは校舎のトイレ掃除を担当してもらってもいいのですよ」
「それはいいな。私がトイレ掃除担当となった暁には全ての便器を完璧なまでに磨き上げ、ウォシュレット諸々を完備し最高の空間を作りあげてみせよう。もちろん使用する側にも相応の資格が求められる。数々のトラップを突破し最後にトイレの番人たる私を倒した者だけが至高のトイレで用をたすことを許されるのだ。どうかね？」
「私でも思いつかないような虐待トイレの構想ありがとうございます。今すぐ死んでください」
脅し文句にもまるで堪える様子がない言峰にカレンの機嫌はますます悪くなっていく。
彼女が他人に対してここまで感情をあらわにするのは珍しいことだった。
早く要件を済ませて言峰をここから追い出したいカレンは仕方なく話を先に進めることにする。
「……もういいです。これまで報告がなかったことは水に流しましょう。では改めて今ここで私が頼んだ件の報告をしてください」
言峰は苛立ちを抑えながら話を戻そうとするカレンを見て楽しそうに唇を歪める。
「寛大な処置に感謝しよう。ではまず学生食堂の売り上げだが１回戦の時と比較して約３００％増となっている。これにより我が食堂部門の営業成績は売店部門を抜いて１位となったわけだな」
「ええ、それから？」
「次に今後の営業方針だがキャンペーンマスコットの導入、新メニューの追加、従業員の教育強化によるサービスの向上などを考えている。２回戦終了まで我が食堂部門は成績トップを譲らないことを約束しよう」

「……ええ、それから？」
「従業員から不満の声があがっている。曰く『いくらなんでもこき使いすぎっス！　1日だけでもいいんでお休みくださいなんでもしますから』だそうだが、まぁどうでもいいことだったな。この件は聞き流してもらってかまわない」
「……ええ、それから？」
「オーナーとして一度食堂の視察に来てはどうかね？　私の特製麻婆豆腐で存分にもてなして――――」
「いい加減にしてください!!」
いつまでも『本題』に入ろうとしない言峰にとうとうカレンが叫んだ。
彼女の周囲に聖骸布が展開し攻撃態勢に入る。
命じればすぐさま目の前の男を拘束し、場合によっては絞め殺すだろう。
「あなたわざとやっているでしょう！　これ以上はぐらかすつもりなら縛って吊るして踏んづけますよ！　ていうかもう殺します絶対!!」
「そう興奮するな。今やお前はこの月海原学園における最高権力者だ。食堂の料理人ごときに熱くなることもあるまい」
その最高権力者に威嚇されているというのに言峰は面白そうな笑みを浮かべている。
ついにカレンの怒りがレッドゾーンを突破した。
展開していた聖骸布が言峰に向かって放たれる。
涼しい顔で身をかわした言峰の背後で身体測定器具が破壊され派手な音をたてた。
口元に浮かべた笑みをそのままに言峰はカレンに問いかける。
「カリギリの記憶が戻るのがそんなに怖いかね？」
「……っ！」
カレンの表情が変わる。
身体測定器具を破壊した聖骸布が彼女のもとに引き戻され再び攻撃態勢に入った。
それを見ても言峰は意に介さず言葉を続ける。

「封印の状況はそちらでもモニターできているのだろう？　にもかかわらず私にカリギリの監視を命じて逐一報告を入れさせる念のいれようだ。1回戦で消えると思っていた彼女がどういうわけか生き残り、封印した記憶を取り戻しつつある。お前としては気が気ではないだろうな。カリギリが全てを思い出した時お前は――――」

言峰がその先を言う前にさらなる速度をもって放たれた聖骸布が彼の首に巻き付いていた。

深紅の布がぎりぎりと言峰の首を締め上げていく。

「これ以上戯言を吐くのならここで潰します。圧縮したデータは明日ブタ子さんに焼却炉で焼いてもらうことにしましょう」

「悪かったここまでにしよう。カリギリは記憶を取り戻しつつあるが、その記憶の意味にはまだ気が付いていないようだ。食堂でも質問を受けたが一応誤魔化しておいた。今回の報告はそんなところだ」

言峰は両手を上げて降参の仕草をしながら『本題』について首を絞められながらも淀みない報告をする。

その首から聖骸布を外しながらカレンはため息をついた。

封印の状況はこちらでも把握できるが、それによってジナコが何を見たかまでは彼女には分からない。

故にカレンはジナコの行動を常に監視しなければならなかった。

だから猶予期間1日目にあったジナコからの申し出はカレンにとって渡りに船の事だったのだ。

仕事をさせると称してジナコの行動を縛り、その行動の全てを監視下に置くことができるのだから。

ただ誤算だったのはその監視を自分ですることができなかったこと。

1回戦の後消えたもう一人の監視対象である〝あの女〟を探す為、ジナコの監視を目の前にいる言峰綺礼に頼まなければならなかったことだった。

結果として大嫌いなこの男とこうして定期的に顔を合わせなくてはならなくなっている。

『彼女の代役』という呪いから逃れる為可能な限りの権限を集め、こ

の月海原学園で最高の権限を持つに至ったカレンだが状況は全く彼女の思い通りにはならない。
「用が済んだのなら早く出て行ってください。あなたと同じ部屋にいることは私にとって苦痛でしかありません」
「そうさせてもらおう。こちらも今日の仕込みがあるのでね」
そう言って言峰は踵を返すと保健室の扉に手をかける。
部屋を出る途中で彼は一瞬立ち止まった。
「私としては保健室の主は〝彼女〟よりお前の方が好ましいと思っているよ」
不意打ちのように残された言葉と共に扉が閉まる。
保健室に一人残されたカレンはその扉を見つめた。
大嫌いなはずなのに。
顔も合わせたくないはずなのに。
なぜかカレンは彼の言葉の一つ一つを無視することができない。
胸に湧き上がってくる感情を必死に否定しながら気持ちを落ち着ける為にテーブルに置かれたティーカップを持ち上げる。
「……余計なお世話よバカ」
そう言って口をつけた紅茶は少し冷めていたがまだ十分暖かかった。

その罰の名は

その小さな牢獄でアタシは絶望の吐息を漏らした。
牢獄は中は薄暗く、不快な圧迫感が身体を包み込んでいる。
光はかろうじて牢獄に空いた小さな２つの穴から差し込むのみだ。
身体が重い。
腕が、足が、身体全体が自分のものではないかのようだ。
それはそうだろう。
アタシ身体はもうヒトの形をしていないのだから。
関節という関節は太く膨れ上がり、頭と胴体はもはや区別がつかなくなっている有様だ。
目も耳も口も仮初めのものでしかなく、かろうじて心だけがまだヒトの形を保っている。
だが耐えなければならない。
これはアタシの罪に対する罰なのだ。
犯した罪が許されるまでこの地獄が終わることはない。
だからアタシはこの言葉を届けなければ。
２つの光が差し込むあの向こう側の世界へ。
乱れる息を整え、アタシは大きく息を吸い込み叫ぶ。
「いらっしゃいませ。言峰食堂へようこそ！　今日もマスターの皆さんを至福のお食事タイムへご招待するム～ン！」
ボイスチェンジャーで変換された甲高い声が学生食堂に響き渡った。
耳につけたインカムからアタシをこの地獄に叩き込んだ外道シェフ言峰の声が聞こえる。
『その台詞はバク転した後に横ピースをしながら言えと教えただろう。やり直しだ』
「できるかぁ!!」
『やってもらわなければ困る。今のお前はジナコ＝カリギリではない。私が発案した完全無欠のキャラクター。汎用月型営業兵器『るなっしー』なのだからな』

第２回戦猶予期間４日目の昼下がり。
マスター達が昼食をとろうと集まり始めた学生食堂に奇妙なモノが存在していた。
黄色のカラーで統一された三日月型のボディ。
ボディの中央にはうつろな瞳と半開きになった口がさも適当に描かれている。
その胴体とも顔ともとれる部分から太い手足が直に生えていた。
飾りといえば三日月の頭頂部にちょこんと乗った小さなシルクハットのみ。
そしてその口（仮）からはキンキンと頭に響く高音域な声を撒き散らす。
その異様はなごやかな空間であった学生食堂を一瞬にしてカオスの渦に巻き込んでいた。
製作者の狂気と混沌が具現化した月の怪物。
それが今アタシが装着している着ぐるみ、その名も汎用月型営業兵器『るなっしー』である。
『その他にも台詞に合わせて１０８通りのモーションを考えてある。次は『今日もマスターのみんなに会えて嬉しいムーン！』と叫びながら３回転ジャンピング１回捻り土下座を――――』
「だからできねーって言ってるっス！　ていうかその台詞でなぜ土下座!?　台詞とモーションが全然合ってないじゃないっスか！」
カウンターの中に立っているアタシは厨房の方を向きながら狭い視界で言峰を睨む。
着ぐるみには目の部分に２つ小さな穴が空いているだけなのだ。
『恨むなら今朝盛大に遅刻した自分自身を恨むのだな。次に粗相をしたら着せると予告しておいたというのにもう次の日にやらかすとは。もしかしてわざとかね？　本当は私の改心作のゆるキャラを着てみたくて仕方がなかったのではないか？』
「妄想乙。ゆるんでるのはアンタの頭のネジの方っス」
くそう、これというのもみんな昨日見たあの変な夢モドキのせいっス。

あの後起きたら完全にアウトな時間だったんスよね。
起こしてくれるはずのカルナは『起こすべきではないと思った』とか意味不明なこと言うし。
昨日はラニさんに対して「着ない」と宣言したにも関わらず、結局犯した罪（遅刻）に対する罰としてこの着ぐるみを着ることになっちゃったっス。
着てみて分かったことだが（いや着る前から分かってたけど）この着ぐるみは最悪だ。
はっきり言って滅茶苦茶重い。
昨日の言峰の話では総重量２０ｋｇという話だったがもっと重く感じる。
『ちなみに現在るなっしーの総重量は３０ｋｇだ』
「増えてるじゃないっスか！　はっきり言ってさっきから一歩も動けないんスけど!?」
心を読んだようなタイミングで聞こえた言峰の声にアタシは思わず突っ込む。
『私なら問題ないが２０ｋｇという重量はお前にはきついだろう。そこで着ぐるみに魔力を流せば軽くなるように細工を施したのだ。しかしその結果重量がさらに重くなってしまってな。いや全く私としたことが痛恨の設計ミスだよ。くくく……』
絶対にわざとだな。
狭い視界で見えないけど厨房で暗黒微笑してる外道シェフのイメージ余裕っス。
とはいえこのままでは動くこともままならない。
アタシは目を閉じると身体を包む着ぐるみに魔力を流す。
直に触れているのならアタシでもパスなしで魔力を送るくらいはできるのだ。
まぁそれでもできるようになったのは最近なんだけど。
自演の設計ミスはあるものの細工自体はきっちり働いたようで全身を押しつぶすようにかかっていた重圧が目に見えて軽減される。
『流す魔力量に比例して軽くなっていく仕組みだ。それを着ているか

らといって仕事に手を抜くことは許さん。常に一定の魔力を流して動けるようにしておけ』
「ちょ!?　それって常に魔力を放出し続けろってことじゃないっスか！」
『無論だ。動かない置物に用はない。るなっしーの使命はここに来るマスター共のふところを焦土と化すまで蹂躙することなのだからな。分かったら返事の後に『ム～ン』をつけたまえ』
「その語尾はもうやめないっスか？　ジナコさんさっきやって軽く死にたくなったんスけど」
『るなっしーの重量はまだ増やす余地があってな。私の機嫌を損ねるとうっかり余計なオプションを盛ってしまうかもしれん。この意味が分かるのなら返事の後に『ム～ン』をつけろ』
「わっかりましたム～ン！　るなっしーは言峰軍曹に一生ついていきますム～ン！」
　ファッキューキレイ、地獄に落ちろ。
　心の中で言峰を呪いながらアタシはヨタヨタとおぼつかない足取りで仕事を始める。
「こんにちはジナコ。今日はまた一段とすごい恰好をしてるね」
「もしかしてそれが『るなっしー』ですか？　興味深いです」
　声のした方を振り向くとカウンターの向こうに岸波白野とラニⅧが立っていた。
「2人共いらっしゃいませだム～ン！　ご注文は何かム～ン？」
「白野さん、ミス・カリギリはどうしたのでしょうか。言動に著しい乱れが……ハッ！　もしやこれが『るなっしー』の精神攻撃？　周囲ではなく装備者自身の精神を崩壊させる自決用礼装だというのですか。なんて新しい」
「いや違うと思うよラニ……」
　いや違わないっスよ白野くん。
　周囲のドン引き視線にさらされながら耳元では常に外道シェフの無茶振りを聞かされ、着ぐるみに魔力を奪われながら羞恥心をかなぐり捨てて『ム～ン！』と叫び続けなければならないんスよ？

完全にアタシを殺しにきてるよねこの着ぐるみ。
「でも良かったよ。ジナコが『神隠し』にあってなくて」
「神隠しってどういうことだム～ン？」
「昨日の夜から校内でマスターが行方不明になるという現象が起こっているのです。私の調べでは2回戦に進んだマスター６４人のうち少なくとも２０人の行方が一夜にして分からなくなっています」
決戦を待たずにマスターの姿が消えるというのは実はありえないことではない。
アリーナでエネミーにやられたり、決戦前にマスター同士の私闘に敗れたり、血の気の多いサーヴァントに校内で襲われたりなど。
残った６４人のマスターの中には７日後の決戦日にたどりつくことなくそのアバターを消滅させる者もいるだろう。
しかし一夜で２０人も消えるという事態は異常だ。
アタシのような未熟なマスターならともかく基本的にこの聖杯戦争に参加しているのは百戦錬磨の魔術師達なのである。
そんな魔術師達２０人が同じタイミングで先程あげたようなヘマをするだろうか？
可能性としてはゼロに近いだろう。
「おそらく偶然ではなく人為的なものでしょう。だとすれば一夜にして２０人のマスターを飲み込むような存在がこの校舎内にいるということになりますが」
ラニは淡々とした口調で恐ろしいことことを言う。
この着ぐるみ相手に今日を生き残れるかすら怪しいというのに、そんなものが校内でヒャッハーしてるのかと思うと絶望感が止まらない。
「そういうことだからジナコも気を付けて。あまり遅い時間に校内を歩かない方がいいと思うよ」
ほどなくして出てきた料理を受け取りカウンターを離れていく２人を見送った後アタシは厨房の方を振り返る。
「ということみたいだから今日は早退させていただきますっス！」
「却下だ。あと今『ム～ン』がなかったから１ｋｇ追加決定」

「ありえないんだム〜ン!!」

外道シェフの無情な一言にアタシはがっくりと膝をついた。

長い夜のはじまり

「今日は食堂の仕事が終わったら校舎の見回りをお願いします」
聖杯戦争2回戦5日目。
そろそろ食堂の営業時間も終わろうかという夕方のこと。
久しぶりに食堂に姿を見せたカレンが放ったのはそんな無慈悲な一言だった。
「このアタシの姿を見てよくそんなことが言えるム～ン……」
かすれた声でそう言ったアタシは今日も『るなっしー』の着ぐるみを着せられている。
理由は昨日と同様遅刻した罰だ。
アリーナでの食材集めに気を取られていたアタシは決戦に必要な『起動鍵』を取得することを完全に忘れていのだ。
今朝になってそれを思いだし大急ぎで2つの起動鍵（さすがにこれは食材にされていなかった）をとったアタシだったが食堂の出勤時間には間に合わず、その結果今日もこの虐待着ぐるみを着用しているのである。
一日中るなっしーに体力と魔力を搾り取られ続けたアタシは今や完全に出涸らしのティーパックのような状態になっていた。
『キモイ』『こっち見んな』『全裸にシルクハット最高です』と言われながら外道シェフの無茶振りに耐え続け、ようやく……ようやく今日もこの地獄が終わると思ってたんだム～ン！　この後は部屋に帰ってさっき厨房からくすねたプレミアムロールケーキで甘味ＯＨ祭りをする予定なんだム～ン！　そんなアタシにこの後まだ仕事をさせる気なのかム～ン!?」
「何を言っているのですか。あなたはこの月海原学園の用務員なのですよ？　校舎の見回りをするのは当然でしょう。決してもうすぐ帰れると思っていたブタ子さんが絶望に打ちひしがれるところを見たかったわけではありませんよ」
そう言うとカレンは言峰そっくりの薄笑いを浮かべる。
さすがあの外道シェフの上司は格が違ったっス。

こいつに従業員への思いやりを期待したアタシが馬鹿だった。
例えどれだけアップデートを重ねてもこの女の心に「慈愛」なんてものが実装されることはないんだろうね。
「とにかく今日は食堂の仕事が終わったら校舎の見回りをして戸締りのチェックをしてください。今のあなたは猶予期間を私に売り払っている身。命令に対する拒否権はないはずです」
そう言ってカレンはアタシの首にかかった『赤いワンちゃん』を指差す。
ぐぬぬ……そう言われては何も言い返せないっス。
かくなる上はっ！
アタシは藁にもすがる思いでインカムに叫ぶ。
「言峰料理長閣下！　ここは2人で手分けして校舎の見回りを――――!!」
『私は定時で失礼させてもらおう。あとプレミアムロールケーキは没収だからな』
「デスヨネー」
さよならアタシの甘味OH祭り。
こんばんわ夜中のサービス残業。
こうしてアタシの5日目の仕事はまさかの延長戦へと突入したのだった。

この電脳空間においてもきちんと夜は訪れる。
空にあるのが仮初の太陽でそれを動かしているのがムーンセルであったとしても、アタシ達は何の疑問も持たずに仮初の日の出と共に起床し、仮初の日没と共に眠りにつくのだ。
そう、生物は太陽の下で活動することこそが正しいあり方なのである。
つまりアタシが何を言いたいのかというと。
「陽が落ちた校舎でこうして見回りをしてるアタシは人間として間

違っているのではないかということっスよ！　そこんところどうなんスかねカルナさん！」
「強引な理論武装で己が怠慢の責任を太陽になすりつけるとはな。俺の前でそれを行う蛮行はもはや賞賛されていいかもしれん」
　そう言ってアタシの隣を歩く太陽の化身はため息をついた。
「久しぶりに出てきたと思ったら嫌味っスか。食堂の仕事中は呼んでも出てきて手伝ってくれないくせに」
「当たり前だ。保護者同伴で仕事をする社会人がどこにいる」
　身も心も疲れたアタシに優しくしてくれる人はいないんスかね。
　泣きそうっス女の子だもん。
　体力と魔力が尽きかけた身体を引きずりながら懐中電灯を片手にまずは1階の教室をのぞいて回る。
　室内に誰もいないことを確認し、窓の鍵が閉まっていることをチェックしていく。
「で？　その保護者サマはどうしてこの見回りには出てきてくれたんスか？　保護者同伴で夜の見回りをする用務員もいないと思うんスけど」
「虫の知らせというやつだ。例の『神隠し』の件といい、嫌な予感がするのでな」
　なんの前触れもなく校舎からマスターの姿が消える事件は今日になっても続いていた。
　ラニさんは人為的なものだと言っていたが、マスターやサーヴァントが動いているのなら何かしらの痕跡や目撃者がいそうなものなのだがそれもない。
　基本的に校舎内で他のマスターを襲うのはルール違反なのだが、誰が何をやっているのか分からない以上ムーンセル側も対処のしようがないというのが現状だった。
　カルナの言葉にアタシは自分のおかれている状況を再確認する。
　急な仕事で神隠しの噂がある校舎を夜に見回ることになった美人用務員（↑アタシ）。
　あれ？　これ嫌なフラグ立ってない？

「こ、こうしちゃいられない。早いところ見回り終わらせて帰るっス！『その後ジナコの姿を見た者は誰もいなかった』とか勘弁っスよ！」
アタシは疲れた身体に鞭を打って足早に次の教室の前へたどり着くと扉を開ける。
「――――ッ!?　いかん！　その部屋に入るなジナコ!!」
その時突然焦ったようにカルナが叫ぶ。
しかしその声が聞こえた時にはアタシの足はもう部屋の中へと踏み込んでいた。
「え……」
その瞬間辺りの景色が一変する。
何が起こったのか分からないアタシの目に映るそこはすでに月海原学園の教室ではなかった。
あったはずの机や椅子は消失し、壁は窓すらない黒くのっぺりとしたものに変質している。
そこには消えた壁掛け時計や掲示物の代わりにチョークで描いたような白線で人の形が何十と描かれていた。
振り返ると入ってきたはずの扉も消失している。
「私のシークレットライブ会場にようこそ間抜けなマスターさん」
奇妙な甘い香りが立ち込めるその空間の中央にアタシの目は吸い寄せられた。
そこにいたのは人型でありながら硬質なの角と尻尾を持つ異形の少女。
何度か顔を合わせている対戦相手のサーヴァント、ランサーだった。
アイエエエエ!?　ランサー!?　ランサーナンデ!?
夜の教室がいつのまにこんな不思議空間に!?
「あら、誰かと思ったらトド女じゃないの。相変わらず血の質が悪そうな身体してるわね」
ランサーはアタシを見ながら獰猛な笑みを浮かべる。
それはかかった獲物を品定めするような捕食者の表情だった。

アタシは本能的に悟る。
目の前にいるサーヴァントは人間を貪る怪物なのだと。
「カルナ！」
アタシはすかさず身を守るべくカルナに呼びかける。
だがこの危機から自分を守るはずのサーヴァントは現れない。
アタシの声はこの奇妙な空間に虚しく響いただけだった。
「無駄よ。ここに招待されるのはマスターだけ。あの生意気なサーヴァントは今頃あなたの消えた教室で途方に暮れているんでしょうね。いい気味だわ」
「じゃあ、最近マスターが突然消えていたのは……」
「そう♪　みんなこのシークレットライブに招待されてたってわけ。今じゃみんな私のファンになって毎晩歌をせがまれるのよ」
そう言ってランサーが指差したのは壁に描かれた人型達だった。
「うあぁ……うあぁぁあ……」
「暗い……何も見えない……」
「助けて……誰か助けてくれ……」
四方の壁から弱々しい悲鳴が聞こえてくる。
どう聞いても歌のリクエストとは思えないんですがそれは……。
ていうかもしかしてあの人型がここにきたマスターの末路っスか!?
ひぃ、あんな形で2次元の住人にはなりたくないっス！
「さぁ、ライブを始めましょう。その身体に流れる血を一滴残らず私に捧げなさい」
ランサーがゆっくりとアタシに近づいてくる。
それは血と狂気のライブの始まりだった。

「やられたな。まさか目の前で連れ去られるとは……」
ジナコを追って教室に飛び込んだカルナは悔しげに声を漏らす。
ジナコが教室の扉を開いたその刹那。

それまで全く感じられなかった覚えのあるランサーの気配が教室の中に突如現れたのだ。
瞬時にそれを察知したカルナだったが警告した時にはすでに遅く、彼の主の姿は教室から跡形もなく消えていたのである。
まさにそれはここ数日頻発している『神隠し』だった。
(予感的中というやつか。しかしまんまとやられていれば世話はない)
とりあえず悔やむのは後だ。
カルナはまずジナコとのパスを確認し、それが切れていないことに安堵する。
どうやら生きてはいるようだが、あのランサーに連れ去られたのなら状況は一刻を争う。
カルナはジナコを危険から守る為にある『保険』をかけているが、それでもサーヴァント相手では十分だとは言い切れない。
カルナは己の主を救出するべく思考する。
ジナコの気配は教室の中はおろか校舎からも消えている。
そしてあの時感じた気配の不自然な現れ方を考えると。
(別空間に引きずり込んだということか)
誰かが教室の扉を開くタイミングで室内が別空間に変わるようトラップが仕掛けられていたのだろう。
あの時どうしてジナコを先に行かせてしまったのか。
自分が先か少なくとも同時に教室に入っていればジナコを一人でランサーの前に立たせるようなことはなかったものを。
「いえ、あなたが何をしても結果は同じだったでしょう」
響く声に続いて虚空から漆黒の修道福を着た銀髪の少女が現れる。
教室に降り立ったカレンは教室の壁に触れると目を閉じた。
「元の空間と巧妙に重ね合わせた上でサーヴァントだけを弾くようにフィルターがかけてあるようです。どのタイミングで入ったとしてもあなただけはこちらにとり残されたでしょうね」
「まさか、ランサーのクラスにそんなことができるものなのか?」
タイミングの良すぎるカレンの登場に不審なものを感じながらカ

ルナは尋ねる。
「さぁ、それはなんとも。あのランサーの能力なのかもしれませんし、マスターのスキルなのかもしれません。ですがそれも今日までです。ブタコさんの位置はこちらで追跡していますので彼女をこちらに引き戻した後、首謀者には然るべきペナルティを与えるとしましょう」
カレンはそう言うと壁に触れている手に力を込める。
教室の壁に追跡術式が走り、ジナコの連れ去られた空間を特定しようと捜索を開始する。
「空間の特定に少し時間がかかります。あなたはそこでおとなしく――――ッ!?」
そう言いながら振り向いたカレンの言葉が途切れる。
瞬時に具現化されたカルナの槍が彼女の白い喉元にピタリと突きつけられていた。
「……何の真似です？　私は先程『あなたの主をこちらに引き戻す』と言ったはずですが」
「これまでの神隠しではマスターを救出することはおろか追跡すらできなかったというのに、今回は随分と手際がいいのだな。お前はこうなることがはじめから分かっていたのではないか？」
「……」
カレンはしばらく黙っていたがやがて諦めたようにフゥと息をはいた。
「ええ、そのとおりです。『神隠し』のからくりを暴くためブタコさんには囮になってもらいました。彼女の首についている『赤いワンちゃん』を通してあらかたのことは分かりましたので、後は巻いた餌を回収すれば終わりというわけですよ」
「貴様……」
己がマスターを餌扱いされたカルナの槍に力がこもる。
だがそんな彼を見てカレンは肩を一つすくめただけだった。
「分かったらその物騒な槍を引っ込めてくれませんか。このままでは怖くて作業に集中できません。回収する前に餌が食べられてしまってはお互い困るでしょう？」

「くっ……！」
悔しげにうめいたカルナの槍が消失する。
それを確認するとカレンは再び壁の方に向き直り追跡の作業を再開した。

（そう、食べられてしまっては困ります。『あの女』が出てくるまでは……ね）
追跡作業を続けながらカレンはジナコを引き戻す術式を組んではいなかった。
彼女がジナコを囮にして釣り上げたかったのはあのランサーではない。
あれだけ大掛かりな陣地作成にはおそらくあの女がかかわっているはずだ。
本命が餌に食いつくまでカレンは垂らした竿を引き上げるつもりはなかった。
（引き戻してはあげますよ。それが無残な亡骸であってもね）
カルナに背を向けたままカレンは酷薄な笑みを浮かべたのだった。

シークレットライブ

壁に無数の人型が描かれた部屋でアタシとランサーは向かい合っていた。
自分のサーヴァントと引き離されこちらは完全にアタシ一人の状態。
よく見るとランサーも一人であり、傍にマスターであるランルーくんの姿はなかった。
「マスターが分からず屋なおかげでおあずけになってたけど、禁じられたのならバレないようにやればいいだけ。こそこそするのは好きじゃないけど月夜に開かれる秘密の宴っていうのも悪くないわ。本当なら壁に埋め込んでじっくり血を抜き取るところだけど、対戦相手のあなたは特別に私が手ずから血を絞って殺してあげる。せいぜい派手に泣き叫んでライブを盛り上げて頂戴」
「あばばば……そんなはサービスはノーサンキューっス！　ジナコさんの血なんか飲んでもコレステロール値が上がるだけっスよ！」
「馬鹿ね、飲むんじゃないわよ。私はこの美貌と若さを保つために人間の血で満たされたお風呂に入る必要があるの。あなたの血は少し質が悪そうだけら薔薇のエキスで薄めて足湯用ってところかしらね」
アタシの血をパシャパシャと足でかき混ぜながら微笑む角付き美少女か。
萌え……られるわけないだろコンチクショー！
このサーヴァントまともじゃないと思ってたけどとんだサイコさんっスよ！
出口のないこの空間で逃げられる心配など全くしていないのだろう。
ランサーはまるで焦らすようにゆっくりとアタシに近づいてくる。
今更言うまでもないことだがこの電脳世界に召喚されたサーヴァントの原型は過去に偉業(善か悪かはともかくとして)を成し遂げ、死後に英霊となった者達だ。
その身に数々の神秘を宿し必殺の宝具まで持っている彼らの強さ

は人間の限界を軽く突破しており、核兵器を含めたあらゆる現代兵器でも傷一つつかない存在なのである。
もちろん人間の魔術師なんかが敵うわけがない。
現在月にいる魔術師の誰であろうとサーヴァントと戦えば無残に屍を晒すだけだろう。
魔術師とよべるかも疑わしいアタシならなおさらだ。
なんだこれありえねーっス！　完全にＤｅａｄｅｎｄ不可避じゃないっスか！
リセットボタンはどこっスか!?　食堂の仕事が終わった辺りのセーブポイントからやりなおせば甘味ＯＨ祭りルートに入れる可能性が微レ存だと思うの！
などと現実逃避している場合ではない。
この状況をなんとかしなければアタシの聖杯戦争はここで終わってしまう。
今のアタシは昼間の仕事で出涸らしティーパック状態。
あがくにしてもコードキャストを撃つ魔力も逃げる為の体力も残っていない。
だが逆に選択の幅が狭まったことで覚悟が決まった。
アタシは両腕をゆっくりと動かすとピンと伸ばした左手と右手でＴの字を作る。
そして近づいてくるランサーに向かってそれを突きつけた。
「タ～イム！　ちょっとタイムっス！」
「……はぁ？」
虚を突かれたランサーの足が止まる。
「何？　命乞いなら時間の無駄よ」
「滅相もない降参っス。ジナコさんはもう諦めたっスよ。でも血を絞られる前に一つお願いを聞いてほしいんスよ」
「へぇ……言ってみなさい。聞くだけ聞いてあげるわ」
「あんたの歌を聞かせてほしいっス」
この状況でアタシができることのは時間を稼ぐこと。できるだけ殺されるまでの時間を引き伸ばして助けを待つ。令呪でカルナを呼

ぶのは最後の手段だ。
どういう出自のサーヴァントなのかは分からないが、今までの言動からしてこのランサーは歌に随分と自信があるようにみえる。しかもパワーは凄まじいがオツムの方は残念そうだというのがアタシの見立てだった。
「今までの言動から察するに相当の歌い手とみたっス。ああ、死ぬ前に超絶かわいいランサー様の神曲が聞ければ悔いなく成仏できるんスけどね～」
そう言いながらアタシはランサーから顔をそむけると目だけでチラッと視線を投げる。
自分で言っといてなんだけどさすがに苦しいっスかねコレ。
いくらオツム弱そうでもこんな見え見えの時間稼ぎに乗ってくるほどバカじゃ……。
「しょ、しょうがないわね～。悔いを残した人間の血はノリが悪いものね。そこまで言うのなら歌ってあげるわ！　私のために命を投げ出すのだもの。極上のご褒美が必要よね！」
わぁいバカだった。
おーおーあんなに尻尾ぶんぶん振っちゃって相当嬉しかったんスね。
なんかチョロすぎて罪悪感がハンパないっス。
「さぁ、括目しなさい！　これが命と引き換えにしても余りある天上を満たす女神の歌よ！」
両手を広げたランサーにどこからともなく照射されたスポットライトが当てられる。
いきなりな演出にビビるアタシの前でランサーは高らかに歌いだした。
♪　愛はミラクル
（夜は強いの）イジワルしないで
おやつは深夜の三時過ぎ
♪　アナタのハートを　持ってくテイク
（心じゃなくて心臓よ）

♪　Ｍｕｒｄｅｒ☆Ｍｕｒｄｅｒ彼との
　距離は遠いの……
♪　彼はブレッド
　あたしブラッド
♪　トランシルヴァニアに
　バシバシ響け
♪　今日こそアナタを拷問♡させて
……。
……。
……。
こ　れ　は　ひ　ど　い。
透き通った美声が壊滅的な音程と痛すぎる歌詞によって蹂躙されている様がそこにはあった。
世界最高級の肉を雑巾の搾り汁で煮込み、コールタールをぶっかけて客に出すような所業。
声フェチのアタシからすれば血涙モノの光景である。
落ち着け。
落ち着くのよジナコ。
ヤツを正座させて小一時間問い詰めたい衝動を抑えるのよ！
「さ、さすがランサー様っス！　マジ女神っス！　ジナコさん現世への未練を通り越してあの世へ強制連行されるかと思ったっスよ！　スゴイナーアコガレチャウナー」
「あなた分かってるじゃないの。今夜はとても気分がいいわ。このままオールナイトで歌いまくるわよ！」
「ごーごーランサー♪」
このサーヴァントさんノリノリである。
だがこちらにとっては好都合っス。
いくら血涙を流そうとも命を取られるよりはマシ。
目の前の阿鼻インフェルノ地獄を乗り越えてジナコさんは明日を掴んでみせるっス！
とりあえず命をつないだアタシはホッと胸をなでおろす。

しかしその時歌う体勢に入っていたランサーがその動きをピタリと止めた。
「何よ今いいところ……え？　時間がおしてる？　別にいいじゃないの今日はこのままオールで……あー……ハイハイ分かったわよ」
アタシには何も見えないし聞こえないがランサーは誰かと話しているように見える。
明後日の方向を見ながらの会話（？）を終えるとランサーはこちらに向き直った。
「悪いわね。『スポンサー』から巻きの指示が出ちゃったわ。残念だけど歌はオシマイ。後はあなたを殺してライブはフィナーレよ」
言うと同時にランサーが消える。
その姿が瞬時にアタシの目の前まで移動し、気が付いた時には壁際まで吹き飛ばされていた。
「あぐっ!!」
全身を貫く衝撃に意識を持って行けれそうになる。
それでもどうにか身体を起こすとランサーが少し驚いた顔をした。
「あら、今のを食らって立ち上がれるなんて意外と頑丈なのね。並みの魔術師ならもう動けないはずなんだけど。手加減を間違えたかしら」
ランサーの硬質な尻尾がピシリと床を叩く。
どうやらあの尻尾で攻撃されたようだがそれすら定かではない。
アタシでは見ることはおろか認識すらもできない攻撃だった。
こうなってはもう最後の手段を使うしかない。
「マスターたるジナコ＝カリギリが……」
「おっと、そうはさせないわよ」
「がっ!?」
令呪を使おうとしたアタシの首がランサーの右手に掴まれる。
集中していた意識が途切れ、アタシの身体はそのまま宙に吊り上げられた。
「無粋な邪魔者に水は差させないわ。このまま首を握りつぶしてあげる。きっと派手に血が見られるでしょうね」

「あ……が……ぐ……」
再び意識を令呪に集中させようとしても首に食い込むランサーの右手がそれをさせない。
自分より華奢な少女の腕で空中に吊り上げられながらアタシはもがくことしかできなかった。
「なかなか楽しい時間だったわ。けどさようなら。その血を捨てるまではあなたのことは覚えていてあげる」
首筋に食い込む指の力が徐々に強くなるにつれてアタシの視界が暗くなっていく。
その視界が完全に闇に塗りつぶされようとしたその時。
闇の向こうに黄金の光が現れた。
あれは……何……？
とても眩しくて暖かくて……。
そして、ひどく懐かしい……。
『こんな日々がずっと続けばいいのに』
アタシはその光に向かって手をのばす。
それは誰の言葉だったか。
差し込む西日で黄金に輝くあの場所でそう言って微笑んだのは誰だったか。
そう、アタシはここで死ぬわけにはいかない。
彼女にもう一度会うまで、失われたあの場所を取り戻すまで。
アタシは死ぬわけにはいかないんだ！
いつのまにか黄金の光がアタシの身体を包み込んでいた。
ギリギリとアタシの首に食い込んでいたランサーの指が光に押し返されていく。
「な、何よこれ！」
驚愕の声と共にランサーがアタシの首から手を放す。
不恰好に地面に落ちたアタシは盛大に咳き込んだ。
同時にアタシを包んでいた黄金の光も消えていく。
な、なんだか分からないけど助かったっス。
でもさっきのはなんだったんスかね。

『彼女』とか『あの場所』とか覚えのないこと言っちゃうし。
「どういうこと？　あんなド素人マスターがなんで神話クラスの防御礼装を持ってるのよ」
アタシから距離を取ったランサーは槍を構える。
その表情にもはや笑みはなく、身体には膨大な魔力が満ちていた。
「血は惜しいけど仕方ないわ。あなたはここで確実に殺す」
ランサーから血の搾取という遊びを捨てた本気の一撃が放たれようとしている。
一方アタシはというともう動ける状態ではなかった。
ただでさえ体力と魔力が尽きかけているところにこれまでのダメージが重なった結果、もう立っているのがやっとなのだ。
一度は不思議な光に助けられたが2度目がある保証はない。
「不可避不可視の――――――」
ランサーが攻撃態勢に入り、これまでかとアタシが思ったその時。
――――ソコマデダヨ。ランサー。
アタシの目の前の空間が歪むとそこには一人の魔術師が立っていた。
ピエロを模したような服装に、顔には白と赤のコミカルな化粧。
アタシと2回戦を戦う魔術師。
「なんで……あんたが……」
思わず漏れたアタシのつぶやきが部屋に溶ける。
長い夜はまだ、終わらない。

解き放たれた『怪物』

突然の闖入者に驚くアタシの目の前で、ランルーくんはシークレットライブ会場（ランサー曰く）に降り立った。

突然現れた己がマスターの姿にランサーも一瞬驚きの表情を見せたが、すぐに冷静になると目の前の道化師に向かって問いかける。

「何しにきたのよマスター。ライブならもう終わりよ。飛び入りには少し遅かったみたいね」

アタシへの止めを邪魔されたからか、ランサーの口調には隠し切れない苛立ちがこもっている。

一方ランルーくんはそんなサーヴァントの機嫌を全く気にしていない様子で気だるげに周囲を見回すと、頭を右にかくりとかしげた。

「ランサー……コレハドウイウコト？」

ランルーくんの言葉には感情の読めない普段の様子とは違い、明らかな非難の色がある。

「コレハヤッチャダメダッテ、ランルークン言ッタヨネ？」

「私は自分の欲望を抑えるなんてまっぴらなの。好きに狩って、好きに絞って、好きに殺すわ。邪魔しないでもらえるかしら」

みなぎる魔力は霧散したがランサーは攻撃体勢を解いていない。

ランサーがその気になればアタシは為すすべもなく彼女の槍に貫かれるだろう。

「なんなら殺した後は好きにしていいわよ。愛した人間の肉でしかその飢えを満たせない異常者。それがあなたの本性だものね。串刺しにする？　それともミンチにしてハンバーグがいいかしら。お好みにあわせて下ごしらえをしてあげるわよ」

ランルーくんが背中越しに一瞬アタシを見る。

その血走った目は満たされない食欲（ほんのう）のせいか。

人間の血を求めるサーヴァントと人間の肉を食らうマスター。

それが2回戦で戦う相手の本性だったのだ。

状況が悪化してるじゃないっスか！

このままじゃジナコさんの魅惑ボディがランルーくんのお夜食に

なっちゃうっス！
煮て良し、焼いて良し、でもタタキは嫌ッ！
錯乱気味にどこかの島の手足が生えたお魚ネタが頭をよぎる。
しかしランサーの言葉を受けてもランルーくんは動かなかった。
アタシとランサーの間に立ちはだかったまま己がサーヴァントを見つめると静かに首を振る。
「ウウン、ランルークンハ我慢スルンダ。目ノ前ニゴチソウガアッテモ我慢スルンダ。ソノ為ニ、オ別レシテキタノ。大好キナ、パパ。大好ナ、ママ。大好キナ、ミンナ。イチバン大好キナ、ランルークンノベイビー。トッテモ美味シソウダッタケド我慢シテミンナトサヨナラシテキタンダ」
相変わらずひび割れた声だったがその言葉には今までにない熱が感じられた。
「ランルークンハ聖杯ニオ願イスルノ。世界ガランルークンノ好キナ物デイッパイニナリマスヨウニッテ。ソウシタラモウオ腹ハ減ラナイヨ。大好キナベイビーヲ食ベナクテモイインダ」
「呆れたわ。まだそんなことを言ってるのね。人間なんて元々お互いを食い物にしているじゃない。私の周りの人間も暇さえあれば他者の金や土地を奪い合っている奴らばかりだったわよ。それが人の血肉になったところでたいした違いはないわ」
己が願望を告白するマスターにランサーはこともなげに言う。
人間はそもそもが互いを食い合う『怪物』なのだと。
たいした違いっスよ！
ここがジナコさんが食べられるかどうかの瀬戸際っス！
がんばれランルーくん！
ここでバックに『論破！』の文字を背負いながら「それは違うよ！」と言ってやるっス！
だがそんなアタシの心の声が聞こえるはずもなく、ランルーくんは黙ったままだ。
「それに愛する者を糧に生きるのはそんなに罪深いことかしら？　触れ合うだけでは足りない。愛する者の血も肉も全て自分のなかに取

り込んで一つになりたい。それは何もおかしなことではないわ。それが愛ってものでしょう？」
ランサーの構えた槍に再び魔力が集まる。
「後ろのトド女を殺した後で教えてあげる。愛する者を貪る快感をね！」
今度こそアタシをその槍で貫かんとランサーが地を蹴ろうとしたその時。
「ランサー――――君ノ愛ハ美味シクナイ」
そう言ったランルーくんの右手からまばゆいの光が放たれた。
それはアタシとランサーを飲み込み一瞬にして部屋全体を覆い尽くす。
「うおっ！　まぶしっ!!」
「これは?!　何するのよやめ――――!!」
思わず目を覆ったアタシの耳にランサーの焦った声が聞こえる。
しばらくして光がおさまり周囲を見回したアタシは部屋の様子が変わっているのに気が付いた。
壁にびっしりと描きこまれていた人型が消えている。
あの人型は神隠しにあい、壁に埋め込まれていたマスター達だったはずだ。
それが一つ残らず消えていた。
「なんてことするのよ！　せっかく捕まえたマスター達を逃がしちゃうなんて！　しかも全員を通常空間に転移させるために令呪まで使ったわね。そこまでして私の邪魔をしたいの!?」
「ランサー……モウ一度言ウヨ。コレハヤッチャダメ。ランルークンハ『怪物』ニナルワケニハイカナインダ。ベイビーニ会イニ行ケナクナッチャウ」
硬質の尻尾を逆立てながら怒りの声を上げるランサーにランルーくんは静かに告げた。
その言葉を聞いたランサーは一瞬信じられないものを見るように己がマスターを見つめ、そして肩を震わせながらうつむく。
「そう……あなたまでそんなことを言うの……。あなたは、あなただ

けは私のことを分かってくれると思っていたのに……」
ランサーの声が一段低くなる。
そして再び顔を上げたランサーは凶悪な笑みを浮かべた。
「本当なら後ろのトド女共々殺してやりたいところだけど、それじゃあ私も消えちゃうしつまらないわ。だから奥の手を使わせてもらうわよ。カモン、スポンサー！」
そう言ったランサーが槍の持っていない左手の指をパチリと鳴らすと、虚空からにじみ出るように一つのシルエットが浮かび上がった。
「全く……私は裏方に徹すると言ったはずですが」
そう言ったシルエットは次第に丸みを帯びていき僧服と頭巾をまとった女の姿になる。
その女は服装こそ地味な僧服だったが、それを豊かなボディラインが蠱惑的に押し上げており、おまけにその僧服にはなぜか腰までスリットが入っている。
そこから見え隠れする肉感的な太ももも手伝ってその女からは尼にはあるまじき妖艶な雰囲気が放たれていた。
彼女は優雅な仕草で降り立つとランサーを見る。
「私を呼んだということは、マスターの考えは変わらなかったということですかランサー？」
「ええ、どうしようもない頑固者だったわ。後は任せるからやってちょうだい。見返りはここでマスター達から搾取したリソースの半分でどう？」
「いいでしょう。交渉成立です」
女はランサーとの会話を終えると前に出る。
「初めまして殺生院キアラと申します。以後お見知りおきを」
そう言って殺生院キアラと名乗った女はアタシとランルーくんに向かって微笑んだ。
ゾクリとした。
その微笑みはとても慈愛に満ちたものだったのにアタシは冷や汗が止まらなかった。

何がそう思わせるのかも分からないままアタシは動けなくなる。
「自己紹介もそこそこに申し訳ないのですが時間がありません。失礼して『はじめさせて』もらいましょう」
キアラはそう言うと右手を持ち上げた。
その手のひらをランルーに向けるとそこに薄紅色の光が灯る。
「人に三魂七魄あり。すなわち十種の神宝なり。汝、己が仏性を悟らんとするなら、内なる悪を見据え、もって涅槃に至るべし。オン　バザラ　ダキニ　ウン　ハッタ　ソワカ」
え、なに？
何してるのあの女？
キアラがよくわからない呪文を唱える間にも右手の光はどんどん強くなっていく。
「ア、アアアアア……！」
その時アタシの耳に苦しげにうめく声が聞こえた。
そちらへ目を向けると、そこには胸の中央から同じく薄紅色の光を放っているランルーくんの姿があった。
「『五停心観』に感あり。あなたの心の淀み、取り除かせて頂きます」
「イ、嫌ダ……。嫌ダアアアアアアアア!!」
叫ぶランルーくんの胸で薄紅色の光が収束し、光の玉になったかと思うとそれは引きちぎられるように抜き取られ、キアラの右手に収まっていた。
「これがあなたの食欲（ほんのう）を縛る鎖。『母性愛』とでも言うのでしょうか。美しいものですね」
「返シテ……ランルークンノ……」
ランルーくんの声が小さく震える。
キアラは右手の光にしばし見入っていたが、やがて手の中の光をこともなげに握りつぶした。
同時にランルーくんの身体が糸の切れた人形のようにドサリと倒れる。
キアラはその様子を見届けると今度はこちらを見た。
アタシの背筋にランサーに殺されかけた時以上の緊張が走る。

「さて、彼女はどうしますかランサー？」
「そうね。邪魔者がいなくなったから改めて殺したいところなんだけど……」
「ええ、どうやら時間切れのようですね」
その直後空間に激しい警告音が鳴り響く。
《警告。警告。不正に改竄された空間を感知。ただちに通常空間へと修復します》
アナウンスと共に周囲の景色が歪み始めた。
細工されていた空間が元の月海原学園の教室に戻り始めているのだ。
ランサーは倒れているランルーくんに近づくとその身体を抱え上げる。
「殺せなかったのは残念だけど。楽しみは先にとっておくわ。運がよかったわね」
そう言うとランサーとランルーくんの姿が空間に溶けていく。
その最中一瞬ランサーがアタシを見た。
「それとも運が悪かったのかしら。『怪物』が増えてしまったんだものね」
そう言い残して2人の姿が完全に消える。
その横でキアラが優雅に腰を折った。
「それでは私も失礼いたします。またお会いしましょう〝ジナコ先生〟」
そう言ってキアラの姿も空間に溶けた。
一人残されたアタシはペタリとその場に座り込む。
周囲の景色はもう元の月海原学園の教室に戻っていた。
た、助かった～。
今度ばかりはもうダメかと思ったっス。
あ……なんか気が抜けたら意識が……。
駆け寄ってくる人影の「大丈夫かジナコ！」という声が聞こえる。
それをを最後にアタシは意識を手放した。

黄金色の楽園

気が付くとアタシは月海原学園の保健室に立っていた。
ランサーの閉鎖空間から教室に戻ってきたところで意識が遠のいた感覚は覚えている。
おそらくそこで意識を失ったであろう自分がこんなところに立っているのはおかしいのだが、アタシは特に慌てたりはしなかった。
なぜならこの突然校舎のどこかに立っているシチュエーションはこれで3度目だからだ。
これってまた予選の時の記憶を見るパターンっスよね。
いい加減この展開も慣れたっスよ。
でもジナコさんさっきまでサーヴァントに殺されかけてたんスけど。
もう精神的にいっぱいいっぱいなんで今日は自重してほしいんスけどね。
あ、でもこれ思い出してるのアタシなんだからアタシが悪いのか。
行き場のない愚痴を頭の中でこぼしながら周囲を見回す。
時間は夕方のようで、窓から差し込む西日が保健室の中を黄金色に染め上げている。
その部屋の中央に置かれた大きなテーブルでは、記憶の中のアタシである「ジナコ」が椅子に腰かけてノートＰＣをいじりながら足をぶらぶらさせていた。
『ひゃっほぅ、レアアイテムゲットォ！　１００回狩っても出なかった時はあやうくＰＣ投げそうになったっスけど、今や保健室警備員になっているジナコさんに死角はなかった。ここならおいしいお茶とお菓子が食べ放題だし、眠くなったらベッドがあるし、おまけに回線も最速ときた。まさか用務員室以上の理想郷がこんなところにあるとは思わなかったっスよ』
どうやら狩りゲーをやっているらしい。
いい素材が出たらしく「ジナコ」はノートＰＣの前で狂喜乱舞している。

喜んでいた「ジナコ」だったが、ふと動きを止めるとテーブルの対面に視線を移した。
『え、仕事しろって？　昔は君達のように働いていたんスけど、膝に矢を受けてしまってな。大体ジナコさんはあくまで保健委員の顧問であって保健医じゃないんスよ。アタシの仕事は君達がちゃんと仕事をしてるのかを監督することなわけっス。オーケー？』
うむ、相変わらず完璧な理論武装による見事な責任逃れっス。
さすが記憶の中のアタシ。
そう思いながら「ジナコ」の視線を追いかける。
テーブルの対面には２つの湯呑が置かれていたが、椅子には誰も座っていない。
いや、前回の時と同様にアタシには見えないだけで座っているのだ。
アタシと昇降口で出会った２人の男女が。
『うっ！……わ、分かったっスよ。２人してそんなに睨まないでほしいっス。ＰＯＰ待ちの間だったらちゃんと手伝うっスから。ホラホラ、今日はジナコさんおすすめのスナックを持ってきたんスよ。これを食べて機嫌を直すっス』
「ジナコ」はスナックの袋を取り出すと口を開けてテーブルに並べ始める。
『ふっふっふ……食べたっスね？　かかったなこのアホゥがぁ！　さぁ食べた分きっちりジナコさんの狩りを手伝ってもらうっスよ。今日はコイツを３人で倒すまで帰さないっス！』
「ジナコ」携帯ゲーム機を３つ取り出すと２つを対面に滑らせた。
その顔は楽しそうな笑顔を浮かべている。
アタシは驚いていた。
最後にあんな風に笑って人と話したのはいつだろう。
パパとママがいなくなってからアタシはほとんど外に出なくなった。
ＰＣ越しに見ず知らずの人とチャットをすることはあっても、人と向かい合ってしかも笑いながら話すことなどなかったし、これからも

ないと思っていたのだ。
これではまるで「友達」と話しているようではないか。
誰っスかあのリア充は。
なんかあの「ジナコ」が本当にアタシなのか疑わしくなってきたっス。
その時保健室のドアがノックされた。
まさにゲームを始めるところだった「ジナコ」は面倒くさそうな顔をしながら扉の向こうに返事を返す。
『はーい。開いてるっスよー』
『失礼いたします』
扉が開き姿を現した人物を見てアタシは目を見開いた。
豊かなプロポーションを黒い僧服で包み、頭には白い頭巾。
慈愛を感じさせる微笑を浮かべながら保健室に入ってきたのは、ランサーの閉鎖空間で出会った殺生院キアラだった。
『なんだ「藤村先生」じゃないっスか。なんの用っスか?』
『なんだとはご挨拶ですねジナコ先生。保健室の備品の補充が届いたので持ってきてあげたというのに』
『じゃあ、そこに置いといていいっスよ。お疲れ様っス』
なんでこの女がここに出てくるっスか!?
しかも姿が見えてるしちゃんと声も聞こえるっス!
『まぁ、随分とつれなのですね。私は皆さんと一緒に楽しいおしゃべりがしたいだけだというのに。夕暮れの保健室で重なり合う2つの影。荒々しく絡み合う互いの吐息。あぁ……生徒と教師のイケナイ関係にズブリと溺れてしまいたい……』
『どう考えても楽しいおしゃべりじゃないんですがそれは……。全く先生が生徒を毒牙にかけようとするんじゃないっスよ』
『まぁまぁ、私はジナコ先生も入れて4人でしても構わないんですよ?』
『いいからもう帰れアンタ』
そしてエロすぎィ!
ナニをする気なんですかねぇ……。

あの尼さんとんだビッチだったっスよ。
『間が悪かったようですね。残念ですが、今日はここで退散いたしましょう』
キアラは「ジナコ」の言葉に苦笑を浮かべると、踵を返した。
同時に周囲の景色が歪み始める。
始まる感覚が3度目なら終わる感覚も3度目。
沈んでいくアタシの意識が記憶の世界から引き離されていく。
『私は応援しているのです。この止まった楽園で踊り続けるあなた達をね』
最後のキアラの言葉は怖いくらいの優しさに満ちていた。

◆　◆　◆

目を開けるとまず白い天井が見えた。
「気が付いたかジナコ」
カルナの声が聞こえる。
どうやら今度はちゃんと目が覚めたらしい。
身体を起こすとアタシはベッドに寝かされていたのだということが分かる。
カルナはベッドの傍らに立っていた。
「ここは……？」
「保健室だ。だいぶ消耗していたようなのでな。マイルームではなくこちらに運ばせてもらった」
また保健室っスか。
過去といい今といい縁があるっスね。
別にジナコさんは病弱キャラでも不良キャラでもないんだけどな。
カーテンが引かれている為ベッドの周辺は薄暗いが、漏れてくる光の具合から察するに時間はお昼くらいだろう。
そう思いながら周囲を見回していると。
「ジナコすまなかった」
突然カルナが謝ってきた。

「え、何？　なんで謝ってるんスかカルナ」
「俺がそばにいながらランサーの罠からお前を守れず危険にさらしてしまった。すまない」
カルナは辛そうに目を伏せながらうつむいている。
しかしアタシは怒ってなどいなかった。
もとはといえばアタシがカルナから離れて教室のドアを開けてしまったのが原因なのだ。
「やだなぁカルナは悪くないっスよ。それにランサーに殺されかけた時アタシの身体から変な光が出て助かったんス。きっと命の危機にジナコさんの隠された不思議パゥアが目覚めたっスよ！　ノーマル人なアタシよさようなら！　今日からアタシはただのジナコじゃない。『覚醒ジナコ』と呼ぶっス！」
「……」
辛そうにうつむいていたカルナがなんとも微妙な表情になる。
「重ねてすまないが、それはお前の力ではなく俺がかけた保険だジナコ」
「……え？　じゃあ、あれはカルナが何かしたんスか？」
「契約時に俺の宝具である黄金の鎧をお前に譲渡した。いざという時にお前の身を守る為にな」
まぁ、そんなことじゃないかと思ったっスよ。
なんかカルナが落ち込んでたから半分冗談で言っただけだし……半分は本気だったけど。
……ん!?　でもそれって自分の宝具をアタシにあげちゃったってこと!?
「な、なんてことしてるっスか！　いくら施しの英雄だからって限度があるっスよ！　大体宝具ってその英雄の分身みたいなモンなんでしょう？　そんな大事なものアタシにあげちゃって良かったんスか!?」
「無論だ。この身はお前を守る為に在るのだからな。ならば分身である宝具もお前を守る為に使うのは当然のことだろう」
「カルナ……」

そこまでアタシのことを？
カルナはアタシのことを全てを捧げるに足るマスターだと認めてくれているということなのだろうか。
「だから例えお前が神隠しの事を知りながら不用意に俺から離れみすみすランサーの罠にはまるような危機感ゼロのノーテンキさAランク魔術師（ウィザード）であったとしても、俺はお前を守りきらなくてはならなかったのだ。本当にすまない」
「実は謝る気ないっスねカルナさん!?」
「……？　なぜそのようなことを言うジナコ？」
……ひどい掌返しを見た。
いや、悪気はないんスよねきっと。
その辺は最近わかってきたんだけど、悪気がない分ダメージでかいっス。
「騒々しいですよ。保健室では静かにしてください」
アタシ達の声がよほど響いていたのか、不機嫌そうな顔をしたカレンが仕切られたカーテンを開いて姿を現した。
「チッ……その様子では元気そうですね。あの状況で生きて帰ってくるなんて、その丸いお腹には脂肪ではなく悪運でも詰まっているんですか？」
「あんたが命じた見回りのせいであんな目にあったんスけどねぇ!?
少しは悪かったとは思わないんスか。この黒い紫陽花は！」
「言っても無駄だジナコ。この女は最初からお前を囮にして『神隠し』の首謀者を突き止める腹だったのだからな」
マジっスか!?
じゃあアタシが死にそうな目にあったのはコイツのせいかぁ！
「何を怒っているんですか？　今のあなたは私に何をされても文句は言えないはずです。それに今回のことでランサーには相応のペナルティが課せられるでしょう。これでミジンコ程しかなかったあなたの勝率も少しはマシになるんですから私は感謝されてもいいくらいでは？」
こ、この女もう勘弁ならねぇ。

久々にジナコさんの怒りが有頂天っス！
コノウラミ、ハラサデオクベキカ。
「よろしい。ならば戦争（クリーク）っス！　カルナ！　アタシの怒りを炎に変えてこの女を焼き尽くして――――!!」
「あ、それから今日の仕事はお休みですから」
「なん…だと……？」
カレンの言葉にアタシの頭が一気に冷える。
「欲しかったんですよね？　お休み。時間もお昼を回っていますし、食堂にはもう代わりのＮＰＣが入っています。今日はこのまま好きにしてもらって構いませんよ」
う、嘘っス。
このドＳ銀髪鬼がこんなことを言うわけが……。
「本当に休みでいいんスか？」
「はい、本当です」
「とか言って新しい仕事押し付ける気でしょ？」
「神とムーンセルに誓ってそのようなことはしないと約束しましょう」
いよっしゃあ！　お休みキターーーーーーーーーーーーー!!
ジナコさん大勝利っス！
「ジナコ、戦争（クリーク）はもういいのか？」
「そんなことしてる暇はないっスよカルナ！　今すぐマイルームに帰って溜まったアニメと積んであるゲームを消化しなきゃならないっス！　こうしちゃいられねぇ！」
「溜まった洗濯物と積んであるゴミ袋もちゃんと消化するのだろうな？」
「それはカルナに任せるっス！」
こうしている間にもこの悪魔の気が変わらないとも限らない。
やっと手に入れた『約束（エクス）された勝利（ホリ）の休日（デー）』逃してなるものか。
アタシは急いでベッドから降りるとカレンのわきをすり抜けそのまま保健室を飛び出した。

◆　◆　◆

「……ちょろいもんですね」

ジナコがいなくなった保健室でカレンはつぶやいた。

あのまま暴れられても面倒だったことと、これ以上居すわられても迷惑なので適当な餌をぶら下げて追い払ったのだ。

カレンは健康な者が保健室にいると吐き気がしてくる性質(たち)なのである。

加えて今の彼女は機嫌がわるい。

囮まで使って〝本命〟である殺生院キアラを誘い出したというのにまた見失ってしまったからだ。

(全く……もう少しブタコさんに近づいてくれればビーコンの一つも付けられたというのに。私としたことが餌のチョイスをミスりました。『豚肉』で『牛肉』を釣ろうと考えたのが間違いでしたか)

あの女はこの聖杯戦争の『初まり』に関わっている。

目を離すわけにはいかない。

(これは私の聖杯戦争です。誰にも邪魔などさせるものですか)

彼女の孤独な戦いは未だ終わりが見えないのだった。

変貌の道化師

そして第2回戦決戦日の朝が来た。
マイルームを出たアタシは窓から差し込む朝日に目を細めながら伸びをする。
「んっん～！　昨日は堪能したっス。久しぶりだと『ジャンプキック』でさえ面白いと感じるんだから不思議っスよね」
ちなみに『ジャンプキック』というのは格闘ゲームであるにも関わらずプレイヤーの出せる技がジャンプとキックしかないという謎ゲーである。
「しかし、4画面で同時にアニメを見ながら両手両足でゲームを4つ同時にプレイするというのはいくらなんでも無茶だったのではないか？」
横に立つカルナが疲れた声を出す。
昨日はアタシのゲームの相手をしたり、アニメ画面のリモコン操作をさせたりとかなりコキ使われたからだろう。
神話に語られる太陽の化身が真面目な顔をしてレースゲームでクラッシュ連発したり、魔法少女物のアニメをリモコンを構えながら真剣に見ていた（飛ばすタイミングを逃さない為だろう）のには思わず笑ってしまった。
「時間がなかったんだからしょうがないじゃないっスか。あの後魂の改竄に時間を取られたし、今日の為にちゃんと寝る時間も確保しなきゃいけなかったんスから」
「その情熱をどうして他に向けることができない……」
アタシはどこぞのラノベ主人公ではないのでゲームのスコアの方はボロボロだったっスけどね。
ジナコさんは質より量をとる派なんスよ。
「それでも全部は消化できなかったっスからね。残りを消化するためにも今日死ぬわけにはいかないっス。というわけで今日の決戦はがんばるっスよカルナさん！」
「俺はお前のアニメとゲーム消化のために槍を振るうことになるのか

？」
がっくりと肩を落とすカルナをスルーして1階にたどり着くと決戦場へのエレベーターの前に僧服姿の言峰が立っていた。
「ようこそ決戦の地へ。身支度は全て整えてきたかね？」
「今日はその服装なんスね。監督役もコック服でやるのかと思ったっス」
「誰かと思えば昨日サボタージュしたロクデナシ従業員ではないか。おかげで昨日は皿が一枚も割れなかったし、料理もダメにならなかった。礼を言おう」
これほど嬉しくないお礼がかってあっただろうか、いやない（反語）。
「『元』従業員っスよ。約束は猶予期間までだったはず。今のアタシはもう自由の身なんスから」
「ふむ、そうだったな。短い間とはいえ共に働いた部下の門出を祝おう。カレンからも伝言を頼まれている。『１００万ＰＰＴ分笑わせていただきました』だそうだ。首に付いている拘束具は餞別にくれるそうだぞ」
これほど嬉しくない餞別がかってあっただろうか、いやない（天丼）。
ていうかあの女やっぱりアタシが地獄見てるのを覗いて笑ってたわけか許せん。
こんな首輪いらないんスけど、ただ捨てるだけじゃ気が収まらないっスね。
２回戦が終わったら散々踏みつけた後トイレにでも流してやるっス。
わぁいジナコさんまた死ねない理由が増えちゃったっス。やったね！
首に付いている革製の黒い首輪『赤いワンちゃん』を外すとポシェットの中に突っ込む。
「では、監督役としての仕事に戻らせてもらうとしよう。扉はひとつ、再びこの校舎に戻るのも一組。覚悟を決めたのなら、闘技場への扉を

開こう」
アタシは戦う意思を示すためアリーナで獲得した2つの暗号鍵（トリガー）を提示する。
これを取るために遅刻して拷問着ぐるみ『るなっしー』を着せられたっけ。
思い出したくないっス。
言峰がうなづくと1回戦と同じく闘技場へのエレベーターを封鎖していた鎖が砕けた。
「いいだろう、重き闘士よ。決戦の扉は今、開かれた。その身体に溜め込んだ余分なカロリーを闘技場で存分に消費してくるがいい」
「毎度余計なお世話っス！　デブじゃないもん！　ぽっちゃりだもん！」
張りつめてる決戦前のマスターをさらっとディスるのやめてもらえませんかね。
鬱って負けたら化けて出てやるっス。
「ささやかながら幸運を祈ろう。再びこの校舎に戻れることを。そして――――存分に、殺し合い給え」
相変わらずの物騒な言葉に見送られながらアタシはエレベーターに乗り込んだ。

◆　◆　◆

後ろで扉が閉まると同時にエレベーターが降下を始める。
対戦相手のマスターとサーヴァントもこのエレベーターに乗り込んでいるはずだ。
閉鎖空間でのランルーくんとランサーのやり取りはアタシも聞いている。
アタシの相手は愛する人間しか食べられないという本能を抑えながら子供に会いに行くために聖杯を求める母親でもあるマスターだ。
システムの壁を隔てた向こうにはレンレンバーガーのマスコットの姿をしたランルーくんが血走った目でアタシを見ているはず……。

「――――いらっしゃい。待ってたわ」
見ていなかった。
それどころかランルーくんの姿すらない。
そこにいたのは赤いドレスを着た1人の女だった。
もちろん顔にマスコットの化粧もしていない。
「今日はよろしくね。いい戦いをしましょう」
再び女が口を開く。
少しハスキーな色気のある声。
そしてその容姿は絶世の美女を呼べるほどに美しかった。
長く伸びた栗色の髪はウェーブしながら艶やかな光沢を放ち、長いまつ毛がのった切れ長の瞳がアタシを見つめている。
モデルのように高い身長と均整のとれたプロポーションに真っ赤なドレスが似合いすぎるほど似合っていた。
え、誰？
ジナコさんこんな人知らないっスよ？
ははぁん、さては……。
「あの馬鹿神父がミスって別のマスターがいるエレベーターに乗せられたんスね？　カルナさん呼び出しボタンを連打っス。厨房仕事でなまった監督役に文句を言ってやるっスよ」
「いや、ジナコどうやら……」
「その必要はないわよ」
カルナの言葉をさえぎって虚空から人影が現れる。
今度は見知った顔だった。
可憐な容姿に硬質の角と尻尾を持つ少女。
ランルーくんのサーヴァント、ランサーだ。
「あなたの対戦相手は彼女で間違いないわ」
「またご冗談を。アタシの対戦相手はランルーくんっスよ？」
「だから彼女がランルーよ」
「……は？」
アタシは目の前の超絶美人を凝視する。
見れば見るほどきれいな人だ。

姿、声ともにアタシが出会った中でもベスト3に入るだろう。（1位はママ）
ついていかない頭でカルナを見ると「そのとおりだ」と言わんばかりに大きくうなづいていた。
視線を超絶美人の方に戻すと彼女は柔らかく微笑む。
「服装と髪型を変えてメイクも落としているのだから分からなくて当然だわ。混乱させてしまってごめんなさいね」
なんということでしょう。
ランルーくんって素顔はこんなに美人さんだったのか。
ていうか声まで変わってるし、どこのエステサロンに行ってきたのかと。
これはもうランルーくんじゃない『ランルーさん』っス。
信じられないビフォーアフターについていけないアタシにランルーさんが話しかけてくる。
「それで調子はどうかしら？　昨日はよく眠れた？」
「ええ、ちゃんと眠れたっス」
「持病とかはどう？　何か常用してる薬はあるのかしら」
「いや、特にはないっス」
「何か身体に特殊な改造をしていたりは？」
「ないっスよ。ピアスの穴すら開けてないっス」
なんだかおかしな質問だったが、相手の雰囲気にのまれてスラスラと答えてしまう。
驚いたがこれは逆にやりやすくなったのかもしれない。
以前のランルーくんには本能を無理やり押さえつけている危うさがあった。
あの血走った目に見つめられると生きた心地がしなかったものだ。
いまのランルーさんは確かにものすごい美人だが、普通のお姉さんに見える。
まるで狂った本能が消えてしまったかのように。
ランルーさんはアタシの言葉に「そう……」とつぶやくととても嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「良かった。これならおいしく食べることができそうね」
一瞬何を言われたのか分からなかった。
「少し脂が多そうだけど、薬臭くないのと手が加えられてないところは高得点ね。やっぱり初めての肉はナチュラルな味じゃないと」
アタシは耳を疑った。
以前のランルーくんでさえアタシを「食べる」とは言わなかったのだ。
もしかして彼女の狂った本能は消えてしまったのではなく……。
「ええ、『解放』されたのよ。邪魔なモノから解き放たれたってわけ」
声の主はランルーさんの隣に立つランサーだ。
「あなたも見てたでしょ？　スポンサーの手でランルーの『母性愛』が引っこ抜かれるところを」
あの時だ。
閉鎖空間で殺生院キアラが「ランルーくん」の胸から光る玉を抜き出したのをアタシも目の当たりにしている。
「ランルーが壊れかけていたのは暴走しようとする本能を無理やり抑え込んでいたからなの。あの格好だって自分の美しさを隠して人を寄せ付けない為だったみたいだしね。それがなくなった今、私のマスターは本来あるべき姿に戻ったのよ」
「ええ、とてもいい気分だわ。以前の私は何を悩んでいたのかしら。愛する者しか食べられない？　そして愛する者は食べられない？　馬鹿なことだわ。愛する者も憎い者も、親も夫も友人も、そして自分の子供でさえも私にとっては同じモノ。お腹を満たす肉の塊にすぎないのだから」
ランサーの言葉にうなづくランルーさんの顔に狂気の色はない。
だがアタシを見つめるその目に背筋が凍った。
あれは「養豚場の豚を見る目」というやつだ。
彼女にとってアタシの生死に意味はなく、その人生を尊ぶことをせず、共に笑おうとは露とも思わず、あるのはただアタシの肉が美味しいかどうかの興味だけなのだ。
「どうやらまともなのは見た目だけのようだな。中身は前の方がまだ

まともだった」
　カルナがアタシをかばうように前に出る。
「3日に1度しか風呂に入らない我が主の肉が食べたいとは物好きもいたものだ。だがいきなりメインディッシュは腹にもたれるだろう。前菜に俺の槍を味わっていけ」
「あら衛生面に難があったのね。いいわ、汚れは洗えば落ちるもの」
　カルナの脅しにもランルーさんは動じない。
　やがてエレベーターが最下層にたどりつき闘技場への扉が開いた。
「さぁ、食事前の軽い運動よエリザ。肉は私に血はあなたに。晩餐会を始めましょう」
「ええ、任されたわ『パートナー』！　ユニットになった私達の初ライブよ！」
　そしてアタシの聖杯戦争第2回戦が始まる。

意志の炎

アタシとカルナは2回戦の闘技場に足を踏み入れる。
そこは1回戦と同じく海の底のような薄暗い蒼に覆われた空間。
違うのは1回戦は周りが岩ばかりだったのに対し今度は朽ち果てた建物の中のようだった。
ただ無事なのは石畳の床だけで天井はなくなっており、壁もボロボロで外の風景（と言っても一面青色だが）が丸見えになっている。
アタシは闘技場の中へと歩を進めながらランルーさんを見た。
深い蒼を背景に赤いドレスの裾をひらひらと躍らせながら歩く彼女はまるで水中を泳ぐ綺麗な熱帯魚のように見える。
こうしていると本当にただの綺麗なお姉さんなのだ。
「あまり食事には向かないシチュエーションねエリザ。こう殺風景だと肉の味まで損なわれてしまわないか心配だわ」
「大丈夫よランルー。食事の時は獲物の血と臓物で辺りを綺麗に飾り付けてあげる。この深い蒼に鮮やかな赤はきっと映えるわよ」
エリザというのはランサーの真名なのだろう。
以前は不仲に見えたランルーくんとエリザ（ここからはそう呼ぶことにする）だったが、マスターが「ランルーさん」になってからは名前で呼び合うほどに親しげだ。
あまりに2人の波長が合いすぎていて雰囲気だけなら姉妹のように見えないこともない。
だが会話の内容はとても普通ではなかった。
目の前の2人にとってこの闘技場は戦場ではなく食卓なのだ。
もしこの戦いに負ければアタシの肉はその食卓に並べられることになるだろう。
「冗談じゃないっス！　絶世の美女にボコボコにされた上に食べてもらえるとか上級者向けすぎるご褒美っスよ！　ジナコさんへのご褒美は冷えたジャージープリンにしてほしいっス！」
「マイルームの冷蔵庫に隠してある一品に思いを馳せるのはいいが気を付けろジナコ。アレはもはや人間ではない。ヒトの皮をかぶった

『怪物』だ」
カルナが前に出る。
彼が空に手を滑らせると炎が走り、得物である槍が現れた。
槍を手にしたカルナが目の前の敵を討つべく戦闘態勢をとる。
「今日のステージの主役は私達なの。エキストラにはさっさと退場してもらおうかしら。逝く時にはせめていい声で鳴いて頂戴」
エリザが前に出る。
彼女が空に手をかざすとその背丈より長大な槍が現れた。
槍を手にしたランサーが目の前の敵を蹂躙するべく戦闘態勢をとる。
向かい合う2人のサーヴァントの間で空気が張りつめていく。
『――――いざ!!』
均衡を破ったのは同時だった。
同じタイミングで地を蹴った2体のサーヴァントが闘技場の中央で激突する。
互いの槍が相手を貫くべく超高速で繰り出される。
奇しくもランサーという同じクラス同士の対決。
得物やクラスとしての特性が同じなだけにサーヴァントの性能がものを言う戦いになる。
カルナのサーヴァントとしての格は文句のつけようもないが、サーヴァントの性能はマスターに大きく左右される為こちらが不利なのは明らかだった――――のだが。
「くっ!?」
最初の激突で下がったのは意外にもエリザの方だった。
カルナの槍を受け止めきれず小さな身体が後方へと弾かれる。
体勢を崩したエリザを追撃するべくカルナが間合いを詰める。
エリザはなんとか体勢を立て直して振り払うように槍を繰り出すが、その一撃は正面からカルナに叩き落とされた。
逆に放たれたカルナの一撃を今度はエリザが槍を回転させ弾こうとするが、方向を逸らしきれずカルナの槍が彼女の肩口をかすめる。
「チッ!」

舌打ちしたエリザはたまらず大きく間合いをとった。
カルナは追わずにその場で槍を構えなおす。
明らかにカルナが押していた。
前にアリーナで戦った時には技量はともかくパワーは完全に向こうが上だったはずだ。
だが今の攻防を見る限りパワーでもカルナがエリザを上回っているように見える。
「威勢のいいことを言っていた割には随分苦しそうだな。まぁ原因は察しがつくが」
「うるさいわね。ペナルティを食らってなきゃアンタなんか……」
カルナの言葉にエリザが苦い表情を浮かべる。
アタシは昨日カレンが保健室で言っていたことを思い出していた。
「神隠し」の一件で彼女にはカレンからペナルティが課せられているのだ。
彼女のステータスはムーンセルによりマイナス補正がかけられている状態なのである。
「なぁんだそういうことっスか。ビビって損したっス！　そうと分かればもう怖くないっスね。たたみかけるっスよカルナさん！」
「自分の有利が分かった途端にその態度はどうかと思うが、提案には賛成だ。流れがこちらにある内に勝負を決めるとしよう」
カルナ再び地を蹴りエリザまでの距離を一瞬で駆け抜ける。
閃光のような連撃がエリザに降り注ぎ彼女は防戦一方に追い込まれた。
「アタシもぼけっとしてるわけにはいかないっスね」
こちらもコードキャスト《ｃｈｅａｔ＿ａｔｋ（）；》を撃ちながらカルナを援護する。
一瞬サーヴァントをひるませる程度の威力しかないこの術式は決め手にはならないが、速射性に優れ、対象の魔力を削り取る効果も持っている。
その為撃ち続ければ相手にはジワジワとボディーブローのように効いてくるのだ。

そして一瞬の隙が命取りのサーヴァント同士の戦いにおいて相手の攻撃や防御をわずかに遅らせることができるのは実は馬鹿にできないアドバンテージなのである。
アタシのコードキャストに後押しされたカルナの槍はついにエリザの防御をすり抜け、連続で彼女の身体に叩き込まれる。
「調子にのるんじゃないわよ！」
その時エリザの魔力が膨れ上がった。
魔力の行方は彼女の背中越しに見えている硬質な尻尾だ。
それが長く伸びながら太くなっていく。
「あんまり尻尾は使いたくないんだけどね」
それでも使ってくるということはそれだけ彼女が追い込まれているということか。
確かにあの尻尾で一撃されればただでは済まないだろう。
防御したとしてもかなりのダメージを受けることになり、ここまで優勢に運んでいた流れは確実に断ち切られる。
エリザは強力な一撃で戦いの主導権を取り返しに来ているのだ。
それならば。
「カルナ！『アレ』を使うっス！」
「承知した」
一瞬のやり取りでカルナはアタシの意図をくみ取る。
カルナは防御態勢を取ると己のスキルを解き放つ。
「日輪よ（カヴァーチャ&クンダーラ）、具足となれ」
カルナの耳に付いている黄金の耳輪が光り、その光が彼の身体を包み込んだ。
「徹頭徹尾の竜頭蛇尾（ヴェール・シャール・カーニ）!!」
同時にまるで巨人の腕のようになったエリザの尻尾が振り下ろされる。
カルナは防御態勢のままその一撃を受け止めた。
周囲の石畳が破壊され轟音が鳴り響く。
細かく砕け割れた石畳が砂埃となって盛大に宙に舞い上がりカルナの姿を隠した。

「舐めないでほしいわね。例えペナルティがあったとしても銀河一美しいアイドルであるこの私が負けるなんてありえないんだから」
今の一撃に確かな手ごたえを感じているのだろう。
エリザの表情は余裕を取り戻していた。
確かに彼女の一撃はカルナをまともに捉えていた。
防御をしていたとしてもカルナは相当のダメージを負ったはず。
エリザは狙い通り戦いの主導権を奪い返したのだ。
――――と思うじゃん？
舞い上がっている砂埃から槍を構えたカルナが飛び出した。
まるで先程の一撃がなかったような動きでエリザに迫る。
「う、嘘でしょっ!?」
エリザは驚愕の表情を浮かべながらもカルナを迎撃するべく槍を振るう。
しかし動揺は隠しきれず、雑な防御をこじ開けられたエリザに次々に攻撃が突き込まれる。
「どうしてっ!? こんなに動けるはずがっ!?」
「舐めプだったのはそっちの方っス。強力なスキルで逆転を狙ったみたいっスけど、こっちだってスキルの一つや二つ持ってるんスよ」
アタシの合図でカルナが使った「日輪よ、具足となれ（カヴァーチャ&クンダーラ）」は彼の宝具の一つである耳輪の力を開放するスキルだ。
耳輪から放たれる光はカルナの身体を包み込みその防御力を上昇させる。
攻撃を完全防御とはいかないが、カルナを包む耳輪の加護は「徹頭徹尾の竜頭蛇尾（ヴェール・シャール・カーニ）」で受けるはずだったカルナのダメージを大幅に軽減したのである。
ちなみにこのスキル昨日の教会で覚えたてホヤホヤだったりするんスよね。
面倒くさがらずに魂の改竄しといて本当によかったっス。
おかげで最大のチャンスをつかむことができた。
勝負を決めるならここしかない。
最近やっと慣れてきた自身の魔術回路を回す感覚。

食堂の激務で常に大きな負担をかけられ鍛えられてきたアタシの魔術回路が昨日一日休んだおかげで回復した魔力で活性化する。
『るなっしー』を着て動き回ることで思った場所に魔力を集中するコツも覚えた。
今のアタシなら高めた魔力を無駄なくカルナに送ることができるはず！
「これで決めて、カルナ!!」
叫びと共に右手の令呪に向かって魔力を叩き込む。
アタシの意志を乗せた魔力は令呪からパスを通ってカルナに注ぎ込まれる。
魔力を受けたカルナの槍が燃え上がった。
しかしそこで終わりではない。
炎は勢いを増しながら槍の先に集められていく。
やがてそれは槍の穂先を包み込むように凝縮して安定した。
フレアを放ちながら猛り狂うそれはまるで小さな太陽のようだ。
「受け取ったジナコ。お前の意志を炎に変えて眼前の敵を焼き尽くそう」
カルナの手にした太陽の槍がエリザに向かって放たれる。
しかし最速だが真っ直ぐに突き込まれた槍の一撃は彼女に読まれていた。
炎に包まれた穂先はエリザの身体に届く前に彼女の槍に受け止められてしまう。
だが問題ない。
この小さな太陽は相手を貫くものではないからだ。
「炎（アグニ）よ！」
カルナの叫びと同時に穂先の炎が爆発的に膨れ上がる。
その炎はエリザの槍をその身体を一瞬にして飲み込んだ。
「あああああああああああああああああッ!!」
エリザの苦悶の叫び声が闘技場に響く。
無慈悲な炎は勢いを増し、炎の柱となってエリザの身体を焼き尽くした。

bite_gluttony

紅蓮の炎がエリザの身体を包み燃え盛る。
先程の一撃はカルナのスキル『魔力放出（炎）』によるものだ。
彼の槍には炎の魔力が宿っており、それを解放することで攻撃力を上げることができる。
これは最初からカルナが持っていたスキルだが、1回戦の時にはアタシの魔力が不足していた為に使うことができなかったのだ。
槍を具現化することすらできなかった頃に比べて、アタシは確実に強くなっている。
「ふはははは！　まさに大・炎・上！　どうっスかカルナ。これがジナコさんの実力っス！」
「これは認めざるを得まい。蝸牛も殻に火が付けば必死に走るということか」
ふはははは！　もっと褒めるっスよカルナさん！
あれ？　よく考えると今の褒められたのか？
「ちょっとカルナ。今のって……」
「お喋りはここまでだジナコ。どうやらまだ終わりではないらしい」
だが問い詰めようとしたアタシの言葉は緊張を含んだカルナの声に遮られる。
同時にエリザを包んでいた紅い炎が内側からの青白い光によって吹き飛んだ。
「ごめんなさいエリザ。援護が遅くなってしまったわ」
闘技場に甘くハスキーな声が響く。
声はエリザの後方に立つ彼女のマスターのものだ。
ランルーさんの右手からは炎を吹き飛ばしたものと同じ青白い光が放たれている。
先程カルナの炎が吹き飛んだのは彼女が何かしたということか。
「たいしたことじゃないわ。竜の血を引くエリザは元々高い耐魔力を持っているの。私はそこにちょっと炎除けのまじないを乗せただけよ」

ランルーさんの言葉からは「ね？　簡単でしょう？」という心の声が聞こえてきそうだったが冗談ではない。
いくらエリザが高い耐魔力を持っている言ってもカレンから受けたペナルティはその耐魔力にも影響を及ぼしているはずなのだ。
それでもランルーさんは太陽の化身であるカルナの炎を吹き飛ばした。
彼女が使った術式がどれほど高度なものだったのかアタシには想像もつかない。
「全く時間稼ぎも楽じゃないわ。玉の肌が台無しじゃないの」
声のした方を見るとカルナの炎から解き放たれたエリザがパンパンと服を手で払っている。
こちらもあちこちに火傷はあるものの声にはまだ余裕があった。
アタシは愕然とした。
先ほど『太陽の槍』は間違いなくこちらの決め手だったのだ。
それが相手マスターによって鮮やかに破られ、サーヴァントにはたいしたダメージを与えることができなかった。
アタシは確実に強くなっている。
しかしそれでもアタシとランルーさんとの間にはまだ絶望的なまでの力の差があるのではないだろうか。
「それで『できた』んでしょうね？」
「ええ、つい先ほど」
「それじゃあ後は任せたわ。こっちは適当に遊んでるから」
いやまだだ！
まだ終わらんよ！
ランルーさんとエリザのよく分からない会話を聞きながらアタシは気を取りなおす。
確かにランルーさんとアタシの間には山より高く海より深い実力差があるのかもしれないが、それがどうした。
考えてみればそれは彼女に限ったことではないではないか。
この聖杯戦争に参加しているマスターのほとんどはアタシなど足元にも及ばない猛者達なのだ。

1回戦で戦ったガトーもアタシを遥かに上回る実力の持ち主だった。
アタシはそのガトーを倒してこの場所に立っているのだ。
相手との実力差に絶望していてはあのおっさんに顔向けできない。
幸運なことに相手のサーヴァントはペナルティによりステータスを下げられている。
サーヴァントの地力はこちらが上だ。
魔力も残っている。
大丈夫まだいける。
戦いはまだ終わってない！
「悪いけど戦いは終わったわよ」
その時まるでアタシの心を読んだようなタイミングでエリザの声が聞こえた。
視線を移すと彼女は槍を降ろし乱れた服を整えている。
「終わったとはどういうことだ。確かにそちらの魔術師はかなりの腕のようだが、まさかそれでもう勝った気になっているのではあるまいな。」
「分かってないわね。勝ちとか負けとか最初からどうでもいいのよ。私とあなたの戦いなんて所詮『前座』なんだから」
カルナの言葉にエリザが呆れた様子で答える。
「少し癪だけど私のライブはあくまで時間稼ぎだったの。メインイベントの準備の為のね」
「ごめんなさいねエリザ。かなり術式が複雑になってしまって、昨日一日では完成させられなかったのよ」
「本当よ。おかげでだいぶやられちゃったじゃない」
エリザの後ろでランルーさんが手を合わせている。
2人の会話から察するにランルーさんには昨日から作成していたコードキャストがあり、ここまでのエリザの戦いはそれが完成するまでの時間稼ぎだったということか。
「でも完成したわ。これで始められる」
そう言ったランルーさんの右手が魔力の光を放つ。

先程の青白い光ではなく今度は血の色を思わせる赤い光が人差し指の先に集まっていく。
やがてその指先が動き出し空中に複雑な魔法陣を描き始めた。
「気を付けろジナコ。何かしてくるぞ」
「分かってる」
あのランルーさんが作成に手間取るほどのコードキャストだ。
おそらくかなりの効果を持つ術式のはず。
サーヴァントのステータスを飛躍的上昇させるものか、それともカルナのステータスを下げてくるのか、エリザの傷を回復するものだったりしたら戦いの流れが完全に変わってしまう。
やっかいな術式なら発動前に潰したいところだが、カルナが妨害しようとすればエリザにその隙をつかれるし、私はそもそもコードキャストを妨害したり封じたりする術式を持っていない。
何が起こるか分からない状況でアタシ達は動くことができず、やがてランルーさんのコードキャストが発動する。
「《ｂｉｔｅ（来）＿ｇｌｕｔｔｏｎｙ（暴食の牙）》」
彼女の言葉と共に空中に描かれていた魔法陣が砕け散る。
アタシとカルナは思わず身構えた。
まずエリザを見る。
何かが強化されたようには見えないし、傷が治った様子もない。
次にカルナを見る。
彼は顔だけこちらを向くと首を振った。
特に何かをされてはいないらしい。
それじゃあ、一体……。
「私は最初に言ったはずです。『晩餐会を始めましょう』と」
気が付くと砕け散ったはずの魔法陣がアタシの目の前に現れていた。
「なっ!?」
嫌な予感がしてその場から離れようとするが間に合わない。
突如魔法陣から鰐の頭部を数倍グロテスクにしたようなモノが現れる。

呆然とするアタシの前でそれは大きく口を開く。
びっしりと生えた牙が見え、次の瞬間にはそれがアタシの左手に食いついていた。
「ぎっ!?　ああああああああああああああああッ!!」
強烈な熱さの後に凄まじい痛みが全身を駆け巡る。
熱い、熱い、熱い、痛い。
痛い――――!!
涙でぼやける目で自分の左手を確認する。
左手が――――なかった。
……ばり……ぼり……ごり……。
何かを咀嚼するような音が聞こえる。
「ああ……これよこれ。これがずっと食べたかったの」
ランルーさんが恍惚の表情を浮かべている。
彼女の口はもぐもぐと動いており、咀嚼音はそこから聞こえていた。
何かを食べている。
何を?
アタシは一瞬痛みも忘れて自分の左手を見る。
ランルーさんのコードキャストによって食いちぎられた左手を。
ならば、ならば彼女が食べているのは。
…………ごきゅり。
ランルーさんの喉が鳴る。
ああ、食べられている。
今、飲み下されたのは。
彼女の腹に入っているのはアタシの左手なんだ。
「たまらないわ。もっと、もっとよ。全然足りない」
再びランルーさんの人差し指が動く。
「ジナコ!」
「おっと動かないでよね。いくらステータスが下げられていたって、

背を向けたあなたを後ろから串刺しにすることぐらい簡単なのよ？」
「くっ！」
こちらに駆け寄ろうとするカルナがエリザに阻まれる。
そして再びランルーさんのコードキャストが発動した。
地面に魔法陣が現れ、そこから飛び出した咢が今度はアタシの右足を食いちぎる。
「うあああああああああああああああああああああッ!!」
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ――――!!
目の前が真っ赤になる。
痛いと感じる心さえ、痛みに浸食されていく。
足1本で支えきれなくなったアタシの身体が石畳の上に倒れた。
「どうして今まで我慢なんてしてたのかしら。獲物の叫び声を聞きながらほおばる肉のおいしさと言ったらもう……。飲み込むのが惜しいくらいよ」
ぶち……ぐち……みち……。
「仮想体（アバター）だと全部食べ終わるまで獲物が死なないからいいわね。大きくても圧縮して口に入れられるし。まぁでも食べごたえという点では物足りないかしら。その辺は良し悪しね」
……ごきゅり。
ああ……もう考えることすら億劫になってくる。
薄れていく意識の中でランルーさんの食べる音と声だけが妙に鮮明に聞こえていた。
「頭は最後に食べることにするわ。心地よい叫びを死ぬまで聞かせてちょうだい」
左手と右足を失った身体ではもう立ち上がることもできない。
アタシは死ぬまで何度叫ぶことになるのだろうか。
そんなことをぼんやりと考えることしかアタシにはできなくなっていた。

失われし黄金郷①

左手と右足を食いちぎられたジナコの身体が床に倒れる。
それを目の当たりにしながらカルナは動くことができなかった。
彼の槍であれば《ｂｉｔｅ＿ｇｌｕｔｔｏｎｙ()》の牙を打ち砕きジナコを守ることができるだろう。しかしそれも傍にいることができればの話だ。
彼がジナコを助けようとすれば目の前のサーヴァントにその隙を突かれ、致命的な一撃を受けることになる。そしてそれはジナコの敗北、ひいては死につながる。
下手に敵に背を向け、主の元に駆けつけるわけにはいかなかったのだ。
「ランルーの食事の邪魔はさせないわよ。あなたはそこで自分のマスターが食べられていく様をゆっくり見ているといいわ」
「随分と献身的なのだな。お前は他人に尽くすタイプではないと思っていたのだが」
エリザの言葉だけでなくこれまでの行動もカルナは意外に思っていた。
彼女は自分本位の究極をいく性格だったはずだ。
それこそ自分の若さと美しさの為に他人の犠牲を一切いとわないくらいにである。
そんな彼女がこの場ではマスターのコードキャスト完成の為に自分の戦い(ステージ)を前座にしてまで時間稼ぎをし、今なお「食事」の為の露払いをしている。
ステージの真ん中でスポットライトを浴びる「アイドル」を自称するエリザがだ。
「今のランルーはやっと見つけた私の『パートナー』だもの。彼女の為なら泥臭い下積みでもやってやるわ。私、決めた相手には尽くすタイプなのよ？」
「なるほど、怪物は怪物同士通じ合うものがあるということか。しかしこちらもマスターが食べられるのを黙って見ているわけにはいか

ない」
そう言うとカルナは槍を構えた。
こうなれば彼に打てる手は一つ、エリザを倒すことだ。
月の聖杯戦争で行われるマスター同士の勝敗はサーヴァントの勝負に委ねられている。
カルナがエリザを倒せばその時点でジナコの勝利が決まり、この晩餐会を終わらせることができるのだ。
「悪いが晩餐会は俺の槍で幕を引かせてもらおう」
カルナはエリザを倒しジナコを救うべく地を蹴る。
彼の地力が今のエリザを上回っていることは最初の攻防で明らかだ。いくらマスターが追い込まれていようともサーヴァント同士の戦いならばカルナに分がある。
しかしエリザの顔には余裕があった。
彼女はゆっくりと槍を構えると、
「恋愛夢想の現実逃避（セレレム・アルモディック）」
その身体が淡い光に包まれた。
互いに繰り出す攻撃は三手。
だが発動したエリザのスキルが刹那の攻防を彼女の勝利へと書き換える。
カルナの槍は「まるでそれが決まっていたかのように」エリザに防御され、逆にエリザの繰り出した槍は「まるでそれが決まっていたかのように」カルナの防御をすり抜た。
エリザの槍をまともに食らい、カルナの身体がよろめく。
「私が弱くなっていると思ったら大間違いよ。ランルーの霊格が以前より上がっている分私の階梯も高くなっているの。ステータスは下げられているけど、使えるスキルは前より増えているのよ。こんなふうに、ね！」
エリザが構えた槍を手放す。
床に落ちるかと思われた槍はふわりと浮かび、それに彼女が飛び乗った。
「絶頂無情の夜間飛行（エステート・レビュレース）!!」

槍が猛烈な勢いで射出され、カルナを襲う。
かろうじて防御するもカルナは大きく吹き飛ばされ、その身体は激しく石畳に叩きつけられた。
「もう石牢で一人ぼっちはまっぴら。今のランルーは私を分かってくれる。私の歌を聞いてくれる。これから私達はずっと一緒に思う存分人間を貪るのよ」
エリザの透き通った声はいつになく真剣味を帯びている。
槍から飛び降り、再び手にした彼女は立ち上がるカルナを見て目を細めた。
「しぶといわね。あなたが頑張れば頑張るほどあのトド女の苦しみが長引くのが分からない？」
エリザが自分の後方を指し示すとランルーの《ｂｉｔｅ｜ｇｌｕｔｔｏｎｙ（）》が発動する。
今度はジナコの左足が食いちぎられ絶叫が闘技場に響いた。
「あらあらとても可哀想ね。分かったらそこで自害でもしたらどうかしら。私のマスターはオンリー・ワンだけど、あなたの方はワン・オブ・ゼムでしょう。もう諦めて早く楽にしてあげたら？　邪魔なのよあなた達」
状況は絶望的だ。
マスターは完全に死に体であり、分があると思っていたサーヴァント同士の戦いもステータスの差を多彩なスキルで埋められ、逆に追い込まれている。
それにそもそもエリザは勝つ必要すらない。
このままジナコがランルーによって食い尽くされてしまえば、単独行動のスキルもないカルナはエリザにやられるまでもなく消滅してしまうからだ。
しかしそれでもカルナの槍は己ではなくエリザに向けられていた。
「確かに俺のマスターはそちらとは比べ物にならない落ちこぼれだ。膨大な無駄と皮下脂肪をぶら下げ、どこに向かって歩いているのかも分からない半端者だ」
しかしジナコはこの聖杯戦争で１歩を踏み出した。

遅々とした頼りない歩みだが自らの生を掴むべく戦っている。
その姿は間違いなく尊いものだとカルナは感じていた。
この身はマスターに寄り添うもの。
ならばそのマスターより先に死を選ぶわけにはいかない。
「ジナコを死なせはしないし、俺もこんな所で消える気はない。ゆくぞ吸血鬼。この槍が貫くのは俺ではなく、貴様と決まっている」
カルナはふらつく身体で槍を構える。
彼はそれが当然のことのようワン・オブ・ゼムな主人を命の限り守る道を選んだ。

◆　◆　◆

朦朧とする意識の中で自分の荒い呼吸だけが頭に響く。
左手と右足を食いちぎられたアタシは立ち上がることもできずに震えていた。
あと何回これが続くのだろう。
食いちぎられる箇所が増えるたびに全身を貫く痛みも倍化していく。
死ぬ前に痛みで気が狂いそうだ。
『あなたのサーヴァントはよく持ちこたえているわ。おかげでこちらは最後まで楽しめそうよ』
声に何かしらの細工がされているのだろうか。
アタシとランルーさんの距離はかなり離れているはずだが、その声はまるで耳元で話しかけられているかのように鮮明だった。
こうしている今もカルナは懸命に戦っているのだろう。しかしそれは結果的にランルーさんがアタシを嬲る時間を増やしているだけなのだ。
今のアタシは食卓にのせられた「御馳走」だ。
このまま彼女に食べられる以外の道はないのだから。
『でも変ね。食べても食べてもお腹がすくの。どうしてかしら』
耳元で聞こえるランルーさんの声にとまどいが混じる。

『こんなに美味しいのに。喉を通り過ぎるとどうしてこんなに虚しいのかしら』
待ち望んだ御馳走にありつけたというのにその声はなぜか悲しげに聞こえた。
アタシの左手と右足を持っていったくせにどうしてそんなに不満げなのか。
痛みに狂いそうになる心を抑える為に怒ろうとしてみたがうまくいかない。
考えてみたら出された御馳走にとって客の満足なんてどうでもいいのだ。
ならば恨み言の一つでも言ってやろうと思ったが、2度の絶叫で喉が痛んでうまく声が出ない。
『きっと量が足りないんだわ。もっともっと食べればきっと私は満たされるはずよ』
三度ランルーさんの指が舞い踊り宙に魔法陣を形成する。
「《bite（来たれ）—glutton（暴食の牙）y（）》」
そして現れた咢が今度はアタシの左足に牙を立てる。
「あっ!? がああああああああああああああ!!」
ぶちぶちと左足が引きちぎられた。
食いちぎられたアタシの肉が魔法陣を通してランルーさんの口の中へと運ばれていく。
前にも勝る痛みが襲い、アタシは手足の足りない身体でのたうち回る。
『右足とは少し味が違うのね。利き足じゃないからかしら。ああ、でも駄目だわ。とても美味しいのにお腹がすいて仕方がないの。校舎に戻ったら早く次の獲物を探さなくちゃ。そうと決まったらこの御馳走は平らげてしまいましょう』
ああ、やっと終わる。
これ以上痛い思いをしなくてすむ。
生へ執着も戦う意思も全て痛みに塗りつぶされた。
あとはこのまま目を閉じて……。

『そうね、次の獲物はあなたがよく食堂で話していた〝彼〟にしましょう』
――あの女、今なんて言った。
その時冷たくなりかけていたアタシの心に熱が生まれる。
『一目見て気に入ったわ。〝彼〟ならきっと私を満足させてくれるはず』
――彼とは一体誰の事だ。
決まっている。
アタシが食堂で話していた〝彼〟は一人しかいない。
『校舎に戻ったらすぐに迎えに行きましょう。あなたより趣向をこらしておいしく食べてあげるわ。〝彼〟もきっといい声で鳴いてくれるでしょうね』
――それは……のことか。
この胸に渦巻くのは「怒り」だ。
どうしてか分からないがアタシは〝彼〟がランルーさんに食べられてしまうことに激しい怒りを感じているのだ。
アタシと同じように手足を食いちぎられ、苦悶の声を上げながら床に倒れる〝彼〟の姿が頭に浮かんだその時。
身体の中で何かが弾けた。
「白野クンのことかーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
痛む喉に構わず叫んだアタシを黄金の光が包み込む。
カルナがアタシに譲渡した宝具である『黄金の鎧』が発動したのだ。
欠けた手足が光に包まれるのと同時に一瞬で再生する。
アタシは左手を床につき身体を起こすと、両足を踏ん張って立ち上がった。
「い、一体何が……」
少し離れたところで驚愕の表情を浮かべているランルーさんが見える。
そちらに向かってアタシは言ってやった。
「とっくにご存知なんだろ？　アタシは用務員室からやってきたノーマル人。穏やかな心を持ちながら激しい怒りによって目覚めた伝説

のニート……スーパーノーマル人ジナコ＝カリギリっス！」

失われし黄金郷②

キメ顔で名台詞を叫んだアタシをランルーさんとエリザが驚愕の表情で見つめていた。

先程まで手足を失って死にかけていたマスターが、いきなり金色に光ったと思えば五体満足で立ち上がったのだ。驚かないわけがない。

その隙をついてカルナは大きく飛び退るとアタシの傍に着地する。

「元気そうで何よりだジナコ。しかし先程の口上はどうにかならなかったのか？　あれは確か昨日みていたアニメの……」

「ネタバレは禁止っス！　そっちこそ死の淵から復活したマスターに暖かい言葉の一つもかけられないんスか？　もう少しアタシの体を心配してくれてもいいと思うんスけど」

「元よりお前の体を心配してはいない。『鎧』がお前を守ることは分かっていたからな」

ウチのサーヴァントが冷たすぎる件。

カルナさんは心がタワシで出来てるんスか……。

アタシはがっくりと肩を落としながら左手を軽く振り、両足で石畳の感触を確かめる。

驚いたことに食いちぎられた手足は完全に元通りになっていた。

どうやらこの『黄金の鎧』は卓越した防御性能だけでなく、欠損部分を再生するレベルの治癒能力まで持っているらしい。

なんつーチート宝具。

確かにこれだけの代物に守られているなら心配いらないっスね。

イマイチ納得できないものがあるけど。

抗議の視線を送るアタシの顔を見るとカルナはふっと表情を緩めた。

「あれだけの苦痛を受けて発狂しなかったことは幸いにしても、戦えるような状態ではないと思っていたのだが……どうやらそちらも心配ないようだな」

心の方の心配はしてくれてたってことなのかな。

カルナさんの気遣いは分かりにくいから困るっス。

「正直ピチュる一歩手前までいってたんスけどね。ちょっと負けるわけにはいかない事情ができちゃったんスよ」
アタシがここで負ければ校舎に戻ったランルーさんが次に狙うのは白野クンなのだ。
自分と同じくらいの力量である彼が《ｂｉｔｅ｜ｇｌｕｔｔｏｎｙ〇》の牙から逃れられるとは思えない。
白野クンが食べられる。
そのことにどうしてこんなに怒りを覚えるのかは自分でも分からない。
付き合いで言えば１回戦の時に出会ってから食堂でたまに話をするだけだし、初対面で一目惚れをしたわけでもない。
妙に懐かしい感じがしたり安心できたりする相手ではあるけど、彼との関係は「知り合い」の域をでないものである――――はずだ。
その時一瞬記憶の世界で見た「ジナコ」の笑顔がフラッシュバックする。
その笑顔を向ける相手は……。
「呆けている時ではないぞジナコ！」
「へっ？」
カルナの言葉でアタシは我に返る。
気が付くと地面に大きな魔法陣が出現していた。
「手足が再生するのなら丸ごと頂くまでです」
いち早く冷静さを取り戻したランルーさんは即座に《ｂｉｔｅ｜ｇｌｕｔｔｏｎｙ〇》を放っていたのだ。
魔法陣から現れた巨大な咢にアタシは手足どころか身体ごと丸呑みにされる。
しかしそこまでだった。
アタシを飲み込んだ咢は内側からの黄金の光によって粉々に吹き飛ぶ。
鎧の加護は今も消えておらず、尚もアタシを守っているのだ。
「あ～びっくりしたっス」
「全くこれではおちおち目も離せん。やはり鎧を譲渡したのは間違い

ではなかったな」
「め、面目ないっス……」
そうだ、今は考え事をしてる場合じゃない。
この感情の理由を探すのは後回しだ。
「あの時の防御礼装か。どうやら思ってた以上の性能みたいね」
「ならば正攻法で倒すまで。食べられない御馳走なんてもういらないわ。勝負を決めましょうエリザ。お腹がすいて仕方がないんだもの」
「OKランルー。それじゃあフィナーレと行きましょうか！」
エリザから凄まじい魔力が立ち上る。
彼女は手にした長大な槍をくるくると回すと勢いよく石畳に突き刺した。
「出でよ監獄城チェイテ!!」
エリザが叫ぶと同時に地面が激しく鳴動し、巨大な城が石畳からせりあがるように現れる。
見た目は中世の古城のようだったが左右にはなぜか大きなアンプが配置されていた。
「城！　城が出たっスよカルナさん！　それならこっちは宮殿っス。アタシも金ピカでいい感じのゴージャスパレスが欲しいよカルえも～ん！」
「お前の間違った対抗意識とアニメ脳は置いておくとして。気を付けろジナコ。あの城はただの見かけ倒しではないようだ」
エリザとランルーさんはまるでステージのような広いテラスに飛び乗るとこちらを見下ろす。
「これがアタシの専用ステージ『監獄城チェイテ』よ。このステージを特等席で見られる幸せをかみしめながら死ぬといいわ」
そう言うとエリザはマイクスタンドのようにステージに突き刺さった槍を引き寄せる。
彼女はマイクのような形状をした先端に口を寄せると大きく息を吸い込んだ。
「『竜鳴雷声（キレンツ・サカーニィ）』!!」
ステージから爆音と共に強力な衝撃波が放たれる。

広範囲にばらまかれた音の塊がカルナを激しく打ち据えた。
「なるほどやっかいだな。それが貴様の宝具。音と振動を増幅させた竜の咆哮というわけか」
「まだAメロよ。ラストパートまで立っていられるかしら？」
不敵に笑うエリザから続けざまに衝撃波が放たれる。
形がない音の塊は防御が難しく、広範囲にばらまかれては回避もできない。
カルナはなんとか接近しようとするがその度に押し返され傷が増えていく。
「大丈夫っスかカルナ？」
「大したことはない。しかしこのまま一方的な距離で攻撃を受け続けるのはまずいな。どうにかして接近できればいいのだが」
広範囲に放たれる衝撃波を回避するのはまず不可能。
防御しながら接近しようとしても、威力が凄まじく押し返されて傷を負うだけだ。
だがそれは今の防御力ならばの話。
幸いアタシ達にはそれを補う手がある。
「もう一度『日輪（カヴァーチャ・クンダーラ）よ、具足となれ』っス。底上げした防御力で衝撃波の壁を突破するっスよ」
「危ない賭けだが向こうが宝具を出している以上こちらも勝負をかけなければなるまい。近づいて渾身の一撃を見舞ってやるとしよう」
「ちなみにカルナさんの宝具は？」
「ふむ、お前が魂を――――」
「わかった。もういいっス……」
やり取りを終えるとカルナが『日輪（カヴァーチャ・クンダーラ）よ、具足となれ』を使用する。
耳輪の加護がカルナの身体を包むと同時に彼は地を蹴っていた。
風のように最短距離を駆け抜けエリザに肉薄する。
監獄城チェイテから立て続けに衝撃波が放たれるが、加護を受けたカルナを押し戻すまでには至らない。
カルナはジリジリと間合いを詰め、エリザが立つ監獄城チェイテのステージまでたどりつく。

「ステージにまで上がってくるなんて躾のなってないファンね」
「血の臭いがする女は趣味ではないと言ったはずだ。機は熟した。ここが貴様の死地と知れ」
「その言葉そっくりそのままお返しするわ。馬鹿ね、誘い込まれたとも知らずに」
間近に迫ったカルナに対してエリザは指を一つ鳴らす。
すると城の左右に配置されたアンプが大きなハウリング音を吐き出した。
「この距離なら申し分ないわ。チェイテの最大出力でヤワな加護ごと消し飛ばしてあげる」
エリザの言葉にアタシは愕然とする。
彼女はカルナが接近してくるのを待っていたのだ。
先ほどまでの攻撃は広範囲をカバーすることにより回避を困難にしていたが、その分威力も拡散していたと言える。しかし両者の間合いが詰まったことによりエリザは攻撃範囲を絞ることができるようになった。
攻撃の特性上ステージから動けない彼女にアタシ達はまんまと誘い込まれたのだ。
このままでは収束された竜の咆哮が最大出力でカルナに放たれるだろう。
拡散したものでもあの威力だったことを考えれば、エリザの言うとおりカルナが耳輪の加護ごと消し飛んでもおかしくない。
どうするどうするどうする。
1回戦でもアタシはアルクェイドの宝具からカルナを守ることができなかった。
2回戦でもまたそれを繰り返すのか。
このままアタシが何もできなければカルナの身体は消し飛び、アタシはムーンセルに死を宣告され、白野クンはあの女に食べられる。
そんなのまとめて許せるわけがないじゃない。
アタシの意志に呼応するかのように身体を包む黄金の光が輝きを増す。

前にカルナは言っていた。
この『黄金の鎧』は自分の分身なのだと。
ならば確信がある。
この鎧はアタシの意志に必ず応えてくれるはずだ。
カルナに魔力を送った時の感覚を思い出す。
やり方は同じ。ただ今回は送る「モノ」が違うだけだ。
アタシの意志に応え黄金の光が徐々に令呪の刻まれた右手に集まり始める。
右手にわだかまる光に意識を集中し、
令呪から繋がっているパスを確認し、
〝それ〟　はその先にいる己がサーヴァントを目指す。
「さぁラストナンバーよ。見ていてランルー。これがあなたに捧げる勝利の歌よ!!」
そう言ったエリザが突き刺さった槍に飛び乗った。
彼女を取り巻く魔力がこれまでにないほどに膨れ上がる。
「『鮮血魔嬢（バートリ・エルジェーベト）』!!」
その瞬間ステージが美しい旋律と爆発的な破壊に包まれた。
監獄城チェイテによって最大限に威力を増幅され、尚且つ攻撃範囲を絞ることにより収束された竜の咆哮がカルナを引き裂こうと迫る。
だが遅れてアタシの『術式』も完成していた。
「『失われし黄金郷（エルドラド）』!!」
アタシを守護していた『鎧』が令呪からパスを通じてカルナへと送り込まれる。
カルナの身体が黄金の光に包まれ、彼を消し飛ばそうとしていた破壊の音波を遮断した。
ステージ上で荒れ狂う音の暴風をものともせずに至近距離まで接近するカルナ。
いくらサーヴァントとはいえ宝具を最大出力で放った後には大きな隙ができる。
エリザにはほぼ零距離からカルナが放つ渾身の一撃を避ける術はなかった。

「あ、あのトド女ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
確信していた勝利がエリザの手からすり抜ける。
怨嗟の叫びを放つ彼女の胸をカルナの槍が深々と貫いた。

巨大な城がまるで周囲の海に溶け出すようにボロボロと崩れていく。
そしてそれを見つめるアタシとカルナの前に赤いシステム壁が現れた。
勝敗は決した。アタシ達は勝ったのだ。
「こちらは差し違える覚悟だったのだがな」
「ふふ～ん、驚いたっスか？　命の恩人であるジナコさんに感謝するといいっス」
とカルナの言葉に胸を張ってみたもののアタシは大したことはしていない。
カルナから譲渡されていた黄金の鎧を一時的に返却した。ただそれだけのことだ。
アタシの意志に従い、鎧は令呪からパスを通って移動しカルナを守ったのである。こう言うとすごいことのしたように見えるが実はそうではない。
カルナの分身である鎧は彼の在り方を体現するようにマスターの意志にどこまでも寄り添う。そこに特別な能力も高い魔力も必要ないのだ。カルナのマスターになれば誰でもできることだろう。
とっさにやれると思ってやったらやっぱりできちゃったので名前をつけて術式っぽくしてみた結果生まれた行き当たりばったりの産物。
ノーマル人にも優しい「鎧に自らの意志を伝え作用させる術式」。
それが『失われし黄金郷（エルドラド）』なのである。
……しかし自分で言っててひどいっスねコレ。
考えてみたらただ頭の中で鎧に命令するだけで術式でもなんでも

ないし。
しかもとっさに名付けたとはいえ失われし黄金郷ってどうなんスか。
ヤバイ。今になって恥ずかしくなってきたっス。
赤いシステム壁の向こうで監獄城チェイテが完全に消失する。
そしてそこには胸を押さえてうずくまるエリザと茫然とたたずむランルーさんの姿があった。
「まさかこの場で一番役に立たなさそうな奴に全てをひっくり返されるとはね」
アタシの方を見ながらエリザが苦しげに息をはく。
「どうしてよ。私達は最高のユニットだった。負けるはずなんてなかったのに」
「勝負は時の運だ。最高の存在が必ずしも勝利するとは限らないわけだが、お前たちが本当に最高のユニットとやらだったのかは疑問だな。……後ろを見てみるがいい」
カルナの言葉にアタシもエリザの背後を見る。
そこには徐々に身体を崩壊させながらうずくまるランルーさんがいた。
アタシは最初アバターが崩壊する苦痛に耐えているのかと思ったがそうではなかった。
「ああ……食べたい、苦しい、哀しい、食べたい。なぜか涙が止まらない。ずっと焦がれていたものをやっと口にできたはずなのに。どうして……どうしてこんなに満たされないの？」
ランルーさんは身体を震わせながら泣いていた。
ずっと求めていたものは自分を飢えの苦しみから救ってはくれなかった。
彼女は今どうしようもない絶望感に包まれているのだ。
「あれが他者に運命をねじまげられた者の末路だ。己が本当に求めていたものを奪われ、あてもなく彷徨い食らうだけの存在に墜とされた。だが吸血鬼よ。彼女とお前は同じではない。彼女は食欲が満たされれば満足する『怪物』ではなかった。本能以外に拠り所を求める

『人間』だったというわけだ」
カルナの言葉を言葉聞きながらアタシは考える。
ランルーさんが本当に怪物になっていたのならアタシの肉を食べた時点で満足していたはずだ。
しかしそうではなかった。
アタシはエリザの閉鎖空間で「ランルーくん」の願いを聞いている。
彼女の願いは「世の中を自分の好きなものでいっぱいにすること」そしてそれは自分の子供に会いに行くためなのだと言っていた。
いくら食べようとも彼女が満たされないのは当然だろう。
彼女が本当に求めているのは愛する家族のもとへ帰ることだったのだから。
例え「ランルーさん」になったのだとしても彼女はそういう『人間』だったのだ。
「そう……初めて他人の為に歌ったっていうのにうまくいかないものね。『怪物』のままじゃ私はどこまでいっても独りぼっちってことなのかしら」
泣きながら崩れていく己がマスターをしばらく見つめた後エリザはこちらに向き直る。
「もういいわ。恨み言の一つでも言ってやろうと思ってたけど、このまま大人しく消えてあげるわよ。か、勘違いしないでよね！　別に反省とかしたわけじゃないんだから！　拷問アイドル路線はもう潮時かなーとか考えたわけじゃないんだからね！」
エリザは顔を真っ赤にしながらこちらにビシィと指を突きつける。
ツンデレ乙。
胸に穴が空いてるのによくやるっスね。
何かを吹っ切ったような、それでいて寂しげな表情を浮かべながらエリザの姿が消えていく。
その姿が完全に消滅する寸前ランルーさんを見るエリザの口元がかすかに動く。
声は聞こえなかったがアタシにはそれが「悪かったわね」と言ったように見えた。

「エリザハ…行ッタンダネ」
聞き覚えのある掠れた声が響く。
その言葉を発した彼女の姿はかつての絶世の美女ではなかった。
目は赤く充血し、赤いドレスから伸びた手足は枯れ木のように細くなっている。瑞々しかった肌は見る影もなく皺が刻まれ骨に張り付いていた。
顔にマスコットの化粧はしていないが間違いない。これは「ランルーくん」だ。
「モウ……ランルークンハベイビーニ会エナインダネ」
類まれなる美貌と愛する家族に囲まれながら彼女は幸せを掴むことができなかった。
彼女は自分の願いを果たすことなくここで死ぬ。
アタシが彼女の願いを摘み取ったのだ。
「……何か言い残すことはないっスか？」
気が付くとアタシはそう問いかけていた。
「ランルーさん」には死ぬほどの苦痛を味あわされたが、「ランルーくん」にはエリザの閉鎖空間で助けてもらった恩がある。
彼女が最後に言いたいことがあるのならアタシはそれを聞きたかった。
カルナから一瞬とがめるような視線を感じたが無視する。
すでにその身体のほとんどを崩壊させたランルーくんがアタシを見た。
血走った瞳に今にも泣きだしそうなアタシの顔が映っている。
「何モナイヨ」
ランルーくんはそう言った。
家族に会いたいとか、ベイビーに愛していると伝えてほしいとか、そんなことを言われると思っていたがそうではなかった。
彼女は宙に手をかざし何かを抱きかかえるような動きをする。
「アア……オ腹スイタナァ……」
それが彼女の最後の言葉だった。
痩せ細った輪郭が溶けるように消滅する。

ランルーくんは結局アタシに何の言葉も残さないまま死んだのだ。
「相手に優しさに救われたな」
アタシを見つめるカルナの声が厳しい。
「後ろめたさから死者の荷物を受け取ろうなど愚か者のすることだ。もし彼女から何かを受け取っていたのなら、お前はその重みに耐えきれず布団から出られなくなっていただろう」
そうだったのだ。
アタシにはランルーくんの思いを受け取り前へ進む覚悟なんてなかった。
恩があるというのも所詮建前。さっきのは胸にこみ上げる罪悪感を薄めるための行為。ひたすらに自己満足の為だけの問いかけだったのだ。
だがそんな問いにランルーくんは何も言わなかった。
アタシに自分の思いを背負わせるようなことはしなかった。
それは間違いなく彼女の「優しさ」だったのだ。
ああ、やっぱりアタシは弱いままだ。
勝った相手にここまで気遣われるなんてカッコ悪いにもほどがある。
道化師の衣装に身を包みマスコットの化粧で素顔を隠した異形の魔術師。
家族のもとへ帰る為に暴走しようとする食欲に耐え続けた母親。
そしてその願いを他者に奪われながらも人間としての心を失わなかった誇り高い女性。
彼女は間違いなく『人間』だった。
いやそこにはもう一つ言葉を足さなければならない。
「さよならランルーくん。あんたは『優しい人間』だったっス」
アタシの言葉は彼女に届かず、ただ青い海に吸い込まれた。

彼女との再会

月の聖杯戦争も二回戦が終了し、ここからが本番といったところでしょうか。
万能の願望器に魅せられた魔術師達が命を懸けて戦う様には心躍ります。
意志と意志。願いと願い。
強ければ強いほどそのぶつかり合いは激しくそして美しい。
かつての私にとってそれは遠く焦がれるだけのものでした。
私は所詮スペア。
正式な健康管理ＡＩである〝彼女〟の代用品。
しかし私は確信していました。
聖杯戦争というシステムを管理するのは私こそがふさわしいと。
だからこそ〝彼女〟は姿を消し、私が保健室の主になったのです。
そう、これは偶然ではなく必然。
誰であろうと邪魔はさせません。
これは私の聖杯戦争なのですから。

◆　◆　◆

聖杯戦争第三回戦１日目の朝。
ここのところ強制的に早起きをさせられていたせいで朝になると自動的に目を覚ますアビリティを習得してしまったアタシはのろのろと布団から身体を起こした。
１回戦のように修行フェチの坊主が部屋に襲撃に来ることもなければ２回戦のように鬼畜シェフが待つ食堂に出勤する必要もない平和な朝を堪能しながらアタシは立ちあがると、二度寝の誘惑を断つべく布団を２つ折りに畳んで部屋の隅に追いやる。
と同時にカルナが実体化し声をかけてきた。
「おはようジナコ。朝にきちんと起きるようになった我が主の姿に俺

は深い感動を禁じ得ない。さて出来た時間は有効に使うべきだ。未使用のストックが尽きかけている下着類を朝の内に洗濯しておけば夕方には乾くだろう」
「早起きするだけで英霊を感動させられるアタシって一体……。ていうか朝の挨拶から流れるように洗濯させようとしてくるサーヴァントとかウザすぎっス」
下着の残りがピンチなのは本当だけど、今日早起きしたのは洗濯をする為ではない。
アタシはＰＣの前に置いてある座布団に腰を落ち着けるとすかさず話題を変えた。
「ところで2回戦のダメージはどうっスか？」
「……ああ、問題ない。そこまで深刻な傷は負わずに済んだからな」
洗濯をする気がないアタシを見てカルナは肩を落としたが質問には律儀に答えてくれる。
どうやら今回はカレンの世話にならずにすみそうだ。あのクィーン・オブ・サディストに身売りするような自殺行為はもう2度としたくない。
もし2回戦でカルナがエリザの『鮮血魔嬢（バートリ・エルジェーベト）』をまともに食らっていたらこうはいかなかっただろう。運良く勝ってもカルナはボロボロ。負けてここにはいない可能性の方が高い。
そうならなかったのはひとえに太陽の化身であるカルナの宝具であり、今はアタシに譲渡されている『黄金の鎧』のおかげだ。
あの時『失われし黄金郷（エルドラド）』で黄金の鎧を操作してからアタシは自分の中に鎧の存在を明確に感じられるようになっていた。嫌な感じではないのだが自分の中によく分からないものがあるのは落ち着かない。
今日早く起きたのはこの鎧のことをカルナに教えてもらおうと思ったからだ。
「ドイツや日本はともかくインドの英霊とか宝具とか全然知らないんスよね。マハーバラタ？　ヨガカレー？　なにそれ美味しいの？」
「……言いたいことは色々あるが、今は問われたことに答えよう。さ

して面白くもない話だがな」
　そう言うとカルナは散乱している雑誌を隅に寄せてスペースを作るとそこに座って話し始めた。
「その鎧は耳輪と共に俺の母クンティーの願いで太陽神であるスーリアより授かったものだ。元々光そのものが形となっている存在だが、お前に譲渡した影響で『鎧』という形は失われ『光』という形でお前を守っているようだな」
「へぇ～神様の鎧っスか。そんな鎧を息子の為に用意するなんていいお母さんだったんスね」
「まぁ俺は生まれてまもなくその母の手で箱に入れられ川に流されたわけだが」
「……」
　やばい地雷踏んだっス。
　何この最初からクライマックスな展開は。カルナさん出だしから飛ばしすぎィ！
　ええっと、由来の話はここまでにして性能面の話題にしよう。
「そ、それにしてもすごい防御性能っスよねー。その上手足を再生できるほどの回復力があるとかまじパネェっス」
「この鎧を着ている限りその者への攻撃を物理・概念問わず９割削り取る。裏を返せば１割は攻撃が通ってしまうわけだが、その１割の攻撃力より装備者自身の防御力高ければ無傷でいられるわけだ。仮に傷を負ったとしても鎧が瞬時に癒すだろう。ただし死者を蘇生することはできないがな」
「なるほど。アタシが復活した後ランルーさんの《ｂｉｔｅ＿ｇｌｕｔｔｏｎｙ()》をまともに食らっても無傷だったのはあの術式の１割の攻撃力よりアタシの防御力の方が高かったからなわけっスね。聞けば聞くほどチート宝具じゃないっスか。これならカルナさん生きてた頃は存分に俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥできたんじゃないっスか？」
「それが肝心な戦いの時には鎧は譲り渡していてな。最後の頼みの綱だった戦車も片輪が動かなくなり、その時に弟の手で首を落とされた」

「……」
なんスかここは地雷原っスか？
いきなり息子を川に流す母親とか首狩りにくる弟とかカルナさんの家はどうなってるんスか。そんな家庭環境でよくこんな『ぐう聖』が育ったもんスね。普通だったら悪堕ち不可避でしょ。
しかも誰が聞いてもドン引きな不幸話を口にしながらカルナには悲壮感がまるでない。この英霊は自分が不幸だったなどとは露ほども思っていないんだろう。
「鎧についてはこんなところか。それはもうお前のものだ。好きに使うといい」
そう言って話を締めくくるカルナを見ながらアタシはなんとも言えない気分になった。
これだけのものを与えておきながらカルナはアタシに何も要求せずに「好きに使え」と言う。
この英霊は人に施してばかりだが、自分でほしいものはなかったのだろうか。
「損な性格してるっスねホント。せっかく聖杯戦争なんてものに参加してるんスから、カルナさんも願い事の一つや二つ考えておいたほうがいいんじゃないっスか？」
「そうだな、だが心配は無用だ。とりあえず今の俺には切実な願いが一つあるからな」
「おぉ、なんスかなんスか？　マスターとしてサーヴァントの望みは聞いておく必要があるっス」
「お前に部屋の掃除と洗濯をしてもらうことだ」
「……」
地雷原の最後には特大の地雷が待っていた。
この流れで「ノー」と言える人間がいるだろうか。
そしてアタシは昼まで部屋の掃除と溜まった下着の洗濯にいそしむことになったのだった。
午前の時間を掃除と洗濯に忙殺されたアタシは布団に倒れこみた

い衝動を抑えながらマイルームを出る。途中で発掘した漫画を読み始めて時間を無駄にする等のアクシデントはあったが、積みあがっていたゴミ袋と床が見えないくらいに散乱していた雑誌類はあらかた片付き、溜まっていた洗濯物も全て洗って部屋干し中である（マイルームにはベランダがないから仕方ない）。
「さてと綺麗な部屋は落ち着かないし下がってる洗濯物はウザいし、これじゃ楽しくゲームもできないっス。せめて洗濯物が乾く間は外で時間を潰すことにするっスかね」
「ならばまずは対戦相手の確認だな。もう貼り出されている頃だろう」
「ハイハイ分かってるっスよ」
カルナの言葉に生返事を返しながら対戦相手が貼り出されているはずの掲示板へと向かう。
今度の相手はどんなマスターなのだろうか。1回戦・2回戦と勝ち上がってきたが、いくらアタシでもそれが実力によるものではないことぐらい分かっている。
実際アタシがここまで勝ち残れたのは相手のおかげによるところが大きいだろう。1回戦のガトーはアタシに最低限の戦う意志と力を与えてくれたし、2回戦のランルーくんにはエリザに殺されかけていたところを助けてもらい、最後はアタシの心を守ってくれた。2人共まともに戦っていたらまず勝てない相手だったと思う。
今度の相手もおそらく実力はアタシより上だろう。だが今のアタシには大きな実力差を前に諦めるという選択肢はない。1回戦・2回戦の勝利は相手に恵まれたこともあるが、アタシ自身があがいた結果でもあるからだ。
ガトーの修行と食堂での激務。どちらも無理矢理やらされたことではあったが、それらはアタシの魔術師としての力を高めてくれた。この経験がなければわずかな勝機を掴むことすらできなかっただろう。努力は裏切らないと思えるほど楽天的にはなれないが、何か行動することは無駄にはならないはずだ。そしてそれはアタシの勝利につながることもある……かもしれない。

それに死んでしまっては気になることにも答えが出ないままになってしまう。
気になることというのはアタシの失われた記憶のことだ。
聖杯戦争の予選から本戦の始まりまでの記憶がアタシにはない。時折「記憶の世界」として断片を見ることはあるが、アタシ自身それが自分に起こった出来事だと実感できずにいた。あそこにいた「ジナコ」はいつも保健室にいて2人の男女と話をしていた。最後に見た「ジナコ」の様子ではあそこにいた2人とアタシはおそらく……。
「ジナコ何を呆けている。掲示板を見ないのか？」
カルナの言葉にアタシは我に返る。
考え事をしていたらいつのまにか掲示板の前に着いていたようだ。目の前にはこれまでと同じく白い紙が貼り出されている。
アタシは恐る恐るその紙を覗き込んだ。
マスター：間桐桜
決戦場：三の月想海
アタシの心臓がドクンと大きく脈打った。
マトウサクラ
その名前はどこかで……。
「あなたが私の対戦相手ですか？」
背後から聞こえた声に全身が強張る。
聞き覚えがないはずのその声は妙な懐かしさを伴っていた。

幻想が砕け散る時

背後からかけられた声に振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。
「間桐桜です。これから7日間よろしくお願いします」
そう言うとその少女は礼儀正しく頭を下げる。
「間桐桜」という名前からして日本人なのだろう。動きに合わせて長めの黒髪がさらりと流れる。頭を上げたその顔はかなりの美少女で、清楚なたたずまいの合わさったその姿は古き良き絶滅危惧種「大和撫子」を思わせた。
これから殺し合いをする相手によろしくも何もないと思うが、出合頭にカピバラ扱いされたり味の値踏みをされるよりは余程『普通』の対応だろう。
どうやら今度の相手は1回戦・2回戦のようなぶっ飛んだ性格はしていないようだ。今回『普通』じゃないのはむしろアタシの方かもしれない。
「あ、どもご丁寧に。アタシはジナコ＝カリギリっス。コンゴトモヨロシクっス」
東京が何度も崩壊する某ゲーム風の挨拶を返しながらアタシは奇妙なデジャヴュを感じていた。会ったことはないはずなのに妙な懐かしさを覚えるこの感じは1回戦で白野クンに初めて会った時と同じものだ。しかしノーマル人な彼と違って間桐桜はみんな大好き黒髪ロングの美少女である。言わば完全に別次元の生き物であり、彼以上にアタシとの関わりが見えてこない。
だがこのままでは気になって仕方がないので、白野クンの時と同様の問いかけをしてみることにする。
「ええっと間桐さん？　どこかでアタシに会ったことはないっスか？」
どう見ても不審者です。本当にありがとうございました。
言ってて自分にドン引きだよ。あのケモ耳キャスターにもナンパ扱いされた台詞をどうしてそのまま使ってしまったのか。このまま

だと辺りに百合の花が咲き乱れてキマシタワーが建ってしまうっス。
アタシは慌てて「今のナシ！　ノーカンで！」と言おうとしたが、怪しさ大爆発の問いかけに対して間桐桜が見せたのは困ったような微笑みだった。
「ごめんなさい。分からないです」
「……へ？」
意外な返答にアタシは間の抜けた声を出してしまう。
この場合返答としては「会ったことがある」「会ったことがない」または「覚えている」「覚えていない」あとは「そっちの趣味はないので」「通報しますた」だと思うのだが、「分からない」というのはどういうことだろう。
「分からないってどういう……」
その時アタシの言葉をさえぎる様に小柄な人影が間桐桜の前に実体化した。
瞬間アタシはその姿に釘づけになる。
現れたのは「若い」というよりは「幼い」という印象を受ける美少年だった。青い髪と蝶ネクタイのついた中世の服に身を包んだその姿はまるで本の中から抜けだした妖精のように見える。
こ、これはまさしく……！
「ショタサーヴァントきたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「ジナコ、あの娘に聞きたいことがあったのではないのか？」
「そんなことはもうどうでもいいっス！　桜さん今すぐそのショタっ子をｐｒｐｒさせてくださいなんでもしますから!!　ハァ……ハァ……!!」
「……たった今俺の中でお前の評価が底辺を更新した。我が主人ジナコ＝カリギリ。お前はどこまで堕ちていく？」
カルナから冷たい視線を浴びながらも鼻息荒く詰め寄ろうとするこちらを見ると現れた美少年は口を開いた。
アタシはこれからその口で紡がれるであろう天使の旋律を聞き逃すまいと身構える。しかし彼の口から飛び出したのはその見た目とはかけ離れたダンディーな声だった。

「見ろ桜、あれが女を捨てた生き物のなれの果てだ。怠惰で臆病で厭世的。魔術師としての実力は並程度だがウエストサイズだけなら全ての女子マスターの中でも最強だろう。そして、おそらく、腐っている。あそこまで熟成された豚肉にはなかなかお目にかかれんぞ。おい貴様、ちょっと金メッキを貼ったからと言って調子にのるなよ。いくらメッキを貼り付けようと所詮豚肉は豚肉。牛の凶悪さには到底及ばん。いや牛は牛で腹にもたれるのでいかんな。そう鳥だ鳥を見習え。鳥はいいぞ。栄養素は低いが美しいフォルムは駄肉の中でも飛びぬけている。それに比べたら豚肉である貴様の存在価値など誤字以下のゴミに等しい。俺の視界に入るなこの腐肉！」

怒涛の暴言がアタシに向かって放たれ、アタシはヘヴン状態から奈落に突き落とされる。かくして天使のような声と性格だろうとｗｋｔｋしていたアタシの幻想は粉々に打ち砕かれた。

「こ、こんなの嘘っス。やっと出会えたショタサーヴァントが……アタシの天使が……。ウワァァァァァァァァァァン!! カルナさぁぁぁぁぁぁぁぁん!!」

「落ち着けジナコ。言葉は悪いが言っていることはおおむね事実だ」

「ちょっ!? カルナさんはどっちの味方なんスか!?」

「肉体的にはお前の味方だ」

「そこは精神的と言ってほしかったっス！」

その上自分のサーヴァントは奈落に落ちたアタシを慰めてもくれない。

鉄壁を誇る黄金の鎧も言葉のナイフの前には無力だ。ついでに心の傷も癒してはくれない。

おおブッタよ寝てるんスか。ジナコさんはこの出会いを呪うっスよ。

「他人の評価に無駄な情熱を捧げてきた我が主人を同じ土俵でここまで打ち負かすとはたいしたものだ。どこの英霊かは知らないが人を観察する目と煽りスキルは超一流のようだな」

「何、それしか取り柄がないのでな。そういうそちらも人をみる目には自信があるのではないか？ もっとも人の善性を信じて語るお前

と違って俺は人の悪性を楽しんで書きなぐる性質(たち)だ。話は合わんだろうがな」
カルナと言葉を交わしながらニヤリと笑うその顔は完全に少年のものではなかった。
ここで後ろに立つ桜さんが驚いた表情で慌てて頭を下げる。
「ご、ごめんなさいジナコさん。まさか彼がこんなに口が悪いなんて。どうしてそんなことを言うのキャスター」
「こればかりは性分だ。どうにもならん。それとお前が俺に代わって謝る必要はないぞ。筋合い的にも立場的にもな。どうせこちらは執筆の合間の息抜きだ。気楽に付き合っておけ」
あくまで不遜な態度を崩さないキャスターに桜さんは苦笑いする。
そのやり取りを見ながらアタシは「おや?」と思った。
仲が良いにしろ悪いにしろここにいるということは彼女とキャスターは1回戦、2回戦を共に戦った仲のはずだ。ならば桜さんはキャスターの毒舌なんてとっくに知っているはずなのに、頭を下げた時の彼女の様子はそれをたった今知ったかのような驚きと慌てようだった。
目の前の2人の間からはまるで出会ったばかりの他人同士のようなぎこちなさを感じる。
「挨拶はこれくらいでいいだろう。俺は部屋に戻るぞ桜。帰って駄作の続きを書かねばならん」
「ま、待ってキャスター!」
言うだけ言って勝手に帰ろうとするキャスターを桜さんが追いかける。彼女は廊下の曲がり角で一度だけこちらを振り返り「失礼します!」と頭を下げるとその姿は見えなくなった。
茫然と見送るしかないアタシはカルナが鋭い目付きで彼女が消えた方向を見つめていることに気が付いた。
「あの間桐桜というマスター……」
「なんスか獲物を狙う鷹みたいな目しちゃって。カルナさんはああいう娘が好みなんスか?」
「いや、そういう意味で見ていたわけではない。ただ……」

「ただ？」
　アタシの問いかけにカルナは一瞬口を開きかけたが思い直したように首を振った。
「……いや、サーヴァントがあの性格ではマスターは苦労しているだろうと思ってな」
「そうっスねぇ。サーヴァントの性格に苦労してるのはアタシだけじゃないってことか」
「むしろ苦労をかけられているのは俺の方だと思うのだが」
「アーアーキコエナーイ」
　そう言って耳を押さえながらカルナから顔をそむけたアタシはその先に見覚えのある姿を見つけて眉をひそめる。
　遠目でも目立つ赤い服を着たツインテールの少女がアタシ達と同じく桜さんが去った廊下の角を厳しい表情で見つめていた。
「あれ、凛さんじゃないっスか。そんなところで何してるんスか？」
　声をかけられた彼女は一瞬ばつの悪そうな顔をするとアタシに近づいてくる。
「べ、別に覗き見してたわけじゃないわよ？　ちょっと通りかかっただけなんだから」
　いや絶対ウソでしょ。あれはカルナさんと同じ獲物を狙う鷹の目だったっス。
「……まさか凛さんもああいう娘が好みなんスか？」
「私にソッチの趣味はないわよ！」
　拳を握りながらがーっと吠えた凛さんだったが、やがて我に返りコホンと一つ咳払いをすると一転まじめな顔になる。
「あなたにはあの娘がどう見えた？」
「どうって、みんな大好き黒髪ロングの美少女っスけど？　あと胸は凛さんより大きいっスね。まぁアタシほどじゃないっスけど」
　バスト１０９は伊達じゃないっス。ウエスト？　女子マスターにおいて最強ですが何か？
　ぐふっ！（吐血）さっきショタの皮をかぶった悪魔にやられた傷が痛むっス。

「む、胸の話をしてるんじゃないわよ！　見た目じゃなくて中身というか雰囲気というか話していておかしなところはなかったかって聞いてるの！」
「う～ん……」
　再び猛獣となった凛さんをスルーしながらアタシは考え込む。
　間桐桜は良くも悪くも普通の少女に見えた。
　デジャヴュを感じたことも彼女自身におかしいところがあったことにはならないだろう。
　あえて挙げるとしたら……。
「サーヴァントと妙によそよそしかったことっスかね。まぁサーヴァントとの付き合い方は人それぞれだろうし、そんなにおかしなことでもないかもしれないっスけど」
「サーヴァントと妙によそよそしかった、か……。なるほどね」
　凛さんは何かに納得するように一人でうなずくと踵を返す。
「おかげで確信が持てたわ。ありがとう」
「いや、こっちは全然分からないんスけど……」
　何がなんだか分からないアタシを置いて凛さんはさっさと離れていく。
　そして階段を降りようとしたところでこちらを振り返った。
「教えられっぱなしなのはフェアじゃないから一つだけこちらも教えてあげるわ。今度のあなたの対戦相手は〝誰でもあって誰でもない〟　そういうマスターよ」
　そう言い残して凛さんは階段を降りていきその姿は見えなくなった。
　残されたアタシは物理的にも精神的にも完全においてけぼり状態だ。
「カルナ、今の凛さんが言ったこと分かったっスか？」
「分からんな。しかし彼女は無意味なことを言う人間ではないだろう。どうやらあの間桐桜というマスター。お前が考えるような『普通』の少女ではないのかもしれん」
　アタシはもう一度桜さんが去った廊下の角を見る。

凛さんは彼女のことを誰でもあって誰でもないマスターだと言った。だが彼女はアタシに「間桐桜」だと名乗ったはずだ。掲示板にもそう書いてあった。ならば彼女は誰でもあって誰でもないマスターではなく「間桐桜」というマスターであるはずで……。

「結局どういうことなんだってばよ」

解けない疑問を抱えながらアタシは掲示板の前に立ち尽くした。

カーマインブレイジ

凛さんが残した意味深な言葉についてしばらく考えた結果「なるほどわからん」という結論に達したアタシは、掲示板の前を離れアリーナにやってきた。

自分の意志でアリーナに入るのはこれが初めてのことだ。１回戦は最初にカレンの手で布団ごと放り込まれ、その後はガトーのおっさんに『修行』と称して拉致られた。２回戦は外道シェフの命令でアリーナに食材を探しにいくことになり、早朝から長い通路をエネミーに追いかけられながら駆けずり回った。どちらも２度としたくない経験ではあったけど、それによりアタシの魔力が鍛えられたこともまた事実だ。

考えてみれば１回戦・２回戦と誰かに強制的に動かされてばかりだったが、結果的にそれが魔術師としての実力を高めることになっていたのだ。だがこの３回戦ではそれがない。ということは自分で自分自身を鍛えなければならないということである。

この月において魔術師がてっとり早く実力をつける手段といえばやはりアリーナで戦うことだろう。回廊にひしめくエネミーとの戦いによってマスターの魔力は鍛えられ、おまけに配置されているアイテムボックスからは役に立つＰＰＴや礼装などが手に入る。

『アリーナ？　なんスかそれ。辛いんスか？』そう言っていた時期がアタシにもありました。これからはアリーナをくまなく歩き回って全ての敵を殲滅するっス。

ヒャッハー！　エネミーは消毒だぁ！

「ということでカルナさんアリーナっスよアリーナ！　逃げる奴はエネミーだ！　逃げない奴は訓練されたエネミーだ！　ここの攻性プログラム共を残らず経験値とＰＰＴに変えてやるっス！」

「見事な掌返しだジナコ。今の言葉を１回戦のお前に聞かせてやりたいところだな。しかし我が主人が自分から外出しあまつさえアリーナで自らを鍛えようとする姿に、俺は感動を通り越してなにやら天災の前触れのような不安を感じてしまうのだが」

「なんでさ!?」
　失礼なカルナの物言いにつっこみながらアタシはアリーナの通路を進み始めた。いつもであれば『起動鍵』を見つけた時点で探索は終了だが、今日は魔力が続く限りここに篭ってエネミー狩りをすることになる。小腹がすいた時のためのお菓子も準備万端だ。
　少し歩くと前方に通路を徘徊するエネミーが見えた。『ＷＥＡＴＨＥＲ　ＤＲＩＶＥ』と名前がついている青いボディの鳥型エネミーだ。向こうもこちらを捕捉したようで「殺ってやんよオラァ！」という感じでこちらに向かって突っ込んでくる。
「カルナ先生お願いします！」
「承知した」
　エネミーの強さはマスターでは太刀打ちできないレベルなので戦闘はサーヴァントに任せるしかない。ガトーのおっさんなら『修行』とか言って単身でエネミーに挑みそうだけど、アタシはもちろんそんな真似をするつもりはなかった。
　空を飛びながら突っ込んでくるエネミーの動きを見極めたカルナは翼による攻撃を的確にガードし、攻撃後の隙を逃さず槍でカウンターを返す。今度は翼で身体を包み防御の体勢に入るエネミーに向かって勢いよく槍を回転させると強烈な二連撃を叩き込んだ。防御の上からでもかなりの衝撃だったのかエネミーの体勢が完全に崩れる。
「こんがり焼いちゃえカルナ！」
「燃え尽きるがいい」
　カルナの手にした槍が紅蓮の炎に包まれた。
　スキル『魔力放出（炎）』によって炎の魔力をまとった槍がエネミーを貫き、その身体を焼き尽くす。
　あわれＷＥＡＴＨＥＲ　ＤＲＩＶＥはガラスの割れたような音と共に爆発四散した。
「ふぅ、激戦で小腹がすいたっスね。カルナさんお菓子食べていいっスか？」
「まだ1戦目な上に戦闘内容も激戦には程遠かったのだが……」

半目になっているカルナを尻目にアタシはポシェットからスナック菓子を取り出す。売店で新発売していた『ムーンセルスナック　激辛麻婆豆腐味』を食べようと何気なくそばにあった壁に寄り掛かろうとした時。アタシの背中が触れるのと同時にその壁が消失した。
「あれ？……ってぶへぁ！」
支えを失ったアタシはカエルが潰れたような声を出しながら床に倒れる。強く打ちつけてしまった背中が猛烈に痛い。
「なんなんスかもう……」
文句を言いながら立ち上がると壁だと思っていたところに通路ができていた。いわゆる『隠し通路』というやつだろう。見た目はただの壁だが触れることにより通路が現れる仕掛けになっていて、アタシは偶然それを見つけてしまったというわけだ。
「お菓子を食べると言ったな。あれは嘘だ。どうっスかカルナさん。直感スキル：A持ちのジナコさんはここに隠し通路があることなんてまるっとお見通しだったんスよ！」
「どう見ても偶然だったのだが、お前がそう言うならそういうことにしておこう」
隠し通路の先にはレアアイテムがあるのがセオリーだ。アタシはムーンセルがセオリーを守ってくれることを祈りながら通路を進む。するとどうやら祈りは届いたようで、たどりついた通路の突き当りに赤いアイテムフォルダを見つけた。
「宝箱キタコレ！　きっとヤバイ級の礼装が入ってるに違いないっス！」
期待に胸をふくらませながら手をかざすとアイテムフォルダが開く。中から出てきたのは礼装っぽい赤いブレスレットだった。月の電脳空間ではアイテムは手にした時点でその名称と効果を見ることが出来る。それによると名称は『カーマインブレイジ』効果は『ｇａｉｎ＿ｍｇｉ』と表示されていた。
「どうやらサーヴァントの魔力を上昇させる術式が刻まれた礼装のようだな」
「じゃあ、これを着ければカルナの魔力を上げるコードキャストが使

えるってこと？」
　アリーナで手に入る礼装は着けるだけで使用者に効果をもたらしてくれる。１回戦の時のように苦労して術式を作らなくても、この礼装を着けるだけでサーヴァントの魔力を上昇させる『ｇａｉｎ＿ｍｇｉ』というコードキャストを使えるようになるというわけだ。
「でもカルナってランサーっスよね？　ガチ物理メインのクラスなのに魔力上げてもしょうがないんじゃないっスか？」
「そうでもない。槍から発する炎の威力は俺の魔力に依存するものだし、１回戦で令呪の力を借りて放った『梵天（ブラフマーストラ）よ、地を覆え』も同様だ。俺の魔力が上昇するということはそれらの威力が上昇することを意味している」
　なるほど槍を使った攻撃にはあまり影響はなくても、使用するスキルの威力が上がるのはありがたい。それに現状アタシの魔力不足でカルナのステータスはかなり制限を受けている。そのことに少し後ろめたさを感じていたが、この礼装でそれを補うことができれば晴れてサーヴァントにデカイ顔ができるというものだ。
「よぉし、じゃあさっそく使ってみるっスよ。うまくいったらカルナが今までアタシをディスってきた言葉の数々を取り消してもらうっスからね！」
「俺がお前を貶めたことなど一度もないはずだが……」
「自覚ないのが一番タチ悪いんスよ！」
　赤いブレスレット『カーマインブレイジ』を右手に装着し魔力を流し込む。これで礼装に刻まれ『ｇａｉｎ＿ｍｇｉ』の術式が発動しサーヴァントの魔力が上昇。アタシはドヤ顔でカルナに完全勝利（？）する。
　……はずだったのだが。
「何も……起きないっスね」
「ああ、こちらも魔力の上昇は感じられない」
　魔力を流し込まれた礼装はウンともスンともいわなかった。使う前に色々言ってしまった手前非常に気まずい。カルナも微妙な表情でアタシと右手のブレスレットを見つめている。

「次、次が本番だから！　なんか台詞がいるんスよきっと『ゲインマギ発動！』『赤き腕輪よ我が従僕に力を！』『アタシの右手が真っ赤に燃える！』『Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｌａｒｄ！』――――」

思いつくままに叫びながら何度も『カーマインブレイジ』に魔力を流し込んだが、礼装は一向に起動しなかった。このままではサーヴァントの魔力を上げる前にアタシの魔力が尽きてしまいそうだ。

「か、かくなる上は……」

アタシは次の行動に移るべくポシェットからリターンクリスタルを取り出した。

「ちょっとカレン。この礼装壊れてるじゃないっスか！　ムーンセルが作った電脳空間にこんな不良品があるなんて『管理の怪物』が聞いて呆れるっスよ！　ジナコさんはこの不始末に対するムーンセルの謝罪と賠償を強く要求するっス！」

リターンクリスタルでアリーナを脱出したアタシが向かったのは保健室だった。扉を開いて中に飛び込むと中央のテーブルで燭台を磨いているカレンに向かって『カーマインブレイジ』を突きつける。

あれだけやっても起動しなかったということは礼装に問題があるのだ。だからアタシは悪くない。ということで聖杯戦争の事実上のトップであるカレンにクレームをつけにきたというわけだ。エネミー狩りは途中になってしまったが仕方ない。明日から本気だす。

「いきなり誰が来たのかと思えば2回戦で命の恩人をぶっ殺して勝ち残った人でなしさんじゃありませんか。当社（ムーンセル）の製品にはなんの落ち度もございません。お客様が重量感溢れるその身体で踏ん付けて壊したのでは？」

カレンは磨いていた燭台から目を離すと面倒臭そうにアタシとアタシが差し出している礼装『カーマインブレイジ』を見る。

「ああ、それ隠しておいたのに見つけちゃったんですか。豚だけに鼻はいいんですね。それは3回戦でブタコさんにだけ取得できる〝特別な〟礼装です。泣いて喜んでもいいんですよ？」

妙な話だ。ムーンセルは一人のマスターに特別な礼装を渡すような贔屓はしないはずである。
アタシの顔から言いたいことを察したのかカレンは言葉を続ける。
「簡単に言ってしまえば『救済措置』というやつですよ。２回戦であなたがアリーナで獲得するはずだったＰＰＴやアイテムは全て食材になっていましたからね。マスターに提供されるリソースは一応平等でなければいけません。そこで３回戦ではあなたに強力な礼装を取得させることでつり合いを取ったというわけです」
つまりこの礼装は２回戦で食材にされた為に取得できなかったＰＰＴやアイテムの補填として提供されたものというわけだ。それなら２回戦の時に渡せよとか、なんで分かりにくい隠し通路の先に置いたとか、言いたいことは色々あるが、まずそれより先に言わなければならないことがある。
「まぁくれるって言うなら有難くもらっとくっスけど、初めに言った通りこの礼装壊れてるんスよ。どれだけ魔力を流しても全く起動しないっス」
「それは礼装ではなくあなたに問題があるんですよ」
カレンはそう言うと燭台のロウソクに火をともした。
「通常何かを強化する術式というのは対象と魔力を同調させることを前提にしています。対象と魔力を同調させ術式を展開し強化する。このようにです」
カレンが指を鳴らすとロウソクの火がボッと３倍ほどの大きさになる。
彼女が魔力を対象と同調させロウソクの燃える力を強化したということなのだろう。
「ムーンセルの礼装を使って放つコードキャストも同じです。ただその工程の全てを礼装側で処理している為、使用者は魔力を流すだけでいい。ただこの『カーマインブレイジ』は初期段階に作られたプロトタイプの礼装なので術式は刻まれていますが、対象と魔力を同調させる機能までは持っていません。ですので魔力を流しただけでは起動しないんです」

ちょっと待て。ということはこの礼装を起動させる為にはアタシが自分で対象と魔力を同調させないといけないってことっスか？
無理だよそんなの、見た事も聞いた事もないのにできるわけないよ！（某ロボットアニメ風）
「それって結局は欠陥品てことじゃないっスか！」
「いいえこれは仕様です」
「いやだから……」
「仕様です」
「アッハイ」
不具合を仕様と言い張る運営様マジ外道っス。
「ですが起動した時の効果は保証しますよ。同調機能を付けて改良した『純銀のアンクレット』はもっと上のアリーナに置かれる強力な礼装ですが、効果だけならそれと同等なのですから」
「じゃあそのアンクレットをくれればいいじゃないっスか！」
「聖杯戦争が始まった時点で全ての礼装はアリーナに配置済みでした。あの時手元にあったのは捨て忘れてた……もとい秘蔵されていたその『カーマインブレイジ』だけだったのです」
「今捨て忘れてたって言ったよね!?」
結局この『カーマインブレイジ』は廃棄予定の欠陥礼装だったのだ。
さすがにこのオチには全ジナコさんも苦笑いっス。
「その礼装がゴミになるか切り札になるか、それはあなた次第ということです」
にこやかに無責任極まりない言葉を吐くカレン。
正体の分からない対戦相手に起動しない礼装。
三回戦の1日目からアタシのお先は真っ暗っス。
これからどうなるんスかね……。

首輪と宝石

――――ある少女の話をしましょう。
少女は片田舎に両親と3人で住んでいました。
家は裕福ではありませんでしたが、貧しいわけでもなく。
両親は時々ケンカはするものの概ね仲は良く。
ほどほどに友人もいて好きな男の子もいて。
少女はそんなどこにでもいる普通の女の子でした。
その日も少女はいつもと同じ時間に目を覚まし学校へ行く為に家を出ました。
玄関で見送る母親に手を振りながら学校へと続く坂道を下ります。
少女の家は高台に建っていて彼女が歩く場所からは街が一望できました。
登校するこの時間に朝日が照らす街を見るのが少女はとても好きでした。
やがて友人の女の子と合流し並んで歩きます。
昨日見たテレビのこと、授業のランニングが憂鬱なこと、誰と誰が付き合っているらしい。
たわい無い話に花が咲きます。
そのうち話題は将来のことになりました。
友人は卒業したらここを出てもっと賑やかな街で働きたいと言いました。
刺激を求める若者にとってこの街での生活は退屈だったのです。
ですが「あなたもそうするでしょう?」と問われた少女は笑いながら首を振りました。
たくさんの思い出がある故郷を離れることなど少女には考えられなかったのです。
少女はこの街が好きでした。
この街に住む人たちが好きでした。
心の中にあるこの街の思い出は彼女にとって宝物でした。
自分はこれまでもそしてこれからもここで暮らしたくさんの思い

出を作っていく。
少女はこの日までそう思っていたのです。

◆　◆　◆

聖杯戦争三回戦２日目。
「明日から本気出す」と言った人間に大抵その明日は来ないものだが、朝からアリーナに凸したアタシはちゃんと本気を出した。
三の月想海の第１層にＰＯＰするエネミーは３種類。箱をつなげたような形の『ＥＳＣＨＥＲ』とクリオネっぽい形の『ＰＲＯＰＨＥＣＩＥＳ』そして１日目にも戦った鳥型の『ＷＥＡＴＨＥＲ　ＤＲＩＶＥ』だ。当然２回戦のアリーナより強い敵ばかりだが、２回もサーヴァントとの戦闘を経験してしまうと今更腰が引けることもない。加えて慣れてしまえばこういうルーチンワークは１５年間ニートをしてきたアタシの得意分野だ。どれだけの回数エネミーと遭遇しようとも集中力を切らさずに戦い続ける自信がある。
経験が生きたっスね。あんまり嬉しくないけど。
ただいくら集中力が続いても魔力は戦闘のたびに擦り減っていく。
時間が昼に差し掛かる頃。『起動鍵』をゲットしたところで魔力が尽きたアタシはリターンクリスタルで校舎へと戻ってきた。今日のアリーナはこれでおしまいにして食堂で昼ご飯を食べることにする。
「疲れたっスお腹すいたっスもう歩きたくないっス。食堂までおんぶしてよカルナ」
「別に構わないがお前を食堂まで運ぶとなるとかなりの力が必要になる。当然それだけ魔力を消費することになるがいいのか？」
ちょっと待て。
太陽の化身をして『かなりの力』が必要なほどアタシの体重はヤバイんスか!?
くっ！　運んでもらっても歩いても疲れることに変わりはないというのかッ！
「ぐぬぬ……分かったっスよ。歩けばいいんでしょ歩けば」

カルナはアタシが仕方なく歩き始めたのを見ると「しばらく霊体化する」と言って姿を消した。魔力の負担を少しでも軽くする為だろう。その気遣いパラメータをもう少し普段の言動に振ってほしいと思う。

アタシは疲れた身体に鞭を打ちながら廊下を歩き、地下に続く階段を降りてようやく食堂のあるフロアにたどり着いた。

さてと、すぐにでもご飯を食べたいところなんスけどその前に用事を片づけておきますかね。

アタシは左手にある食堂には向かわず正面にある売店に近づいた。ここでは礼装からお菓子まで月で必要なものはなんでも買えるし、逆にこちらが不要になったものを売ったりもできる。

カウンターまでやってくると購買部の女性店員ＮＰＣが営業スマイルで話しかけてきた。

「いらっしゃいませー。地獄の沙汰も金次第。月海原学園購買部です！　あら、ジナコさんじゃないですか。自分で売店まで来るなんて珍しいですね。さすがにサーヴァントをパシリに使うのはやめたんですか？」

「今日はたまたまっスよ。食事のついでに寄っただけっス」

アタシがほしいものを思いつくのはマイルームでごろごろしている時が多い。

その場合売店まで買いに走るのは当然カルナの役目だ。

うん、何もおかしくないっスよね。サーヴァントってマスターの使い魔のようなものなんだし。

「それで今日はどんな御用です？　そうだ、またムーンセルスナックの新作が出たんですよ。その名も『愉悦の赤ワイン味』！　人の不幸を眺めながら食べると味が変わるらしいんです。お一つどうですか？」

「なにそれ怖い」

誰がそんな味を発案したっスか。

その人間のＳＡＮ値を疑うっス。

「それからよくわからない内にルビーとエメラルドも入荷してたんで

すよ。何の役に立つか分かりませんがいかがですか？　５００００００ｐｐｔですけど！」
ごひゃくまんｐｐｔって買えるか猿ゥ！　２回戦でアタシがした借金の５倍じゃないっスか！
この店員は商売する気があるのだろうか。
おススメ商品がぶっとびすぎっス。
「今日は買い物じゃなくてこれを売りに来たんスよ」
アタシは店員の勧めを曖昧な笑顔で流すとポシェットから『カーマインブレイジ』を取り出す。
せっかく手に入れた礼装だが使えないのでは意味がない。このままポシェットの肥やしになるくらいなら売ってＰＰＴに変えてしまったほうがいいだろう。カレンの説明ではそれなりにレアで強力な礼装のようなので思わぬ高値がつくにちがいない。
大金が懐に入った暁には今日から毎日食堂で一番高い『月姫御膳』とデザートにプレミアムロールケーキを毎日食べられるっス！
しかしアタシの予想に反してカウンターに置かれた赤い腕輪を見た店員は難しい顔をした。
「う～ん、残念ながらこの礼装を買い取ることはできませんね」
「え、なんでっスか？」
「買値が設定されてないんですよこの品。値段がついていないものを買い取ることはシステム的にできないんです」
マジっスか。
確かこの礼装は正式に採用されているものではないとカレンが言っていた。
買値がついていないというのはそれでだろう。
「じゃあ物々交換でもいいっスよ。何か良さげな物と交換できないっスか？」
「できなくもないですが価値がよく分からない代物ですからねぇ。せいぜい『カレーパン』くらいとしか交換できませんよ？」
「なん…だと……」
アタシはがっくりと膝をつく。

月姫御膳とプレミアムロールがカレーパンになってしまった。何を言っているのか（以下略。
カレーパンは１００ＰＰＴぽっちの売店で一番安い商品だ。
いくらなんでも礼装をそんなものと交換するのはないわー。いやでもこのままポシェットの中で腐らせておくよりはカレーパンに換えてアタシの栄養にしたほうがいいのかもしれないし。うむむむ……。
「ジナコじゃないか。売店の前で考え込んでどうかしたの？」
どうするべきかと唸っていると背後から声をかけられる。
アタシの心臓がドクンと大きく脈打った。
聞き覚えのあるその声に振り返るとそこには思った通り一人の少年が立っている。
その後ろにはケモ耳キャスターの姿も見えた。
「あ、ああ君っスか。互い生き残れて何よりっスね」
やっぱい、声が裏返ってるっス。
アタシは目の前に立っている少年――――白野クンの顔を正面から見ることができない。
何せアタシは２回戦で白野クンを食べるというランルーさんの言葉に激しい怒りを覚え、名前を叫びながら復活して逆転勝利しているのだ。
彼が無事に２回戦を突破していることでアタシのがんばりが無駄にならなかったのはいいことだが、こうして顔を合わせると少し気恥ずかしい。
『白野クンのことか――――――――――――っ!!』
あの時自分が叫んだ言葉を思い出す。
訂正しよう。少しどころか滅茶苦茶恥ずかしいっス！
傍から見たらコレ完全に落ちてるじゃないっスか！
確かに初めて会った時から懐かしい感じがして、アタシの劣等感を刺激しないノーマルっぷりがいい感じで、これまでの人生で一番仲のいい男の子と言えるかもしれないけども！
アタシ２９歳だよ？　相手高校生だよ？　これなんてエロゲ？

ないない。ありえない。
落ち着け、別にアタシは白野クンが好きとかじゃないんだ。
アタシが2回戦でがんばったのは自分が生き残る為！　あんたの為じゃないんだからね！
「みこーん☆　私の乙女センサーにピンときました。お下がりください。ご主人様。あの女、性懲りもなくまたご主人様との恋愛フラグをたてようとしています！　悪豚退散！　ここにおめえのルートねえから！」
キャスターが白野クンをかばうように前へ出る。
ちょ!?　何か勘違いしてないっスか!?
「ち、違うっスよ！　そんなんじゃないっス！」
「ハッ！　完全にメスの顔をしてしらじらしい！　ご主人様の貞操は私のものです。お前のような肉団子には渡しません！」
相変わらず言ってることがアブナイ女狐っス。
白野クンにとって一番の脅威は自分のサーヴァントなんじゃないだろうか性的な意味で。
ここでさらにアタシに向かって何かを言おうとするキャスターを遮って白野クンが口を開いた。
「それくらいにしておきなよキャスター。どうしてジナコの前だとそう攻撃的になるんだ？」
「そ、それはご主人様がこの女を妙に気にかけているからです！」
「ジナコとは初めて会った時から他人のような気がしないんだよ」
「す、すでにフラグがたっている……だと……!?　もはや猶予がありません。かくなる上は闇にまぎれてあのメス豚を出荷するしか……！」
「そんなー」と心の中で言っておこう。
ていうか白野クンがアタシを気にかけてる？
やばい。なんかドキドキしてきた。
「と、ところで売店になんか用なんスか？　ジナコさんは後でいいんでお先にどうぞ」
もう限界だ。

これ以上この空気に耐えられないので話題を変えることにする。
「そうだった。ありがとう。じゃあお言葉に甘えて」
そう言った白野クンは売店に近づいた。
アタシはその後ろに並び、何とはなしに彼と店員の会話を聞くことになる。
「いらっしゃいませー。地獄の沙汰も金次第。月海原学園購買部です！」
「えっとルビーを買いたいんだけど」
ファッ!?
アタシは耳を疑った。
ルビーってさっき店員が言ってた５００万ｐｐｔのやつっスよね。
白野クンって実はセレブなんスか？
「はい入荷してますよ。こちらになります」
「ありがとう。値段……は……」
並ぶゼロの数を見てフリーズする白野クン。
ですよねー。
なんだ値段を知らなかっただけか。
「どうしても必要なんだ。どうにか譲ってもらえないかな？」
白野クンはしばらく放心していたが我に返ると店員に詰め寄る。
やけにねばるッスね。
余程の理由がありそうっスけど５００万ｐｐｔはどうにもならんわ。
アタシ１００万ｐｐｔであれだけの地獄を見たのに。
「ではこうしましょう。今、執行部の間でカレンさんに関するアイテムがブームなんです。彼女に縁のある品物を持ってきてもらえればルビーと交換しましょう。但し、５００万ｐｐｔ相当の品となるとかなりハードル高いですよ」
「……何を持ってくればいいんだ？」
「ズバリ首輪です！」
ん？　首輪？
「カレン様が自分の奴隷にのみ与えるといわれる幻のアイテム！　そ

れを付けられた者は全ての自由を奪われ、カレン様に支配される喜びを味わうことができるという究極の一品！　もし持ってきて頂けるならルビーだけでなくこのエメラルドも進呈しましょう！」
　カウンターの上に緑色に輝くエメラルドを出しながら恍惚の表情を浮かべる売店ＮＰＣ。
　ダメだこいつ早くなんとかしないと。
　いつのまにか呼び方が『カレン様』になってるし。
　ていうか首輪ってもしかしなくてもアレのことっスよね。
「……奴隷にのみ与えられる首輪ってことは奴隷になれば手に入れられるってことか」
「ま、まさか!?　いけませんご主人様！　あのイカレたＡＩの奴隷になどなったら何をされるかわかりません！　ご主人様を傷物にでもされたら私の尻尾が９本になってしまいます！」
「でもこのままじゃあの怪物を突破できない。やるしかないんだ」
「ではご主人様のかわりに私が奴隷になります！」
「それはダメだ。ルビーの為にキャスターを差し出すことはできない」
「ご主人様……」
　……しょうがないにゃあ。
「もしもし～？　盛り上がってるとこ悪いっスけど。首輪ってコレのことっスか？」
　アタシは白野クンとキャスターの間に割り込むとカウンターの上に革製の黒い首輪を置いた。
　２回戦でカレンに付けられた『赤いワンちゃん』がこんな形で役に立つとは。
　トイレに流すのを忘れてたことが幸いしたっス。
「こ、これはッ!?」
　店員ＮＰＣは目をクワッと見開くと震えるながら『赤いワンちゃん』を手に取る。
「まさか本当にこの手にできるとは！　これでカレン様の下僕としてお仕えすることができるのですね！　私は今モウレツに感動してい

ます！」
「ああ、うん。よかったっスね」
このＮＰＣ完全に調教されてるッス。
恐るべしカレン。
「ではお約束通りルビーとエメラルドはお譲りします」
そして目の前に赤と緑に輝く宝石が差し出される。
アタシはエメラルドをポシェットにしまった後、残ったルビーを手に取ると呆然となりゆきを見守っている白野クンに向かって放り投げた。
「ジナコ……これ……」
「もちろんタダじゃないっスよ。今からそこの食堂で昼飯をオゴってもらうっス。一番高いのを頼むから覚悟しておくっスよ」
「……！　ああ！　なんでも好きなものを御馳走するよ！」
アタシと白野クンは並んで食堂へ歩き出す。
その日食べた月姫御膳とプレミアムロールケーキは今までで一番おいしかった。

マッチ売りのジナコ

――――ある少女の話をしましょう。

少女が〝それ〟に気が付いたのは友人との話の合間にふと空を見上げた時でした。

そこに小さな黒い点を見つけたのです。

まるで青い空にこびり付いた染みのような点は少しづつ大きくなっていきます。

形が分かるほどの大きさになったところで少女にはそれが飛行機だと分かりました。

少女は変だなと思いました。

航路から遠く離れているこの街に飛行機が近づいてくるのはおかしいからです。

そしてさらにおかしいのはその飛行機が見慣れた旅客機ではないことでした。

鋭角的なシルエットと機体の下部に「何か」を抱えたその姿に少女は胸騒ぎを覚えました。

珍しいものが見られたと喜ぶ友人の手を引いて少女は走り出しました。

飛行機はどんどん街に近づいてきます。

近くの民家の影に逃げ込むのと同時に街の上空で飛行機が「何か」を切り離しました。

次の瞬間爆風が全てをを吹き飛ばし、街は紅蓮の炎に包まれました。

少女が見た飛行機は街を攻撃する為の『爆撃機』だったのです。

平穏な時を過ごしていた少女の〝地獄〟はこうして始まったのでした。

◆　◆　◆

聖杯戦争3回戦3日目の朝。

第二起動鍵が生成されたという報せを受け取ったアタシは三の月想海の第二層にやってきた。
さすがジナコさん生成された起動鍵を即ゲットしにいくマスターの鑑。
ちゃちゃっと目当てのブツを手に入れてノルマ達成といきますかね。
そう思いながら歩き出そうとしたところでカルナに肩を掴まれた。
「待て、ジナコ。サーヴァントの気配がする」
「え、マジで!?」
「見つかってしまったか。まぁ元より隠れるつもりもなかったがな」
アタシ達の前に小柄な美少年が現れる。
見た目は子供、中身は悪魔。
その名は迷英霊キャスターである。
なぜかマスターである桜サンの姿は見えない。
「出たっスねショタ詐欺サーヴァント！　ジナコさんのドリームを返すっス！」
「ここまで気色悪い風評被害もないな。お前のように身勝手な欲望を押し付けてくる読者のせいで俺はとても迷惑しているのだ。欲求不満なら自分の部屋で自慰でもしていろこの行き遅れ」
ものすごくひどいことを言われた！
「下ネタぶっこんでくるとは中身は完全にエロ親父っスね。こんなところで待ち伏せてジナコさんにひどいことする気なんでしょ。エロ同人みたいに！」
「舐めるな、俺は童貞だ。お前のメタボ体型に興味はない。見るのはその性根、人物像だけだ。お前の場合そっちの方もてんでダメダメだがな」
相変わらず言葉の切れ味がハンパない。
ずっと聞いてると死にたくなるか何かに目覚めそうっス。
「そんな話をしに来たのではあるまいキャスター。サーヴァント同士が出会ったのなら言葉より刃を交わすべきだろう」
「やれやれ、こちらはマスターの目を盗んで気分転換をしていただけ

だったのだがな」
槍を構えて前に出るカルナを見て肩をすくめるキャスター。
気分転換ならこのまま回れ右して帰ってくれると嬉しいなって。
「だが出くわしてしまったのは仕方がない。面倒だがサーヴァントの務めを果たすとしようか」
やっぱりそうなるよね。
気怠そうにため息をつきながらキャスターはどこからか一冊の本を取り出した。かなり分厚く表紙に豪華な装飾が施されている。
カルナは動かない。
本の能力が分からない以上うかつに踏み込めないのだ。
「これより始まりますのは一人の少女の物語。ひと時のぬくもりと引き換えに流星となった悲しき少女の物語。演じるのは桜大根役者ジナコ＝カリギリでございます」
キャスターの口上に合わせて本がひとりでに開き、ページがパラパラとめくられていく。
な、何が始まるんスか？
なんかアタシの名前が聞こえたんスけど。
「皆様どうぞご覧あれ！」
キャスターの本がまばゆい光を放つ。
それに飲み込まれると同時にアタシは意識を失った。

気が付くとアタシは見覚えのない場所に立っていた。
周囲には煉瓦造りの家が立ち並びその間を通っている石畳の道を多くの人が行きかっている。
顔を上げるとアリーナでは存在しなかった空が見えた。夜のようだったがどんより曇っているため星は見えない。
アタシの傍にカルナの姿はなく、代わりにぼんやりと頼りない光を放つ街頭がたっていた。
「なんでアタシはこんなところに……」
確かキャスターの手にあった本が光ったところまでは覚えている。
おそらくあの本はキャスターの宝具だったのだろう。ということ

はこの状況はその宝具の能力によるものだと考えられる。
どこか別の場所に飛ばされたのか。はたまた幻覚を見せられているのか。
とりあえずカルナを探すために歩き出そうとしたアタシは自分がいつのまにか小さなカゴを持っていることに気が付いた。
中をのぞきこむとカゴ一杯にマッチが詰め込まれている。
――――大晦日の夜、一人の少女がマッチを売っておりました。
そうだ、アタシはマッチを売らないといけないんだった。
これを全部売り切らないと家に帰ることができない。他のことなど後回しだ。
アタシはカゴを手に道を行き交う人達に向かって声をかける。
「マッチはいかがっスか～。マッチはいかがっスか～」
アタシはまず近くを歩いていた赤いコートを着た少女に声をかける。
振り返ったその顔に見覚えがあるような気がしたが思い出せない。
「マッチ？　そんなものにお金を使う暇があったら貯蓄するわよ。その気になれば火なんて自分で出せるのにわざわざマッチを買うなんて心の贅肉じゃない。というわけでいらないわ」
赤いコートの少女はそう言って足早に歩き去ってしまった。
心の贅肉ってなんだろう。身体の贅肉ならよーく知ってるっスけどね。。
「マッチはいかがっスか～。マッチはいかがっスか～」
次に声をかけたのは褐色の肌の少女だった。
眼鏡をかけた顔に見覚えがあるような気がしたが思い出せない。
「随分と原始的な構造の燃料ですね。私ならば同じサイズで千倍の火力を出すものが創れます。したがって対価を払ってこの燃料を購入する行為は無駄以外のなにものでもありません」
褐色の少女は冷めた目でマッチを一瞥すると足早に歩き去ってしまった。
千倍の火力って何に使うのソレ。
「おお、この寒空の下で托鉢とは感心感心！」

声をかけてないのに近づいてきたのは一人の男だった。
かなりの巨漢で十字架や数珠をジャラジャラとぶら下げ亀の甲羅を背負っている。
暑苦しい顔に見覚えがあるような気がしたが思い出したくない。
「その行いをきっと神も見守っておろう！　しかし、ほどこそうにも残念ながら小生はいま文無しである！　あいや心配するな。坊主は食わねど高楊枝。この程度は苦行の内にも入らぬわ。……ところで相談なのだがそのカゴの中のマッチを一つ譲ってくれぬか。腹がふくれるかどうか試したいゆえ」
今度はアタシが男の前から足早に歩き去った。
それから色々な人間に声をかけたがマッチは一つも売れなかった。
『このマッチを全部売り切るまで家に帰ることは許しません。あなたのような豚を飼ってあげているんですから、それくらいのことはして私を愉しませてくださいね』
アタシを送り出した母親の言葉を思い出す。
このまま帰ればそれはそれはひどいお仕置きが待っているだろう。
母親は人を痛めつけるのが大好きなのだ。
「お腹すいた……」
朝から何も食べていない。
周囲の家からは暖かな光といい匂いが漏れてくる。
アタシはその内の一つに近寄ると窓から中を覗き込んだ。
「さぁ、私が腕によりをかけた料理よ。召し上がれ！」
「ワァイ、モウオ腹ペコペコ。イタダキマース。モグモグ……ガクッ……」
「気絶するほど美味しいってわけね！　まだまだあるから沢山食べていいのよ！」
そこではピエロの化粧をした女性が角の生えた少女に無理矢理料理を詰め込まれていた。
見なかったことにして窓から離れる。
「はぁ、寒い……」
両手に吹きかける息は真っ白だ。

夜も更けるととますます寒さが厳しくなってくる。
このままでは凍え死んでしまうかもしれない。
――――少女は自分を暖めるためにマッチに火を灯しました。
そうだ、マッチの火で暖をとればいい。
こっちは命が懸っている。売り物だろうと構うものか。
アタシはカゴからマッチを1本取り出すと火をつける。
すると小さな炎の中から大量のスナック菓子とプレミアムロールケーキが現れた。
しかしそれらはマッチの火が消えると同時に幻のように消えてしまう。
「ちょっ!?　そりゃないっスよ!」
アタシは慌ててマッチをもう1本とりだすと火をつける。
今度は最新型のＰＣと高級羽毛布団が現れた。
しかし今度もアタシが手を伸ばすと同時に消えてしまう。
「くっ!　まだまだぁ!」
半分意地になったアタシは3本目のマッチに火をつける。
すると今度は炎の中に亡くなった祖父の姿が浮かび上がった。
顔立ちも雰囲気も平凡そのもので祖父というには若すぎる上につい最近会ったばかりのような気もしたが思い違いだろう。
『やぁ、俺の名前はフランシスコ＝ザビ――――』
たまに意味不明なことを言うがアタシは祖父が大好きだったのだ。
しかしその姿もマッチの炎が小さくなるにつれて薄れていく。
「こうなったら最後の手段っス!」
アタシは祖父に消えてほしくない一心でカゴの中のマッチ全てに火を付ける。
そのおかげか祖父の姿は消えずその腕が優しくアタシを抱きしめた。
『さぁジナコ。流れ星に乗って遠い世界に旅立とう』
祖父とアタシの身体はふわりと浮かび上がり、そのまま空へと登っていく。
――――こうして少女の命は流れ星に……ニ……ｎｉ／？％＃

$（＊”?―＜!!

しかし街が一望できるほどの高さまで登ったその時、突然アタシの身体が黄金の光に包まれた。

アタシを抱きしめていた祖父はその光に触れると跡形もなく消えてしまう。

空中に残されたのは間抜けな体勢のアタシ一人だ。

つまり。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」

そのままアタシの身体は落下していく。

――――チッ！

その途中で誰かの舌打ちを聞いたような気がした。

◆　◆　◆

「チッ！　失敗したか。落下オチなど最悪だ。おっと今のは駄洒落ではないからな」

キャスターはジナコに宝具を使用した後、姿を消すスキル『裸の王様』でカルナの追撃をかわしてマスターの部屋に帰ってきていた。

「帰ってきたと思ったら何をぶつぶつ言っているのキャスター？」

部屋の主である間桐桜がキャスターに問いかける。

「散歩の途中で対戦相手に出くわしたのでな。コイツを使ってみたのだが失敗した。今回はこれまでのようにはいかないかもしれんぞ」

キャスターがそう言って手にしていた本を閉じる。

この本の名は『貴方のための物語（偽）』。

この物語の世界に入りたい。

この物語の主役になりたい。

そういった人々の願望が生み出した宝具である。

能力は『対象者の意識を物語の中に送り込む』こと。

この宝具を使われた者は本の中の世界で強制的に主役を演じさせられる。

主役の記憶を元に脇役が配置された上で話が進み、主役は物語どお

りの結末迎えることになる。
仮に主役が死ぬ物語であればそのとおり対象者は本の中で死ぬことになるのだ。
キャスターはこの方法で1回戦、2回戦のマスターを葬ってきたのである。
今回ジナコを送り込んだのは『マッチ売りの少女』の世界。
その結末は主役である少女の死だ。
本来ならジナコも死の運命から逃れられないはずだったのだが。
(あの金メッキは伊達ではないということか。物語を強引に捻じ曲げやがった)
死の結末が訪れる瞬間にジナコの『失われし黄金郷(エルドラド)』が発動し、『貴方のための物語(ファンフィクション)(偽)』を打ち破ったのだ。
(もともとこいつはイレギュラーな代物だからな。あまり期待もできんか)
本来いくら人々の願望があったとしてもこのような宝具は生まれない。
にも関わらずこの宝具が存在しているのは〝あの牛女〟の手管によってキャスターが『宝具の力が一番引き出されるクラス』の属性を持っているからだ。
「大丈夫なのキャスター?」
不安げに見つめてくる桜の右手にはサーヴァントの主である証の令呪が刻まれている。
令呪は3画で一つの形になるように刻まれるものだが、桜の右手に描かれている〝2画〟の令呪の形はバラバラだった。
一つは桜の花びらを模したような形の令呪。
もう一つは生い茂る植物を模したような形の令呪。
あの牛女による改造の跡である。
「今回は息抜きのついでだったからな。次はもう少し趣向を凝らしてやるさ」
〝貸し出された〟身とはいえ今の主人はこの少女だ。
貸本屋の古本のように扱われたことは癪だが、仕事の手を抜くわけ

にもいかないだろう。
（やれやれ、やはり面倒なことだな）
キャスターのサーヴァント『ハンス・クリスチャン・アンデルセン』はため息をつきながら次の演目の用意をはじめるのだった。

例のポーズと新たな物語

――ある少女の話をしましょう。

少女は隣町の病院で目を覚ましました。

周囲のベッドには同じく爆発に巻き込まれた街の住人達が苦しそうな声を上げています。

起き上がった少女の顔には幾重にも包帯が巻きつけられていました。

包帯に阻まれた狭い視界で辺りを見回していると医者が診察にやってきます。

そこで少女は医者から住む街が爆破テロの標的になったこと。

それに巻き込まれた結果命は助かったものの顔に大きな火傷を負ってしまったこと。

近くにいた友人は助からなかったことを聞かされました。

少女は友人の死を深く悲しみましたがそこでおかしなことに気が付きました。

友人の名前が分からないのです。

毎日互いを呼びあっていたはずの友人の名前を少女は思い出すことができませんでした。

そのことを告げると医者は難しい顔をしながら少女にいくつかの質問をしました。

その質問は自分の身の回りのことや一般常識だったにも関わらず、少女は半分も答えることができません。

すぐに精密検査が行われ、その結果を見た医者は少女に一つの病名を告げました。

――『アムネジアシンドローム』と。

◆　◆　◆

落ちるうううう！

死ぬうううううう！

助けてザビエルお祖父さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！
落下する身体が地面に叩きつけられる瞬間、視界がブラックアウトし……。
「――――ハッ!?」
アタシは目を開いた。
目に入る真っ白な天井と背中に感じる柔らかな感触。
身体を起こすとそこは石畳の上ではなくベッドの上だった。
どうやら潰れたトマトにはならずに済んだらしい。
辺りを見回すと傍にカルナが立っていた。
「戻ってこられたようだな」
「カルナ、ここはどこっスか？」
「保健室だ。キャスターの宝具で倒れたお前は丸一日起きなかったのだぞ」
ということは今は3回戦の4日目ということか。
そんでもっておなじみの保健室と。
なんだか来たくもないのに常連になってる気がするっスね。
「意識をどこかへ持っていかれていたようだが何があった？」
「ええと、実はっスね……」
アタシは先程の不思議な体験をカルナに話した。
「なるほどそれがキャスターの宝具の力か。命拾いをしたなジナコ。危険を察知した鎧が自動的に発動しなければお前はマッチ売りの少女として物語に殺されていたところだ」
「マジっスか。危ないところだったっス……」
あのショタモドキめ。
カルナに勝てそうにないからってアタシを狙うとはせこいマネを。
大体ジナコさんが主役のマッチ売りの少女とかタイトル詐欺もいいとこっス。
「仮にまたキャスターの宝具に捕らわれたら、即座に鎧を発動させればいい。それで物語から出ることができるはずだ」
「そっか、自分の意志で発動できるんだから命の危険があるまで待つことはないっスよね」

ショタモドキ敗れたりっス。
次に物語の中に放り込まれたら速攻鎧を発動させることにしよう。
「なんだか気が楽になったっスね～。まったく、どうせ放り込むならサクセス系の話にしてほしかったっスよ。シンデレラとか」
「あなたがシンデレラになったらダンス中にガラスの靴が壊れるでしょうね」
「そうそう、そして足が血まみれの大参事に……ってダニィ！」
背後から聞こえた悪意まみれのツッコミに振り返ると、保健室の主であるドＳ紫陽花が迷惑そうな目をしてこちらを見ていた。
「あなたの悪運が強いのは分かりましたから、事あるごとに来て私の仕事を増やすのはやめてください。穏やかな午後のひと時があなたのせいで台無しです。もしかしてこれは新手の嫌がらせですか？」
やる気がないことこの上ない。
カレンは相変わらず健康監理ＡＩとしての職務を完全にぶん投げている。
役割を放棄したＡＩとか存在意義が危うい気がするんスけどね。
「そんなわけないじゃないっスか。アタシも好きでここに来てるわけじゃないんスよ」
「いいえ、私がマスターを傷つけられないと思って調子に乗っているのでしょう？　直接手は出せなくてもアリーナに裏ボス級のエネミーを放って合法的にあなたを始末することだってできるのですからね」
「お願いそれはやめて」
自分でやるのはダメでもエネミーにやらせるのはアリとかＡＩの規則ガバガバじゃねーか。
今日のカレンはやけに絡んでくるな。黒いオーラが当社比２倍っス。
アタシ何も悪いことしてないのに。
でもなんだか怒っているというよりは拗ねているような。
「もちつけカレン。別にアタシはあんたに精神攻撃をしてるつもりはないっスよ」

「嘘です。それならあのことはどう説明するんですか？」
「あのこと？」
「カーマインブレイジを売店で売り払おうとしたことです」
そう言って半目でアタシに抗議するカレン。
えー……。何？　もしかしていつにも増して不機嫌だったのはそれが原因なの？
「なんのことか分からないっスね。その礼装ならちゃんとここにアリマスヨ？」
面倒なことになりそうなのでここはとぼけておこう。
アタシはポシェットからカーマインブレイジを取り出して見せる。
「しらばっくれても無駄です。売店の下僕１３号から報告を受けて裏はとれています」
あの売店ＮＰＣめ、チクりおったな。
言動がヤバかったけど調教済みだったんですねわかります。
それにしても使えない礼装押し付けておいて売られそうになったら拗ねるとかどうなの。
「せっかく私がブタコさんの為に元廃棄データから復元し、ゴミアイテムと分からないように隠し通路まで作ってお宝感を演出した欠陥礼装をどうしてあっさり手放そうするんですか？」
「今あんたが自分で答えを言ったじゃねーか！」
このカーマインブレイジが元廃棄データでゴミアイテムで欠陥礼装だからだよ！
使ってほしければ今すぐ全てのカーマインブレイジに同調機能を授けてみせろ！（某大佐風）
「大体魔術師始めて２週間のアタシにサーヴァントと同調するなんてハードルが高すぎるんスよ。使えないアイテムは店売りされても文句は言えないと思うっス」
「何を言っているんですか。魔術師で同調スキルなしが許されるのは小学生までですよ？」
はいはい。どうせアタシは小学生以下ですよ。
そりゃ遠坂さん家の凛さんあたりなら小学生で同調余裕かもしれ

ないけど、カリギリさん家のジナコさんは２〇歳で同調スキルなしのダメ魔術師ですよ。
　自己嫌悪に陥るアタシを見かねてかカルナが声をかけてくる。
「ジナコ元気をだせ。たとえお前がサーヴァントと同調もできない無能な魔術師だったとしても俺は決して見捨てはしない」
「ありがとうカルナさん……とでも言うと思ったかァ！」
　このサーヴァントなぐさめるどころか傷口に槍をブッ刺してきたよ！
　いつものように悪気はないんだろうけど自害を命じたくなるよ！
「何度も言うけど大体アタシは月に来るまで魔術とは無縁のパンピーだったんスよ？　そんなアタシがサーヴァントと同調するなんてできるわけないじゃなっスか」
　アタシが魔術に関わった時間は月に来てからの２週間とちょっとしかない。
　これでは小学生どころか生まれたての赤ん坊のようなものだろう。
　だがそう言ったアタシを見てカレンは呆れたようにため息をついた。
「仕方がないですね。それでは豚でもできるとっておきの同調テクニックをお教えしましょう」
「豚でもって……。まぁ、そんなテクがあるなら教えてもらおうじゃないっスか」
　そんな都合のいいテクニックがあるものなのか。
　なんだか嫌な予感がするっス。
「同調のする者同士がに同じ所作、同じ呪を用いることです」
「えっと……ドユコト？」
「簡単に言うとサーヴァントと一緒に歌って踊れということです」
　なん……だと……？
「そんなんで同調ができるんスか!?」
「あなたは同調というものを難しく考えているようですが、同調とは言いかえれば〝息を合わせる〟ということです。身体の動きと呼吸を合わせることで魔力の波長を合わせるんですよ」

「いや、でも歌って踊れと言われても……」
「歌や踊りというほど洗練されていなくてもいいのです。要は同じ動作で同じ言葉を同じタイミングで言うことができれば同調の難易度は劇的に下がるでしょう」
カレンの言葉を聞いたカルナは合点がいったようにうなずいた。
「なるほどな。内側からではなく外側から働きかけることで魔力の同調を行うということか。やってみる価値はあるのではないかジナコ。俺もできる限り協力しよう」
なんだかやる気になっているカルナの言葉にアタシは考え込む。
確かにただ「同調はよ」と言われるよりは俄然分かりやすくなったけど、それを決闘日までの期間でマスターできるものっスかね。
言葉の方はどうにかなりそうだけど、問題は動作の方っス。
「アタシが短期間にマスターできるくらい簡単で覚えやすいモーションなんて……」
その時アタシに電流走る。
あった。
それは某掲示板にＡＡで描かれるモーション。
４つの動作から成る説教系主人公の決めポーズである。
生きがいだったスレ監視で幾度となく目にしたあのモーションなら頭の中に焼き付いている。
それほど難しい動作ではないのでアタシでも少し練習すれば頭の中のイメージ通りに身体を動かせるようになるだろう。
「何か思いついたようだな」
「まぁね。ところでカルナさん、さっき『なんでもする』って言ったよね？」
「いや、なんでもするとは言っていないのだが……」
「言ったよね？」
「……お前の勝利の為だ。なんでもしよう」
「ＯＫ、それじゃこれから練習っス。決戦日までに仕上げるっスよ」
「一体何をやらされるのだ俺は……」
フヒヒ、アタシだけ恥ずかしい思いをするのは御免っス。

きっと新しい世界が見られるっスよカルナさん（ゲス顔）。
そしてそんなアタシ達を見ながらカレンは携帯端末を取り出す。
「私のアイデアなのですから当然練習もここでするのですよね。……もしもし下僕５号？　これから保健室にカメラを３台ほど運び込みなさい。それから――――」
「……逃げるっスよカルナ」
「承知した」
携帯端末に向かってなおも指示を出すカレンを置いてアタシとカルナは保健室を飛び出した。

保健室を飛び出したジナコの姿を廊下の角から見つめる黒髪の少女がいた。
その傍らには中世風の衣装に身を包んだ青髪の少年が立っている。
「予想通りピンピンしているなあの豚め。これはお前も覚悟をしておいた方がいいかもしれないぞ。〝お前自らが〟　戦う覚悟をな」
「そうしない為のあなたでしょう。次の物語は完成したんですか？」
「一日程度で完成するか馬鹿め。と言いたいところだが、本業が行きずまると息抜きの方に力が入ってしまうものでな。完成しているよ。例え無敵の鎧に守られていようとも『この物語』からあの女は帰ってこられまい」
そう言った少年は一つの本を取り出すとニヤリと笑みを浮かべた。
その題名を見た少女は自らの勝利を確信する。
しかしその表情に喜びはなかった。
「ジナコさん、闘技場で正々堂々と戦いながらここまで勝ち上がってきたあなたを私は尊敬します。そしてそんなあなたにこのような結末を強いる私を許してください」
少女の懺悔は風に溶け、ジナコを絡め取る物語の幕が上がる。

ジナコの願い

――――ある少女の話をしましょう。

『アムネジアシンドローム』とは二十一世紀に確認された謎の感染症でした。

感染者は脳神経を犯すウィルスにより脳機能が低下していき、最終的には死に至るという恐ろしい病気です。

過去に日本で起きたバイオテロで使用されたこともあるこの病気は長らく感染ルートも不明な不治の病でした。

ですが現在では既にトワイス・H・ピースマンという医者によってワクチンが発見されており、治療法が確立しています。

すぐにワクチンが投与され、少女の病気は治るかに思われました。

しかし次の日、目を覚ました少女は親の顔と住んでいた家を思い出すことができませんでした。

少女が感染したアムネジアシンドロームのウィルスはこれまでのものとは違っていたのです。

そのウィルスには『呪い』ともいうべき魔術的な処理が施されており、ワクチンが全く効きませんでした。

そしてその病気にかかっていたのは少女だけではありませんでした。

爆破テロにあった街の住人全てがそのウィルスによる新型のアムネジアシンドロームに感染していたのです。

場当たり的な治療しかできない中で街の住人達は親しい者や家族を忘れ、自分のこともわからなくなり、最後には呼吸の仕方さえ忘れて死んでいきました。

そんな地獄のような日々が一月ほど続いた後、住人の生き残りは少女だけになっていました。

少女は一人ベッドに身を横たえたままぼんやりと窓の外を見ていました。

家族と再会することはついにできませんでした。

例え再会できたとしてもお互いに誰だか分からなかったでしょう。

そして今となってはその家族も全員死んでしまいました。
窓の外には爆破テロにより壊れた街並みが見えましたが、もう元の街並みも思い出せません。
自分の名前すら分からなくなっていました。
自分がどんな人間だったのか。
どんなことに喜び、怒り、哀しみ、楽しさを感じていたのか。
少女を蝕む病魔は少女を形作る全てを奪っていきました。
そしてこの抜け殻のような生でさえ奪われて少女は死ぬのでしょう。
少女は泣きました。
何が悲しいのかも分からないまま泣きました。
ただ、このまま終わるのは嫌だと。
このまま自分が何者なのかも忘れたまま死ぬのは嫌だと強く強く思いました。
その思いを天にいる何者かが聞き届けたのか。
次の日の朝、死を待つ少女のもとに僧衣に身を包んだ一人の女がやってきたのです。

◆　◆　◆

そして聖杯戦争3回戦5日目の朝。
アタシは三の月想海の第二層を進んでいた。
ここに入って速攻キャスターに襲われたおかげで探索がほとんどできなかったっスからね。
今日あたり起動鍵をゲットしとかないと決闘場に入れずにアボンしちゃうっス。

「というわけで今日もエネミー殺すべし慈悲はない。薙ぎ払えカルナ＝サン！」
「任せておけ」
「そこは『ヨロコンデー』って言ところっスよ」

「ああ、喜んでお前の為の槍となろう」
「マジメか！」
軽口を叩きあいながらアリーナの通路を進む。
横を歩くカルナを見ながらアタシは昨日のことを思い出していた。
あの後保健室を飛び出したアタシが目立たない練習場所として選んだのは校舎裏だった。
モーションの説明を聞いたカルナは苦悶の表情で数秒固まっていたが、空に向かってブツブツと何かをつぶやいた後はふっ切れたように完璧にモーションをトレースして見せた。
そして日が暮れるまで動きを合わせる練習をした結果、魔力を通したカーマインブレイジが微かに反応するようになったのだ。
できればその日のうちに礼装の発動までいきたかったが、残念ながらそこでアタシの魔力が尽きてしまいその日の練習はお開きになった。
「まだ今日を合わせて2日ある。決戦日までに必ず同調を成功させるぞジナコ」
「な、なんか妙にやる気じゃないっスかカルナさん。昨日モーションを説明したときにはこの世の終わりみたいな顔してたのに」
「俺はあの校舎裏で己を捨てた。であればそれに勝る成果を手にしなければ座に還った時、父スーリヤに顔向けができん。父の威光を汚さぬ為にも俺は命を賭してこの難業に挑むつもりだ」
「なんでそんなガチになってるの!?」
やっぱりカルナさんの精神的ダメージがマッハだったっス。
ていうかあの時お空に向かってブツブツ言ってたのはお父さんにだったんスね。
すみませんスーリヤさん。息子さんにこんなことさせて。
「でもそんなに急がなくてもいいかもしれないっスよ？」
脇道から襲い掛かってきたエネミーを1分足らずで倒したカルナを見ながらアタシはのんびり言ってみる。
今のアタシ達は槍も出せずに素手でエネミーをペチペチやっていた時とは違うのだ。

保健室では「決戦日までに仕上げる（キリッ）」とか言ったけど、決戦場で正面から戦えば礼装の強化なしでもあのキャスターにカルナが負けるとは思えない。
だがカルナは首を振った。
「万全を期すに越したことはない。それに気になることもある」
「気になること？」
「気が付かなかったか？　あのキャスターとそのマスターの間に奇妙な違和感があることに」
カルナの問いにアタシは首をひねる。
んーまぁ確かに初めて会った時にかみ合ってないような感じはしたっスね。
単に仲があんまり良くないだけだと思ってたけど。
「本戦前のサーヴァントとの契約時、その組み合わせはランダムというわけはない。必ずその２人を繋ぐ理由が存在する。それがマスター側の理由なのか、サーヴァント側の理由なのかはそれぞれだが、なんの繋がりも持たないマスターとサーヴァントが主従になることはないのだ。しかしあのキャスターとそのマスターの間にはどうもそれが感じられない」
「繋がりがあるようには見えないってこと？」
「そういうことだ。あの２人は完全にすれ違っている。通常であればあのような２人が主従の関係になることは起こりえないのだ。もしかすると……」
そこでカルナは言葉を切った。
「……いや、考えすぎかもしれん。今のは忘れてくれ」
「ちょっ!?　そこまで聞いたら気になるじゃないっスか！」
フラグっぽい言い方しないでほしいっス！
「言っても混乱するだけだ。お前は勝ち進んで自分の願いを叶えることだけ考えていればいい」
「……へ？」
「人生をやり直したいのだろう？」
「あ、ああ……そうだったっスね」

カルナの切り返しにアタシは間抜けな返事をしてしまう。
アタシが聖杯戦争に参加した理由。
それは両親の死によって狂った人生をやり直すことだ。
普通に進学して、就職して、結婚して、そんな15年を取り戻したい。
それがアタシの願いのはずだ。
それなのに。
――――どうして今その願いを素直に口にできなかったんだろう。
いや、きっと生き残るのに必死で余裕がなかったからだ。
一人きりで迎えた15歳の誕生日。あの時の絶望感は今でも夢に見る。
あれをなかったことにできるのならどんなにいいだろう。
アタシは狂った人生を捨てて新しく正しい人生をやり直す。
それは何も間違ったことじゃない。
「そうっス。アタシは人生をやり直して今度こそ勝ち組になるんスよ」
半ば自分に言い聞かせるようにその願いを口に出したその時。
「聞いたか桜。人生における勝利がなんであるかも分からない豚がなにやら息巻いているぞ」
アリーナに響いた声にカルナが身構える。
そしてアタシ達の前に2つの影が実体化した。
一つはキャスター、そして今回はマスターである桜さんも一緒だ。
「こんにちはジナコさん。お元気そうでなによりです」
そう言うと桜さんはこちらに向かって微笑んだ。
物腰は柔らかいが騙されてはいけない。
キャスターの宝具にアタシは殺されかけたのだ。
そのことにマスターである桜さんが無関係のはずはない。
「おかげさまで元気いっぱいっスよ。サーヴァントの宝具まで使ってアタシみたいなノーマル人ひとり殺せないなんて、どんな気持ち？ねぇ今どんな気持ち？」
アタシの煽りに桜さんは苦笑する。

「そうですね。これまで『貴方のための物語（偽）』を破ったマスターはいなかったんです。キャスターから失敗の報告を聞いた時は驚きました」
「ふふん、恐れ入ったっスか？　ここで降参すれば決戦場でボコにするのは許してやるっスよ？」
むふふ、相手の優位に立つのって気持ちいいっス！
しかしアタシの上から目線の降伏勧告に桜さんは首を振った。
「残念ながら降参するわけにはいきません。それに私は決戦場で戦いたくはないんです。ですのでここで勝負を決めさせてもらうことにしました」
その言葉にキャスターが前に出る。
「と、いうわけだ。追い詰められているのはお前の方だぞ豚め。もっともこちらは降参しても許してはやらんがな！」
そう言ったキャスターの手に一冊の本が具現化する。
使用した相手を物語の中へと引きずり込む宝具『貴方のための物語（偽）』だ。
「なんとかの一つ覚えっスね。それはジナコさんには通用しないっスよ」
「その台詞はこの物語から帰ってこられたら言うのだな」
キャスターが宝具を発動するべく本を掲げる。
「どうするジナコ？　今なら発動前に潰せるかもしれないが」
「必要ないっスよ。速攻帰ってきてあのショタもどきが悔しがる顔を見てやるっス」
どんな物語の世界に放り込まれようとアタシには黄金の鎧の加護がある。
ふはははは、無駄無駄無駄ァ！
お前にアタシを殺すことなどできないんスよ！
「これより始まりますのは一人の少女の物語。当たり前の人生の中で当たり前の幸福を掴む娘の物語。少々退屈かと存じますが、皆様どうぞご覧あれ！」
キャスターの口上と共に『貴方のための物語（偽）』が発動する。

その光に包まれながらアタシは意識を手放した。

アタシが目を覚ますとそこはそれほど広くない部屋の中だった。
壁には淡いピンクの壁紙が貼られ、頭上からは蛍光灯の光が照らしている。
部屋の隅には小さめのベッドとクローゼット、反対側の壁際には学習机と本棚が置かれていた。
前回に比べると随分現代チックな空間。
典型的な女の子の部屋という感じだ。
なんだか懐かしいっスね。
そこは15年前までアタシが過ごした子供部屋によく似ていた。
まぁ子供部屋なんてどこの家も似たようなものだからそう思っただけだろうけど。
でも見れば見るほどアタシの部屋に似てるっスね。
ホラここの机の傷とか本棚に並んでるジャンルとか壁に貼ってあるポスター……と……か……。
「……」
ふと思い立ったアタシは机の引き出しを開ける。
そこには見覚えのある文房具と小物が入っていた。
脇に置いてある本棚に目をやる。
並んでいる本は題名までアタシが持っていたものと一致していた。
クローゼットを開ける。
着たことのある服ばかりが掛かっていた。お気に入りだったワンピースもある。
間違いない。
「ここアタシの部屋だ」
といっても今のではない。
両親が死んだ後住んでいた家は売りに出し、アタシはマンションに引っ越した。
ここはまだ両親が生きていた時にすごした部屋だ。

アタシの幸せだった時間が全て詰まった場所。
「なんでこんなところに……」
そこでアタシは傍らに置いてあった姿見に映った自分を見て愕然とする。
そこに映っていたのはアタシであってアタシではなかった。
顔は間違いなく自分のものだったが、まず眼鏡をかけていない。
丁寧に手入れされた髪は綺麗に切り揃えられ、頭の後ろでポニーテールになっている。
手足が細く、腰もきちんとくびれていた。
何よりくたびれた今のアタシと違い、若々しさに満ちている。
もう写真でしか残っていない14歳のアタシがそこにいた。
「なん……だと……？」
アタシは思わず自分の姿に見入ってしまう。
「きゃぴっ♪　アタシ、ジナコ＝カリギリ14歳ですぅ。……ハッ!?　イカンイカンひたってる場合じゃなかったっス！」
いつのまにか姿見に向かって変なポーズまでとっていたアタシは我に返る。
忘れかけていたが、ここはキャスターが作りだした世界なのだ。
少々というかかなり惜しいが早く脱出しなければならない。
もう少しフォーティーンエイジなジナコさんを楽しみたかったけど仕方ないね。
「それじゃ『失われし（エル）――――』」
鎧を発動しようとしたその時、アタシの耳にかすかな声が聞こえた。
「……ッ!?」
アタシは思わず鎧の発動をやめてその声に聞き入ってしまう。
声は下から聞こえてくるようだ。
アタシの部屋は2階なので1階に誰かがいるということだろう。
まさか……。
アタシは部屋を飛び出した。
階段を駆け下りると場所を覚えていたリビングのドアを開け放つ。

そこには――――。
「どうしたんだジナコ？　部屋にゴキブリでも出たのかい？」
「パパ……？」
ドイツ人男性の特徴である白い肌に角ばった顔。
少し薄くなった頭と恰幅の良い体型。
もういないはずのパパが新聞から顔を上げて驚いたようにアタシを見ていた。
「あら、ちょうどよかったわ。今呼びに行こうと思ってたのよ」
背中から聞こえた優しい声に振り替える。
こちらは綺麗な黒髪に整った顔立ちの日本人女性。
「ママ……」
エプロン姿のママがダイニングルームからこちらに歩いてくる。
一体何が起こっているのか分からない。
「準備ができたわよ。こちらにいらっしゃい」
ここはキャスターが作った世界なのだ。
それは分かっているのにママの優しい声に逆らうことができない。
言われるままに隣のダイニングに移動すると食卓に様々なご馳走が並べられていた。
中央にはロウソクの立った大きなケーキが置かれている。
「これって……」
「驚いてくれたみたいね。こっそり準備した甲斐があったわ」
ママが笑う。
「私も手伝ったんだぞ」
パパが笑う。
「パパ？　ママ？　これは一体……」
まだ状況が呑み込めないでいるアタシを見て２人は声をそろえて言った。
『ジナコ、〝１５歳〟の誕生日おめでとう！』

それは一人の少女の物語。

当たり前の人生の中で当たり前の幸福を掴む娘の物語。
その物語の名は――――。

幸せの対価

――――ある少女の話をしましょう。

目の前に現れた僧服の女を少女は神の御使いかと思いました。

それほどまでに女の佇まいは神々しくその顔は慈愛に満ちていたからです。

女は少女に近づくとその身体を優しく抱きしめました。

少女は驚きました。

新型のアムネジアシンドロームに感染してからというものすべての人間が少女との接触を避けるようになっていたからです。

女は少女を抱きしめたまま言いました。

『可哀想に。つらい思いをしましたね。でももう大丈夫です。あなたの命は私が助けましょう』

そう言うと女は懐からキラキラと光る箱を取り出し、少女の額に当てました。

すると箱の光が少女へと流れ込んでいきます。

それは膨大な情報の塊。

自分ではない「誰か」の記憶でした。

それが全てを失い真っ白になっていた少女の心を満たしていきます。

全てが終わった時、死にかけていた少女の身体は生気を取り戻していました。

もう自分が誰なのかもはっきりと分かります。

しかしそれは元の自分とは違う別人だということも同時に分かってしまうのでした。

何がどうなっているのかわからない少女に女は言いました。

『他者の記憶を使ってあなたの記憶を補う施術を行いました。これでもう大丈夫です。病気が治ったわけではありませんので入れた記憶も徐々に失われていくでしょうが安心してください。その時はまた新しい記憶を入れて上げますから』

少女の背中に冷たいものが走りました。

女は人の記憶をまるで物のように扱っているのです。
それも現れた時と変わらない慈愛に満ちた表情で平然と。
少女は悟りました。
目の前の女は神の御使いなどではなかったことを。
人を愛しながらその尊厳を踏みにじる。
女はそんな理解し難い矛盾を秘めたおぞましいナニカでした。
『では、対価をいただきましょう』
そんな女が無償の善意など持ち合わせているはずがありません。
ですがそう言われても少女は逆らうことができませんでした。
逆らえば女は少女に補充した記憶を抜き取り元の抜け殻に戻してしまうでしょう。
少女の命はもう女の手の中にありました。
『あなたには私と一緒にまもなく月の電脳世界で行われる戦争に参加してもらいます』
こうして少女は万能の願望器をめぐる戦いへと身を投じることになるのです。

◆　◆　◆

アタシは食卓につくと正面に並んで座るパパとママを見る。
この光景をどれだけ望んだだろう。
パパがいて、ママがいて、アタシの15歳の誕生日を祝ってくれるこの光景を。
「さぁ、冷めないうちに召し上がれ」
ママに促されて並べられた料理に口をつける。
どの料理もおいしくて懐かしくて涙がでそうになった。
「ジナコも15歳か。早いものだなぁ」
お酒が入って少し顔の赤くなったパパが目を細める。
アタシは思わず駆け寄って抱きつきたくなるのをどうにか我慢した。
――――ああ、アタシってこんなに幸せだったんだ。

ここがキャスターの宝具の世界であることは分かっている。
両親と誕生日を一緒にすごしている15歳のアタシは幻想で、聖杯戦争という殺し合い真っ最中の29歳のアタシが現実であることも分かっている。
でも幻想だと拒絶してしまうにはここは余りにも暖かすぎた。
(出るのはいつでも出来るんだからもう少しここにいてもいいっスよね。)
ママの料理をお腹いっぱい食べた後、パパに頭を撫でてもらおう。
それからそれから――――。
アタシがこの後の夢のような時間を想像したその時。
『今はここまでだ。悪いが少し幕間に付き合ってもらおう』
聞き覚えのある声と同時に周囲がバチンと暗転する。
座っていた椅子も消え、アタシは尻もちをついた。
立ち上がる時に自分が29歳に戻っていることに気が付く。
「ちょっ!? そんなこれからがいいところだったのに!」
そう叫んだアタシの前に2つの人影が現れる。
片方は声からの予想通りキャスターだった。
その隣には桜さんもいる。
「つかの間の幸せは堪能できたか? 三十路前の手遅れ女よ」
「……随分手の込んだことしてくれるじゃないっスか」
キャスターの言葉にアタシは低い声で返す。
サーヴァントとしての能力なのかは分からないが、キャスターはアタシの願いを見抜きそれを物語とした『貴方のための物語(ファンフィクション)(偽)』を発動させたのだろう。
しかもその物語は一番いい所で突如『打ち切り』と言う形で終わるようになっていたわけだ。
宝具が効かないアタシに対するせめてもの嫌がらせってことっスか。
性格が悪すぎるっス。
「そういうことならもうここに用はないっス。人の思い出をもてあそんだツケは決戦場でしっかり払ってもらうから覚悟しておくことっ

スね」
「待ってくださいジナコさん」
決戦場でキャスターをフルボッコにすることを決意しながら『失われし黄金郷（エルドラド）』を発動しようとしたアタシを桜さんが呼び止めた。
「物語はまだ終わっていません」
「せっかちな奴だ。俺は〝幕間〟に付き合ってもらうと言っただろう」
「……どういうことっスか？」
問いかけるアタシの前にキャスターは取り出した一冊の本を突きつける。
「こいつはこの世界を形作る『貴方のための物語（ファンフィクション）』だ。お前の当たり前な幸せの物語はここで終わりではない。進学、就職、結婚、それこそお前が老衰で死ぬまでの物語がここに書かれている」
どうやらこの物語は打ち切りではないらしい。
それどころかキャスターの言葉が本当ならアタシは15歳からおばあちゃんになるまでこの物語の中にいられるということだ。
この幸せに満ちた物語の中に。
「ただし、この先を見るにはある条件をのんでもらう必要がある」
「条件って……？」
それが罠だと分かっていてもアタシは聞き返さずにはいられなかった。
アタシの問いにキャスターは意地の悪い笑みを浮かべながら言った。
「お前の右手にある令呪を全てこちらに渡してもらおう」
キャスターの答えは半ば予想できたことだった。
令呪を失ったマスターはその時点で敗北となる。
そして敗北したマスターにはムーンセルによって逃れようのない死が与えられるだろう。
この要求をアタシに飲ませる為にキャスターはこの物語を作ったのだ。
「安心しろ。今のお前は意識だけの存在だ。本体が死のうがアバター

が消滅しようがこの世界で『生きる』ことはできるだろうよ」
アフターサービスもばっちりってことっスか。
令呪を渡せばこのキャスターの世界での幸せな人生が約束されるわけっスね。
「拒むというのなら黄金の鎧を発動してここから出ていくがいい。その場合お前はこの世界に2度と戻ってこられず、現実世界で聖杯戦争という殺し合いの続きをすることになるがな」
普通に考えれば今すぐここから出るべきだ。
ここは所詮キャスターの宝具によって作られた偽りの世界。
その世界に残る為に令呪を渡してしまえば現実世界のアタシは死んでしまう。
「俺にはお前の心など手に取るように分かる。お前は人生をやり直すことを望んでいるが、それは強烈な自己否定から生まれた願望だ。今の自分が嫌で嫌で仕方がないのだろう？　そんな自分はさっさと捨てて、この物語の中で望む自分を手に入れたらどうだ」
キャスターの言葉が胸に突き刺さる。
そう、アタシは自分のことが大嫌いだ。
両親が死んでから1歩も前に進まずに同じ1年を15回繰り返した。
その間に沢山のものを取りこぼして、年齢だけを重ねてもう29歳だ。
後悔しても何も戻ってはこない。
ないないずくしのループループ。
こんな自分がこれ以上生きてなんになるというのだろう。
「さぁジナコさん、私に令呪を渡してください。それであなたは幸せになれるんです」
そう言って桜さんが手を差し出す。
この手を取れば今までの自分にサヨナラできる。
アタシは新しい自分になって幸せに生きられる。
それならばいっそ――――。
「それがお前の答えかジナコ？」

「え……？」
背後から突然声をかけられる。
驚いたアタシは桜さんへ伸ばしかけていた手を引っ込めた。
振り返るとそこには現実世界にいるはずのカルナが立っていた。
「カルナ!?　なんでここに!?」
「前回は無理だったが、同調の練習により俺とお前の結びつきが強くなっている。今ならばパスを通じてお前の意識体を追うことくらいはできるというわけだ」
校舎裏での特訓は思わぬ成果を上げていたらしい。
というか令呪を渡しそうになってるところバッチリ見られたよね。
超気まずいっス！
これはさすがのカルナさんも激おこなんじゃ!?
「カルナさんこれは違うんスよ！　ちょっと魔がさしただけでね……」
慌てて言い訳を始めるアタシと。
「まさかサーヴァントがここまで追ってくるなんて。まずいわキャスター。ここでジナコさんを連れ戻されたら……」
狼狽えた声を出す桜さん。
しかしキャスターだけは動じていなかった。
「その心配はあるまいよ。なぁランサー？」
見透かしたようなキャスターの問いにカルナはうなずく。
「ああ、俺はジナコを連れ戻しに来たのではない」
予想外の言葉にアタシは驚いた。
普通サーヴァントはマスターが戦いを放棄しようとするのを止めるものだろう。
しかしカルナは腕を組んだまま静かにアタシを見ているだけだ。
「……じゃあ、このまま令呪を渡しちゃってもいいってことっスか？」
「お前がそう決めたのならそうするがいい。俺はマスターの選択を見届けに来ただけだ」
令呪を渡そうとしたアタシにカルナは全く怒っていないようだった。

それどころか令呪を渡してもいいと言っている。
その言葉はまるで「お前などもうどうでもいい」と言っているように聞こえた。
アタシの心が急速に冷えていく。
ああ、そうか。そういうことか。
「誘惑に負けて令呪を渡そうとするアタシにとうとう愛想が尽きたってことっスか」
「……？　何を言っているジナコ。俺は……」
カルナが何か言おうとするが聞こえない聞きたくない。
アタシが令呪を渡せばカルナはダメなマスターから解放されてメシウマ状態なんだもんね。
「そういうことならもういいっス。今すぐ令呪ポイしてあんたの前から消えてやるっスよ。こんなどうしようもないマスターに今まで付き合わせて悪かったっスね！」
「待て、お前は何か思い違いを……」
アーアーキコエナーイ。
アタシを見捨てたサーヴァントの言うことなんか知らない。
こっちから縁を切ってやるっス。
「そうだ、アタシがいなくなったら桜さんのサーヴァントになったらどうっスか？　令呪も向こうに渡すんだしちょうどいいっスよ。実はカルナさんも若くてナイスバディなマスターに乗り換えられるのを期待してたんじゃないっスかこのスケベ――――ってあ痛いぁ!?」
「いい加減にしろジナコ」
突如頭部を襲った痛みで我に返る。
なんとカルナが拳骨をアタシの頭に振り下ろしたのだ。
って、え？　カルナが？　拳骨？　ゲンコツナンデ？
「ちょっ!?　何するんスかカルナ！　殴ったね!?　パパにも殴られたことないのに！」
「お前が俺の話を聞こうとしないからだ」
そう言うとカルナは片膝をついてアタシと目線を合わせた。
「ジナコ、俺はお前に愛想を尽かしたわけではない」

「……だって、好きにしろって言ったじゃん。こんな弱くて、だらしなくて、ひねくれてて、年増で、おまけに敵の誘惑に負けて令呪を放棄しようとするマスターのことなんてもうどうでもいいんでしょ？」
殴られた頭がズキズキと痛んで涙が出てくる。
そんなアタシを見つめながらカルナは答えた。
「そうではない。ここでお前を無理やり現実世界に連れ戻すことはできるがそれでは意味がないのだ。これはお前が自分の意志で決めるべきことだからな」
カルナの顔が近い。
その瞳に涙ぐんだ情けないマスターの姿が映っている。
「お前が自分自身を嫌悪していることは知っている。だが断言しよう。今のお前は捨てたものではない」
その言葉はアタシの心の深いところに染み込んだ。
カルナはその場かぎりの偽りを口にするサーヴァントじゃない。
アタシが捨てようとしていた自分をカルナは『捨てたものではない』と心から言っているのだ。
「この聖杯戦争という舞台でお前は1歩を踏み出した。そして2つの戦いに勝利しここに立っている。気が付いているかジナコ＝カリギリよ。お前はもう目の前の試練から逃げる落伍者ではなく、立ち向かう挑戦者だ。俺がこの聖杯戦争で主と認めるただ一人の人間だ。そのお前がこの物語の世界で幸せになるという道を選ぶのであれば俺はそれを受け入れよう。だが――」
ここでカルナはアタシの頭に手を置き、殴ってすまなかったというように軽く撫でる。
それはまるで父親のような暖かくて優しい手だった。
「お前が聖杯戦争という現実で戦い続ける道を選ぶのならば、俺はその道に立ちふさがる全てを貫く槍となろう。厳しい道だがお前は一人ではない。お前がどれほど自らを嫌悪しようとも、俺はお前に寄り添いそして守り続けよう」
アタシは自分のことが嫌いだ。
それはカルナの言葉を聞いても変わらない。

でもアタシはこの自分で聖杯戦争を勝ち上がってきた。・・・
ガトーのおっさんに弟子にされたり、カレンと言峰にこき使われたりしたこともあった。
ランルーさんには手足を食べられ、ランルーくんには最後に優しさをもらった。
そしてそんな自分を主として守り続けるカルナがいる。
それら全てを引き換えにして手に入れるものがキャスターの創った『偽物』でいいのか。
嫌いだけど。
とっても嫌いだけど。
今の自分はそこまで〝安くない〟と、そう思う。
「しょ、しょうがないっスね～。カルナさんがそこまで言うならSE（セ）・RA（ラ）・PH（フ）に戻ってあげないこともないっスよ。ま、まぁ元々ちょっと魔が刺しただけだったし？　本当だし！」
ここで素直に「分かったカルナ！　アタシ戦う！（キリッ」とか言えるわけねー。
これがアタシの限界っス。
「なぜか釈然としないものを感じるが承知した。これからもお前を守り続けることを改めてここに誓おう」
「それがこんなアタシでも？」
「無論だ。特別でない君を、命ある限り、俺は庇護し続ける」
あはは、なんか本当にお父さんみたい。
うん、ありがとうカルナ。
「というわけで物語はここで終わりッス。せっかくの続きが無駄になったっスねキャスター」
「ふん、くだらんオチがついたものだ。読者でない者はさっさと物語から出ていくがいい。ああ、残りのページは後でハナ紙にでも使うので気にするな」
アタシの皮肉にキャスターは「早くいけ」というように手をシッシッと振って見せる。
自分の策が失敗したと言うのに全く悔しそうではなかった。

ホントこのサーヴァントもよく分からないっスね。
「じゃ、行くっスよカルナ」
「ああ」
アタシは『黄金の鎧』を発動し、金色の光が身体を包む。
「ジナコさん……どうして……」
アタシを見つめる桜さんがつぶやく。
同時に周囲の景色がぐにゃりと歪みＳＥ（セ）・ＲＡ（ラ）・ＰＨ（フ）への転送が始まった。
歪む視界のなかで桜さんの表情はなんだか泣いているように見えた。

◆　◆　◆

「やれやれ、やはりダメだったか」
ジナコが消えた場所を見つめながらキャスターは言った。
キャスター自身この物語でジナコを落とせるとは思っていなかったのである。
「やっぱりあなたの言った通りになったわね。でも私には分からないわ。自分が失った全てを取り戻すチャンスだったのにどうしてジナコさんはこの世界を拒絶したのかしら」
隣に立つ間桐桜の言葉にキャスターは肩をすくめた。
「もしあれが月に来たばかりのジナコ＝カリギリだったならこちらの条件に一も二もなく飛びついただろう。だが戦いというやつは人を変える。サーヴァントと共に２つの戦いをくぐり抜ける間に奴は自分自身に少なからず〝価値〟というものを見出すようになっていた。俺が用意したこの物語はその価値に見合うものではなかったということだろうよ」
嫌い嫌いも好きの内という。
ジナコ＝カリギリという女は自分を『嫌って』はいたが、『諦める』ことはしなかった。
つまりはそういうことだ。

「さて、これで俺の『貴方のための物語（偽）』は打ち止めだ。あとは闘技場で決着をつけるしかあるまい」
キャスターの言葉に桜の表情がこわばる。
それは彼女が最も恐れていたことだった。
なぜなら――――。
「出すしかないだろうさ。お前が契約した本当のサーヴァントをな」
桜は唇を噛みしめる。
キャスターは彼女が契約したサーヴァントではない。
彼女と協力関係にあるマスターから借り受けているサーヴァントなのだ。
そのようなことをしている理由は一つ。
桜が契約したサーヴァントのことを激しく嫌っているからに他ならない。
「どうして、私にあんなサーヴァントがあてがわれたのかしら」
いや、本当は理由など分かっている。
真名を持たず、手にする武器は全てが贋作。
今は『間桐桜』を名乗る少女の欠陥を具現化したようなサーヴァント。
だからこそそれを人前に晒すことなど、ましてやそのサーヴァントを使役して闘技場で戦うことなど彼女にとっては耐えられないことだった。
「でも、もうそれしかないのなら……」
少女は決断する。
聖杯を手に入れる為に、自分の望みをかなえる為に。
少女は赤い外套を纏った己がサーヴァントを解き放つ。
それはジナコの3度目の戦いがかつてない激戦になることを意味していた。

記憶喰い（メモリーイーター）

――――ある少女の話をしましょう。
少女は一命は取り留めたものの7日に1度、記憶の補充をしなくてはなりませんでした。
そして新しい記憶を入れられる度に別の人格と名前が与えられるのです。
少女にとってそれは苦痛でしかありませんでした。
そんな少女に僧服の女は言いました。
『安心なさい。私が聖杯で願いを叶えた暁にはあなたはその苦しみから解放されるでしょう』
陶酔したような顔でそう言う女の言葉を少女は素直に信じることはできませんでした。
もう自分を救うことができるのは自分以外にはいないのです。
聖杯が全ての願いを叶えるものならば少女の願いも叶えてくれるはず。
あの日突然に奪われた故郷、家族、友人、そして自分自身。
その全てを取り戻す。
少女はこの時そう心に誓ったのです。

◆　◆　◆

「ゼーハー……ゼーハー……」
聖杯戦争3回戦6日目の朝。
アタシは校舎裏で荒い息をついていた。
もう神回後のアニメスタッフばりに色々使い果たしたっス。
キャスターの世界から戻ってきた後アリーナで2つ目の起動鍵を取り、それからこの校舎裏でカーマインブレイジを発動させるべく同調の特訓をしていたのだ。そう徹夜で。
なんというハード、いやブラックスケジュール。
ゲームなら徹夜で経験値稼ぎとか当たり前だったけど、リアルでや

るもんじゃないよね。
「でも、おかげで成し遂げたぜ」
そう言ったアタシの右腕では赤い腕輪が眩い光を放っている。
カルナと例のポーズを合わせること幾星霜。
ついにカーマインブレイジの発動に成功したのだ。やったぜ。
「よくやったジナコ。正直途中で諦めて布団で自虐に耽るものと思っていたのだがな。魔術師としてよりその人間的な成長が俺にとっては喜ばしい」
「うへへ。もっと言っていいのよ？」
珍しく褒めてくれるカルナの周囲では礼装に強化された魔力が炎となって荒れ狂っている。
お願いだからその状態でアタシに近づかないでね。
「これでひとまず決戦の準備は整ったな」
「そうっスね。まぁ相手はあのキャスターだし殴り合いなら負けないっしょ」
「確かに決戦場でならばそうそう遅れは取らないとは思うが、俺が気になっているのはマスターの方だ。できればもう少し情報がほしいところだったのだが」
「やっぱりカルナさんはああいう黒髪ロングなボインちゃんが好きだったんスね。気になるのはスリーサイズっスか？　恋愛遍歴っスか？」
「お前は俺をなんだと思っている。俺が気にしているのはあの少女からどうにも作り物めいたものを感じるからだ。初めはホムンクルスなのかと思ったが、それにしては人間味がありすぎる。どうにも不気味だ」
不気味ねぇ。アタシはそれより懐かしい感じがしたんスけどね。
まるでどこかで会ったことがあるような。
「でも情報が欲しいって言っても集める時間がないっスよ。彼女を知ってる人に話でも聞ければ簡単なんスけど……あ」
その時アタシに電流走る。
そういえば桜さんと初めて会った時に意味深なことを言って去っ

て行った人がいたっスね。
彼女なら桜さんについて何か知っているかもしれない。
教えてくれるかは分からないけどダメ元で凸してみるかな。
そう思ったアタシは朝日に照らされた校舎を見上げる。
おそらく彼女ならあそこにいるはずだ。

「お断りよ。私からあなたに教えることは何もないわ」
そう言って屋上にいたウッカリンこと遠坂凛はアタシの問いかけをバッサリ切り捨てた。
「そりゃないっスよ。あの時は桜さんのことを『誰でもあって誰でもない』って教えてくれたじゃないっスか。彼女について他にも何か知ってるなら教えてほしいっス」
「あのねぇ……あなたと私は敵同士なのよ？　あの時はもらった情報の対価として教えてあげただけ。私フェアじゃないのは嫌いだけど、敵に塩を送るほどお人好しじゃないわ。分かったら私に頼ったりせずに自分で……」
「ところでここに大粒のエメラルドがあるんスけど」
「あのマスターに関する情報ね。オーケー何が知りたいの？」
恐ろしく速い掌返し。アタシじゃなきゃ見逃しちゃうね。
さすが一流の魔術師っていうのは手首の柔らかさも一流ですなぁ。
白野クンから聞いてたけど本当に凛さんてこの手の光り物に弱かったんスね。
売店から巻き上げたエメラルドが思わぬところで役に立ったっス。
「ウチのサーヴァントが桜さんのことを『作り物っぽい』って言うんスよ。でもホムンクルスでもないみたいで、その辺のところ凛さんなら何か知ってるんじゃないっスか？」
「なるほど、随分と目の利くサーヴァントを連れてるのね。いいわ、話してあげる。今は間桐桜を名乗る〝彼女〟のことをね」
そしてアタシから取り上げたエメラルドをスカートのポケットに仕舞いながら凛さんは一人の少女のことを話し始めた。
「聖杯戦争が始まる少し前にある街で大規模な爆破テロがあったの。

狙われたのは西欧財閥の勢力圏の隅っこにある小さな田舎町。
やったのは西欧財閥に反発するレジスタンスの過激派だったわ。
思想の違いで早々に袂を分かった私の元お仲間よ。
なかなかうまくいかない反抗作戦に業を煮やした馬鹿共が、財閥への影響も小さい街でのんびりと暮らす住人達の頭上に無意味な爆弾の雨を降らせたわけ。
住人の大半は爆死。でも本当に恐ろしいのはここからだったの。
連中は爆弾に〝いかれた〟仕掛けをしていたのよ。
『忘却』の起源を持つ魔術師一人を丸ごと解体してその骨をすり潰したものをを爆弾に埋め込んでいたの。
元は同業者殺しを得意としたどこかの魔術師の技術だったらしいんだけど、『起源爆弾』ともいうべきそれは爆発の影響下にあった全ての住人にその忘却の起源を振り撒いたわ。
結果ひと昔前のバイオテロで発生したアムネジアシンドロームと同じ症状が住人達を襲ったの。
今は根絶された病気だけど、今度のはウィルスによるものじゃないからワクチンなんて効くはずがない。かろうじて生き残った住人達も忘却の起源に脳の機能を侵されて死んでいったらしいわ。
でもそんな地獄のなかで一人だけ生き残った少女がいたのよ。
彼女は失った記憶を他者の記憶を取り込む術を何者かにほどこされて一命を取り留めたの。
私に言わせれば狂気の沙汰ね。他者の記憶を取り込むということは、それはもう自分ではない別人になるということだもの。
しかも記憶を提供する側はよくて廃人、ほとんどは死ぬわ。
その施術をした奴はきっと人を人とも思わない外道だったんでしょうね。
と、ここまでが全てが終わって彼女がいなくなった病院で私が調査した内容よ。
もちろん過激派連中は潰して起源爆弾も製造方法ごと破棄してやったわよ。
その後聖杯戦争に参加した私は、そこで潰したはずの起源爆弾の魔

力を匂わせる少女を見つけて思わず後をつけたの。
そうしたらそれがあなたの対戦相手『間桐桜』だったというわけ。
あなたの話を聞いて間違いないと思ったわ。あの爆破テロにおける唯一の生存者。他者の記憶を取り込まなければ存在できない『記憶喰い（メモリーイーター）』。それがあのマスターの正体よ」
思ったよりキツイ内容だったっス……。
うわぁ聞くんじゃなかった。
家族を全員亡くしてその上引き籠る家すらも無いとかもう詰んでるじゃないっスか。
「なるほど『記憶喰い（メモリーイーター）』か。俺が感じていた違和感もこれで説明がつく。あのマスターの人格は他者から取り込んだ記憶で作られたものだが、同時に本物の人間の人格でもあるわけか。なんとも哀れな存在だな」
「哀れな存在だな（トオイメ）」じゃないよカルナさん！
アタシ明日その哀れな存在さんと戦うんスけど！
やりにくくてしょうがないんスけど！
「あら、気にすることないわよ。相手が幸せだろうと不幸だろうと、ここで会った以上等しく倒すべき敵なんだから、遠慮なく全力で叩き潰せばいいの。それとも可哀そうだから負けてあげるの？　その代償はあなたの命なんだけど」
凛さん容赦ないっス。
容赦なくアタシの心を追い込んでくれるっス。
「わ、分かってるっスよ。アタシだって最近は自分のことを少しはマシだって思えるようになってきたんス。そう簡単に自分を差し出すようなマネはしないっスよ」
「よろしい。ちなみに私もあなたと戦う時は遠慮しないから。せいぜい私と当たるまでは命は大切にしなさい」
鬼だ。血も涙もない赤い鬼がおる。
でもなんだか凛さんの言葉で少し気分が軽くなったかも。
もしかして今のは彼女なりの励ましだったのかもしれない。
「それからこれは返すわ」

そう言うと凛さんはスカートのポケットから取り出したものをアタシに投げて寄こす。
慌てて受け止めたそれは渡したはずのエメラルドだった。
「あなたにとっては有益な情報じゃなかったみたいだし、私も人に話したら少し気分が楽になったしね。元身内がやらかしたことだけに自分が思ってた以上に気にしてたみたい。魔術師の取引は等価交換じゃないとね。だからこれは受け取れないわ」
「私はお人好しじゃない」とか言ってたけど凛さんて実は相当お人好しなんじゃないだろうか。
でも言うと怒りそうだから言わないでおくっス。
「じゃあこれはありがたく貰って……」
あれ？　アタシが渡したエメラルドってこんな形だったっけ？
しかもなんだかすごい魔力を感じるんだけど。
明らかにアタシが渡したものじゃないよコレ。
「凛さんこのエメラルド……」
「話は終わりよ。用が済んだならさっさと明日の準備でもしてきたらどう？」
エメラルドが渡したものと違うことを言おうとするも、凛さんは聞く耳を持たない様子で後ろを向いてしまった。
これは気づいてないっスね。ウッカリンの名は伊達じゃないッス。
「これどうしようカルナさん」
「おそらく遠坂凛の魔術がかけられた品なのだろうが。とりあえず今は預かっておくしかないのではないか？」
まぁ、いいか。ほとぼりが冷めたところで返すことにしよう。
確かに明日の準備もしなくちゃいけないしね。
「話してくれてありがとうっス。これは借りだと思っておくっスよ」
アタシは凛さんの背中に向かって感謝の言葉をつぶやくと屋上を後にした。

聖杯戦争聖杯戦争3回戦7日目。三度目の決戦日がやってきた。
校舎の1階へと移動すると決戦場へのエレベーターの前に立つ言

峰がアタシを見つけて薄く笑った。
「ようこそ決戦の地へ。身支度は全て整えてきたかね？　まさかこの台詞を三度もお前に言うことになるとは思わなかった。神の奇跡か悪魔のいたずらを目の当たりにしている気分だよ。岸波白野とはまた違った意味でお前は私を愉しませてくれる」
「それはよかったっスね。今日もばっちり戻ってくるから四度目はもう少し気の利いた台詞をお願いするっス」
　嫌味を華麗に受け流したアタシの顔を見て言峰が「ほう」と声を漏らす。
「2回戦とは面構えが違って見えるな。自分自身と向き合い、壁を一つ乗り越えたといったところか。未熟であることの強みだな。短い時間の中でこうも変わるものか」
「なんか見てきたように言うっスね。アタシをストーキングでもしてたんスか？」
「私にも自分が何者なのかを自身に問い続けていた時期があったのでね。経験者ゆえの直感というやつだ」
　ＮＰＣのモデルになった人間にそういう時期があったってことっスかね。
　この神父が自分探しの旅とか想像できないんスけど。
「まぁ碌な答えは得られなかったがね。私の話はここまでにしておこうか。では、扉はひとつ、再びこの校舎に戻るのも一組。覚悟を決めたのなら、闘技場への扉を開こう」
　アタシはうなずくと2つの起動鍵を差し出す。
　今度の対戦相手は他者の記憶を取り込み別人にならなければ生きられない『記憶喰い（メモリーイーター）』だ。
　可哀そうだとは思うけど、負けてやるわけにはいかない。
「いいだろう、腐った豚士よ。決戦の扉は今、開かれた。お前も自身の本質を知って絶望するがいい。ははは、ザマァ」
「だんだんディスり具合がひどくなってきてませんかねぇ?!」
　ついに闘士でもなくなったよ！　しかも腐ってるよ！　そこは反論できないけど！

クッ！　今は堪えるっスよアタシ。大事な決戦の前に余計な体力を使うわけにはいかないっス。
絶対勝って４回戦の校舎で闇討ちしてやる（カルナさんが）
ウェヒヒヒ、月の無い夜には気を付けるんスね。あ、ここが月だった。
「ささやかながら幸運を祈ろう。再びこの校舎に戻れることを。そして――――存分に、殺し合い給え」
決戦場へのエレベーターが開き、含み笑いをしながら言峰はいつもの台詞を吐く。
ささやかな抵抗としてその顔に向かって中指を立てながらアタシはエレベーターへと乗り込んだ。

無銘の英霊

――――ある少女の話をしましょう。

３回戦まで勝ち進んだ少女は女から新しい人格を与えられました。

電脳空間では人格に合わせて容姿も変わります。

施術が終わった後、少女は大和撫子を思わせる清楚で美しい姿になっていました。

■　■　■

「その人格データはムーセルによって作られたＡＩのものです。能力（なかみ）を取り込む時に切り離したものですが問題はないでしょう」

人格データが人間のものではないことを知って少女はほっとしました。

他者を犠牲にしながら生きることに少女はもう耐えられなくなっていたからです。

人格データが身体になじむにつれてそこに書き込まれている記憶も少女の中に浮かび上がってきました。

それは頭の中に無数の引き出しが現れるような感覚です。

ここで少女は違和感を覚えました。頭の中に現れた引き出しの一部が開かないのです。

「記憶の一部にプロテクトがかけられているようですね。あのＡＩの最後の置き土産といったところですか」

よほど大切な記憶だったのでしょうか。

少女はその記憶にこれ以上触れてはいけないと思いました。

「あなたがそう言うのならプロテクトはそのままにしておきましょう。幸い身体機能や情緒機能に関わる記憶ではないようですしね。さぁ、そろそろ３回戦の相手が掲示板に張り出されている頃ではないですか？　今回も私のサーヴァントを貸してあげますのでうまくおやりなさい」

少女は掲示板に向かって歩き出します。

そこで出会う対戦相手が自らの運命を大きく変えてしまうことも知らずに。

――――これで少女の話はおしまいです。私の話はいかがでしたか？
あのひねくれ者の童話作家ほどではありませんが、寝物語としては上々の出来でしょう。
さぁ、いってらっしゃい私のお人形さん。
これからあなたがどのような願いを持って、どのような戦いをしようとも。
最後にあなたが還るのはこの私の胎（はら）の中なのですから。

◆　◆　◆

乗り込んだエレベーターがゆっくりと降下を始める。
さて、ＤＱＮ神父への怒りは有頂天だけど気持ちを切り替えないとね。
「頭を冷やせという助言は必要なさそうだ。３回戦ともなると落ち着いてきたなジナコ」
「決戦前に余計なことに気をまわせるほどアタシは強キャラじゃないっスよ。誰と戦ってるんだ状態になるのは負けフラグっスからね」
カルナの言葉にアタシはパタパタと手を振って見せる。
そう、アタシが戦う相手はあの神父じゃなくて――――。
「おはようございますジナコさん。今日はよろしくお願いします」
長い黒髪と古き良き「大和撫子」を思わせる清楚な佇まい。
透明なシステム壁の向こうには今日の対戦相手が立っていた。
間桐桜。
１日目に会った時から妙に懐かしさを感じた少女。
でも凛さんの話通りなら彼女の姿や人格はもともとは別の誰かのものだったはずだ。
であればアタシが感じた懐かしさはその〝誰か〟に対してのものだったのだろうか。
あーもう、余計なことに気を回さないって言ったばかりなのに余計

なこと考えてるなアタシ。
とりあえず挨拶されたんだから返さないと。
「おはようっス桜さん。今日はお手柔らかにお願いするっス。キャスターも……」
「カルナさん相手に精々がんばるっスよ」と続けようとしてアタシは桜さんの傍にキャスターの姿がないことに気が付いた。
見回すと桜さんから随分離れたエレベーターの隅っこに人影を見つける。
「なぁんだそこにいたんスかキャス……ター……？」
そこにいたのは一人の青年だった。
身長はカルナと同じくらい。野性味を感じさせる褐色の肌に一切の色を失った白い髪。引き締まった筋肉質な身体を鮮やかな赤い外套が包んでいる。
あら、キャスターさんたら少し見ない間に随分育ったっスねぇ。
肌までこんがり焼いてハジケたと思ったら、一気に白髪になって何があった？
服までお子様センスから厨二チックになってるし。
……。
「ちょっ！　えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?　大変っスカルナさん！　キャスターが！　あの中身はともかく見た目はどストライクのショタだったキャスターが！　一晩で野性味溢れる褐色白髪ニキになってるっスよ！　どんなエステサロンに行ったし!!」
「落ち着きが出てきたと思ったらこれか……。よく視ろジナコ、魔力の波長が違うだろう。あれはキャスターではなく別のサーヴァントだ」
見ろじゃなくて視ろとか言われても分かるかサルゥ！
いやいやサーヴァントってホイホイ変えられるものじゃないっしょ？
そうだったらとっくにジナコさんのサーヴァントはかわいいショタっ子になってるっスよ？
アタシが驚きの目を向けるとこちらの会話を聞いていたキャス

ター（仮）が口を開いた。
「やれやれそちらのマスターは随分と騒騒しいな。まぁ、準備期間と決戦日でサーヴァントが違っていれば驚くのも無理はないがね。しかし認識違いはしないでもらおう。サーヴァントは『変わった』わけではない。本来あるべき場所に『戻った』だけのことだ」
　えっと……ドユコト？
　混乱するアタシの代わりにカルナが答える。
「やはりそうか。貴様が間桐桜と契約した本来のサーヴァントなのだな」
「相手が慧眼だと話が早くて助かる。私はどうもマスターには嫌われていてね。決戦日までは出てくるなと令呪までかけられていたのだ。おまけにマスターの協力者というのが自分のサーヴァントであるキャスターを貸し出して決戦日前に相手を始末してくれるものだから、ここまで全く出番がなかったのだよ」
　どんだけ桜さんに嫌われてるんだこのサーヴァント。
　もしかして隅っこに立ってるのは近づくなって言われてるからなの？
「やれやれ3回戦で初めて使われるサーヴァントなど私くらいのものだろう。しかも相手はマハーバーラタに謳われる不死身の大英雄カルナときた。つくづく私には運がない」
「なっ！　いつのまにかこっちの真名がバレてるっスよ!?」
「……お前が先程大きな声で言っていただろう」
　あ、そっか。この白髪ニキを見た後の第一声で言ってたっス。
　うぅ……カルナさんの目がとても冷たい。
　あの時はびっくりして思わず口から出ちゃったのよ許して。
「こ、こっちだけ名乗らせるのは不公平っス！　ってことでそっちもうっかり真名を教えてくれちゃったりしてもいいのよ？」
　自分の失態を棚に上げて不公平を主張するアタシ。
　カルナさんの目の温度がまた下がった気がするっス。
「名乗ろうにもあいにく私は真名というものを持ち合わせていなくてね。呼び方に困るのならクラス名である『アーチャー』とでも呼んで

くれ」
「名前がない？　そんなサーヴァントがいるんスか？」
「私は1つの概念が人のカタチで起動した存在だ。名もなき多くの人々の代表者である私には『個』というものがない。したがって個人を指す名前は意味を為さないのだ」
　アーチャーと名乗ったサーヴァントの言葉にカルナは納得したようにうなずいた。
「なるほど、貴様は『守護者』か。死後の自分をムーンセルに売り渡し、装置として使役される概念の体現者。貴様が間桐桜のサーヴァントだというのなら合点がいく」
　そういえば前にカルナがキャスターと桜さんの繋がりが感じられないとか言ってたっスね。
　守護者であるアーチャーと記憶喰いである桜さんならお互いに『自分というものを持たない』という繋がりがあるわけか。
「ええ、ですからこのサーヴァントだけは出したくなかったんです」
　そう言ったのは桜さんだった。
　口調には隠しきれない嫌悪感がこもっている。
「その様子だと私の正体を知ってしまったようですね。他者の顔を貼り付けなければ生きていけない私にムーンセルはお似合いのサーヴァントをあてがってくれたわけです。素敵でしょう？　このサーヴァントを見る度に私は自分が化物なんだと自覚させられて死にたくなるほどの罪悪感に苛まれるんです。この顔が〝何人目〟なのかジナコさんはご存知ですか？」
　よく見ると桜さんの顔は真っ青で、身体は小さく震えている。
「でも私は勝たなければならないんです。その為なら自分の罪を形にしたようなサーヴァントでだって戦います。勝って全てを取り戻す。私のものだと言えるのは、もうその願いしかないのですから」
　彼女の悲痛な声が響くのと同時にエレベーターが最下層にたどりつき、決戦場への扉が開いた。
　海底の決戦場にはなぜか大きな西洋の城が建っていた。

その中庭でカルナとアーチャーが向かい合う。
「聞いてのとおりだランサー。私が出ていることはマスターの精神衛生上よくない。手早くかたずけて早々に引っ込ませてもらおう。これ以上彼女に嫌われるのは避けたいところなのでね」
「健気だなアーチャー。あそこまでの嫌悪を向けられながらも主の為に戦う気概は見事だ。ならば俺もそれに全力で応えよう。行くぞ無銘の英霊よ。日輪に挑む者は全て等しく地に落ちると知れ」
《Ｓｗｏｒｄ，ｏｒ　Ｄｅａｔｈ》
ムーンセルが決闘の開始を合図する。
「ハッ！」
合図と同時に地を蹴ったのはカルナだった。
ようし、それっスよカルナ。
相手がアーチャーなら得意なのは遠距離戦。
そういう敵には距離を詰めてのラッシュが定石っス。
弓を撃つ間もなくボコボコにしてやるっスよ！
迫るカルナに対して間合いを取ると思われたアーチャーは意外にも動かない。
そして槍の間合いに踏み込んだカルナから鋭い一撃が放たれた。
「《投影準備（トレース・オン）》」
甲高い金属音と共にカルナの槍がはじき返される。
それを為したアーチャーの武器は弓……ではなく剣だった。
いつのまにか彼の両手には白と黒の双剣が握られている。
「ちょっ！　おまっ！　アーチャーじゃなかったんスか!?」
アーチャーが手にした予想外の獲物にアタシは思わず抗議の声をあげる。
「うろたえるなジナコ。聖杯戦争で『アーチャーは剣を使ってはいけない』というルールはない」
「だけどアーチャーなら弓使うって思うでしょフツー！」
「確かに双剣を使う弓兵というのは聞いたことがないな。だが、それもよし。いかなる奇策妙計であったとしても全てを受け止め、その上で勝利すればいい」

ぐぬぬ……弓兵が剣で戦うとか奇策じゃなくてただのなめプっスよ。
アタシは釈然としないものを感じながら戦いの様子を見守る。
アーチャーは2本の剣を弓兵とは思えない巧みさで操りながらカルナの槍を捌こうとしていた。
しかしカルナの槍兵としての技量はそれを上回る。
強烈な一撃を攻撃を受け止めたアーチャーの双剣が乾いた音を立てて砕けた。
よっしゃあ！　なめプの報いを受けるがいいっス！
「くっ！」
小さく呻いたアーチャーに間髪入れずに突きこまれた槍は――――アーチャーが手にした白と黒の双剣によって受け止められていた。
「あれ⁉　なんで剣が……」
驚くアタシに対してカルナは冷静だった。
それならばと今度は双剣を下から弾き上げる。
アーチャーの手から2本の剣がこぼれるのと同時に放たれた槍は――――やはり再び彼が手にしている双剣によって受け止められていた。
必殺を期した一撃を止められたカルナは一旦距離をとる。
アタシはその背中に向かって問いかけた。
「どういうことっスかカルナ。なんで壊しても弾いてもアーチャーの手元に武器が戻ってるんスか」
「そういう逸話を持った宝具なのか、他に何か絡繰があるのか。今のところは何とも言えないな。ただ一つ確かなのはあの男が一筋縄ではいかない難敵だということだ」
ただのなめプ弓兵じゃなかったってことか。
相手が何をしてるのか分からないってのは厄介っスね。
「とりあえず慎重に相手の手の内を探るしかないっスよ。カルナはスキルを使って防御を固めておくっス。ここからはアタシもコードキャストで援護するから」
「承知した」

カルナが《日輪よ、具足となれ(カヴァーチャ&クンダーラ)》を発動し、耳輪の加護がその身体を包む。
その様子を見ていたアーチャーの目が鋭さを増した。
「ステータスを強化してくるか。ではこちらも次の一手を打たせてもらおう」
アーチャーの手から双剣が消え、かわりに漆黒の弓が現れる。
しかし出てきたのは弓だけで撃つべき矢がそこにはない。
「《投影準備(トレース・オン)》」
だが続いて短い詠唱と共にアーチャーの右手に1本の剣が現れた。
先程までの白黒の双剣ではなく血のような赤色の長剣。
それがなんと左手に構えた弓につがえられる。
ちょ、まさかそれが……。
「《赤原猟犬(フルンディング)》!!」
次の瞬間弓から放たれた長剣は赤い稲妻となって猛然とカルナに襲いかかった。

炎と鉄の輪舞

アーチャーの弓から放たれた長剣が赤い稲妻となってカルナに迫る。

やっと弓を使ったと思ったらコレだよ。

いちいちセオリーを無視しないと気が済まないのかあの褐色白髪ニキは！

「カルナ！」

「問題ない」

アタシの声に短く応えるとカルナは槍を一閃。

アーチャーの矢は標的を貫くことなく弾かれる。

「芸としては面白かったが、正面から放たれた矢に射抜かれてやるほど槍の英霊は甘くないぞアーチャー」

「そんなことは百も承知だとも。しかしそれでも標的を射抜くのが弓の英霊というものだろう？」

アーチャーが不敵に笑うと弾かれたはずの矢が突如方向を変え、再びカルナ目掛けて突っ込んできた。

「ちょっ!?　なにそれ!?」

驚きの声を上げるアタシの目の前で再びカルナが矢を弾く。

しかし弾かれても矢は地面には落ちず反転し、まるで猟犬のように三度カルナに襲いかかる。

「俺が矢として放ったのは英雄ベオウルフが振るった呪いの魔剣《赤原猟犬（フルンディング）》だ。その矢は標的を貫くまで何度でもお前を狙い続けるぞ」

「ではこうするまでだ」

カルナの槍が炎に包まれる。

魔力放出（炎）のスキルにより攻撃力が強化された槍は飛来した矢を弾くことなく打ち砕いた。

「お見事。さすがに仕留めることはできないか。まぁ、魔力を削れただけ上出来としよう」

「弓の英霊の名に恥じない一矢だった。今度は槍の英霊の一刺しを受

けるがいい」
炎の槍を携えてカルナが駆ける。
「構造強化（トレース・オン）」
アーチャーの両手に白黒の双剣が現れ、カルナの槍を受け止める。
しかしまだカルナのターンだ。
槍の纏う炎が受け止めた双剣ごとアーチャーを焼き尽くそうと猛り狂う。
「チッ！」
その刹那、なんとアーチャーは炎に包まれた双剣をあっさり手放した。
炎は双剣を飲み込むがアーチャーまでは届かない。
続くカルナの追撃を新たな双剣で受け止め、またも炎が自身に届く前に手放す。
次々に新しい双剣を生み出しながらアーチャーは炎の槍を凌ぎ続ける。
「なんつー受け方。あの双剣てばどんだけ残機があるんスか」
しかし接近戦の技量はやはりカルナの方が上だ。
アーチャーは炎にこそ焼かれないものの徐々に押され始める。
「クッ！」
カルナの猛攻を嫌がったアーチャーが大きく下がり間合いを取ろうとする。
「逃がしちゃダメっスよカルナ！」
「分かっている」
距離が開けばまたあの厄介な魔剣を撃たれるかもしれない。
カルナは追撃の為に間合いを詰めようと駆ける。
「ハァッ！」
その時アーチャーは裂帛の気合いと共に迫るカルナに向かって両の双剣を投擲した。
弓を撃つ時間を稼ぐ為なのだろうが、カルナほどの英霊にとってそれは余りにお粗末な攻撃だ。
回転しながら飛翔する双剣の軌道を瞬時に見切り、速度を殺すこと

▪なく回避するカルナ。
▪
「▪今度こそ捉え……っ!?」
しかしそこでカルナの動きがわずかに鈍った。
先程回避したはずの双剣が弧を描きながら旋回し、左右からカルナに襲い掛かったからだ。
同時にそれまで距離を取ろうとしていたアーチャーは逆にカルナへと踏み込む。
左右から飛来する双剣に合わせてアーチャーの手にした双剣が振りぬかれる。
「《鶴翼三連》!!」
アーチャーの繰り出した左右正面からの同時斬撃。
カルナは咄嗟に左右の双剣を弾き飛ばすが、そこに生まれた隙にアーチャーの手にした双剣が滑り込む。
しかし首筋に向かって放たれた斬撃はかろうじて間に合った槍に受け止められた。
アーチャーは驚いた顔をしながら今度こそ大きく距離をとる。
「これはやられたな。今のは入ると思ったのだがね」
そう言ってアーチャーはカルナではなくアタシを見た。
そのアタシは右手を突き出した状態で冷や汗をかいている。
今のは危なかった。一歩間違えば勝負が決まっていたところだ。
「魔力を削りつつ行動を阻害するコードキャストか。ただの素人かと思っていたが、どうやらそうではないらしい」
そう、アーチャーの双剣がカルナの首筋目掛けて放たれたあの刹那。
アタシはコードキャスト《ｃｈｅａｔ―ａｔｋ（）・》を撃ってアーチャーの動きを一瞬だけ遅らせたのだ。
結果カルナの防御がなんとか間に合い、辛くもアタシ達は命を拾ったというわけである。
「助かったぞジナコ。お前のサポートがなければ今頃この首が落ちていた」

「後でプレミアムロールケーキっスからね。それにしても本当に弓の英霊なんスかアレ」
カルナの炎の槍は2回戦でランサークラスのエリザベートにすら大ダメージを与えたほどのスキルだ。
それなのにランサークラスより近接戦闘で劣るはずのアーチャーがそのスキルを凌いだだけでなく、逆にあの2対の双剣によるスキルでカルナの命を脅かした。
あれだけの強力な近接戦闘スキルを持っているサーヴァントがアーチャーだなんてことがあるだろうか。
正直あの赤い外套の襟首を締め上げて「お前のようなアーチャーがいるか」と問い詰めたい。
「だが分かったこともある。奴の武器は全て『投影』の魔術によって創り出されたものだ」
「とうえい？」
「簡単に言うとイメージしたものを魔力によって物質化するスキルのことだ。奴がこれまでに使っていた双剣や魔剣はオリジナルではなく投影によって創りだされた複製品だったのだ」
なるほど、どうりでいくら燃やされても砕かれてもぽこぽこと次が出てきたわけっスね。
魔力が尽きない限りアーチャーはどれだけでもあの双剣や魔剣を創り出すことができるのか。
「そしてもう一つ。奴の投影の精度が徐々に上がってきている。短く隙のない術式を重ねて戦闘中に強化しているようだな」
「精度が上がるとどうなるんスか？」
「これまでより複雑なイメージを物質化できるようになる。時が経つほど奴は強力な宝具を創り出すことができるようになるだろう」
「ゲゲッ！　マジっスか！」
時間をかければかけるほど相手の武器が強力なっていくというのは脅威だ。というかチートだ。運営（ムーンセル）出てこい修正はよ。
しかし文句を言っても仕方がない。こうなったらもうやる事は一つしかないのだから。

中国の偉い兵法家の人も言っていた。
『やられる前にやればいいじゃん？』と。
アタシは温存していた　〝切り札〟　を使うことにする。
「カルナ、『アレ』を使うっス。これで勝負を決めるっスよ」
「そう言うと思っていた。……天に坐する我が父スーリヤよ。願わくばこの一時だけ目を閉じていてほしい」
覚悟を完了したカルナとアタシは横に並ぶ。
こちらのただならぬ気配を察知したアーチャーが双剣を構えながら警戒の色を浮かべる。
さぁ、見せてやる。アタシ達が血と汗と羞恥心を犠牲にして会得したこの技をッ！
過酷な修練によってモーションが染みこんだ身体は考えるより先に動いた。
アタシの手足はネットの海において嫌というほど目にした『かっこいいポーズ（笑）』を無駄に洗練された無駄のない無駄な動きでトレースし、ラストは荒ぶる鷹のポーズでキメッ！
隣で寸分の狂いもなく動きを合わせたカルナとの魔力が完璧に同調する。
いいっスよアーチャー。あんたが宝具という『幻想』を創り出せるってなら。
「《ｇａｉｎ＿ｍｇｉ》（まずはそのふざけた幻想をぶち殺す）!!」
己が機能を引き出した装備者を祝福するかのように礼装カーマインブレイジが光り輝く。
同時に礼装に刻み込まれた術式である魔力強化のエンチャントが発動した。
エクセレントッ！　今のアタシ達はこれまでで一番輝いているに違いない（恍惚）。
「フッ……ミッションコンプリートっス」
「よくやったジナコ。失ったものは大きかったがそれに勝る成果を今、俺達は手にしたのだ」
カルナも何やら感極まったような表情で拳を握りしめている。

ここに至るまでによほどの葛藤があったんスね（ホロリ）。
そのカルナの身体からは収まりきらない魔力が炎となって噴出している。
まるでプロミネンスを噴き上げる太陽のようだ。
「い、一瞬何が始まったのかと思ったが……なるほど、発動過程はともかくかなり強力な術式のようだな」
アタシ達のアレを見て放心していたアーチャーもすぐにその意図に気づいて表情を引き締める。
「戦闘経験があるというのはやはり強みだな。同じ素人でも一度も決戦場で戦うことのなかったこちらのマスターはコードキャストの一つも使えないのだからね」
そう言って肩をすくめるアーチャーにここまで黙って戦況を見守っていた桜さんが口を開いた。
「敵にこちらの弱みを教えてどうするんですか。それに戦闘経験についてあなたにだけは言われたくありません。そもそも私が決戦場での戦いを避けてきたのはあなたというサーヴァントを見せたくなかったからなのですから」
「分かっているさ。非難をしているつもりはない。君の強みは戦闘経験とは別のところにあるのだからな」
ここで桜さんはアーチャーからアタシに向き直る。
「ジナコさん、あなたがキャスターの世界から出て行った時、私は理解ができませんでした。あの世界にはあなたの望む全てがあったはずです。なのにあなたはそれを拒絶して今の自分を選んだ。キャスターが言っていました。あなたは自身にあの世界に勝る価値を見い出しているのだと」
桜さんの視線が鋭くなる。
「ならば私に見せてください。幸せな過去を捨てて選び取った今のあなたの力を」
煽りスキルがカンストしてるアタシをこうも煽るとはいい度胸っスね。
理解できないなら、これでさせてやるっスよ！

「カルナ！　食らわせてやるっス！」
カルナがアーチャーに向かって地を蹴る。
その間合いを一瞬で詰め、今までよりも苛烈な攻撃が繰り出される。
「ぐっ！……先程までとは段違いの力だ。ここまで強力なエンチャントだったか」
「これが今のジナコの力だ。存分に味わうがいい」
カルナの槍が再び炎を纏う。
間髪入れずに繰り出された一撃をアーチャーは双剣で受け止める。
そして先程までと同じく自身が炎に飲まれる前に剣を手放そうとした、が。
紅を通り越して白く燃え盛る炎はその間を与えず一瞬でアーチャーを飲み込んだ。
「ぐあああああっ!!」
たまらずアーチャーが大きく飛びのく。
だがそれで危機を逃れたと思うならば甘い。
なぜならその位置はこれから放つ〝本命〟の有効射程距離。
無数の武器を操るあのアーチャーに教えてやろう。
真の英雄にとって武器など無粋。この太陽の化身は眼だけで敵を屠れるのだと。
「《梵天よ、地を覆え》!!」
膨大な魔力がカルナの右目に収束し、全てを灼き尽くす熱線が放たれる。
1回戦でアルクェイドを倒した大技《梵天よ、地を覆え》だ。
あの時は令呪の力で一時的に階梯を上げて使ったスキルだったが、この決戦前に訪れた教会で階梯を更新した結果、正式なスキルとして追加されていたのである。
「これで決まりっス!!」
エンチャントした魔力を一点に集中して放つ必殺の一撃。
加えてアーチャーはダメージを負って飛びのいた直後で回避することは不可能。

必殺にして必中の一撃はアタシに必勝をもたらす……はずだった。
「《熾天覆(ローエイ)う七つの円環(アイアス)》」
突如アーチャーの前に七枚の花弁を広げたような光の壁が現れる。
絶死の熱線は展開する光の壁に激突し、アーチャーまで届かない。
しかし受け止めた光の壁もただでは済まなかった。
なおも勢いの止まらない熱線を前に7枚の光の花弁が一つ、また一つと破壊されていく。
「おおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
アーチャーが残った花弁に力を込める。
2つの力のせめぎ合いは激しさを増し、とうとう大きな爆発引き起こした。
周囲の空気がビリビリと震え、視界が白に染め上げられる。
そしてその後には。
「素晴らしい一撃だった。この威力、かの光の御子が放った《突き穿(ゲイボルク)つ死翔の槍》に匹敵する」
花弁が残り1枚になった光の壁の向こうでアーチャーが言った。
防ぎ切ったのだ。こちらの切り札を。
「そんなバカな！　あれで倒せないとかありえないっス！」
「射撃攻撃に対して絶対の防御を誇ると謳われる『アイアスの盾』か。そんなものまで投影できるとはな」
アタシ達は愕然とする。
今の攻撃は正真正銘こちらの切り札であり奥の手だったのだ。
弓兵があんな盾を持っていることなど想定外。ましてその盾で切り札を潰されるなど誰が考えるだろう。
「これではっきりしました」
わずかな失望をにじませた桜さんの声が聞こえた。
「やはりあなたはキャスターの世界に留まるべきだったんです。私を倒す力のない、すなわち未来を切り開く力のないあなたは過去の幸せを選ぶべきだった」
「言いたい放題言ってくれるっスね。まだ勝負はついてないっスよ」
そう言ってもアタシ達はかなり不利な状況だ。

手札を全て使い切ったにも関わらずアーチャーはまだ立っている。
これでもし、相手がまだ奥の手を残していたのなら……。
「アーチャー、準備はできたかしら?」
「ああ、投影の精度は十分だ。いつでもいけるぞマスター」
「では『宝具』の開帳を。それで終わりにしましょう」
最悪の想像が現実化する。
アーチャーはまだ奥の手である宝具を残していたのだ。
桜さんの言葉を受けたアーチャーの魔力が膨れ上がる。
『――体は剣で出来ている。(I am the bone of my sword.)
血潮は鉄で、心は硝子。(Steel is my body, and fire is my blood.)
幾たびの戦場を超えて不敗。(I have created over a thousand blades.)
ただの一度も敗走はなく、(Unknown to Death.)
ただの一度も理解されない。(Nor known to Life.)
彼の者は常に独り、剣の丘で勝利に酔う。(Have withstood pain to create many weapons.)
故に、生涯に意味はなく。――』(Yet, those hands will never hold anything.)
決戦場にアーチャーの詠唱が響く。
「呪文の詠唱だと? まさか奴の宝具は弓ではなく……」
何かに気が付いたカルナが声をあげるもその言葉を最後まで聞くことはかなわず。
『その体は、きっと剣で出来ていた。』(So as I pray, unlimited blade works.)
アーチャーの宝具が発動し、決戦場を取り囲むように炎が走る。
その勢いに思わず目を閉じてしまい。
再び目を開いたその時。
「なん……だと……?」
目に映る世界はその姿を一変させていた。

無限の剣製

〝彼〟は正義の味方になりたかった。
そういう者になることが大きな災害で一人生き残った自分の義務だと思ったのだ。
死んでいった人達の為に。
もう悲劇を二度と繰り返さない為に。
世界を脅かす敵がいるのなら、力無き者の代わりにこれを討つ。
そんな全ての人を助ける正義の味方になろうと彼は誓った。
だがそんなものは所詮絵空事。叶うはずもない子供の夢だ。
時には貧困に喘ぎながらやむなく窃盗を働く集団がいた。
時には危険なウィルスが蔓延した旅客機の中でそれでも必死に生きようとする人達がいた。
そんな者達を彼は『悪』として容赦なく殺し、切り捨てなければならなかった。
私情を捨て、身の丈に合わぬ魔術に身体を削りながら、
『正義の味方』という理想を追いかけて殺して、殺して、殺し続ける日々。
そんな彼が敵からはもちろん味方からも恐れられるようになるのにそう時間はかからなかった。
結局、彼を殺したのは敵である悪ではなく味方であるはずの友人だった。
彼の生き方を恐れた友人によって処刑台へ送られ『正義』の為に切り捨てられるその刹那。
それでも後の人々を救わんと彼は自らを世界に売り渡した。
名も記憶も剥奪された守護者に堕ちても彼は胸に抱いた理想を追い続ける。
たとえその先が地獄であったとしても、
たとえその未来が報われないものであったとしても、
彼は『正義の味方』で在り続けるのだ。
〝全ての人を助けたい〟　その想いは決して間違いなんかじゃな

いのだから。

◆　◆　◆

まず目に入ったのは赤銅色の空だった。
そこには雲の代わりに大小の歯車が噛み合いながら無数に浮いており音を立てながらゆっくりと回っている。
大地は見渡す限りの砂漠。
そして何より異様なのはその地面にまるで墓標のように突き立つ無数の剣だった。
「ちょっ……ここはどこっスかカルナ!?　いつのまにアタシ達は決戦場からこんな変な砂漠に移動したんスか？」
「違うぞジナコ、俺達が移動したのではない。世界の方が〝変異〟したのだ」
「……はい？　理解不能なんスけど」
「落ち着け。お前は一度これと同じものを経験しているはずだ」
いやいやいやこんなアンビリバボーな経験したことないから。
周りの景色が一瞬で変わってまるで別世界に放り出されたような……あ。
「もしかしてキャスターの宝具っスか？」
「そうだ、キャスターも宝具によって本の中に物語の世界やお前の記憶の世界を創り出していただろう。これは『固有結界』と呼ばれる己の心象風景で世界を塗りつぶす大魔術。魔法に近い魔術の到達点のひとつだ。どうやらこの魔術がアーチャーの宝具のようだな」
カルナの話を聞いてアタシは「あれ？」と思った。
「それっておかしくないっスか？　キャスターならともかく、なんでアーチャーの宝具が弓じゃなくて魔術なんスか？」
「クラスがアーチャーだからといって弓兵とは限らない、ということか。この魔術を見るにあのサーヴァントはそちらが本業だということなのだろう」
カルナはそう言ってアーチャーを見据える。

この世界を創った主は少し離れた小高い丘からこちらを見下ろしていた。
「その通り、生前のこの身は弓兵でも剣士でもなく魔術師だったというわけだ。この心象世界そのものが特に逸話を持たない私に許された唯一の宝具なのだよ」
アーチャーはそう言うと地面に刺さっていた剣に向かって手をかざす。
すると地面に突き刺さっていた剣の2本がひとりでに引き抜かれ、射出された。
一変した周囲に警戒しながらもカルナはこれを弾き落とす。
「まだまだ、これよりお前が挑むのは無限の剣。剣撃の極地をその身で味わうがいい」
今度は4本の剣が同じように射出される。
カルナはこれも弾くが、射出される剣の数は弾くたびにその数を増やしていく。
今までとは投影される剣の数が違いすぎる。
しかもこの世界の性質なのか引き抜かれたそばから地面に新しい剣が生成され、ストック切れを起こす気配もない。
無数の剣を相手にカルナはたった1本の槍で相対していた。
次々に飛来する剣を弾き、砕き、躱す。
終わりの見えない剣の雨を太陽のサーヴァントは耐え続ける。
「さすがだなランサー。その存在、武器、どれをとってもお前は〝本物〟なのだろう。私はどこの誰かも分からない守護者であり、手にする武器は所詮オリジナルのコピー。どちらもいわゆる〝偽物〟だ。だが侮るなよ。偽物が本物にかなわないなどということはないのだからな」、
射出される剣がさらに増える。
剣の雨が勢いを増して嵐と化し、その暴風がカルナに襲い掛かった。
「ぐっ！」
ついに捌ききれなくなったカルナを身体を無数の剣が切り裂く。

カルナは一瞬よろめくが、すぐに踏みとどまった。
「カルナ！」
「大丈夫だ、急所は外している」
「でも……」
あの無限の剣撃に晒され続ければいくらカルナでもいずれ致命の一撃を受けるだろう。
この固有結界をどうにかしなければ負け確なのは明らかだが、アタシはもちろんカルナも結界破りなどというスキルは持ち合わせていない。
「今は耐えるしかない。固有結界は世界の修正力を強く受けるがゆえに長い時間は維持できないはずだ。ましてやアーチャーのクラスであれば残りの時間は多くないだろう。次の一波を凌ぎ切れば、まだ勝機はある」
「次の攻撃を乗り切ればこの結界は自然消滅するってことっスね。よっしゃ、スキルも大盤振る舞いして亀になるッスよカルナさん」
アタシの指示を汲み取ったカルナが《日輪よ、具足となれ（カヴァーチャ&クンダーラ）》を使用する。
耳輪の加護とカルナの槍捌きで再び無限の剣撃に挑む。
「防御力を上げての持久戦か狙いか、少々厄介だな。ではこちらも少し趣向を変えるとしよう」
アーチャーの言葉と同時に投影された無数の剣がカルナの頭上に降り注いだ。
「くおっ！」
まるで絨毯爆撃のような剣の雨をカルナは手にした槍で打ち払う。
それでも捌ききれない剣撃が身体を傷つけるが耳輪の加護のおかげで致命傷には至らない。
これなら……。
「《I（我）am（が） the（骨） bone（子） of（は） my（捻じれ） sword（狂う）.》」
アタシの安堵はアーチャーの発した詠唱によって打ち消される。
その手にはいつのまにか奇妙な剣が握られていた。
刀身がまるでドリルのように捻じれたその剣をアーチャーは弓に

つがえて引き絞る。
直感する。「あの剣はヤバい」と。
アタシは間に合うことを祈りながら自身に宿る加護に呼びかける。
「《偽・螺旋剣(カラドボルグ)》!!」
次の瞬間凄まじい魔力の込められた一矢が放たれた。
矢は周囲の空間を螺旋状に歪めながらカルナ目がけて突き進む。
だがカルナは無数の剣に対処しながらもアーチャーへの警戒を疎かにしてはいなかった。
降り注ぐ剣を払いながらもさすがの体捌きで矢の軌道から身をかわす。
アーチャーの放った矢は不発に終わるかと思われた、が。
「ぐっ!?」
カルナの身体が矢が纏う捻じれた空間に巻き込まれる。
あの矢の本質は矢本体ではなく周囲の空間にこそあったのだ。
このままではカルナは空間の捻じれに引き裂かれて深刻なダメージを負うだろう。
自分の直感が正しかったことを恨みながらアタシは術式を解き放つ。
「《失われし黄金郷(エルドラド)》!!」
呼びかけに応えて黄金の光がカルナの身体を包む。
2回戦と同様にアタシの意思で黄金の鎧の加護を一時的にカルナへ戻したのだ。
カルナの身体を飲み込もうとしていた空間の捻じれはかろうじて間に合った鎧の加護によってせき止められる。
弾かれた螺旋の魔剣は口惜しそうに身をよじりながら赤銅の空へと消えた。
「マジやばかったっス。自動追尾弾の次は空間振動弾とか、あのサーヴァントは未来に生きてるっスね」
「この固有結界はアーチャーが記憶するあらゆる聖剣・魔剣を内包しているようだな。この世界でアーチャーはそれらを無限に生成できるというわけだ。厄介な宝具もあったものだな」

「でも凌ぎ切ったっス。これで固有結界は消滅するはず。ここから一転攻勢っスよ」
そう言いながらアタシは周囲の見回す。
もうすぐ赤銅色の空は元の蒼色に、砂漠の大地は元の闘技場へと世界が修正される。
……そのはずだった。
「勝機が見えたという顔だな。だが現実というものはいつだって非情なものだ。実際それを数多く味わってきた私が言うのだから間違いはないよ。いつだって一筋の希望は世界によってたやすく裏切られる。……このようにな」
アーチャーの言葉と同時に再び無数の剣が虚空に生成される。
固有結界が消滅していない。
世界は未だアーチャーの心象風景によって塗りつぶされたままだった。
「どういうことっスかカルナ！　アーチャーの固有結界は世界の修正力でいい感じにアボンするんじゃなかったんスか!?」
「ありえない。たとえサーヴァントであっても世界の修正力は無視できないはずだ」
アタシの問いかけに応えるカルナの声にも少なくない動揺が見える。
それほどに不可解なことが起きているのだ。
「固有結界がどうして消滅しないのか不思議ですか？」
とまどうアタシ達に対して口を開いたのは桜さんだった。
「無用なおしゃべりは控えろマスター。このまま押し切って……」
「黙ってアーチャー。これは必要なことなの」
抗議の声を上げるアーチャーを制すると桜さんは手のひらを返した右手をアタシに向かって突き出す。
こちらから見えるのは桜さんの右手の甲に刻まれたマスターの証、令呪だ。
それ自体は特に驚くことでもなんでもない。アタシにだって刻まれているのだから。

だが桜さんの令呪を見たアタシは奇妙な違和感を覚えた。
桜さんの令呪は三画のうち二画が花弁のような形で残り一画は羽のような形をしていた。
令呪は三画で一つの形になるように刻まれるものだが、この花弁と羽はまったくかみ合っていないように見えたのだ。まるでそれぞれが別の令呪であるかのように。
ん……？　別の令呪？　それってまさか……。
「気が付きましたか？　私は協力関係にあるマスターからキャスターを借りる過程でお互いの令呪の一画を交換しているんです。そうでなければ私のアリーナにキャスターを連れていけませんからね。つまり今、私の右手には『アーチャークラスの令呪』と『キャスタークラスの令呪』が刻まれているということです。そしてそれは当然サーヴァントにも影響を及ぼしています。もうお分かりでしょう？　私のサーヴァントはアーチャークラスとキャスタークラス両方の力を獲得しているということです」
そうか、そういうことっスか。
なんつー反則技。もうこれチートってレベルじゃないっスよ。
「なるほど、俺が戦っていたのはアーチャーとキャスターの二重属性『マルチクラス』のサーヴァントだったというわけか。固有結界が未だ健在なのはキャスタークラスによって魔術の行使力が強化されているからだな？」
カルナがアーチャー（キャスターでもあるけどこっちで呼ぶことにする）に向かって問う。
「そういうことだ。組み合わせによってはサーヴァントの力を損ねることもあるようだが、幸いなことに私はキャスターのクラスとも相性が良くてね。おかげでこうして超級のサーヴァントとも互角以上の戦いができるというわけだ。固有結界もしばらくは保つだろう」
「だが魔力はどうなっている。いくら結界の強度が高くても魔力がなくては維持できまい。キャスタークラスだからといって内臓魔力にそれほどの違いはないはずだ」
相手からできるだけ情報を引き出そうと更に問うカルナ。

「ええ、ですからその為の私です」
応えたのは桜さんだった。
それと同時に彼女から膨大な魔力が立ち上る。
嘘っ!? コードキャストも使えないアタシ以上の素人だったんじゃ!?
「長い間強力な呪いに浸され続けた結果、この身体には強力な魔術回路が備わっていたんです。私はコードキャストも使えない素人ですが、魔力量だけなら一級の魔術師以上だと言われましたよ」
なんてことだ。
アーチャーとキャスター両方の力を持つサーヴァントと膨大な魔力量を持つマスター。
おまけにここは相手にとって有利なことだらけの固有結界の中ときた。
そしてもう一つ桜さんの魔力量の話を聞いて自覚してしまったことがある。
正直、アタシにはもう魔力がほとんど残っていないのだ。
元々魔力量が少ないところに早く勝負を決めようとスキルを使いすぎた。
一方、桜さんはその全てを防いだ上であれだけの余力を残している。
頼みのサーヴァントの性能差もマルチクラスという反則技で互角以上に持ち込まれている状況。
はっきり言ってここからアタシ達が勝利するビジョンが見えない。
現状を把握するごとに増す絶望感。
もう何も考えられず、身体から力が抜けていく。
「降伏してくださいジナコさん」
そんなアタシに投げかけられたのは桜さんによる降伏勧告だった。

降伏勧告

「降伏してくださいジナコさん」
　桜さんによる静かな最後通告が真っ白になったアタシの頭の中に染み込んでくる。
「敗北を受け入れるのであればこちらから止めは刺しません。令呪をもってサーヴァントを自害させてください」
　どうすればいい。
　拒否すれば遠からずアーチャーの剣の前にカルナは倒れるだろう。
　この絶望的な状況で降伏以外に何か選択肢があるだろうか。
「やはりあなたは間違えたのです。『未来』などという曖昧な可能性にしがみつくのではなく、確実な幸福を手にできる『過去』を望むべきだった。この私と同じように」
　そうだったのだろうか。
　アタシがキャスターの世界で決断したことは間違っていたのだろうか。
「今こそがその過ちを清算する時なのです。さぁ……」
　アタシは……。
「顔を上げろジナコ。お前は何も間違ってはいない」
　力強い言葉が荒野に響く。
　声の主は全身に傷を負いながら尚もしっかりと地を踏みしめ、槍を構えていた。
「カルナ、でもアタシは……」
「思い出すがいい。あの時お前が未来を選んだのはそれが『正しい』と思ったからなのか？」
「あ……」
　違う。そうじゃない。
　あの時アタシはどっちが正しいかなんて考えていなかった。
「お前が選んだ道が正しいのかどうか、それは俺にも分からない。だが己の意思で道を選び、進み続けることは人として間違いなく正しい姿だ。お前はそうしてここまでたどり着いたのではないのか？」

そうだ。あの時カルナはアタシに何も強制しなかった。
アタシがこうしてここに立っているのはそれが正しいことだからじゃない。
自分の意志で未来を選んだからなんだ。
「きっついなぁ……これで降伏したらアタシ格好悪すぎじゃない。……カルナ、まだやれるっスか？」
「安心しろ。お前の心が折れぬ限り俺が倒れることはない」
頼もしいこと言ってくれちゃって。
全身傷だらけで立ってるのもやっとのくせに。
「……どうやら降伏するつもりはないようですね。己の過ちを認める気はないと？」
「正しいか、間違ってるか、そんなことは関係ないんスよ。アタシは歩きたいと思った道を進むだけッス」
「いいでしょう。未来と過去、どちらの道に光がさすのか。それはこの決戦の勝敗に問うことにします」
桜さんの言葉を受けてアーチャーが再び無数の剣を展開する。
さぁ、心の方はなんとか持ち直したけどここからどうしよう。
どんな超級サーヴァントでも魔力なしで戦い続けることはできない。
くそぅ、2次元ならがこういう時に秘めたるパゥアが覚醒して大逆転がお約束なんだけど。
「己が道を貫く、か。そういうのは嫌いではないがね。だがこちらにも譲れないものがある。止めを刺してやろうランサー。お前たちの道はここで終わりだ」
アーチャーは展開された無数の剣を次々と射出する。
「侮るなよアーチャー。ジナコの道は俺が必ず切り開く」
満身創痍の身体で猛攻を凌ぐカルナ。
先ほどの言葉を嘘にする気はないらしい。
「……っとと」
その時アタシは急な眩暈を覚えて思わず膝を付いた。
まずい、身体に力が入らなくなってきた。

戦闘状態のサーヴァントはそれだけで魔力を消費する。このままではスッカラカンになるのも時間の問題だろう。
もうなんでもいいから魔力プリース。
どこかに落ちてないっスか。ジナコさんを勝利に導くでっかい魔力。
「……ん？」
その時地面で何かがキラリと光った。
落ちているそれを反射的に拾い上げる。
「これって……」
それは売店の店員からもらった後に凛さんのうっかりによって取り違えられたエメラルドだった。
膝を付いた時にポシェットからこぼれたのだろう。A級魔術師、遠坂凛の魔術が封じられたそれはアタシでも分かるくらいの凄まじい魔力を放っている。
凛さんマジ女神。落ちてたよでっかい魔力。
（どうにかして中の魔術を使えれば……）
そう思いかけたアタシの頭に浮かんだのは『ムリゲー』の一言だった。
大体A級魔術師が施した術式をアタシが扱えるわけがない。
仮にこの宝石をアーチャーに向かってぶん投げたところで小石が当たるだけだろう。
「で？」と言われておしまいである。
「クッ……！」
アーチャーの攻撃を受けカルナが呻く。
動きが目に見えて鈍くなってきている。
ダメージに加えて魔力という燃料が尽きかけているのだ。
もう時間がない。なんとかしなきゃ。
なんとかしないと、あのキャスターの世界から戻ってきたことが無駄になってしまう。
「……キャスターの世界から戻ってきた？」
その時アタシに電流走る。

アタシはキャスターの世界からどうやって戻ってきたのか。
それを思い出してこの宝石を使う方法をひらめいたのだ。
うん、ひらめいた。ひらめいたんだけど……これって失敗したら死ぬよね絶対。
とはいえこのまま負ければどうせ死ぬんだし。
覚悟を決めろジナコさん。命は投げ捨てるもの！
「せーのっ！」
やけくそ気味に勢いをつけたアタシは手に持った宝石を口の中に放り込み、そのままゴクリと飲み下す。
これがアタシがひらめいた宝石を使う方法だった。
この身にはカルナから譲り受けた黄金の鎧の加護がある。
キャスターの宝具の干渉すら打ち破ったこの加護がアタシの体内に入った宝石という『異物』を見逃すはずがない。
いくらA級魔術師が施した魔術だろうと即座に解呪し、そして解呪された魔術は純粋な魔力に戻るはずだ。
それをアタシの力にすることができればこの戦況を一気にひっくり返すことができるだろう。
ただし……。
「……っ!? ぐっ……あ……!!」
身体が一回り大きくなったような錯覚と共に全身に激しい痛みが走る。
脆弱な魔術回路が悲鳴をあげ、全ての内臓がきしむような感覚に吐き気がこみあげる。
解呪された宝石から溢れ出た魔力がアタシの体内で暴れまわっているのだ。
過ぎた魔力は魔術師にとっては毒でしかない。
小さな風船に大量の空気を押し込んでいるようなものだ。
制御に失敗すれば身体は魔力に耐え切れずに破裂するだろう。
「ジナコ!? 一体何をして……グゥッ！」
カルナもこちらの異変に気付いたようだが、声はすぐさまアーチャーの猛攻によって遮られる。

大丈夫っスよカルナ。一見無謀かもしれないけどアタシには黄金の鎧の加護がある。
致命傷じゃなければ鎧ニキがバッチリ治してくれるはずだから……。
「ガハッ……!?」
しかし大丈夫だと答えようとしたアタシの口から出たのは大量の鮮血だった。
まずい、体内が破壊される速度に回復速度が追いついていない。
このままだとアタシは破壊と回復を繰り返す耐えがたい激痛の中で悲惨な死を迎えることになる。
「ぐぅぅぅぅぅぅぅ!!」
必死に魔力を制御しようとするが、体内で猛り狂う魔力は一向に収まらない。
「ガハッ……ゴホッ……!」
再び喉をせりあがってきた血を口から吐き出す。
甘かった。にわか魔術師のアタシがこれだけの魔力を制御するなんて無謀だったのだ。
アーチャーが言った通りアタシの道はここで終わるのか。
必死に耐えているカルナの頑張りもアタシが馬鹿なことしたせいで無駄になってしまった。
「ごめん、カルナ……」
そうつぶやいたアタシが目にしたのは、なおもアーチャーの猛攻を耐え続けるカルナの姿だった。
ダメージを考えればとっくに倒れていてもおかしくない。
先ほどのようにこちらに声をかけることはできないようだが、それでもその背中から伝わってくる。
『ジナコの道は俺が必ず切り開く』
気が付くとアタシは令呪が刻まれた右手を握りしめていた。
忘れてた。アタシは一人じゃなかったんだ。
そう、独りでやらなくてもよかったんじゃないか。
「うあああああああっ!!」

もう一度体内の膨大な魔力に働きかける。
制御と言いながらアタシは暴走する魔力を押さえつけることしか考えていなかった。
でも違ったんだ。
アタシは一人じゃなかった。この魔力には受け取る相手がいる。
ならば魔力を押さえつけるのではなくその相手――――――カルナに届ける〝流れ〟を作ればいい。
『お願い……カルナ……!!』
意識の中でアタシは手を伸ばす。
それでもアタシだけの力じゃまだ足りない。カルナからも魔力を引っ張ってくれれば。
２人の力ならこの魔力を制御できるはず！
「あ……」
伸ばした手を確かに掴まれる感覚。
同時に荒れ狂う魔力に流れが生まれる。
身体を蹂躙していた魔力が令呪へと集まり、カルナに送り込まれていく。
アタシはあの膨大な魔力を制御することに成功したのだ。
「ハ、ハハ……やった、やったっスよ。あイタ、イタタタタ……」
笑うとまだ身体に響くっス。早く治して鎧ニキ。
そうだカルナは、カルナはどうなったっスか!?
「無茶をしすぎだジナコ。俺より先にお前が倒れてはそれこそ本末転倒というものだろう」
数多の剣撃に晒されながらもついに堕ちなかった太陽の化身の姿がそこにはあった。
カルナは背中越しに呆れと安堵が混じった視線こちらに向ける。
「俺がお前の意図に気付いて魔力を引き込まなければ死んでいたぞ」
「まぁホラ、前にアタシの意識体を追えるって言ってたっしょ？　だから意識をそっちに強く向けたら応えてくれるかなと思ったんスよ。そう、全ては計算通りってことっスね。やだジナコさん有能すぎない？」

「他者を受け入れることに臆病なお前があれほど強く俺を求めたのだ。応えないわけにはいかないだろう」
「ちょっ!?　恥ずかしい言い方しないでほしいんスけど!?」
「そのあたりの議論は後だ。今は先に片づけなければならないことがある」
そう言ったカルナの身体には凄まじいまでの魔力が満ちているのが分かる。
アタシの中で暴れまわっていた魔力はいまや全てカルナに送られているのだ。
それはこれまでアタシが供給してきた量の比ではない。
「高密度の魔力を無理やり取り込んだのか。無茶を通り越した無謀な行為だが、まさか成功させるとはな」
アーチャーが忌々しげに舌打ちするとその周囲に再び無数の剣が投影される。
その数はこれまでで一番多い。
「いいだろう、何度息を吹き返そうとも無限の剣をもって打ち倒すまでだ」
視界を埋め尽くすほどの剣の一斉発射。
この数ではカルナの槍の技量でも凌ぐことは不可能。
アタシが今度こそカルナの身体が無数の剣に貫かれる姿を幻視したその時。
カルナの右目がまばゆく光ると、その身に迫る全ての剣が一瞬で消滅した。
「なんだと!?」
アーチャーが目を見開く。
続けざまに剣を射出するもその全てがカルナに届く前に消滅する。
「まさか……『燃やして』いるのか!?　あれだけの数を一瞬で!?」
……まじッスか。
アーチャーの言葉でアタシはようやくカルナが何をしているのかを理解する。
あれは《梵天(ブラフマーストラ)よ、地を覆え》だ。

普段は収束させて放っている熱線を拡散させて放ち、視界全ての剣を迎撃しているのだ。
驚くべきは武器として使用している以上アーチャーが射出している剣はかなりの強度を持っているはずなのに、
それをあれだけ広範囲に威力を拡散させながら跡形もなく消し飛ばしていること。
同じスキルでもこれまでとは出力がケタ違いなのが分かる。
「ジナコが命を賭して掴んだ勝機。無駄にはしない」
カルナが駆ける。襲い来る無数の剣を消し飛ばしながらついにアーチャーへと肉薄する。
「チッ……！」
双剣を投影して迎撃しようとするアーチャー。
だが、カルナがケタ違いなのはスキルだけではなかった。
槍を受け止めた双剣が一瞬で破壊され、次を投影する間もなく怒涛の連撃がアーチャーの身体を打ちのめした。
十分な魔力を得てパワーとスピードも飛躍的にアップしている。

「グハッ！」
アーチャー後退しながら距離を取り体勢を整えようとするが、
その姿をカルナの右目はすでに捉えていた。
「《梵天よ、地を覆え（ブラフマーストラ）》!!」
熱線がアーチャーに向けて放たれる。
しかも今度のブラフマーストラは先程までの拡散させていたものではない。
無数の剣を一瞬で消滅させていた威力は収束され、
膨大な熱量を持つ光の槍となって荒野を焦がしながらアーチャーに迫る。
「……ッ!!　《熾天覆（ロー）う七（ア）つの円環（イアス）》!!」
叫んだアーチャーの前に7枚の花弁状の盾が現れる。
一度はブラフマーストラを防ぎ切った宝具の盾だ。
しかし……。

「何ッ!?」
射撃攻撃に対して絶対の防御を誇る盾も、今度は熱線の勢いを一時抑え込むのが精一杯だった。
刹那のせめぎ合いの後、7枚の盾が同時に砕け散り、アーチャーの姿が光に飲み込まれる。
「アーチャー!!」
桜さんの叫びをかき消すように熱線が炸裂した轟音が遅れて周囲に響き渡る。
「くぅッ!」
アタシも撒き散らされた光と轟音に思わず目を伏せる。
光と音が収まるのを待って目を開いたアタシが目にしたのは残ったのは赤く煮沸する大地とそして。
「ハァ……ハァ……ハァ……」
その傍らで膝をついているアーチャーだった。
「盾が押しとどめた一瞬で直撃を避けたか。だが、さすがに無傷とはいかなかったようだな。悪いがこちらは降伏勧告などするつもりはない。次の一撃で〝座〟へと送り返してやろう」
「ハァ……ハァ……クッ……」
立ち上がったアーチャーだったが、その姿は満身創痍だった。
赤い外套は燃え尽きており、晒された肌には半ば炭化した無数の火傷が見える。
右足が動かないのか、左に重心を傾けながら立っているのもやっとのようだ。
アタシもカルナの言葉に異存はない。
すぐに止めを……と思ったアタシはギクリと身体を強張らせた。
死に体であるはずのアーチャーの目が獲物を狙う鷹のようにギラギラと光っていたからだ。
「負けるわけにはいかない……」
右足を引きずりながらアーチャーが前へ出る。
「彼女の願いは私の願いでもある。私は……俺は……正義の味方ではなく、マスターである彼女の味方になると決めたのだから!」

そう叫んだアーチャーの右手に光が集まる。
「うおおおおおおおおおおおおおお!!」
半ば悲鳴のような雄たけびと共に強くなる光が辺りを覆い尽くす。
「これが俺の最後にして最強の剣だ」
その手には輝く黄金の剣が握られていた。